

---

# 戦火を越えて Cross over the under fire

羽場速雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦火を越えて Cross over the under fire

### 【Nコード】

N8745F

### 【作者名】

羽場速雄

### 【あらすじ】

UC0070年代も終盤に差しかった頃、地球連邦軍の若き女性将校アヤリィハヤカワは過酷な運命に見舞われる。傷ついた心が癒える間もなく、人類がかつて体験したことのない地獄の戦争へと彼女はのみこまれていく……。

## GROUND OPENING

抜けるような青空がどこまでも果てしなく続いている。草原という名の緑の絨毯が地平線まで続くこの場所だからこそ、見られる至上の光景。

そよぐ風が乾いた音をたてて草花を揺らし、心地よい午後を演出してくれている。

大草原の中にポツンと建てられた白い外観のログハウスにも、等しく自然は恩恵を与えてくれた。

張り出したテラスに、家屋と同色の丸テーブルが。同じく、同色同デザインの対の椅子が向き合うようにして置かれている。

室内からトレイを両手で持って出てきた長い黒髪の少女は、その椅子に行儀悪く腰掛けている同じく黒い髪の少年の姿を見て、肩を竦めた。

「まったく、またそんな格好で座って。ちゃんと姿勢正しく座らないと、ケーキあげないからね」

両足を投げ出すようにしつつ摺り落ちる寸前のようにして座っていた少年は、その言に彼女を仰ぎ見ると、慌てて座り直して姿勢を正す。

そんな様子がおかしかったのか、怖い顔をしていた少女は一転して、噴出すように相好を崩した。端正な顔立ちは笑顔を浮かべるととても魅力的なものになる。まだ10代半ば過ぎであるが、将来を約束された面持ちだ。

対する少年も、少女によく似た顔立ちを呆気にとられたものにしていったが、すぐに声を漏らして笑う。少女よりも数歳年下の少年らしい、やんちゃな笑顔だ。

「さて、冷めないうちにお茶にしましょうね。今日はお姉ちゃん、いつもにもまして頑張って作ったのよ」

少年の笑顔に笑顔で応えながら、彼女はトレイをテーブルに置く

と、ティーセットと大皿に載ったアップルケーキを下ろしていく。ケーキを切り分け、アップルティーを注ぎ、各々のものをセッティングした。

甘い香りが風に乗って辺りを和ませる。アップルケーキは食欲をそそる、なんとも言えない透き通るような薄茶色に焼けており、少女が自信を持って言うだけのことはあった。

「ほら、よく焼けてるでしょ。我ながら天才ね」

「これだけは認める、うん」

「『これだけ』は余計でしょ、まったく」

他愛のないやり取りが暖かい。

少女は準備が整うと、少年の向かいに腰掛けて、

「じゃ、食べましょう。美味しくてほっぺが落ちちゃうわよ」

と、うそぶく。少年も苦笑いを浮かべながらもそれがあながち間違いではないので、フォークを手にすると喜んでケーキを頬張った。

彼の美味しそうに食べる様を見て、少女はとても満足そうな微笑を浮かべる。

気をよくしながら自分も食べようと、小皿に切り分けられたアップルケーキをさらにフォークで小さく分け、さらに小さいその口に運ぼうとした時。

「お姉ちゃん、遠くに行っちゃうんだよね」

唐突に、沈んだ声が少女の鼓膜を打った。

他でもない、目の前に座っている少年しか、彼女の他に言葉を発する人間はいない。少女は口へ運びかけたフォークを持つ手を下ろし、食べるのを止めてうつむいている彼を見据えた。

「うん、そうだね……遠くだね。でも、ナイメーヘンは日本からだって飛行機ですよ。んん……厳しい所だからなかなか外出はできないけど……だけど、もうこれっきりってわけじゃないんだからね」

優しい眼差し。

確かに彼女は美麗な面持ちをしていたが、切れ長の目 元がやや

冷たい印象を与えてしまうところもあった。けれど、今はまったくそれを感じさせない。想いのこもった、暖かい目元をしていた。

「お休みになったら会いに戻ってくるし、そしたらまたケーキ焼いてあげるから。ほら、そんな顔しないの。男の子でしょ。う？ いつまでもお姉ちゃんお姉ちゃんばかりだと、お姉ちゃんリツくんのこと嫌いになっちゃうよ？」

すると、ハッと顔を上げる少年。それに、彼女は再び穏やかな笑みをもって迎えた。

少年は照れくさそうに視線を外すと、その照れを隠すように残った自分の小皿に残ったアップルケーキを一口で頬張った。

「い、いつまでもお姉ちゃん言ってるわけじゃないもんね。お姉ちゃんが戻ってくる時には、ガールフレンドの1人や2人、紹介してやるよ」

口の中をアップルケーキで一杯にしながら先ほどまでとはうつて変わって、澄ました顔でそんなことを言う少年。もちろん、それは強がりもあるが、少女の想いを気遣いさらに応えるという配慮であるのは、当然のことながら彼女もわかっていた。

だからこそ、

「それは楽しみね！ どんな子を紹介してくれるのかなあ。大丈夫、苛めたりしないから」

などと言ってみせる。それはまた、少年に対する少女なりの配慮だったのだから。

お姉ちゃんにはかなわないよなまったく、と肩を竦める少年。それが少女はおかしくて、再び噴出して笑みをこぼした。少年も彼女の笑みにつられるようにして頬を緩める。

2人の前には『別れ』という避けられない未来が存在していたが、今だけはそれを忘れた一時が流れてくれる。

和やかで穏やかな時間。

数年後、2人が大いなる運命の渦中に巻き込まれてしまうことなど誰も、もちろん当人たちさえも知る由もなく、今はただただ悠久の

時の狭間に身を委ねていた。

時は宇宙世紀。

人類が広大な宇宙へとフロンティアを求め、暦を改めてから、既に70年以上が過ぎていた。既

UC0078年2月11日。

サイド4と月の中間宙域。地球よりも月の方が巨大に見える静かな虚空は、遠い星々の瞬きに見守られつつ、平穏な時の狭間に身を委ねている。

これが海ならば、寄せては返す波打ち際の穏やかな光景が当てはまることだろう。

が、汀の安寧は不意に打ち砕かれた。灰色の巨大な人工物が、熱核ロケット推進の炎を吹き上げらせて通過したからだ。

地球連邦宇宙軍・サイド4駐留軍所属、第4哨戒部隊のサラミス級宇宙巡洋艦マドリッド。重力や空気抵抗とは無縁の宇宙空間を舞台とした、軍艦ならではの直線的なフォルムの艦体は、滑るように漆黒の宇宙を突き進んでいく。

ロービジーカラーで塗装された全長220m級のこの宇宙巡洋艦は、ネームシップ・サラミスの同型艦として、昨年末に艤装を終えて本部隊に配備されたばかりの新鋭艦であった。

それまで炸薬による実体弾砲塔だった主砲は、スペックDと呼ばれる昨年建造のサラミス級から全てメガ粒子を放つビーム砲塔へと変更されている。本マドリッドもその例に漏れず、単装とはいえ計6門のメガ粒子主砲にて武装することとなり、既存のサラミス級と比べて飛躍的に戦闘力を向上させていた。

本来であればこの艦は、常設艦隊へと配備されるのが常道である。常設艦隊における旧式艦との世代交代を差し置いて、一哨戒部隊へ優先的に新造艦が配備されたことにはもちろん理由がある。

それは、この宙域がジオン公国との勢力境界宙域である点に尽きた。

一時ほどの急激な二国間の情勢悪化はないものの、冷戦とも言うべき実際の戦火を交えない戦闘的な関係は依然として続いているか

らだ。

この宙域に展開している哨戒部隊は、対外的には治安維持を目的としてはいたが、実質はジオンに対する監視・偵察行動を主眼に置いていたのである。ある意味ここは最前線でもあり、故に危険も大きく、それに見合った戦力が 配備されるのは当然のことだ。

不審船の臨検用に海兵隊まで搭乗していることも、現情勢下におけるこの宙域の不安定さを物語っていた。

マドリードの艦内は、ブリッジブロックのある最上層のレベル4から艦底部のレベルB2まで全7層に分かれており、さらに艦首から艦尾までAからOまで区画分けがなされている。細部にわたるブロック構造は、被弾時のダメージコントロール（損害局限）に優れており、それは例え最新鋭の宙艦だとしても変わらない。

通常配置の艦内ではあるが、厳戒宙域を航行しているためどこか張りつめた空気が漂っている。

ただ、それでも交代勤務で休憩に入った者たちには、ほんのひと時の安寧を愉しむ余裕は存在していた。

「お疲れ様です、少尉」

通路を無重力の宇宙ならではの移動手段・ハンドリフト 壁に設えられたレールの上を移動する取っ手 につかまり、食堂を指していた彼女は、対向からやってきた対空戦闘要員の伍長にすれ違いざま声をかけられ、敬礼をもって応えた。

おそらくこれから交代して再び勤務に就く伍長を背後に見送ると、彼女はハンドリフトから手を離し、身体についた慣性を抑えるようにしてやんわり廊下に着地する。もちろん、ブーツの裏に仕込まれている電磁石の効果を最大限 利用するようにして。

毛先についた慣性はさすがに抑えられず、肩下まで伸ばした艶のある黒髪が顔前に流れる。彼女はそれを手櫛で後ろに流して一歩踏み出した。圧搾空気でドアが横に開く。ドアの横壁には一般食堂とプレートが貼られていた。

最下層とはいえ彼女は曲がりなりにも士官であり、食事は士官食



堂にて摂るのが常道である。規律の面からも本来であればそうすべきなのだが、あえて下士官および兵が詰める一般食堂にやつてくるのは、彼女の指揮者としての 思惑と さらにこちらの方が重きを占めているのだが 人となりがそうさせていたのだった。

食堂はちよつとしたスペースが取られており、さながら小ホールといった様相を呈している。そこは食事を摂る場だけでなく休息を愉しむ場所でもあり、談笑やカードに興ずる兵士たちも多い。

通常配置のため数十人の兵らが各々の時間を過ごしている中、彼女は軽く床を蹴って身体を宙に浮かせつつ、ホールの中央辺りまで前進する。彼女の到着に気づいた部下たちが手を振って自分たちの居場所をアピールしていたからだ。

「隊長、遅かったっスね。何か問題でもあったんっスか？」

床に固定されたテーブルには6つの同じく固定された椅子が設えており、中央辺りのそのテーブルでは4人の兵士たちが食事を摂っているところだった。彼女が彼らの元へ着くなり声を掛けてきたのは、4人の中でも比較的小柄な、まだ少年の幼さが抜けていないようなグレムスン伍長である。

「特に何も。小隊長がトイレでアレをチャックにはさんで、のたちちまわったおかげで引継ぎに遅れたぐらいね」

彼女 アヤリ「ハヤカワ少尉は、事も無げに流して言いつつ、空いている椅子に腰を下ろす。この女性隊長が一瞬何を言ってるのかわからなかった部下たちだったが、彼女が背もたれに背中を預けた時、大爆笑が巻き起こった。

「トレセンのヤツ、ざまあないぜ！」

「かなり格好悪いな。恥ずかしくてまともにこれから表歩けないぞ、ヤツは」

「けど、あれは痛いですよ。なんだか小隊長に同情するなあ」

予想通り好き勝手言いたい放題言っている部下たち。アヤリは微笑しながらも、緊張と危険と隣り合わせの毎日の中で、数少ない安息の時間である今を嬉しく思った。

アヤリは第4哨戒部隊 通称マドリッド隊旗下のマドリッド海兵小隊に所属する第1分隊隊長である。

士官学校を卒業後、高度な指揮管制能力とズバ抜けた兵装に関する知識および射撃能力を買われ、幹部候補生過程を経て、本人の希望とは裏腹に海兵隊畑を歩みもう2年が過ぎ去った。まだ2年という声もあるかもしれないが、彼女が歩んできた道は大事はななくとも、数え切れないほどの小事に常に追われる日々だった。

しかしながら、それでも万事大したこともなく 小事を大事にしなかったアヤリの才覚と努力のたまものであるが 過ぎた2年という年月は、彼女に様々な経験と周囲からの絶対の信頼を与えてくれた。そのおかげで、軍隊という特殊な環境下におけるさらなる苛酷な海兵隊という部門でも、女性だてらに男性以上の仕事をし得たのである。

最初は今の部下たちも抵抗を感じていたようだが、以前の海兵部隊に接していたのと同様に根気よく面倒を見ることによって、今では固い信頼関係を築くことができた。

もちろん、単に面倒見がいいだけで部下たちは指揮官に命を預けてはくれない。指揮官に真の実力、戦う力がなければやはり信頼は生まれないからだ。オールマイティーではないが、アヤリには部隊を運用し実戦を戦い抜くことに 秀でた力が備わっており、それが部下たちの目に十分以上の実力として映っていたからこそその関係である。

粗野で野蛮で下品な話ばかりしている、女性には真っ先に嫌われる輩ばかりが特に海兵隊には集まっていたが、彼らの根っこの部分はとても純粹で、人としての道を決して踏み外さない本当の意味で至極まともな人間ばかりでもあった。だからアヤリは彼らが好きだったし、そんな彼らをできる限り守っていききたいと常日頃思っていたのだった。そう、自分に絶対の信頼を寄せている彼らのために。

「 隊長。隊長つては何しよっぱい笑い浮かべてるんですか。本

当は結構好きなんでしょう？ こういうネタ」

と、グレムスンの隣に座るひと際がつしりとした体格のフラビス軍曹が、にやけながらこちらに話を振ってきた。対し、アヤリは切れ長の目元を半目に変えて返す。

「馬鹿。ちなみにフラビス、それもセクハラ。これでフラビスは損害賠償金額2億5千万突破ね」

目を丸くするフラビス。ついで、再び腹を抱えて皆が大笑いする。

「フラビスやったな。これで曹長を抜いてお前がセクハラキングだ。しつかり貯金しとくんだな」

「おめでとうございます先輩！ これで名実ともに女の子には本当もてなくな、痛っ！」

ここにはいないロドニー曹長の名前を出した長身痩躯のエノア軍曹に続いて、最年少でインテリ然としたコナー伍長が追従するものの、さすがに先輩としての威厳を煌かせたフラビスはコナーの頭を叩いて、

「うるせえぞコナー！ 自分は0ハイト（通貨単位）だからってよ、このムツツリ野郎が！」

と怒鳴るが、

「『それが普通だ』と言って下さい」

とさらにコナーに返され、再び目を丸くしてしまう始末。面目丸つぶれである。

「まあまあ、2人とも。フラビスも、私だって今すぐに訴えるって言ってるわけじゃないんだから、そんなに怒らない。それにその時になってお金なかったら、いい金貸し紹介してあげるから。10日で40割ぐらいの素敵なところを」

とりあえず仲裁に入るアヤリだったが、途中から冷ましているのか焚きつけているのかわからないような台詞を口にする。それを聞いた当事者のフラビスだけでなく、部下たち全員はやれやれと脱力するのだった。

「それはともかく。いよいよ明日は入港っスね」

苦笑いから復帰したグレムスンが話題を変えてまず口を開く。

「おお、そうそう。やっと上陸だぜ。シャバの空気が懐かしい」

「つて、たった7日の哨戒勤務だけじゃないですか。地球軌道艦隊の奴らなんてそももいつになつたら帰れることやら……」

「奴らは奴らだ。俺たちは短い間に最大限の働きをして休む、これだ。まあ上陸して一日休み明けから始まる地上勤務7日はそれはそれで退屈だな」

フラビスとコナーのやりとりに突っ込みを入れつつ、肩を竦めるエノア。

マドリード部隊はサイド4と月の宙域を7日かけて哨戒（パトリール）し、終了すると母港のあるサイド4、12バンチコロニーのアイランドシャンティへと帰港するのである。そこで交代部隊の第3哨戒部隊に哨戒任務を引き継ぎ、1日の休息を置いた後、書類整理・作成やら雑務の待っているコロニー基地での地上勤務を7日間行うのだ。これが終了すると再び1日休息を置き、戻ってきた第3哨戒部隊から哨戒任務を引き継ぎ再度宇宙に出て行くという、一連のサイクルになっているのである。

今日は哨戒任務の7日目であり、最後のブロックを哨戒し終えれば、そのままアイランドシャンティへと帰港する予定だった。彼らは休息時間のゆったりとした時だから明るく、はしゃいでいるのだけでなく、明日の休みを思い描きリラックスしているのだ。

どんなに精強な兵士でも、ある程度の息抜きは絶対不可欠である。本人が必要としていないと思っけていても、深層心理の精神的疲労や肉体の芯からくる疲労は無意識下で蓄積されていくからだ。それを解消するためにも、ある一定の休息は兵士が人間である以上、なくてはならないものだ。た。

もつとも、ここには『休みはいらぬ、もつと任に就きたい』という殊勝な輩は1人もいなかったが。

アヤリはそれでいいと思っている。海兵隊というのは軍隊の中で

も最も危険な部署の1つでもある。さらに、仮想敵国……いや、すぐに開戦してもおかしくない敵国ジオンのお膝元を哨戒する部隊に付随している海兵隊なのだ。いやがおうにも危険は跳ね上がる。

最前線にいる者達の共通した、『死に対する漠然とした不安と、死を受け入れるという諦観に似た覚悟』がないまぜになり、明日がないかもしれないという思いに到達する。のも当然のことだった。

だからこそ、命の存在をささやかな休息で確かめて安心し、緊張に疲労した己を癒すのである。次に再び来やる、不安と覚悟の日々を乗り越えるために。

休みの日はこう過ごすだの、ああするだの、明日の休息について熱く語り合っている部下たちを見守りながら、アヤリは今日も何事もなく終わってくれることを胸中で静かに祈った。幸い、自分の目の前でこれまで部下を失うという光景には出会っていない。

これからもそうありたい。それが彼女の数少ない願いの一つであった。

ただ、どうやら運命の神というのはひたすら人の想いを裏切るのが趣味らしい。

艦内スピーカーからある一定の音域の笛音が一定時間流れたのだから。それは緊急時に兵士たち全ての注意を集めるための前段合図。食堂にいる兵士たちの視線が一斉にスピーカーに注がれる。

『第3警戒態勢発令。繰り返す、第3警戒態勢発令。総員、配置につけ。総員、配置につけ』

淀みのない、女性ブリッジオペレーターの声が響き渡る。とたん、兵士たちが整然と立ち上がり、食堂のドアへと向かっていく。アヤリたちも同じく無言で即座に行動に移していたが、次にスピーカーから発せられた言葉に怪訝な表情になる。

『なお、第1海兵分隊長のハヤカワ少尉は至急ブリッジまで来られたい。繰り返す、第1海兵分隊長の……』

レベル4まで昇ったエレベータから降り、目の前を横切る通路の右方向へと体を流す。5メートルほど進むと、第1艦橋プライマリブリッジというプレートが貼られた扉の前にやんわりと降り立った。

と、扉が横にスライドして開く。そこは、マドリードの中枢たる場所だった。

決して広くはないが、整然と各所に機材が配置され無駄は一切ない。両壁の一部が窪んだ箇所にそれぞれオペレーター席が配置され、次々と発生するデータを女性オペレーターたちが処理している。アヤリの眼前方向には操舵手席と砲術士官席が設えてあり、さらにその向こうには絶対零度の空間とを隔てる、強化特殊樹脂製のウインドウが。もちろんその先は、深く重い黒　宇宙が広がっている。

ブリッジの中央には、やや高めに位置が設定されたシートキャプテンシート艦長席があり、本来そこに座っているべき指揮官は今はそのシートの傍らに立ち、マドリードの高級士官らと厳しい面持ちで何やら言葉を交わしていた。

「ハヤカワ少尉、参りました」

ブリッジには重苦しい空気が充満していた。アヤリはそれを振り払うかのように彼らの前まで進むと、踵を揃えて敬礼する。

「おお、ハヤカワ君。急に呼びたててすまん」

この艦の中で最上位に位置する、マドリード艦長にしてマドリード隊の指揮官であるトレビ少佐は、厳しい表情のままアヤリを迎えた。

「君を呼んだのは他でもない。早速だが、聞いてもらいたいものがある」

トレビは副長のガルフ大尉に目配せし、それを受けたガルフは手に持った小型端末を操作した。すると、ブリッジ前面ウインドウの

上に設えてある大型モニターに映像が映し出される。

それは、ブリッジの状況を録画している記録カメラが撮影したものだった。ブリッジの後方上段から撮影されており、艦長席に座するテレビの薄い後頭部がよく見える。

映像には日付と時間も記録しており、日付は今日、時間はつい15分前ほどだ。

音声も出ているが、特段変わった様子はない。通常航海のいつもの光景で、ブリッジ要員は黙して各々に与えられた職務を果たしていた。

状況に変化が訪れたのはそれほど時間を経ずしてのことである。

女性オペレーターが突然報告の声を上げていた。

『艦長、レーザー通信で音声だ。これは、子供、少年の声？ 救助を求めているようです』

『どこからだ。発信源を特定しろ』

報告を受けたテレビが指示すると、オペレーターは即座に解析を試みている。レーザー通信はレーザーを使用した光学通信機構であり、その強力な指向性を以って発信しているため、出力等にもよるが、発信元を解析するのはそう難しいことではない。

『解析。2時方向座標マイナス30、本艦より4万5千の位置から発信されています。発信元はどうやら静止しているようです』  
『音声回せ』

テレビの命令でオペレーターはブリッジ内のスピーカーへと音声を切り替えていた。すると、小声で押し殺すようにして話している声がブリッジ内に響く。

『けて下さい。僕たちの乗った船は、正体不明の船に接舷されて、武装した男たちに取り込まれてしまいました。僕らではどうすることもできません、誰か助けて下さい』

そこで映像は途切れた。ガルフが端末でモニターを消したからだ。

「見ての通りだ。今から15分前に入った通信でな。索敵班に光学

探査をかけさせたら、確かに発信方向に静止している光源を2つ発見した。至急、当該宙域を航行している艦船を確認したところ、民間船の1隻がこの時間帯にこの宙域を航路として使用していることが判明した。月からサイド4へと向かう船だ」

テレビの説明を耳に受け、状況を整理しながらもアヤリはどこか先ほど耳にした声　少年の声に引つかかるものを感じていた。続けてテレビの後をガルフが引き継ぐ。

「サイド4の航路局から民間船の所属と目的、乗員乗客等の細目を明記した航行リストを入手した。サイド4船籍で名前はスラトス。サイド4および月を結ぶ定期便で乗員5名、乗客50名。ビジネスマンや旅行者の他に、ハイス쿨の生徒らを乗せている。どうやら卒業年次らしく、思い出旅行と題してクラスで月へと出かけていたらしい。発信していたのはその中の1人だ」

そこまで言つて、ガルフは再び映像を再生した。先ほどの少年の声が改めてブリッジに流れ込む

『奴らは誰か探しているみたいです。前の方から1人1人確認します。でも、何をするかわかりません。お願いです、僕らを、みんなを助けて下さい。僕はリクトハヤカワ。本当のことです、信じして下さい』

映像が切れる。もはや、それ以上アヤリの前で流しておく必要がないからだ。

そして、当のアヤリは目を見開いたまま硬直していた。

「君を呼んだのは他でもない。もうわかつていると思うが、通信してきた少年　リクトハヤカワと名乗る少年について、君は何か知っているかね。君と同じファミリーネーム、それも珍しいジャパニーズのものだ。　どうだね？」

気が動転しかけていたアヤリだったが、テレビの落ち着いた諭すように問いかけてくる声に助けられた。彼女はしかし、目を見開き顔を青ざめたまま答えた。

「わ、私の耳がおかしくなっていないければ、あれは、あの声は、私



の、私の弟のものです」

自分で言いながらも、彼女にはまだ信じられなかった。どうして弟が、リクトがこんなところにいるのか。わけがわからなくなりそうになるのを必死に押し止めながら、アヤリは以前彼が口にしていたことを思い出した。

いつだったか、電話で話したときに彼は月へ1度行きたいと言っていた。そして、クラス旅行かなにかあったら、月旅行を提案するのだとも。

まさかそれが今で、さらになんらかの事件に巻き込まれてしまうとは、いったい誰が予期できたことだろうか。彼にも、そしてアヤリにもできるはずがなかった。

「やはり君の縁類だったか。そこで聞きたいんだが、彼はどうやって通信をしている？ 正体不明船に襲撃を受け、船内は制圧されているようだ。にもかかわらず、レーザー通信がどうしてできる？」

ショックを受けているアヤリではあったが、ガルフは彼女にそれほど状況を整理する時間を与えなかった。矢継ぎ早に問いかけてくる。

しかし、アヤリとて1個分隊を預かる士官であり指揮官である。決して動揺から立ち直ったわけではないが、冷静さと状況を判断する力はまだ残っていた。

弟が使っているのは、間違いなく自身が彼のために贈った『絆』だ。

「おそらく、私が昔弟に与えた『お守り』を使っているのだと思います」

「お守り？」

「はい、なにかあった時にと。お守り代わりの緊急用の小型通信キットです。ブローチタイプをした、掌に収まる大きさのもので、使用時間は極端に短いですが出力は大きめで、5万ぐらいの距離なら条件付ながら、届きます」

アヤリは続けて、自身が首から下げているものを懷に手を入れて取り出す。

それは銀色をした小さなペンダントだった。装飾らしい装飾はあまりないが、どこか気品のある雰囲気漂わせている。

「形こそ違いますが、私のこのペンダントと弟のブローチは一对のセットで、もちろん私のペンダントも通信能力があります」

「君のものと相互に通信できるということか」

「いや、しかし艦長。こちらからの通信は武装集団に察知されてしまふ可能性があり、先ほどから控えております。ハヤカワ少尉のそれも使うことはできません」

トレビの言葉を遮るガルフ。彼の言う通り、通信はあくまで受信状態に留めてあったのだ。こちらから不用意に返信することで仮に武装集団に通信を傍受されてしまったら、いたずらに刺激して最悪の結果を招く可能性がある。

「その点は問題ありません」

アヤリはきつぱりと言い切った。

「弟のものと私のものは、先ほども申しました通り対のセットです。通常の通信、他のレーザー通信機とも交信できますが、互いのみが交信できる専用の通信波長帯も設定されています。これは傍受することはできません」

「するとそうか。奴らに気づかれずに交信できるんだな」

「はい。短時間ですが、可能です」

アヤリの言葉に、トレビは腕を組んで考え込んだ。その時間は決して長くはなかった。

「よし、わかった。ハヤカワ君に任せる。彼との交信を開いてくれ」

願ってもないことだ。アヤリは即答して受諾すると、ペンダントの通信機能を起動させる。

テレビらとやりとりをしているうちに冷静さが戻ってきていた。焦っても何も生みはしない。アヤリは今とはにかく、弟たちの無事

と救助を第一義に考えることを全てに優先させた。

「わかりました。では、状況が進展いたしましたらまたご報告いたします」

艦長席のテレビがシートに備え付けの端末を使い、サイド4の駐留軍司令部を通して政府に対応を求めていた通信 が終わる。アヤリは背後にその声を聞きながら、ペンダントの入力装置を使って設定を操作し、弟のブローチとの専用回線を呼び出す。

ペンダントは蓋がついており、その中に超小型ディスプレイと端末操作キーが設えているのだ。アヤリはフロントウィンドウの前まで歩み寄ると、ペンダントを眼前に突き出す。すると、一拍置いてそのディスプレイに『Link OK』という表示が現れる。

繋がった。表示を目にし、はやる気持ちを抑えながらテレビを振り返り、目配せする。対し、テレビは頷き、彼女に行動を促した。

アヤリは再びフロントウィンドウへと向き直ると、ペンダントの発信ポートを闇の深淵へと向けながら、口元へと引き寄せる。

1つ間を取るようにして息を飲み込み、そして彼女は言葉を紡ぎ出した。

「リクト、リクト聞こえる？ 私、アヤリよ。聞こえていたら返事をして」

機械的には繋がったとはいえ、果たしてこの声は弟に届いているのだろうか？ 胸中では不安と心配がないまぜになっただけのもの、それを顔には出さない。静かに相手からのリアクションを待った。

その時間は実際にはほんの10秒足らずだったに違いない。だが、アヤリにとっては幾星霜を経たかのごとく、無限の時間に感じられた。

「……………ね、姉さんなのか？ ほ、本当に、アヤリ姉さん？」

ペンダントのスピーカーからは、姉の名を確かめるようにおずおずと喋る弟の声が流れていた。歓喜が胸を突くが、その思いを抑え、彼女はコンタクトを始める。

「ええ、アヤリよ。今、あなたが居る場所からそう遠くない位置にいるわ。詳細はともかく、そちらで起こっていることはリクトの通信からわかつてる。あなたを始め、乗客の皆さんは危害を加えられてない？」

『大丈夫、みんな無事だよ。でも、よかった。姉さんが、姉さんが居たんだ、近くに』

張り詰めていたものが溶けていく声だ。リクトの想いが伝わってくる。それにアヤリもほだされてしまいそうになるが、当然まだ何も解決していない。気を引き締め直す。

「リクト、通信機で話していても大丈夫？」

『うん。僕が座っているのは船の後ろの方の席だし、前の席の陰に隠れて小声で喋ってるから。まだ奴らもこっちは来てないし』

「そう。でも、十分気をつけて。絶対に油断しないで。それから、もっと詳しいそちらの状況が知りたいの。あなたのわかる範囲でかまわないから、教えて」

アヤリの問いに、リクトはすぐに了承し説明を始める。

リクトの話だところだ。

月を出たスラトス号は順調に航海を続けていたが、この宙域に差し掛かった時に不審船が接近し、突然威嚇射撃を加えてきたのと。

スラトス号はその後すぐに停船。操縦席から船内に放送が入り、不審船から停船命令があり停船しなければ撃沈するという脅しをされたために停船したこと、ノーマルスーツを着用しシートから離れないようにとのがそれぞれ乗客に伝えられたという。

乗客の中にはどうということだと騒ぎ出す輩もいたそうだが、客室乗務員の必死の対応により、乗客全員が緊急用にシートの下に格納されているノーマルスーツを着用し、各々席でジツとしていたと

のことだった。

船が不審船の接舷により揺れたのは、放送があつて丁度乗客全員がノーマルスーツを着用し終えた頃だったという。窓から外を見ると、灰色に塗装された船が横並びに停船し、移乗用のエアロックを兼ねた接舷ベイが伸びてスラトス号の搭乗ハッチに接続。空気漏れ等をチェックしているのか、やや間を置いた後にスラトス側のハッチが開かれ、黒いノーマルスーツを着けた武装済みの集団が船内になだれ込んで来たそうだった。

集団は7名。直ちに操縦室と客室を制圧したとのこと。

武装しているライフルで威嚇しながら乗客に不審な挙動をせぬよう警告すると、リーダーらしき男が男性の名前を挙げて名乗り出るように叫んだという。ただ、それにより立ち上がる者は1人もいなかったそうだった。

すると、別の男が出てこないと全員射殺するぞと息巻いていたが、リーダーらしき男はそれを制し、客室の最前列の席から客を調べ始めたとのことだった。どうやら誰かを探しているようで、首実検をしているようなのだ。

こうして、一連の状況にリクトは持っていたブローチを使い、外へと運を託して救助を求め現在に至る。

「これはもしかするともしかするぞ」

ことの経緯を聞いたトレビがつぶやく。

ガルフが、アヤリがその言葉に反応する。3人は顔を見合わせた。

一連の事件 民間船襲撃事件は何も今回が初めてのことでない。宇宙海賊などという前時代的な輩は確かに存在し、民間船が被害を受けることもまれにあった。

ただ、ここ2ヶ月の間に3件起こった民間船撃沈事件は様相を異にしていたのだ。

襲撃された船は撃沈され、乗員・乗客が全員死亡か行方不明かのいずれかだったからだ。ある意味、当局とのバランス感覚を持つ

ている宇宙海賊は、よほどのことがなければさすがにそこまで手荒な真似はしない。

事件にはある共通している事項があった。未公表のその事項とは、行方不明者の中に、どの事件にも1人だけ乗客 リストに偽名を使っている人間がいたということである。

捜査当局だけでなく、連邦軍の情報部も動き、3人の偽名使用者を洗ったところ、点を線で繋ぐ『理由』が浮かび上がってきた。

偽名を使った3人 彼らは技術者、もしくは科学者だったのである。それも、兵器開発にも転用できる『ミノフスキー物理学』に関連した。

それが何を意味するのか 現情勢下を鑑みればすぐにでもわかることだった。

亡命。そう、ジオンから連邦への。

科学者、それも兵器開発にも転用できるミノフスキー物理学の科学者の流出は、ジオンにとって痛手で以外の何物でもなく、これ以上人材の流出はなんとしても避けねばならないのも、わかることだった。

これに対し、連邦の捜査当局と軍情報部は、ジオン側が亡命を阻止し当事者を連れ帰った上に、証拠を消すために民間船を撃沈しているのではないかと推測していた。確たる証拠はないが、数々の状況証拠からそれが最も確率の高い可能性であることは間違いないのである。

地球連邦宇宙軍・サイド4駐留軍司令部はサイド4政府の意向を受け、つい先日、哨戒レベルを上げたばかりだった。その矢先の今回の事態。ブリッジ内の空気は重かった。

「ハヤカワ君。襲撃してきた彼らが探している男の名前、リクト君はなんと言っていたかな」

沈鬱な雰囲気払いのけるように、トレビが口を開いた。

重要なことである。今回の事件がこれまでの民間船撃沈事件と同様であれば、亡命者は偽名を使っているはずだ。乗客リストで調べ

ても目ばしい技術者・科学者はヒットしないだろう。

だが、襲撃者は亡命者を知っている。よって、襲撃者が名乗り出るよう呼びかけた男の名前はもちろん本名以外に考えられない。

「ロボノフ、と聞こえたそうです」

「ロボノフ……君は知っているか？」

問われて頷くアヤリ。

「科学者という範囲で括るのであれば。私の記憶が正しければ、フルネームはポレフ＝ロボノフ。確かミノフスキー物理学を専攻している物理学者で、ミノフスキー粒子を縮退させて生成される、メガ粒子の実態について詳しい権威のお一人のはずです」

名前を呼ばれた男が確かにポレフ＝ロボノフであれば、一連の事件に共通する事項・科学者というキーワードに間違いなく引っかかることになる。加えて

「もう1つ。半年ほど前、ある科学番組で目にしたのですが、サイド3に居留しているものの今はフォンブラウン大学に出向して実験をしているという話がありました。これも、亡命の脚がかりとして考えると……」

全てが線で結びつく。亡命を希望し行動に移したポレフ＝ロボノフ博士を追って、彼らはやってきたという結論へと。

あとは、事件の中心にあるロボノフ博士がくだんの民間 船に搭乗していることを確認できれば完璧だ。

問題はどうかやって確認するのだが、それを考える間もなく、事態は予測もしえない方向へと向かっていたのである。

「艦長、司令部から入電！ 緊急です！」

突然上がる、切羽詰ったオペレーターの声。テレビはわかったと頷き、シートの端末を取り上げる。

「姉さん、そつちで何かあったの？」

こちらからのマイクの音量は最小限にしてあるため、ペンダントからブリッジ内の音声が向こうに聞こえることはないが、なかなか次なる姉の声が聞こえてこないことに不安を感じたのか、リクトが

たまらず呼びかけてくる。

「大丈夫よ、大丈夫。心配しなくていいから。とにかく落ち着いて、ジツとしているのよ。必ず助けるから」

司令部からの入電が気になったが、その前にリクトの不安を取り除かなくてはと、アヤリはとにかく冷静な声で彼を安心させようとした。

すると、リクトは少し黙った後、

「姉さん、僕に約束してくれたことは、どんなことがあっても必ず果たしてくれたんだよね……」

と、安堵したような声で続けた。それを受けてアヤリも、

「でしょう？ 私を信じて。きっと、きつとすぐに無事に会えるわ」

確かにリクトと約束したことは、彼女は必ず守ってきた。彼にとつては多少怖い姉ではあったろうが、それでも絶対の親愛を寄せてきていたのは、姉が十分過ぎるほど信頼に足る人間だったからだ。

その信頼を裏切りたくはないのはもちろんのこと、アヤリも5つ離れた弟のことがなにより好きだったのだから。

わずかな沈黙。それは、互いが互いの信頼という想いを噛み締めている時間でもあった。と、

「ハヤカワ少尉」

テレビの呼ぶ声が。アヤリはリクトに断りを入れ、彼の方を向いた。

艦長の顔色はお世辞にもいいとは言えなかった。それは、司令部からの入電が原因であると誰が見てもわかることだった。

「最悪だ。あの船にはロボノフ博士は乗っていない」

アヤリは耳を疑った。それほど、艦長の言葉は爆発的威力を秘めていたのである。

「司令部から、ロボノフ博士が別の民間船で亡命してきたところを、たった今保護したとのことだ。彼らが探している博士は、既に我々



の保護下にある。あの船には彼らの目標 存在しない」

まさに最悪だった。

彼らは独自の情報網を以ってロボノフ博士を追跡し、スラトス号に乗船していると確信を持ち襲撃したに違いない。しかし、そのスラトス号に目標であるロボノフの姿がないと彼らが気づいたら……。即座に探索行動を中止し、離脱。そしてスラトス号を即座に破壊するだろう。これまでと同様に、目撃者を消すために。

スラトス号が撃沈される！ そのことを考えただけでアヤリの胸は張り裂けそうになった。

撃沈イコール、それは弟の死を意味する。頭から血の気が引きそうになるのを懸命に堪え、アヤリは残った冷静さをフル動員した。

「艦長、もはや時間がありません。彼らがまだ、ロボノフ博士の搭乗を信じ検索をかけている今、即座に行動すべきです。私たち海兵隊は、そのために専門訓練をこの数ヶ月、行ってきたんです！」

トレビに詰め寄るアヤリ。それは、心からの想いだった。

ジオンとの境界宙域付近を守備する艦に搭乗する海兵隊は、全て特殊訓練を受けており、対テロ・強行突入戦闘もできる。加えて、昨今連続した、民間船撃沈事件を鑑み、ここ数ヶ月間は特に民間船への強行突入を想定して訓練も行っていたのだ。今こそ、それを活かす時だった。

「不幸中の幸いという奴かな」

蒼い顔をしていたが、トレビはわずかに口元をほころばせた。

「ハヤカワ少尉。先ほどの報告と同時に、司令部経由でサイド4政府からの突入許可が下りた。もしもの時にはと申し合わせていた司令部の根回しが、生きた形になったな」

「それでは」

頷くトレビ。

「時間がない。ハヤカワ君、君の分隊を突入艇にB装備で待機させてくれ。作戦および船内図面は集合後、突入艇内で確認してもらう。訓練の成果を見せられるなら できる な」

躊躇する言われはなかった。そのための訓練、そのための海兵隊、そのための指揮官たる自分なのだ。

「お任せ下さい」

背筋を正して敬礼するアヤリ。対し、トレビは頷くとオペレーターに指示を飛ばした。

「シグルズ君、全艦戦闘配置発令だ」

オペレーターは『I s i r（了解）』と復唱し、非常喚起用の笛をマイクに向かって吹きつける。甲高い音が鳴り響き、そしてアラートボタンが押された。オペレーターの戦闘配置発令のアナウンスとともに、けたたましい警報が艦内を駆け巡る。

事態の推移はまったく予断を許さない。これまでも、そしてこれから。だが、やるべきことはもはや決まった。

「リクト。これから助けに行くわ。だから、慌てたり、取り乱したりしないでとにかく静かに待っていること。無理はしなくていいけど、できれば、周りのお客さんにも同じようにさせること。いいわね？」

強行突入作戦が動き出した以上、あと何回通信できるかわからない。アヤリは最後にと、弟に言うべきことを言った。

姉の毅然とした言葉から何かを感じたのか、

「わかった。なんとかしてみるよ。それから、とにかく待つてる、姉さんを」

と殊勝な台詞を吐く。弟の返信に、姉は満足そうに微笑みを浮かべた。

「よろしい。ご褒美に、今回の一件が終わって無事に帰港できたら、無事と久しぶりの再会を祝して特製アップルケーキを焼いてあげる」

「本当！？ やったね、姉さんのアップルケーキは絶品だからなあ」

抑えてはいるが、喜色の混じっているリクトの声。アヤリ自身も、大概呑気なこと言ってるな苦笑しつつも、それだけではないことは

よくわかっていた。

姉思いの弟のことだ。もちろん恐怖はあるだろうが、できるだけ安心させようという心根が働いているであろうことは容易に察することができた。

「リクト……ううん、ケーキを糧に、もうしばらく頑張つて」

喉まででかかった言葉を飲み込み、最後にもう一度、リクトを励ます。彼ももはや多くを語らず、ただ『うん』と、しっかりとした返事を寄越すのだった。

あとは行動に移すだけだ。アヤリはオペレーターからの報告を聞いていたテレビに今一度、声をかけた。

「艦長。これは……このペンダントはお預けします。任務中、あちらに突発的事態が起きた時に、私だけ状況を知るのは対応に遅れが出てしまうかもしれませんので」

そつと手の中のペンダントを差し出す。テレビはそれに目を落としてから、再びアヤリへと向き直って頷いた。

「わかった。ただ、回線は君のノーマルスーツの通信キットにもリンクするようこちらから設定しておく。そのペンダントを中継して君がリクト君と話せるようにな」

「艦長……ありがとうございます」

テレビの心遣いがあるがたい。アヤリはペンダントを彼に手渡すと、ではと再び敬礼し、踵を返す。にわかにあわたしくなったブリッジをあとにすべく、床を蹴ってドアまで飛ぶ。彼女を感知してドアが開き、通路へと出る。そこで携帯 端末を取り出し、己の片腕を呼び出した。

「ロドニー、装備Bで突入艇に分隊全員集合。大至急よ。私もすぐに行く」

Yes sir! と威勢良く復唱するロドニー曹長の声を端末から受けながら、エレベーターへと文字通り飛び乗る。慣性保存の法則に逆らうべく、エレベーターが降下するのに合わせて室内の固定用パイプを握った。

必ず助け出してみせる。待ってて、リクト。

格納庫へと一気に降下するエレベーターの振動に揺られながら、アヤリは固い決意を胸に誓うのだった。

宇宙線及び太陽光対策として、ノーマルスーツのバイザーには通常特殊表面加工処理がなされている。薄いブルーとなってその加工が見えるものの、可視光を透過するので中の表情を窺い知ることももちろんできる。

だが、船内に侵入してきた者達のバイザーは全て完全なブラインド、つまり黒色処理をしていたのである。マジックミラー的狀態で中からは外景をしつかりと見ることができるが、外からはその面持ちを見ることはできない。

ゆえに、前席のヘッドレスト越しにヘルメットがチラチラ見えても、なにも窺い知ることができない。それが至極もどかしい。リクトハヤカワは、せつかく姉に船内の状況を伝える手段を持っているというのに、さらなる情報を得ることができない現状に胸中で舌打ちした。

もちろん、リクトとて不安がないわけではない。襲撃者が侵入してきた当初は戸惑いと恐れに身を硬くしたものだっただけ。

しかし、今は強力な味方がバックアップしてくれている。そう。『最愛の姉』という、かけがえのない存在が。

偶然にも、パトロール中の軍艦が救難信号をキャッチしてくれ、さらにその船には姉が搭乗していたのだ。これはも、リクトにとっては天の采配としか思えず、姉が必ず自分たちを助けてくれると信じていた。

だから今は気を張っていられるし、把握した子細を、姉から貰った『お守り』を駆使して報告することもできたのである。

姉・アヤリハヤカワによく似ているものの、優しさよりも精悍さを強めたその面持ちは、今は決しているいい血色をしていなかった。むしろ青ざめている。けれど、その瞳 黒真珠を思わせる漆黒の眼差しから、力は失われていなかった。

窓側に座る彼の右隣は元々誰も居なかったが、今は侵入者に強制的に座らされた客室乗務員が居る。20歳前後ブルネットが綺麗な北欧系の女性で、先ほどから止まらぬ震えに唇を噛み締めていた。

リクトは、膝の上で硬く握られたその女性の拳の上に、そつと手を重ねる。と、うつむき加減の彼女の震えが一瞬止まった。

「大丈夫。きつと、助かりますよ。僕たちは無事、必ず帰れる。僕たちには、『姉さんたち』がついているんですから」

重ねた手に優しく力を込める。と、彼女は小さな声で『姉さんたち……』とつぶやく。

「そう。さつきコレで話していた相手です」

反対側の手に握られていた姉からの贈り物を彼女に見せながら、己の視線もブローチへと向ける。

彼の想いは確固たるもので、絶対なる姉への信頼に依っていた。そんな彼の想いをあたかも汲んだかのごとく、ブローチの一端が弱々しくも点滅し始める。それは、姉からの通信が来ているサインだった。

リクトは破顔した。すぐにブローチを耳元へと運ぶ。

「姉さん、姉さんかい？」

『ええ。そちらの様子はどうか？』

問うとすぐに姉が返事を寄こしてくれる。はやる心を抑えながら、リクトは答えた。

「変わらず、だよ。奴ら、意外と時間をかけて調べてる。今、やっと真ん中らへんの座席を調べ終えたところだよ」

『よかった。どうやら間に合いそうね。リクト、これから我々はスラトス号に強行突入をかけるわ』

「強行突入……ど、どうやって？」

『小型突入艇で接舷して、そちらの後部ハッチを爆破。エアロツクを強制的に接続して、私の海兵分隊を突入させる。いい？ 衝撃が起きたら頭を抱えて前のめりに上体を伏せるのよ。絶対に頭を上げては駄目、わかった？』

矢継ぎ早にこれからの状況を説明され、しかもそれが現実離れしたものだったのでリクトは少し動揺したものの、姉の注意に素直に『うん』と応じていた。

『時間がないわ。私からの通信はこれで終わるけど、なにかあったら回線は生きてるからいつでも声をかけて』

「わ、わかったよ」

『いい子。それでこそ私の弟よ』

とにかく必要なことだけを口にしてきた姉の声がそこで止まる。

その間はほんの数秒のものだった。それでもリクトにはとても長い、悠久の時の流れが眼前に横たわったような 気がしていた。

「ね、姉さん？」

たまらずこちらから声をかけると、

『……すぐに、行くから』

静かだが、想いのこもった言葉が投げかけられてきた。 その一言だけで、リクトは十分だった。

「わかった。姉さんを待ってるよ」

彼にとっても他に言葉はもういらなかった。 同じように、一言、返した。

『幸運を、リクト』

「幸運を、アヤリ姉さん」

最後にそう交わし、姉との交信は終わりを告げる。

耳元からブローチを離し、脱力気味に背もたれへと身体を預ける。すると、先ほどから隣の客室乗務員の手を上に重ねていた手の甲に、にわかに温もりが生まれたことに気づく。

見ると、そこにはさらに手を重ねた彼女の姿があった。 涙目ではあったが、その瞳には先ほどまでの怯えた様子以外のかなにかが生まれていた。

「大丈夫ですよね…… お客様のお姉さまが、助けに来て下さるんですよね……」

震える声で、だがしかし希望を決して捨てない強い芯のこもった

声で、彼女はつぶやく。

言葉で答える代わりに、リクトは重ねた手にやんわり力をこめて彼女の眼差しを黒い瞳で受け止め、静かに頷くのだった。

『こちらマドリード。突入艇、状況知らせ』

リクトへの通信を終え十数秒も経たないうちに、同じくレーザー通信にてマドリードから連絡が。マドリード海兵小隊隊長トレセン中尉の声が意外に広い突入艇の中に響く。

「こちら突入艇、ハヤカワ少尉です。現在、予定通りスラトス号に接近中。タイムスケジュールの誤差はありません。全て順調」

兵員が艇内の両脇で待機できるよう、固定ベンチが設置されているキャビンのコックピット寄りのシートについていた。アヤリは、突入艇備え付けの通信装置にヘルメットからの接続端子を繋ぎ、マドリードへと返信する。

『了解した。マドリードはこれよりミノフスキー粒子を戦闘濃度散布後、信号弾を発射。不審船に停船維持勧告をかける。突入艇は作戦通り、行動に移すように』

「突入艇了解。通信終わり」

ヘルメットの通信装置をオフにすると、アヤリはキャビン内を見回した。

そこには、マドリード海兵小隊が誇る第1分隊が詰めており、分隊長のアヤリをはじめ、副隊長のロドニー曹長以下総勢10名の姿があった。

各員、戦闘用ノーマルスーツ　宇宙戦闘機パイロットのスーツよりも丈夫で、通常のノーマルスーツよりも動きやすい、両方の特性を持ったスーツだ　を着込み、すぐにも突入できる準備を万全に整えていた。

「みんな。船体図面、頭に叩き込んだ？　突入は一瞬で終わる。これまでの訓練を念頭にこなせば、必ず成功するわ」



1人1人の顔を順に見ていく。

バイザーの向こうの面持ちは、皆それぞれ引き締まっていたいい顔をしていた。これから危険な任務をこなすということに対し、怯えや尻込みなど微塵に感じさせない。

決意を胸に抱いた、戦士の顔であった。

頼もしい部下たちを見回し、アヤリは1つ間を置くかのように満足気にまぶたを伏せる。

「みんな無事に戻ったら」

再びその黒い宝石のような瞳を彼らの前に現しながら、

「1杯おごつてあげるわ」

とたん、喚声を上げて喜ぶ隊員たち。単純だが、それは愛すべきものがある。アヤリは苦笑しながらも彼らのそんな反応が好きだった。

「2分前よ、バイザー下げ。各員、突入用意。所定の位置について」

気を引き締め直して命令を下すと、一転、隊員たちも一瞬緩んだ空気を変えた。それまで開けていたヘルメットのバイザーを閉じ、別人のように迅速な行動を以ってして突入のための所定位置へと移動する。

「曹長、先鋒宜しくね」

バイザーを閉じながら、アヤリは目の前を通り過ぎて移動していくロドニー曹長へと声をかける。すると、彼はニヤリと笑みを浮かべ、

「お任せを。弟さんもお客も、無事に保護してみせますよ」

アヤリも笑みを返し、

「頼もしいわね。幸運を」

短いやりとりだが、それで十分だった。ロドニーは軽く敬礼して応え、船首へと向かっていった。

突入艇は特徴的な船体をしており、船首コックピット真下に強行接舷用の圧着ブロックを備えていた。

これは、突入対象のハッチへと油圧を利用して完全に接舷した後、ハッチとハッチの空間をエアロックとして使用。空気を流し込み対象と突入艇を完全に空気がある状態で繋ぎ、そのまま乗り移れるようにする構造なのだ。

突入直前の現在、先陣を務めるフラビス軍曹とエノア軍曹がハッチの前に陣取り、その直ぐ後ろにロドニー曹長が。さらにその後に残りの各隊員が続く配置となっている。

ハッチは大人1人が通れるサイズとなっており、逆を言えばそれ以上の人数は通れない。決して広くはないのだ。その狭いハッチを通し、いかに短時間でいかに多くの兵員をスラトス号の船内に投入できるかがポイントの1つであり、そのための訓練を彼らは気が遠くなるほどの回数こなしてきていた。

張り詰めた緊張感に彼らにプレッシャーを与えてはいたが、それは集中力を研ぎ澄ませる程度であって決して重荷にはなっていない。もちろん、彼らには血のにじむような訓練を乗り越えた『自信』があるのだから。

彼らが立ち向かうべき作戦はこうだ。

まず、マドリードが囷となりあえてその姿を襲撃者たちの前に晒す。これにより、彼らの意識は一気に緊迫してしまう。だろうが、同時にマドリードへと注意が向けられる。そこが狙い目なのだ。

マドリードによる臨検命令通信を合図に、突入艇はスラトス号の後部下方ハッチへと強行接舷。

圧力により突入艇の船首とスラトス号ハッチを完全に密着させた後、ハッチはC 4爆弾により破壊。一気に突入し、スラトス号船首部にかたまっている襲撃者を制圧する。これが強行突入作戦の全貌である。

襲撃者の配置はリクトからの報告で判明している上、船内図面は司令部経由でこちらに届き既に各員の頭の中に刷り込まれている。

あとは、『その時』を待つだけだ。

静寂が船内を支配していた。

突入艇は現在慣性飛行を行っているため、スラスタは使用していない。一番音を発するものが静かなため、隊員たちの息遣いが聞こえてきそうなほど、嵐の前の静けさが満ちている。

ただ、カチャカチャという軽い物音が。携行している連邦軍の正式アサルトライフル、CALT・M72A1の安全装置を各員が外す音だ。戦闘の直前までは安全装置はかけておくのが鉄則だが、今がその直前なのだから。

アヤリも皆に習うかのように、射撃制度が高められた彼女専用のM72A3の安全装置を解除する。実質的に静から動へと変わる瞬間であり、彼女は一段と気が引き締まる思いにかられた。

と

突入艇のコクピットの方から、まばゆい光が他に窓のない船内へと差し込んでくる。他でもない、マドリードの信号弾の光だ。

「信号弾です！」

静寂を打ち破る突入艇パイロットの叫びがコクピットから上がった。同時に、

「こちらは地球連邦サイド4駐留軍、第4哨戒部隊マドリード。前方の2隻、これより臨検を行う。停船を維持せよ。繰り返す、停船を維持せよ」

というレーザー通信が船内スピーカーに飛び込んできく。

「マドリードが動いた。よし、突入艇突撃！ 接舷して！」

応え、アヤリが命令を飛ばす。

ミノフスキー粒子のおかげでこちらの接近は気づかれていない。ましてや、元々小型なのに加え、停船中の2隻の死角 即ち斜め後方下から接近をかけているのである。目視で補足されることもまずありえなかった。

目標を捕らえた突入艇は慣性速度をバーニアの逆噴射で弱め、そして

「取り付いた！」

嬉しそうなロドニーの声が。

後方下からスラトス号の後部船底に、軽い衝撃とともに取り付く突入艇。即座に油圧がかけられ圧着ブロックはスラトス号の外壁に一分の隙間も残さず密着する。続けざま、ハッチとハッチの間が与圧され、約1気圧の空気で満 たされた。

「C-4 急げ！」

作戦通りだ。ロドニーの檣に応えるかのように、フラビスとエノアは突入艇側のハッチを開けるとすぐさまスラトス号の船底ハッチへと取り付いた。あらかじめ用意しておいた帯状のC-4プラスチック爆弾をしかけるのである。

驚くほどの手際によさでC-4を設置すると、即座に退避。コナ―伍長が後方で導火線に点火した。

ハッチの周りを取り囲むようにして設置されたC-4が乾いた破裂音を立て、直後、埃を叩いたかのごとく白い煙が巻き起こる。C

-4によつて拘束から解放されたハッチは、無重力の法則に従い船体からゆつくりと外れた。

「突入!!!」

アヤリの号令一下。フラビスとエノアを先頭に、ロドニーらがそれに続く。

漂うスラトス号のハッチを押し分け、弱装弾が装填されたアサルトライフルを構えて次々と第一分隊総勢10名の隊員たちが突入していった。

とたん、エアロックの向こうからほとばしった閃光と爆音に出迎えられながら、アヤリは10名の中で7番目に陣取る形でスラトス号内へと突入する。

爆破されたハッチをくぐると、スラトス号側のエアロックが出迎える。その向こうにもう1枚ハッチがあったが、既にそこは爆破を労せず、スキミング装置によりロックを解除されて開放されていた。

M72A3を携え船内ハッチを越える。そこは客室の後方に設えられた化粧室などが密集した通路であり、その向こうに救助すべき

乗客と、捕捉すべき襲撃者らがいる。

突入した隊員たちは客室に押し入っていた。発砲炎が先に突入した隊員たちの背中ごしに垣間見える。

アヤリも他の隊員たちとともに客室へと突入。最後尾の座席の影に隠れながら、襲撃者らがいる前方を窺った。

先鋒のフラビスらが予定通り突入と同時に乗客に呼びかけたのだろう。乗客たちは皆、座ったまま頭を抱え、前のめりに姿勢を低くしている。流れ弾から極力身を守らせるためだ。

一方、客室前方は薄っすらと煙が漂っていた。突入と同時に使用されたスタングレネード（音響閃光手榴弾）の名残だ。

その向こうには、まっすぐ立っている人影はない。無重力状態のキャビンをふわふわと漂う、乗客らのものではないタイプのノーマルスーツが数体。言うまでもなく、隊員に射殺された襲撃者の骸だった。

こちらに反撃してくる銃撃は、客室前部側壁面にある昇降用ハッチの影からのものである。そこは、不審船が無理矢理接舷ポートを使用し、襲撃者たちを送り込んできた入口でもあった。

突入と同時の第一撃で相手を一掃できなかったのは反省すべき材料ではあるが、こちらが圧倒的に有利である状況なのは変わらない。虚を突かれてまとまった反撃ができない今こそが、相手を制圧できるチャンスなのだから。

「そこだ！」

後方から支援攻撃をすべく、M72A3を射撃位置に構えていたアヤリは、ハッチの影からほんのわずかだけ体を見せこちらヘライフルの銃口を向けてきた敵の姿を逃さなかった。

マニユアル射撃を選択していた彼女のM72A3が砲口炎を煌かせたかと思うと、ハッチの影の敵が吹き飛んだ。

「先鋒突撃！ 援護する！」  
今だ。

残敵を一気に制圧すべく、通路で身を低くしながら敵へ攻撃をし

かけている隊の先頭　ロドニーへ命令を下す。同時に、敵が潜んでいるハッチの影やコクピットへの通路の影などに、モードを切り替えた3点バーストにて牽制射撃を加えるアヤリ。

彼女の支援を受け、ロドニーを先頭に隊員たちは床を蹴り、雪崩こむようにして一気に客室の先頭へと躍り出る。勢いに押された敵は、突撃してきた彼らの砲火にさらされ、次々と沈黙していく。

ロドニーらの砲火から逃れた敵も、アヤリの精密狙撃により打ち漏らされることなく倒れていった。

「客室制圧！　敵は全て沈黙しました！」

ロドニーの声だ。アヤリは慎重に様子を覗いながら立ち上がると、客室前方で片手を上げている曹長の姿を確認した。続けて他の隊員からも朗報が。

「コクピット確保！　パイロットたちも無事です！」

「よし！　船内をくまなくチェック！　残敵を漏らすな！」

各員に指示を出しながら客室の先頭へと向かう。続けて乗客へ呼びかけた。

「乗客の皆さん、我々は地球連邦サイド4駐留軍のマドリード隊です。もう心配ありませんが、指示があるまで座席からは立たないで下さい」

峠は越えたが、まだスラトス号の保安を完全に確保したわけではない。乗客には今しばらく動かないでいてもらわなくてはならない。

もつとも、乗客たちは安堵の声や歓声を上げてこそいるが、幸いなことに統制のとれないパニックからはほど遠い状態だった。アヤリの言うことに耳を傾け、みなが大人しくしている。これなら大丈夫だ。

ほっと一息つきながら、客室先頭のロドニーのもとへとたどり着く。敬礼して迎える彼に、アヤリは事態が次の段階に移っていることと鑑み、表情を少しも緩めずに尋ねた。

「曹長、敵船の様子は？」

「ハッチが閉じられています。あちらの船に残員としてパイロットが残っていても不思議ではないですし、もしかしたら何名かあちらに逃げられたのかもしれませんが」

「そうね。けどこの空域はマドリードが居るから、スラトス号から離脱して逃走しても艦砲の餌食になるだけ。ただ、自暴自棄になつて無茶な行動に出てくるかもしれないから、ハッチには隊員を配置しておいて。それからマドリードにスラトス号制圧報告。至急で宜しく」

「了解」

敬礼し、命令を実行すべくその場を離れるロドニー。彼の背中を目で見送ると、アヤリはそこでようやく弟のことを考えた。

客室を見回すと、ノーマルスーツ姿の乗客が安堵と歓喜の表情を浮かべ、隣の座席同士無事を喜んでいる者や、涙を流している者、助かったことを神に祈る者など、様々な模様が広がっている。

そのなか、後ろの方の座席。一部に座席から身を乗り出している者がいた。本来なら前席の影に隠れて見えないであろうヘルメット全体がはつきり確認できる。

遠目でもそれが誰だか、彼女には迷うことなく判別できた。その人物の座る席位置まで、彼女は床を蹴つて再び身体を流し、通路を進んだ。

こちらが移動する様を、ヘルメットの人物はずっと目で追いかけていた。片時も見逃すまいとしているかのように。

「姉さん！」

とうとう我慢できなくなったのか、隣に座っていた人物の前をすり抜けて通路に出てきた彼。リクト「ハヤカワは、ヘルメットの奥で満面の笑顔を浮かべながら姉を迎えていた。

「無事でなにより、リクト。怪我はない？」

アヤリも女性にしては大きい168センチの背丈があつたが、それでもリクトはプラス10センチは大きいため、彼を見上げる形になる。肩に手を触れて、感触で無事を確かめる行為をしたかったが、

弟の身の丈ゆえにアヤリは彼の二の腕に軽く触れることで代わりとした。

「もちろんなんともないよ。姉さんが助けに来てくれたから、僕もみんなも無事さ」

「よかった。姉さん、心配したんだから」

本当は任務よりも彼のことが気になり、今とてすぐにも抱きしめてやりたい衝動にかられていたが、曲がりなりにも軍隊で数年飯を食ってきたアヤリである。鋼の意思が揺るぐことはなく、最小限の言葉による気持ちの吐露で抑えていた。

そんな姉の心をよくわかつているのか、リクトも二の腕に添えられている姉の手に反対側の手を重ね、微笑みながら頷いていた。

数年振りの再会がこのような形とはなったものの、ハヤカワ姉弟の『兄弟愛』は、以前と変わらぬ確かなものとして存在していた。

つかの間の邂逅。しかし、それは突然起きた振動に打ち破られる。

スラトス号の船体が揺れた。一度ならず二度、三度。

突発的な激しい振動に身体が流されそうになるのを押しとどめ、さらにリクトの身体も支えてやりながら叫ぶ。

「どうした！ この振動はなに！？」

すると、血相を変えたロドニーがコクピットの方から急ぎ飛んできた。

「敵がスラトス号から離脱！ 敵船が備え付けの火器で、離脱しながら砲撃を加えてきました！」

「なんですって！？ マドリードはいつたいなにをしているの！」

そうアヤリが叫んだ時、再びスラトス号が振動に襲われたかと思うと、客室とコクピットの間の通路にある機内サービス用の給湯室が突然爆発を起こした！ 砲撃を受けた衝撃で給湯設備がやられたのか、爆発とともに激しい炎を噴き上げている。

と、これまでの平穏さが嘘のように怒号と悲鳴が客室を支配する。なかには我慢できずに立ち上がってパニックに陥っている者もいた。



このままの状況では危険だ。コクピットにいた隊員が直ちに炎の消化に当たろうとしているが、あの火勢を抑えることはもう無理だ。アヤリは決断した。

「曹長、スラトス号を放棄する！ 客室前部の乗客から速やかに突入艇へ移乗させなさい！」

「えっ！？ し、しかし、これだけの人数」

「ピクニックに行くわけじゃない！ マドリードに移すまでの短い時間なら、なんとか乗せられる！ 命令だ！ 急げ！」

「りよ、了解！」

厳しいアヤリの声に圧倒されながらも、ロドニーは応答して他の隊員へと命令を伝え、さらに早速乗客へと呼びかけていた。

パニックになりかけていた乗客を落ち着かせ、速やかに 突入艇への移乗を指示するロドニーの声を聞きながら、アヤリは傍らで呆然と立ち尽くしている弟を見上げる。

「リクト、聞いての通りだけど、あなたは乗客の最後に移乗するのよ」

そう言つと、案の上青い顔をしたまま訝しがるリクト。アヤリは理由を話した。

「あなたは私の弟だから。軍関係者の家族は最後よ。怖い思いをさせるけど、私が一緒にいるから……許してね」

真摯に意図を伝えると、彼はすぐに納得したようで、心配いらないうという風に頭を振った。

「僕は大丈夫だよ。他でもない、姉さんがいてくれるんだから。それより、早くみんなを」

気丈にも彼はそう言ってくれる。弟の勇気を無駄にはいけない。アヤリは頷くと、ロドニーと他の隊員たちに誘導されて後部ハッチへと移動開始した彼らを尻目に、炎がまき起こっている客室前部に飛びつつ分隊無線を使って突入艇のパイロットへと回線を開いた。

「ハヤカワよ。離脱した敵船は？ まだこちらを狙っているの！？  
マドリードは！？」

『マドリードが砲撃を加えています！』

遅まきながらとはこのことだが、それでも手遅れではない。パイロットの報告を聞いたアヤリは、炎を避けながら客室の壁にへばりつくと、敵の指示で下ろされていたと思われ、小窓のシールドを上げた。すると、遠くの虚空で光の柱が2、3つ煌いたかと思うと、爆発が起きた。あれはメガ粒子砲の光であり、爆発は間違いなく敵船のものであろう。

これで敵の心配はない。あとは乗客と隊員、そしてなにより弟を助けるだけだ。

給湯室の火勢はさらに激しさを増し、客室内には発生した黒煙が充満し始めている。残された時間は決して多くはなかった。

乗客の避難は順調にはいっていたが、まだ3分の1ほど客室に残っている。全員がノーマルスーツを着ているため、煙による一酸化炭素中毒の恐れを考慮する必要がないのは不幸中の幸いだ。

弟の姿を目で追うと、言いつけ通り自分が座っていた座席の所にて待機している。隣に女性も一緒に待機していたが、ノーマルスーツに船舶会社のロゴが入っている。客室乗務員だ。乗員としての役目もさることながら、弟に気を遣っていてくれるのだろう。

心のなかで礼を言いながら、火勢を監視していた隊員たちに声をかける。

「私たちも乗客の最後にくわよ。これ以上ここにいるのは危険だわ」

隊員たちが返事をするのを耳にしながら、炎に対して背を向ける。その時、炎のなかで起こっていたできごとについて、知る由もなく

乗客の移乗はほぼ完了しようとしていた。残りはリクトとソラトス号乗務員、それから乗客誘導に携わらなかった隊員だけだ。

これでリクトも移乗させられる。アヤリは待ちに待ったこのタイ

ミングを無駄にしないため、リクトのもとへと向かった。

「リクト、ありがとう。おかげでみんな無事に移乗できたわ」

「気にしないで姉さん。僕も姉さんの力になれて嬉しいんだからさ」

照れ笑いを浮かべて首を竦めるリクト。その言葉がありがたかった。

「さ、リクトも移乗しなさい。あなたも一緒に、早く」

リクトの腕を取り、後部ハッチの方へと押しやる。同時に、彼の隣のフライトアテンダントにも移乗を促した。その時だった。

なんの前触れもなく、再び爆発が起きた。その爆音に驚く間もなく、次の瞬間、さらに激しい破裂音がしたかと思うと

「なっ!？」

身体がいきなり誰かに思い切り引っ張られたかのように客室前部へと強烈に流される。とつさに座席のへりをつかんで抗う。さらに、頭上を飛んでいきかけたノーマルスーツをとつさに反対の手を伸ばしてその手を引っつかんだ。

混乱しかける頭を研ぎ澄まされた理性でねじ伏せ、状況の把握に努める。

この、身体を引っ張る力は風の流れた。それはつまり、空気が流れている。激しく空気が漏れているのだ、外、虚空の宇宙に。

捕まえているノーマルスーツの向こう、客室前部は様子を完全に異にしていた。

なんと給湯室があつた辺りが根こそぎ失われていた。代わりに船体に巨大な穴が開き、そこから船内の空気が盛大に失われているのである。

敵船の攻撃による損壊も原因だろうが、火災により船体を構成しているパーツが急激に劣化。それが外壁に穴を開けたに違いない。猛烈な空気の流れに抗いながら、必死にノーマルスーツをつかむ。残念ながら何人か隊員と乗務員が飛ばされて穴から吸い出されていたが、彼女としては最も助けたい人の手を掴めたのが慰めになっ

た。

空気の奔流にあおられながらもこちらを見上げるヘルメット奥の顔は、リクトのものだったのだから。

客室の空気は無限ではない。あと少し耐えれば、空気は全て排出されて真空になる。そうすれば外と釣り合うために吸い出されることはない。

2人分の重量を支えつつ、さらにリクトをつかむというのはかなり堪えたが、アヤリは齒を食いしばって耐えた。

「ね、姉さん、助けて……！」

「わかってる！ わかってるから！ 絶対離さないで！ 私の手を離しちゃだめ！」

恐怖で言葉が途切れるリクトと、必死のアヤリ。

2人を繋ぐのは、アヤリの腕。固くお互いの手と手は結ばれていた。

だが、腕力はどうにか足りていても、手出しの出来ない『摩擦の力』を最後まで借り続けることはできなかった。

その時は突然やってくる。

瞬間、2人とも声が出なかった。

アヤリの手からスルリと抜けてしまうリクトの手。空気の奔流にすぐに捕まり、流されていくリクト。それを、あたかもスローモーションのように目で追いかけるアヤリ。

「姉さん……！」

瞬間的に消えていったリクトの声と姿に呆然としていたアヤリだが、すぐに我に返るとシートから手を離し、自分も弟を追って大穴へと向かおうとする。

「なにやってんですか隊長……！」

シートから離れた手を、シート伝いにこちらへ戻ってきていた口ドニーがつかんで引き戻す。

「離して！ リクトが、リクトが……！」

「外に放り出されただけです！ すぐに搜索かければ見つかります

！ それより、このまま船内にいる方が危ない。爆発の危険性があります！ 早く退避を！」

ロドニーの言は正しい。

皮膚にもリクトが流されてから船内の空気が全て出たのか、空気の流れが止まって身体が自由になった。アヤリは冷静になって彼の言葉を受け入れた。受け入れるしかなかった。

「撤退……撤退だ」

心のバランスが崩れそうになるのを必死で押しとどめ、押し殺したようにそうつぶやくのが今のアヤリには精一杯だった。

ロドニーに付き添われてどうにか突入艇のハッチまでたどり着いた彼女は、彼の手を振り解いた。

「平気。それより、突入艇を離脱させる」

ロドニーの心配を他所に、彼女は今やすし詰めとなった突入艇内へと入る。突入艇も先ほどの減圧のあたりを食っていたが、元々全員ノーマルスーツを着ているし、乗員乗客とも誰一人吸いだされることはなかったようだ。

さすがに定員が30人そこの突入艇内に倍人数が押し込まれているため、ハッチからなかに入ってもそれ以上先に進むことができない。それでも目的は果たせるのでアヤリは気にしなかった。

「パイロット。レーザー通信をこっちに回して」

空気が抜けてしまっているため、分隊無線を使って呼びかける。

すると、ハッチ上のコクピットからすると端末ケーブルが伸ばされてきた。

『どうぞ。ブローチへの回線は開いてます』

彼女が意図していることを先読みしたかの配慮。パイロットの行為が、涙が出るくらいありがたかった。

「……ありがとう。それと、大至急マドリッドに宇宙へ放り出された要救助者たちの救難措置を取らせて。直ちに突入艇離脱、ハッチは気にしなくていい。ロドニー、隊員と乗員乗客の総員を確認して」

パイロットと、ハッチ口に待機していたロドニーにそれぞれ指示を出す。

一見冷静なアヤリではあるが、彼女の内心は推して知るべし。

油圧レベルが落とされ、軽い衝撃とともに突入艇がスラトス号より離脱する。突入艇のハッチは開け放たれているため、見る間のうちに小さくなっていくスラトス号の姿が、漆黒の闇の向こうに視認できた。

船底から接舷したためにスラトス号の外観　穴が開いたのは上部だ　は突入前と特に変わったようには見えない。だが、確実に彼の船は壊滅へと一步一步向かっていった。次第にあちこちから白い霧状の煙を放出し始めるスラトス号。

「リクト。ねえ、リクト。姉さんよ。返事をして、リクト」

ケーブルをヘルメットの端子に差し込んだアヤリは、唯一、弟と自分を繋いでいる『絆』に託し、遠ざかっているスラトス号に空ろな眼差しを預けながら言葉を絞り出す。

懸命の想いを込めた、アヤリの祈り。

だが、返事はない。ほんのわずかに走る、ノイズだけが彼女の鼓膜をなぞっただけだ。

「お願いだから、返事をしてよ。無事なんでしょう？　ねえ、リクト」

痛々しい呼びかけは、むなしく漆黒の宇宙へと消えていく。アヤリの声は震えていた。

精気のすっかり失われた呆然とした面持ちで返事のない相手に語りかけていると、人員超過の突入艇内に無理やり消えていたはずのロドニーから声をかけられ、我に返った。

「隊長。乗客49名、乗員4名の無事を確認。隊員は我々も含め7名が健在。吸い出されたのは乗員乗客各1名、隊員3名の計5名です。スラトス号に開いた穴と月と地球……それぞれの位置関係を踏まえて搜索すれば、見つけ出すのは至難、とまではいかないでしょ

う。ただ、それには至急の 対応が求められています」

「曹長……」

アヤリには彼が何を言いたいのかすぐに理解できた。

彼は自分の心を推し量ってくれている。つまり、ロドニーはここはまかせて弟を探しに行くよう促しているのだ。

「我々の任務は、乗員乗客を無事救い出すことです。決して持ち場を離れることにはなりませんよ」

厳つい顔をしているロドニーだが、バイザーの奥にあるその面持ちが今は優しくかった。

20歳近く年上の部下は、父親のような暖かい眼差しで見守ってくれている。それが嬉しくも、ありがたくもあった。そしてその氣遣いが逆に申し訳なく、アヤリは彼から視線を外し、

「曹長……すまない……」

と一言こぼすのが精一杯だった。

「隊長、これ使って下さい」

事の顛末を船内から見守っていた隊員の1人が、折り畳まれたランドムーバーを乗客たちの頭ごしにこちらへ押しやる。無重力ならでは、ランドムーバーはフワフワと浮いて アヤリの手元までやってきた。

ランドムーバーはバックパックに装着して使用する。簡単に言えば圧搾空気を使って宇宙空間を移動することができる、携帯小型推進器だ。

「……ありがとうございます」

それを受け取ったアヤリは、戦闘時の威勢のよさはどこにいつてしまったかのような細かい声を漏らす。それを見ながら、ロドニーはしゃがみこんで通路の下に備え付けられたハッチを開き、なかからランドムーバーに取りつける船外活動用のライフケーブルを引きずり出して立ち上がった。

「行って下さい。そして必ず見つけ出して下さいよ」

アヤリのランドムーバーのフックにケーブルを引っ掛け、『大人

の微笑』を浮かべるロドニー。返す言葉は、もう必要なかった。

ランドムーバーを背負うと、アヤリは踵を返して突入艇の床を蹴った。身体がふわりと浮き上がり、虚空へと流れる。

突入艇を背中に残し、飛び出したのは星々が全天に広がる闇の世界。

ここにリクトがいる。助けるよ、必ず。約束……約束 したもの。

バイザーの中に小さな丸い水滴が飛び散る。

胸が張り裂けそうだった。だが、行かねばならなかった。

今彼を救えるのは、自分だけなのだから。



病室は4階の通路一番奥にあった。

静まりかえった廊下の先、病室の前には先に面会に来ていたフラビス軍曹が所在なさに待機しており、エレベーターホールから歩いてきたロドニー曹長に気づくと慌てて姿勢を正して敬礼する。

「様子はどうだ」

沈鬱な声音で問うロドニーにフラビスはただ黙って首を横に振るだけだった。

第一分隊でも精強な隊員である彼が悲壮な面持ちに沈んでいる。ロドニーはそうかといった風に表情を陰しくしたまま病室のドアをノックする。その部屋のなかには1人しかおらず、返事がないこともフラビスの対応でよく理解していた。あくまで儀礼である。

部屋に入ると、涼しげな風が彼の頬を撫でた。病室の窓が心持開けられており、室内には新鮮な空気が流れている。真っ白な寝具が窓から差し込む陽光にまぶしい。質素な病室の壁際据え付けられたベッド、彼女はそこに居た。

アヤリ「ハヤカワ。彼女は身動き一つせずに、ただただ虚ろなまなざしで天井を見つめたまま精気のない面持ちを曝している。ロドニーが入室してきたことなどまるで気づいていない様子で……」。

彼も話には聞いてはいたが、これほどまでに憔悴してしまっているとはには信じられないことであり、表情をさらに強張らせていた。

ほんの一週間ほど前までは、彼の上司たる彼女はマドリード海兵分隊の優秀な指揮官として才を振るっていた。『女だてら』という言葉はとうの昔に死語にはなっていたが、それでも屈強な男性たちを實力で従わせ、厚い信頼を集めた様は、その言葉を彷彿とさせる。

それほどの優れた女性士官が『あの事件』のせいで今ではこのよ

うな痛々しい状態になってしまった。

そう、全てはあの『スラトス号事件』が原因だった。

不審船に襲われていた民間宇宙船スラトス号の危機を、たまたまキャッチできたサイド4駐留連邦軍所属のマドリッド哨戒部隊は強行救出作戦を展開。スラトス号乗客の協力もあり、劇的に作戦は成功しつつあった。

いや、結果からすれば、あの作戦は成功と言っても過言はない。

やもうえぬ『痛み』の上に成り立ったとはいえ。

作戦は万事問題なく進んでいるはずだった。銃撃戦で負傷した隊員はいたが、それでもみな軽症である。スラトス号を襲った不審船を制圧し、事件は解決するはずだった。

しかし。

不審船は不敵にもサラミス級宇宙巡洋艦マドリッドの砲門に屈せず、逃走。その際に置き土産とばかりにスラトス号に砲撃を加えていったのである。

これが原因となってスラトス号の給湯室が爆発。外郭に大穴が開き、乗客乗員、加えて突入していたマドリッド海兵分隊の隊員が何名か宇宙空間に吸い出されてしまったのだった。

もちろん、すぐさま宇宙に放り出された人間の救助活動 行われた。迅速な救出劇はトラブルを補って余りあるもののはずだった。

行方不明者2名。

それが、現実だった。1人は19歳のスラトス号女性乗務員。そしてもう1人は

「マドリッド隊は再編されることになりました」

臥せるアヤリをしばらく立ったままジッと見つめていたロドニーは、やがて心地よい風が吹き込んでくる窓そばへと歩み寄り、コロニー独特の円筒形内大地の眺望を瞳に映しながら、おもむろに口を開いた。

「ほとんどのメンバーが地球軌道艦隊やジャブロー行き……皆、栄転です。なにしろ迅速かつ的確に事件を解決したんですからね。マ

スコミも世論も我々の働きを大きく認めてくれます。特に、貴女の功績を――

そこまで言つて彼は言葉を詰まらせた。

誰もが認める最大の功労者がよもやこんなにも哀しい状態になつてしまつてゐるとは。頼もしい上官に篤い信頼を寄せていた彼だからこそ、今の彼女は見るに堪えなかつたのである。

だが、『あの過酷な結末』を鑑みれば無理もないことだつた。

スラトス号船内から放り出され、行方不明になつたもう1人……他でもない、彼女の血を分けた弟・リクトⅡハヤカワだつたのだから。

搜索部隊は迅速に展開していたし、なにより当のアヤリが最も初期の段階で搜索に入つていたことが記憶に新しい。そのため、同じく放り出された海兵隊員たちは次々と見つかつていた。

しかし、スラトス号の女性乗務員とリクトⅡハヤカワだけはどんなに懸命の搜索を尽くしても発見することができなかった。

いたずらに時間ばかりが過ぎていき、『酸素容量限界時間』が刻々と迫ってくる。

ノーマルスーツに搭載されている酸素は無限ではない。最大容量でどんなに節約しても1日前後が限度である。宇宙においては酸素切れは即死につながり、万が一宇宙を漂流した場合に備え軍用ノーマルスーツなどには自決用の毒物も標準装備されているほどである。刻々と迫る死の恐怖から開放されるために。

結局、搜索隊は1日経つても、いや2日経つても彼らを発見することはできなかった。

3日目になつた時は、扱いは行方不明者の搜索という形にこそなつていたが、実質は遺体の発見回収を目的とした搜索へとシフトしてゐたのである。

この事実、連日徹夜続きだつたアヤリが見るに堪えな。いほど憔悴し、結果倒れてしまつたというのも無理からぬことだ。

以来、彼女は覚醒していてもまづたく反応を示さぬようになり、

今日に至る。

衰弱はしていたものの、身体的には命に別状はもちろんない。

しかし、彼女は立ち直れないほどのダメージを『心』に負ってしまった。

なぜなら、彼女が弟を『殺した』のも同然だったのだから。

スラトス号突入劇の時、彼女は弟よりも他の乗客の脱出を優先させた。心情的な問題はともかく、これは至極当然のことではあった。

彼女は軍人であり、国民の生命と財産を守ることが第一の任務となっている。そのためには、優先順位としては家族よりも第三者の間人を守ることが求められる。彼女はそれを実行したのだ。

結果として、彼女の行為により弟は帰らなかったが、他に女性乗務員1名の犠牲だけでスラトス号の乗員乗客ほぼ全員が無事助かった。

いまだ検証は執り行われているものの、あの状況で発生してしまった犠牲はこれはもう仕方のないことであり、最小限の犠牲で最大限の人命を救助できた　というのが、軍、民間の専門家、マスコミ、そして世論の一致した見解　だった。

だが、彼女にとっては他者の評価など問題ではない。

彼女が弟の脱出を後回しにしたために、その弟があのような結果になってしまったのはこれは動かしようのない事実なのである。

だから彼女は絶望に苛まれ、だから自らを責め、だから忘我の淵に立たされてしまった。

そんな彼女に、誰が『貴女は悪くない。仕方なかったんだ』と言えようか。もはや、あとは時間が解決してくれるのを待つより他なかった。

ロドニーの胸には幾つもの想いが去来してはいたが、彼はそれを表に出さずに振り返る。

「隊長。マドリード隊はバラバラになってしまいましたが……　貴女と戦った日々、貴女が信じた道を迷わず進んだ決断を我々は決して

忘れません」

ゆっくりと語る彼の言葉には重みがあった。

決して長い時を共に過ごしたわけではない。だが、わずかな時でも密度の濃い、そして深い絆を持てた時間を共有できたことは確かなことであつたのだから。

年も軍歴もロドニー曹長の方が圧倒的に彼女よりも上回っている。しかし、彼はアヤリハヤカワという女性士官を心の底から尊敬していた。だから

「だから……必ず、帰ってきてくださいね。我々はいつまでも待っていますよ」

ロドニーは言いながら横たわる彼女の元へと歩み寄り、シートから出ていたその手にそつとある物を握らせた。

「では。ロドニー曹長、配置に戻ります」

そして彼は、踵を合せて背筋を伸ばし、一分の隙もない敬礼を見せるのだった。そのまま綺麗に回れ右をし、部屋から退出していく。

部屋には再び静寂が訪れた。

相変わらず窓からは涼しげな風が吹き込み、カーテンをやんわりと揺らしている。部屋は常に新鮮な空気に満たされ、ただ1人残された彼女を包んでいた。

彼女の様子は、変わらない。天井を見つめたまま身動き一つしない。唯一、ただ一点だけの変化を除いて。

天井に向けられた虚ろな視線はそのままに、彼女の目尻から一筋の『想い』がこぼれる。

それは今の彼女ができる、たった一つの情動表現だった。

光る『想いの筋』で頬を塗らした彼女の手の中には、リクトハヤカワのブローチが握られていた

時は宇宙世紀0078年。

動乱の時代は、もう目の前までやってきていた。

地球連邦宇宙軍サイド2駐留艦隊所属・アイランドペルナローゼ守備戦隊配備サラミス級宇宙巡洋艦リヨン。

最新式のスペックDに及ばない1つ前の世代のサラミスではあるが、近代改修を終えており、第一艦橋の強化特殊樹脂製の窓から見下ろすと、外見は変わらないもののメガ粒子砲に換装された艦首上甲板第一主砲塔を視野に入れることができる。

近代改修に伴い各電子機器も一新され、もちろん艦の中核たるこの第一艦橋も最新の装備になっていた。

ブリッジクルーが配置につき、各々の計器に目を光らせている。それでも通常配備中ということでノーマルスーツを着用していないクルーたちの間には、緊張感のなかにもどこかリラックスした雰囲気漂っていた。

窓の外にはどこまでも星空が続く虚空。そして、タバコケースぐらいの大きさに感じられる、周囲に点在している円筒形の物体。

スペースコロニーである。サイド2特有の並び 同心円状に幾重にも浮遊配置されている人類史上最大の建造物も、大気がないうえに他に比較対照物のない宇宙という空間では、距離感がつかめなためその巨大さを正確に認識することができない。実際は全長30キロを超す超巨大人工物なのだが、それこそ手を伸ばせばスッポリと手のひらに収まってしまふような感覚に陥るのがこの漆黒の空というものだ。

しかし、こんなにも巨大なものが小さく見えてしまうほど宇宙は広大であり、現代の大海原たる存在なのである。リヨンは、この静かな海を平穏に保つために巡視航行をしているのだった。

どこまでも穏やかな海。だが、平穏を打ち砕く時というのは、いつも突然やってくるのだった。

「警報!!」

突然あらん限りの声をあげて叫ぶオペレーター。同時に、機械で合成されたけたたましい警報ベルの音がブリッジ内に響き渡る。

「どうした!」

「3時方向座標プラス40、距離9千に不明艦1! エネルギー反応!」

「右舷Fブロック、レベル3に直撃! 損害不明!」

「確認しろ! ダメージコントロール DCチームに急ぎ補修させろ! 面舵20、上舵3

5、全速! 応戦用意!」

艦長の怒声混じりの問いに的確に対応するブリッジクルー。その上で瞬時に新たな指令を飛ばし、状況に対応しようとする艦長。先ほどのどこか生ぬるい雰囲気は嘘のようである。

警報によって自動的に第一戦闘配置が敷かれたため、照明が落とされ非常灯の赤い光だけが頼りのブリッジ内。戦闘状態に入ったクルーたちの後方、通路から第一艦橋へのハッチがある壁際に場違いな面々が並び立ち、緊張感満ち溢れる状況に驚嘆と羨望のまなざしを向けていた。

場違いな面々。彼らはハイスクールの学生たちだった。まだあどけなさを残しつつも、これから大人の仲間入りをしようとしている彼らにとって、目の前で起きているできごとはこれまで体験したことのない類のものだ。

惹きこまれてしまうのも無理ないか。

色とりどりの私服姿の学生たちの中に、カーキ色の詰襟上着とスカートという組み合わせの女性用連邦軍軍服に身を包んだ黒髪の若い女性士官の姿が。彼女は学生たちを横目で見ながら胸中で独りごちていた。

不穏なご時世とはいえ、局地紛争やテロ以外の『戦争』と名のつく物騒な事態はもう何十年も起きていない。

一般のハイスクールの学生にとって、軍や軍事とは自分たちの生活とは最もかけ離れた存在なのだ。多感な時期の彼らにとって、この戦闘劇は十分刺激のあるものだった。



自分が学生の時はどうだったろうか。彼女はかつての自分の姿を思い浮かべていたが、その間にも戦闘状況は刻々と移り変わり、リオンは連絡を取り合った僚艦と不明艦を挟み撃ちする構図へと持ち込んでいた。

作戦は見事成功。なおも抵抗する不明艦に警告を発したあと、リオンは主砲を斉射し標的を撃沈する。窓の向こうに派手な爆発の光球が発生し、薄暗いブリッジのなかを照らし出した。

学生たちは口々に驚きの声をあげて見入っている。本当の戦闘ともなれば無駄口ひとつ発することはできないだろうが。

そう、これは本当の戦闘ではなかった。

爆発が収まるとともに、漆黒ながらも星々のまたたき、なによりコロニーの姿を見ることができた窓の外の世界から一切の光と物体が消えてしまう。非常等から通常の照明に戻り、その光に照らし出されたのは横に線の入った灰色の壁。

「状況終了。繰り返す、状況終了」

「シャッター下ろせ。各員、担当長以外は通常配置に」

オペレーターの放送が流れ、艦長の指示により閉じられていた灰色の壁、ブリッジの窓を守る防護シャッターが窓下にある格納スペースへと引き込まれていく。その向こうに広がっていたのは宇宙空間ではない。

横長の壁面で囲まれた広大な空間が占め、ノーマルスーツを着た作業員が時折辺りを浮きながら流れていく。

そう、ここはコロニーの宇宙港なのだ。リオンは宇宙港に係留されたまま模擬戦闘訓練を敢行していたのである。

シャッターに映し出されていた光景は全てコンピューターグラフィックスで作られた偽物だった。もっとも、実際戦闘になれば防衛のために防御シャッターが上がり、外の景色はCG変換されてシャッターに投影されるのだ。ゆえに偽物 とはいえ、その精度は本物とまったく見分けのつかないほど精巧だった。

精巧であればあるほど、模擬戦闘とはいえ臨場感が高まり、より

実戦に近い体験と経験を得ることができる。どうやらおおむね今回の模擬戦闘は良好な結果を収めたようだ。色々と指示を飛ばしている艦長の横顔が満足気なの　が物語っている。

それを、彼女はどこか冷めたまなざしで見つめていた。なぜなら、この模擬戦にほとんど意義を感じていなかったのだから。

確かに作戦は上手くいった。しかし、現在の情勢下で不明船1隻をシミュレーションで仕留めることなどそれほど重要なものではない。仮想敵国、いや、明日にも本当に敵になりかねないジオン公国という相手がいるというのに。

今秋、彼の国には国家総動員令が発令されていた。冷戦下にあからさまな挙国一致体制をとっているのだ。ジオンの選択肢のなかに『先制攻撃』というシナリオが盛り込まれていることなど素人でもわかる。

由々しき事態だ。にもかかわらず、模擬戦の、しかも警備任務の延長上にある戦闘が上手くいったことで満足してしまっている。これが今の連邦軍の実態であり、ひいてはそれを運用している連邦政府の状態をよく表していた。

ふと、艦長と目が合った。軽く会釈すると、彼は慇懃深く頷き、再び己の職務に戻っていた。

あの艦長は彼女のことをよく知っていた。実績はもちろんのこと、その経歴、門地まで。階級が下の相手にもかかわらず、明らかにこちらの顔を窺った態度をとっていた。彼の期待するところは、彼女の門地の影響力だったようだ　が、期待された本人してみても、それは迷惑この上ないことだ。

驚くことではない。この艦長のような人物など現在の連邦軍には数え切れないほど存在している。将校は栄達ばかりを望み、下士官・兵たちには低い鍊度とモラルが蔓延していた。

「あのう、このあとはどうすればいいんですか」

自身の出世のことしか考えてない指揮官の背中を冷たい視線を浴びせていた彼女は、呼びかけられた声の方に振り返った。

いまだ興奮が収まらないといったような学生たちが次の指示を待っている。若々しい、希望に満ちた表情で。

彼女を見る彼女の表情が一瞬曇った。

まだ穢れを知らない彼らの面立ちを見ているとどうしても思い出してしまう。

そう、『黒髪の少年』のことを。

それでも彼女は、ぎこちないながらもすました笑顔を浮かべて対応した。

「あ、ああごめんなさい。ブリッジでの模擬戦闘訓練視察はこれで終了よ。士官食堂に移動するから、通路に出たらエレベーターまで進んでね」

第一艦橋のハッチを開け、学生たちに出るように促す。指示に従って次々と退出し、最後の学生が出たのを確認してから彼女もハッチをくぐる。

くぐりざま、一見整然としているが実際は非常に空虚な内実を持つブリッジの有様をいちべつし、彼女は身を翻して、エレベーターを目指して通路を進む学生たちの先頭へと身体を流した。

時はU C 0 0 7 8 年1 2 月、アヤリハヤカワ2 4 歳。

中尉となった彼女は、いまだその身を軍籍に委ねていた。

「それでは本日のプログラムは全て終了となります。希望者には入隊試験の出願願書と手続き案内を配布しますので、こちらで受け取ってからお帰り下さい。それでは皆さん、お疲れ様でした」

小奇麗な士官食堂の一角。向かい合わせのテーブルに各々ついていた学生たちに封筒に入った願書等を指し示すと、アヤリは今回のプログラムの完了を告げて踵を揃え、敬礼する。両隣に立つ、彼女の部下も併せて敬礼する。と、一斉に学生たちから拍手が起こった。

どうやら今回の艦内視察プログラムのお礼のようだ。少々気恥ずかしさを覚えながらも直ると、部下に出願願書と案内の入った封筒を渡す準備をするよう指示した。学生たちは各々立ち上がり、封筒を受け取りに来る。

解散となり、封筒を受け取った学生たちを別の部下が艦の昇降口まで誘導しているのを確認すると、アヤリは学生たちの一団から離れ、隅の方にある周りに人気のないテールブルに付いて書類をまとめたファイルを広げた。

今回のプログラムの報告書をまとめ、協力してもらったあの艦長にも提出しなければならない。もちろん正式なものは後日提出することになるが、今日は挨拶を兼ねて簡単な口頭報告をしなければならないので、スケジュールやメモ書きした書類を見直しておかなければ。

アヤリは胸のポケットからペンを取り出すと、ポイントポイントをなぞりながら今日のスケジュールを反芻しだした。

彼女が現職、サイド2駐留軍求人広報部・アイランドペルナローゼ出張事務所の人材管理部門課長という役職に、中尉昇進に併せて転属してから8か月弱が過ぎ去っていた。

2月に起きたサイド4空域での不審船事件。彼の事件で最愛の弟を失ったアヤリは、一時忘我の淵を彷徨った。

だが、もちろん個人差はあるものの人間とは意外と身も心も丈夫にできているもので、アヤリは徐々に我を取り戻していき、3月になると見た目的には普通にコミュニケーションを取れるまでに回復していた。

回復したあとに待っていたのは、世間の羨望と好奇の目だった。彼女は悲劇のヒロインであるだけでなく、民間人の被害を極力抑えて事件を解決した英雄だったのだ。さらに彼女の出自が特異だったこともあり、マスコミとゴシップ好きの大眾がこのネタに興味を抱かないわけではない。

幸いだったのは、この場合彼女が軍人だったことだ。そのために

報道からは隔離され、1度だけ記者会見を行っただけでマスコミとの直接のコンタクトはその後は一切なかった。もちろん、ハイエナのようにアヤリの個人情報をかきあつめたゴシップ誌などはあることないことを面白おかしく書きたて、当座のネタとしてはいたが。

それも3か月も過ぎると、元々報道の立ち入れない軍人ネタのため、ぱたりと収まっていた。なにかと面倒くさい軍というものではあるが、この時ばかりはアヤリはこの組織に少なからず感謝したものであった。

確かに誰もが驚くほどの回復ぶりを見せてはいたが、彼女の心には修復できない大きな傷痕が残されていたのだから。今でも人知れず時折見せる、どこか悲しそうな表情……それが全てを物語っていた。

身を引き裂くような辛い思いをし、少なからずその一端の要因となった所属組織・地球連邦軍。当該事件により身も心も深く傷ついた体験を経、それでも軍に居続けた理由について彼女が振り返ったことはなかった。

事件後、軍上層部は彼女の状態を見、既存の現場では従来通りの勤務はできないと判断し、リハビリも兼ねて現職の事務職へと就かせたのだが、それが逆に彼女に深く考えるタイミングを与えなかったのだ。

現職たる求人広報事務所の仕事はお世辞にも一線の仕事とはいえない。現在の連邦軍のなかではむしろ閑職といつていい職場だった。

他の部署と異なり、通常の公務員同様の決まり決まった勤務時間と休日で、役所の事務職と違うのは制服を着ているか着ていないか程度の違いしかないと見られても別段おかしいことではなかった。

このようにゆったりと時間が流れていく職場である。本来であれば考える時間も多く、身の振り方や今後の自分のあるべき姿、事件を振り返って選ぶ人生等々を冷静に考えられる。そう誰もが思う

ことだろう。

しかし、この大河のようにゆるやかな時の流れの職場の空気は、逆にアヤリの思考を停止させてしまった。緊迫した状況下で日々過ごしてきた彼女は、むしろそのような追い込まれた状況の時にこそ鋭い判断力・思考力が全力を発揮するようになっていたのだ。

本来一般企業などでは重要部門の求人広報部門であるにもかかわらず、現在の連邦軍のそれはルーチンワークと年間数度の求人活動が全てで切迫した任務などありはしない。仕事だけでなく生きる道においても漫然とした思考が 助長されてしまうのもこれは仕方のないことだ。

だからアヤリはここにいる。ここにいて、明確な道標を見つけ出せない状況に陥っていたのだった。

それでも与えられた仕事は水準以上をこなしてきたのはさすがで、今行っているチェック作業もこと細かになしている。

メモの走り書きに目を通していた時だった。人の気配が接近してくるの不意に感じ、身体に染み付いた習慣が気配の方へと鋭い視線を飛ばさせる。

視線の先にいたのは3人の学生だった。金髪の少女が1人と同じく金髪の少年とブルネットの少年の2人。

側に近づいて声をかけるまでは作業を続けているだろうと思っていたのだろう。行為の前にこちらが気づいたことに驚いて足を止めていた。

困惑している彼らには悪いことをした。さすがに彼らが可哀想になり、アヤリはペンを置いて手を組み合わせると、

「どうしたの？ なにか私にご用かしら」

表情を崩し、薄く笑みを浮かべてやる。すると、緊張の面持ちだった彼らの表情も安心したように緩んでいた。それがきっかけとなつたのか、3人のうち代表で金髪の少女がしゃべりかけてきた。童顔で愛らしい面立ちの少女だ。鼻の周りに貼り付けたそばかすが彼女の幼顔をより強調していた。

「あ、あの、すみません。ハヤカワ少尉、なんですよ」

「おい、今は中尉さんなんだぞ」

言ったとたん、横槍を入れられている少女。クラスメートの突っ込みに顔色を変えて彼女は慌てていた。

「ご、ごめんなさい！」

あたふたして頭を下げている姿がなんとも可愛らしい。アヤリは微笑んで気にしていない様子をアピールした。

「いいのよ。今年の春先までは実際少尉だったんだし。それより、どうしたの？ なにか不都合でもあった？」

「い、いえ、その、あの、さ、サインしていただけますか！」

隠し持っていた手帳を差し出しつつお辞儀して頼み込んでいる姿勢の女の子。

「ハヤカワ中尉はあの『サイド4宙域不審船事件』を解決した英雄なんですよ！ そんな方にこうして近くでお会いできるなんて俺感激です！」

「あ、握手していただけますか！」

彼女の後を追いかけて興奮気味に喋る他の2人の言を聞いてようやく彼らの意図を理解した。彼らは英雄としてのアヤリ「ハヤカワと邂逅したことに感激しているのである。そうすれば次に取るアクションは、早速披露してくれた三者 三様の有様になるのも至極当然のことだった。

あの事件以来数え切れないほど同じような場面に遭遇したため今さら驚くこともないが、やはりその胸に去来するのは事件の記憶だ。アヤリの表情がふと寂しそうなものに変わる。

それでも彼女は、自分の感情を修正することを忘れなかった。いまだ傷は癒えていないが、重篤な精神状態へと落ちてしまう前に自己を救済する術を彼女は身につけていた。

「お名前は？」

女の子が差し出していた手帳を受け取ると、アヤリはペンを取って適当なページに流暢に自分の名前を書き込んだ。

「ファーナです！ ファーナ「トラヴィスでお願いします！」

「ファーナさんね。ちょっと待ってて」

自分の名前の下に、『For Miss Farna Trav  
is.』と日付 を添えて書き込んでやる。書きながらちらと彼女の様子を覗くと、書き終えるのを目を輝かせて待ち焦がれている様子が目に飛び込んできた。それがとても可愛らしくてつい笑みがこぼれてしまう。

「はい、どうぞ。つづりはこれでいいかしら？」

「わあ！ あ、はい！ ありがとうございました！」

感激という感情を満面に浮かべながら手元に返ってきた手帳のサインを見た彼女は、喜色に溢れた声で礼を述べた。差し出されてきた小さな手に手を重ねてやると、何度も何度も礼の言葉を述べて感激している少女。それを見ていたクラスメートの少年2人は、

「お、おいお前ばっかりずるいぞ」

「は、ハヤカワ中尉、僕にもサ、サインお願いします！」

当然の抗議と言えば当然なのかもしれない。アヤリは苦笑いしながらも、2人にも書くものがあれば差し出すように と告げるのだった。

結局3人にサインを振る舞い、求めらるままに握手で応 対したアヤリ。彼らは口々に何度も礼の言葉を述べながら最後に退出の挨拶をし、士官食堂から立ち去っていった。 なんと騒がしいひと時だったが、気分は悪くない。あの事件直後に大拳して押し掛けた始末の悪いミ―ハー族に比べれば可愛いものだ。

なんとなく癒されたような気分のまま彼らの背中を見送り、再び作業を始めるべく席に着こうとすると突然声をかけられた。

「よう、相変わらず大人気だな」

声のした方を見ると、軍服に身を包んだ中年の士官がこちらへ身体を流してくるところだった。その顔はよく見知った顔であり、アヤリは降ろしかけていた腰を上げ、姿勢を正し敬礼して彼を迎える。



「マチアス大尉。先日はどうも。それからお変わりありませんか？」

上手くバランスをとって着地した彼・マチアスは、気さくな笑みを浮かべつつ、両手に持ったドリンクパックの片方を返礼代わりに差し出してきた。

「まあなんとか息災つてとこだな。事務所の連中が来ていると耳にしたから顔を出してみたんだが、今日は引率の先生役か？」

「そんなところです。事務所でデスクワークばかりですと、たまにはこういうのもいいですね」

ドリンクパックを受け取ったアヤリは、肩を竦めつつも笑顔で答えた。

マチアス大尉はかつてアヤリが所属していたサラミス級宇宙巡洋艦マドリードで機関長の職責を担っていた人物だった。所属していた配置こそ違うものの、よき年配、よき上位者として色々と世話になったものだ。

現在マチアスはペルナローゼ守備戦隊所属の同級宇宙巡洋艦リヨンの機関長を務めており、粗野なところもあるが高い技術の優秀な士官という昔から変わらざるの評価を伝え聞いている。

2月のあの事件後、部隊が再編され彼も異動していたのだが、まさか彼の赴任先にほど近い勤務地に赴任するとは思っていなかったため、再会した時はそれは嬉しかったものである。以来、所用で港を訪れる時などは幾度となくまみえ、先日も互いの近況を語らいながら食事をとにしたばかりだった。

そのマチアスが感心したように頷いている。

「様になってるな。やはり貴官はスラックスよりスカートの方がよく似合う。そうしているとそこのねえちゃんなんかよりはるかに綺麗なんだがなあ」

つま先から頭までを見回したマチアスの感想である。確かにいつもはスラックスタイプの制服を着用しているが、10代の学生を相手にするような説明会や見学会の時は極力スカートタイプを選択し

て着用している。

ただでさえ軍服というものは威圧的であるため学生達が萎縮しかねないと考えた彼女なりの配慮で、柔らかな物腰で彼らに接することができるよう着分けているのだった。

もつとも、公私にわたり普段あまり女性らしい服を着ず、パンツタイプがメインのため、当人も実はスカート姿に照れがある。そこを突っ込まれば、狼狽しつつ頬をほんのり朱に染めてしまうのも無理からぬことだった。

「からかわないでくださいよ、大尉」

「俺は本気だぞ」

妙に真剣な表情で返してくるマチアスに、アヤリはますます狼狽しとうとうつむいてしまう。

「変わらんな、貴官は。大の男も2秒でねじ伏せる女偉丈夫とはとても思えん」

「ほつといてください」

アヤリが口を尖らせて反論すると、案の定、彼は破顔して面白がっていた。

「そっちは最近どうだ。時期が時期だけに、今日みたいに学生相手の説明会三昧か」

言いながら、テーブルを挟んで彼女の対面側にさっさと座ってしまうマチアス。我が道を行くところなどなんと彼らしい。変わらずの有様に苦笑しながらも、彼女も椅子に腰掛ける。

「回数はそれほどでもないんですが、意外と事前準備に手間暇がかかりますね。今日の見学会も申請するだけでも一苦労でしたよ」

「それでもこなしってしまうのはさすがだな。ペルナローゼ事務所の新任求人屋はえらく優秀だと駐留戦隊でも噂になってるぞ」

「そうやって持ち上げてもなんにも出ませんよ。出るとしたらこれぐらいですかね」

不敵な笑みを浮かべ、アヤリは一通の大判封筒を差し出す。怪訝な面持ちでそれを受け取ったマチアスは、中身を出さぬまま封筒口

から中を覗き込み、苦笑いを浮かべていた。それは学生たちにも渡されていた入隊案内と入隊試験 願書だった。

「俺を勧誘してどうする」

「大尉も初心に返っていつそ一兵卒からやりなおしてみてはどうです？ 多分新鮮で刺激的な体験ができると思います すよ」

澄まし顔のアヤリ。それに対し、マチアスは渋い顔をして封筒を差し戻してきた。

「やめとくよ。貴官の部下になってこき使われそうだからな」

「酷いですね。ちょっと前まで持ち上げてくれていたのにもう終わりなんですか？ 私が大尉の上官だったら、ことさら優しく耳元で『もたもたするな、この×××野郎！』と囁いて差し上げますのに」

口元に掌を添え囁いている真似をしてみせると、叩き上げの中年大尉は目を丸くしていたが、すぐに破顔して諸手を挙げた。

「わかったわかった、俺が悪かった。降伏。降参」

詫び言葉を口に行っているが、浮かべている人懐っこい笑みには全く懲りた様子はない。マチアスは心底おかしいと いった様子で笑っていた。

しかし、その笑みの裏側に彼はなにかを隠していた。傍目にはいつもの陽気な彼なのだが、普段通りの様子のなかにアヤリはどこか異なった雰囲気を感じた。彼女の鋭敏な感覚は、言葉にはできない彼の微細な異変を捉えていたのである。

ひとしきり笑い疲れたのか、ドリンクパックの飲料を美味そうに嚙下しているマチアス。そんな彼に、アヤリは陰しくもなくかといつてとりたてて柔和でもない、自然体の表情を向け、言った。

「大尉、今日は雑談をしにいらっしやうたわけではないので しょう？ お顔にそう書いてありますよ」

その一言が契機となった。嚙下を止めると、ドリンクパックをテーブルの上へと置いて表情をあらためた。それまでのどこかだらしのない雰囲気が一変し、マチアスは鋭い眼光をアヤリに飛ばしていた。

「貴官に嘘はつけんな。正直、貴官に話すべきかどうか俺なりに悩んだんだが、やはり話しておいた方がいいだろう」

彼は周囲をそれとなく見回すと、テーブルの上にやや上体を乗り出し、小声で話し始めた。

「あまり考えたくない話だが、サイド3のジオニストどもは近いうちにもしかするともしかすることを起こすかもしれない」

サイド3のジオニスト。それはジオン公国のこと。

もしかすること。それは昨今の情勢を鑑みれば1つしかない。

「なにがあつたんですか」

「今朝、サイド4の部隊で月の裏庭を観測する任務についている同期から連絡があつた。サイド3内のコロニー間を多数の光点が移動しているのを観測したそうだ。移動と言ってもバラバラにただ動き回っているだけではなく、ポイントポイントに集結していつている……そう確認できたとのことだ」

アヤリの表情が強張った。テーブルの上で組み合わされていた指にやや力がこもる。

「数は確認できているんですか」

「いや、まだ特定できていない。ただ、民間船の動きとして考えるには不自然すぎるということだ。サイド中に分散配備していた艦艇を集結させているとしか思えんな」

マチアスは難しい顔をして嘆息し、ほんの数秒疲れたように瞼を閉じていた。再び瞼を開けると、

「……とまあ、こういうネタだったから色々考えたんだが。止めとくか？」

いまさらながらの問いかけだ。

「いえ。オチまで見せられているのに『今のコントはなかったことにしてくれ』、と言われてもなかなか難しいと思うので」

苦笑いを浮かべながら答えると、

「違うない。うちもないことを言った。忘れてくれ」

彼は至極もつともだというように口の端を歪めて不敵な笑みを浮かべていた。

マチアスの口がどうして重くなっているか、それはアヤリ自身がよく理解していた。

全てはあの不審船事件に端を発しているのである。事件後、軍と警察による合同の調査が行われ、それは現在も継続中なのだが、いまだ不審船を繰り出しスラトス号を襲撃した犯行グループのバックボーンを特定するに至っていない。おそらく今後も不可能だろう。

しかし、事件の現場に居た人間、サイド4駐留軍の人間はあの事件以前にも起きていた同様の事件を経験している。事件の特性を鑑みると、状況証拠だけとはいえジオンの影が絡んでいることは疑いのないことと判断できたのである。

アヤリは一連の事件に絡んできたまさに現場の人間だった。だからこそ、ジオンこそが不審船事件の黒幕だと確信を抱いていた。

そして、その不審船事件で彼女は最愛の弟を失った。

悲劇の責めを負うべき一端はアヤリにもあるのかもしれない。そのことは彼女自身がよく理解していた。だからこそ、彼女は事件後しばらく忘我の淵を彷徨ったのである。自身を責めて。

だが、やはり最大の加害者は他の誰でもない、不審船の犯行グループであり、その後ろで糸を引いていた黒幕なのだ。

こうなれば、彼女がジオンという国に対してどのような思いを抱くか。自明の理である。

ではそれがマチアスに今回の情報をもたらすことをためらわせた要因だったのか？ 彼女にジオンの蠢動を知らせることで、彼女の怒りにさらに油を注ぎかねないかもしれないという危惧を感じたからだったからか？

答えは否。むしろ逆である。

マチアスは今回の件でアヤリの古傷を悪化させてしまわないか、そう思ったのだろう。

彼女の心の根底を占めている思いは、ジオンに対する純粹な怒り以上に強い『無力感』であるということ。マチアスがこのことに気づいていることをアヤリは知っていた。

現場で一線を張っていた頃のアヤリは自信に溢れていた。もちろん、過信や驕りを諫めたい意味での自信にである。

それでも彼女は弟を救うことはできなかった。その程度の自身の力など、なんの意味もないと思い知らされたのだ。

ジオンへの怒りを持ちつつもどうにもできない焦燥感、苛立ち。やがてたどり着く無力感。復帰してもデスクワークばかりで切迫感のまるでない現在の職場に染まりきってしまうことも無理からぬことだった。

そんな彼女にいまさらジオンの動向を伝えたところでどうなるというのか　マチアスはそのところを慮ってくれたのだ。

それでも今回の件はことがただけに最後には語ってくれた。もちろん気を遣ってくれていたのはありがたいが、このジオンの動きはこれまでと状況が異なる。聞いたからといってなにもできないのはわかってはいるが、それでもこの話を聞かなかったら無力感以上に後悔の念が心を占めた　ことだろう。

「……ありがとうございます。すみません、色々と気を遣わせてしまつて」

言葉で気持ちを表すだけでは彼女が過去から抱いているこの上官への感謝の念は表現しきれない。しかし、それでもやはり言葉として表さなければならぬ。アヤリは精一杯の気持ちを込め、深く頭を下げた。

「おいおいよしてくれ。俺は別に礼を言われるようなことはなに一つしてないんだ。貴官はじいさんばあさんにに席を譲つたら、必ず礼が欲しいと思うか？」

そんなことあるわけがない。アヤリはいいえと答えた。  
「だったら、そういうことだ」

マチアスは口元に笑みを浮かべた。この件はそこまでだぞ、とい

う意味合いの笑みだった。

それをよく理解したアヤリは、だからこそあえて自身から切り出した。この会合の本来の話題について。

「それで、大尉はどうお考えですか？ 今後の展開として」

「あまり考えたくはないな。こうなると考えざるをえないが。さつきも言ったが、もしかすることを起こすかもしれない、奴らは」

渋い表情をして腕を組み、事態が決して樂觀視できないことに低く唸るマチアス。

「しかしだ。彼我国力比1：30とも言われている情勢下で、奴らが連邦政府に挑んでくるなんてのはある意味狂気の沙汰だ。まともな思考回路を持っていたら選択肢にすら挙がらんだらう。貴官はどう思う？」

「おっしゃる通り常識的に考えればありえないでしょう。ですが、常識などというものは、実はそれほど確たるものではないものでもあります」

「違うない。来るかな、奴らは」

額に脂汗をじっとりと滲ませ始めた上官の問いに、彼女は押し殺した声で決して結論づけたくはない答えを紡ぎ出す。

「この時期に艦艇を集結させているとなると、単なる演習　そう発表があつたとしても到底信用しかねますね。『来るべき時がとうとう来た』……そんな気がします」

彼ら、ジオン公国が宣戦布告してくる布石はいくらでもある。それがこれまでの内部での蠢動ではなく、外部に対しての動きと取れる行動を開始しているのだ。その先にあるものはなにか。言わずもがなのことである。

「奴らはどうやって我々を攻略するつもりなんだろうな」

それが最大のポイントだった。絶対的な国力比を覆すのは本来であれば不可能だ。

それこそ、常識的に考えるなら『ありえない』。正面からぶつかれば彼らの敗北は必至だ。こんなことは当然彼らも分かっているは

ずである。

ではなぜ動くのか。アヤリには思い当たる点があった。

「1：30の彼我国力差……確かに無視できないものです。しかし、だからといってこれを覆す手段がないというわけでもありません。もつとも、仮に覆すための拳に出るとすれば、非常に強行的な手段に依らざるをえませんが」

言いたくはないが結果的にそれが現実であること。事実を認めたくない思いが自然と下唇を噛ませる。

しかし、それでどうなるものでもない。アヤリは重い口を開いた。

「彼らが絶対差を覆す手段として用いるのは『奇襲』と、それからこれこそあまり考えたくはありませんが……おそらく『NBC（核・生物・化学）兵器』だと思います」

とたん、マチアスの双眸が大きく見開かれた。

多少なりとも想定はしていたもののあえて論外の位置に据えた最も聞きたくない言葉だったようで、彼は数秒間言葉を失っていた。

それでもどうにか落ち着いていたようで、アヤリの出した結論に言葉を続ける。

「生物・化学兵器にとどまらず、『核』も使ってくるか。有史以来、実戦ではヒロシマ・ナガサキでしか使用されなかった兵器を」「それこそが盲点だと思います。誰もが『使われることのない兵器』と考えているところが」

現在の気持ちを表すようにため息を一つ吐き、一拍間を置いて続ける。

「旧世紀の冷戦期には相互抑止力として、大国間の戦争が過去のものとなつてからは小型のものが各地紛争への抑止力として機能してきました。連邦政府が設立してからも同様ですが、安定期に入つてからは核兵器の存在はほとんど意味をなさなくなっています。人々の記憶からも失せ欠けているというのが現状でしょう。よしんば核兵器に対する認識が残っていたとしても、草創期でしか使われ



たことのない兵器ですから、『使わない兵器、使ってはならない兵器、使ったら世界世論の厳しい非難にさらされる兵器』というものが総じて今の人間の感覚でしょうね」

「なまじ危機なんてものから離れている期間が長かっただけに、現実から乖離した感覚に陥るのも無理ないことだ」

「ええその通りです。ですが、使ってはならない兵器、ということを決めたんでしょうか。そもそも兵器とは使用されるために作られたものです。例えば核が抑止効果という当初のものとはすり替わった目的のために作られてきたとしても、その目的が有名無実になった現在、第一義の目的のために使われることはないなどと言える根拠はどこにもありません。これまで使用されてこなかったのは、単に世界情勢と倫理意識という非常に曖昧なものに依っていたに過ぎないんです」

言いながらテーブルの上に視線を落とす。

一見平和そのものの現代も、実際はかなり危ういバランスの上に成り立っているのだ。自ら発した言葉とはいえ、いやがおうにもそのことを再認識させられたアヤリは再び深く嘆息した。

「しかし」

沈鬱ながらも言葉をつむぎ出すマチアス。アヤリは顔を上げ、彼へと視線を移した。

「しかし、ジオンにそれらを運用できる戦力は存在しているか。腐ってるとはいえ、連邦も張子の虎な部分ばかりじゃない」

「その通りです。『あの兵器』のことを伝え聞いていたとはいえ、現在こうして彼らが蠢動し始めるまでは私もそう思っていました」

「人型機動兵器、か」

ずばりの回答に、アヤリは頷いてそれが正解である旨を伝えた。

「大尉は本当に優れた情報網をお持ちのようですね」

「なに、最前線の海兵で実績を積み今も現場の信頼が厚い誰かには負けるさ」

蛇の道は蛇というやつである。互いに軍内部に非公式の情報網を

持ち、そこから様々な情報が入ってくる。

もつとも、アヤリの場合はマチアスと違って無論自分からそれらを求めているわけではなく、人の良い旧交の面子らが彼女の人柄に惚れ込んで、軍事情報に限らず様々なことを一方通行的にもたらしにくれているのだが。

「で、仮に奴らが木偶人形を持っていたとしてだ。そんなに脅威となるものか」

「一見荒唐無稽のように思えますが、ミノフスキー粒子のことを考えれば決して子供たちが好きなアニメヒーローの世界の話で終わりません。彼らが人型機動兵器に着目したのは、まさに彼の粒子の特質を完全に理解し軍事転用した結果だと思っています」

くだんの粒子の研究にジオンが血眼になっているのは、なにもいまに始まったことではなかった。一連の不審船事件が相次いだ時も狙われたなかにミノフスキー物理学の権威と言われている亡命希望者がいたことからよくわかる。

連邦軍もミノフスキー粒子に関して研究を進めてはいった。実戦でも試験的に使われている部隊もあった。アヤリが以前所属していた部隊もそれである。

が、単にそれだけだ。ほんの片隅で片手間に扱われているにすぎない。単に特性の研究だけに留まらずミノフスキー粒子が導き出す次世代の戦術まで視野に入れて研究しているというジオンに遠く及ばない。

こうなってしまったのは軍首脳部がミノフスキー粒子を用いた新たな戦術を否定したからである。

ミノフスキー粒子は確かに電子戦に影響を及ぼすものであるが、それは使用した方にとっても同様である。自らにも足枷をはめる方法がどうして主たる戦術として使われようか。これが連邦軍の出した結論だった。

これに似た考え方にいわゆる『核抑止力』があるが、ある意味一面的には的を得ている論理である。

ただ、忘れてならないのは、状況を覆す『手段』が現れない、という前提の上に築かれている論理であることだ。

しかし、連邦軍はこの前提を思考の外に置き去りにしてしまった。

「ミノフスキー粒子はその特性として電磁波および赤外線の影響を阻害します。すなわち、交戦領域へ大規模にこの粒子を投入できる体制を整えられれば、レーザーや誘導兵器の類を完全に無力化することが出来ます。こうなると 既存の長距離電子戦というものは完璧に封じられ、自動的に前時代的な目視による有視界近接戦闘へと移行せざるをえません。これまでの軍事戦略のそれこそ常識などというものは、のきなみ引つ繰り返るでしょう」

「そこで木偶人形の登場というわけか」

「そういうことです。電子戦と誘導兵器に特化している今の連邦軍では対処しきれないでしょうね」

「なるほどな。ミノフスキー粒子をばら撒いて目を潰し、動きを封じたところを有視界近接戦闘に特化した木偶人形にNBC兵器を使わせて奇襲する、か……確かにこれはたまらん。だが、それにしても彼我戦力比を覆す駒としていささか 弱くないか？ 確かに局地的な戦術的勝利は奴らにもたら されると思うが、連邦が奇襲を耐え抜いて持久戦に持ち込んできたなら国力の差はいかんともし難いところだろう」

「ええそこですね。彼らはまず、連邦軍の宇宙にての橋頭堡であるルナツーを潰すでしょうが、それだけでは連邦軍の一部を叩いたにしか過ぎません。彼らの戦略はおそらく、いえ、確実に短期決戦・早期講話という点に置かれてい るでしょう。これを達成するためには――」

いよいよ話の核心部分へと踏み込み始めた時だった。話の腰を折る無機質な電子音がアヤリを止めた。

マチアスの携帯端末の音だ。彼は懷から折りたたまれたそれを取り出し、開く。小型ディスプレイに表示された内容に目を通したか

と思うと、ばつの悪そうな表情でこちらに向　き直った。

「すまん、呼び出した。まったくヒヨッコどもめ、俺がいけないなにもできん。困ったもんだ」

「いえ、私の方こそ長々と話込んでしまつてすみませんでした」

舌打ちしながら立ち上がったマチアスに合わせ、アヤリも立ち上がる。

「色々お気遣いいただいて、いつも本当にありがとうございます」

「なあに、気にするな。それより、杞憂に終わればいいがな」

まったくである。憎むべき相手ではあるが、だからといってことが起こればいいわけではない。

アヤリは心の底からの同意を表すべく、ええ、と答え頷いた。

「近いうちに続きをやるう。またなにかわかったら連絡する。じゃあな」

「はっ、失礼します」

軽く手を振つて踵を返すマチアスを敬礼で見送る。

士官食堂から彼が出て行くのを見届けると、アヤリは再び座席に腰掛けた。

そういえば、と一口も口につけていなかったドリンクパックに手を伸ばす。中身はアイスコーヒーだった。氷が入っているため、しばらく置いていてもひんやりと冷たく、嚥下すると喉が心地よかった。

ひとしきり喉を潤すと、深く息を吐きながら背もたれに身体をあずけて天井を見上げる。脳裏に渦巻くは、先ほどの話　。

ジオンが連邦に戦争を仕掛けようとしている。もう何年も前から危ぶまれていたことだ。それが、現実のものとなろうとしている。

戦争。

開戦したら果たして自分はどつするのだろう。現在の職場でひたすら志願兵を募るのだろうか。それとも転属命令が下り、前線へと送られるのだろうか。むしろ自分から前線への転属を志願するのだろうか。

しかし、結局行き着く先はやはり『だからどうなるというのだ』  
という感覚。仕方なくも思うが、同時に歯がゆくもある。自分自  
身の心なのに思うようにならない。

女偉丈夫と言われても自分などしょせんこんなものだ　アヤリ  
は目を閉じて、迷走する己の心に対し今日幾度目かの深いため息を  
吐いた。

「短期決戦・早期講話、か」

これ以上思い悩んでも詮無きことだ。どうせ堂々巡りである。ア  
ヤリは気分を切り替え、先ほど途中までマチアスに語った内容を一  
部反芻してみた。

ジオンの戦略がその点に置かれていることは間違いない。そうで  
なければそもそも開戦する意味がない。

では、そのために彼らにとって最も効果的な手段はなにか。マチ  
アスに言いかけたのは、まさにそのことだった。

国力比で絶対的に劣る彼らに勝機があるとすれば、機先を制して  
連邦軍の中枢を完膚なきまでに破壊してしまうことに尽きる。

どんなにフェイルセーフを万全にしても、頭脳を完全に破壊  
されてしまえば混乱が起きないわけがない。ましてや連邦軍という  
安全保障の礎のもとに成り立っているのが　連邦政府である。防壁  
が瓦解すれば政府はなす術もない。

戦意を喪失したところに講和を持ちかけられれば、連邦政府は受  
諾せざるをえないだろう。実質的には降伏も同様の講和だとしても

問題なのは、いかにして連邦軍の中枢を壊滅させるか　この点  
だった。

連邦軍の中枢は、地球の南米大陸はアマゾン川流域の地下に建造  
されている軍最大の施設・連邦軍本部『ジャブロー』だ。このジャ  
ブローは地下の岩盤をくり貫いて建造されているため、一説には核  
の直撃にも耐えうると言われて　いるほど頑強な守りに支えられて  
いる。無論、本部を守る充実した攻撃戦力も強力だ。

さらにポイントなのは、密林の奥地に建造されている上に施設のほとんどが地下に存在していることである。そのため基地の正確な位置を知るには、連邦軍以外では至難と　　いう壁が立ちほだかる。

これらをクリアしてどうやってジャブローを撃滅するか。アヤリも今のところ解にたどり着いていなかった。

「あ、いけない。早く報告して事務所に戻らないと」

ふと我に返る。マチアスと話し込んでしまったのに加え、　考え耽って時間を費やしてしまった。世界の情勢を見据えることも大切だが、だからと言って目先の事務処理を疎かにしていいというわけはない。

背もたれから身を起こし、ファイルに綴じられた書類に再び目を通す。

ひどく嫌な予感にチクリと痛む胸の奥　　それを押し留めて。

スペースコロニー・アイランド・ペルナローゼの中心街からやや外れたビル街にある、官庁機関専用ビルの4階。

地球連邦サイド2駐留軍旗下の求人広報部・アイランドペルナローゼ出張事務所はそこに居を構えていた。

エレベーターホールの前に設えられた受付の奥にオフィスが広がっており、パーティーションにて人材管理課と広報課に区分けられている。

アヤリは人材管理課の奥、課長席にて広げられた書類を前に、手にしたペン底を下唇にあてがいながら一人物思いに耽っていた。

彼女の思いを占めているのはただ1つ。一昨日から思案に思案を重ねているジオンによるジャブロー攻略法についてである。彼女はメモ帳を引つ張り出し、整理するために書き出し始めた。

1つ目。かつてのICBM（大陸間弾道弾）の技術をフィードバックし、衛星軌道上からの核攻撃。衛星軌道上の制宙権さえ確保できれば、かなりリスクの少ない攻撃法だ。

だが、大気圏突入させたミサイルを迎撃される可能性がある上に、なにより先方はジャブローの位置を特定できていない。

厚い岩盤に守られているジャブローを攻略するには、旧世紀に使用されていた地下攻撃用の地中貫徹弾を使うのが得策だが、そのような特殊なミサイルをジオンが多数所有しているとは考えられないし、あったとしても少数のそのミサイルを以って広大なアマゾンにローラー作戦をかけられるはずもない。

地下への核攻撃は威力が限定されてしまったため、この点においても位置を特定せずに使用しても、打撃効果はかなり薄いことがわかる。アヤリは1案を書いてはみたものの、すぐに二重線で削除する。

2つ目。衛星軌道上の制宙権を確保するのは同様だが、異なるの

は地上部隊を降下させること。アマゾン流域に降下させた地上部隊によって直接侵攻、以って核攻撃。

とはいえ、この案も厳しいと言わざるを得ない。確かに長距離対空攻撃により核を迎撃される可能性は低くはなるが、降下中の迎撃脅威は依然として存在している上、兵站も確保せずに現地に降下し直接攻撃というのも現実味が薄い。奇襲ということであればまた少し話しは変わるかもしれないが、ジャブローの位置すら判別していないのではそもそも奇襲もなにもない。これも削除だ。

3つ目。制宙権のくだりは同様。そこからジャブロー以外の連邦拠点へと降下・制圧をかける。ここを橋頭堡として兵站を確保しつつ、できるだけ早い段階でジャブローの正確な位置を特定。核攻撃を含めた総攻撃の準備を整える。

正直、これが今のところの3つの案のなかでは一番まともで確実な手段に思える。ただ、もちろん万全ではない。むしろ最も確実な反面、致命的な状況に陥ることになる可能性も秘めている手段だった。

なぜなら3案は消耗戦・長期戦になる要因を持っているからである。これでは彼らの短期決戦・早期講和の戦略にそぐわなくなってしまう。

先の2つ同様、二重線で削除しようとするが、少し考えたのちに思いとどまる。代わりに3案の頭に三角の印を付け、保留扱いにした。

では、これらに続く4つ目の案はないのか。

「課長？ ハヤカワ課長、どうかされましたか？」

呼びかけている声に思案の世界から連れ戻される。普段ならばこうはならないのだが、いかせん題材が題材だけにのめり込み過ぎてしまっていたようだ。アヤリは4案目を思案するのを止め、顔を上げた。

見ると、部下の1人、オットー少尉が怪訝な表情を浮かべて机の前に立っていた。



「あ、いえ、なんでもないの」

「そうですか。呼びかけても反応がなかったものですから、なにかあったのかと」

「ごめんなさい、ちょっと考えごとをしていたただけだから。それになにか？」

さりげなくメモした紙を机上の他の書類の間に滑り込ませ隠し、アヤリは指を組み合わせて自然体でオットーを見上げた。

真面目そうな面もちと眼鏡がトレードマークのオットーは、この春任官・着任したばかりの新米士官である。本人はジャブロー勤務を希望していたようだが、図らずとこんな場所でこんな任務についている。決して愚鈍ではなくむしろ優秀な人材ではあるのだが、気が弱い上に神経質で、そのわりにはいざという時の注意力に若干欠けるところがあるのと、肉体労働が不得手ということからここに配属されたと人事データに付記されていた。

「今夜のことなんですが、終業後すぐにここを出ますので、終業間近になりましたら準備のほど宜しくお願いします」

「今夜のこと？　すぐに出る？」

なんのことだかわからず、首を傾げる。すると、血相を変えて焦るオットー。

「先日お話して出席のご了解を得た、課のクリスマスパーティーの件なのですが、だ、大丈夫ですよね？」

そういえばそうだった。我が意を得たりとばかりに「ああそうだ」という意味合いで口を軽く開いて頷く。

不審船事件以後、大勢で集まって騒いだりすることにはめっきり興味を失ってしまったアヤリは、最初に誘われた時はカンパだけして断ろうとしたものの、課員たちの度重なる勧誘については折れて参加を同意したのだ。

しかし、マチアスとの件があつてからはそのことばかりが頭を占めていたため、すっかりスケジュールのことを失念していた。もちろん最初から忘れていたわけではないので、クリスマスの予定は

しつかりパーティのために確保してある。

「大丈夫よ。ちゃんとスケジュールは空けてあるから。終業 した  
らすぐに出るのね。OK、遅れないよう準備するわ」

「わ、わかりました。お願いします」

動揺していたオットーも、上司から快い返答を得られるとたんに表情を一変させ、上機嫌で回れ右をして立ち去った。現金なものである。3つほどしか年齢は変わらないものの、どこか子供じみたところのあるオットーの素行にアヤリは苦笑いを浮かべるのだった。

アイランドペルナローゼ出張事務所には事務所長のもとで統括されている人材管理課と広報課があり、人材管理課課長であるアヤリの下には5人の部下がいた。士官は先程のオットー少尉のみで、他は下士官と軍属の事務官 である。

事務所長であり先任士官でもあるエグモンド中尉同様、ひたすら事務畑を歩いてきた典型的な事務軍人のラメラ軍曹。44歳と最年長であり、部下達のまとめ役も立場的に請け負っている。恰幅のいい巨体をいつも愛嬌たつぷりに 揺すりながら仕事をしているのが特長である。課で唯一の妻帯者でもあり、地球に妻と息子を残してここに単身赴任している。

元61式戦車の砲手を務めていたナグン伍長は中堅軍人で、訓練中の事故により負傷し、現場任務は不可能と上に判断されたために異動し、現職に至っている。元々事務能力が高かったため、仕事は迅速正確。怪我をして身体 が不自由とは思えないほど屈強な体躯をしている。退屈な事務仕事でも文句1つ言わずに遂行しており、前任とまったく異なる仕事内容にもまんざらではない様子だった。

アヤリと同じく生粋の日本人であるヒタキ事務官は、まだ 20歳と巷でいうなれば女子大生位の年齢なものの、仕事に対するモチベーションは明確かつ高い。元々士官学校への進学を希望していたものの、身長が足りずに断念したと いうことが仕事への姿勢に反映されているようだった。同じ女性としてかつ軍人としてある程度

の地位と実績を残した アヤリに敬意を払っている。過分な敬意に、当の本人はただ困ったような笑みを浮かべるばかりだった。

ヒタキ事務官と同じく女性の部下で、大学を出ても行き場がなかったので軍属になったと公言してはばからないのが ラロシ工務官だ。南フランス系の陽気な妙齡の女性で、ヒタキとは正反対の派手好き、遊び好き。素行に少々問題があり、アヤリも何度かやんわり注意したりもしたが、根は憎めない性格をしている。マイペースで仕事よりプライベートに重きを置き、定時になると風のように去っていく様など、彼女の人となりをよく表していた。

こうして見ると、どこかに問題を抱えた人材が多くを占めており、隣の広報課も同様だった。ある意味アヤリもその1人であり、この部署に各々を配置転換した上層部の思惑が見え隠れしている。考えるまでもなく、『不要な人材のゴミ捨て場』的な意味合いがこの事務所には存在していた。繁忙期がないわけではないが、基本的には暇な時間が多くを占めている。一言で表すなら『閑職』というのが妥当なところだ。

『仕事がない時は自分で見つけるもの』という社会人全般にとつての一般論的指針はもつともなのだが、なにごとにも限界はあり、この職場はまさにその限界を突破するような環境に置かれていた。そのため、閑職の空気に耐えられなくなった者たちが上の思惑通りに退職することも多く、広報課のメンバーはこの半年で半数が入れ替わっていた。

幸い、人材管理課のメンバーは、アヤリが赴任してから変わらずのままだ。広報課のメンバーに比べれば彼らの在職率は高く、管理職であるアヤリの前任者の方がむしろ退職してしまうという体たらくだった。

よほど水があっているのか、それとも小うるさい上司には無縁だったせいか、はたまたアヤリの人となりによるものなのか。いずれにせよ、分かっているのはこの職場がとにかく暇で仕方ないということである。

人材管理課の仕事は、連邦軍に興味・志望を持つ民間人に対し、連邦軍の組織概要および入隊方法、各職種の勤務体系、給与・福利厚生等を説明・勧誘するために存在している。対象となる民間人は主として高校生および大学生のため、コロニー内の高校・大学へと赴き、生徒・学生に対して説明会を開催する。また、軍施設等の見学会も行い、彼らの志望意欲を向上させる。先日行われたサラミス級宇宙巡洋艦リヨン見学会など、最たるものだ。

もつとも、この事務所の所管しているのは、その名前の通りペルナローゼただ1基のコロニーだけだ。必然、対象となる生徒・学生のパイは限られる。その限られたパイに 対して行える求人活動などたかが知れており、ましてや不穏な空気はあれど、まがりなりにも平和なこの時代に軍人を目指す人間など、そう多いわけでもない。

軍人が暇なのはある意味大変喜ぶべきことなのだが、当事者たちにとつてみれば複雑だ。暇というのも度を過ぎれば苦痛でしかないのである。

アヤリでさえ暇を持て余し、その時間を懸念事項の思案という方面へと振り向けていた。

彼女も精勤しようと努力したものの、くだんの見学会の報告書などはすぐに書き上げてしまった上、場繋ぎで始めた来期の年度計画という先取りの仕事すらも終わってしまうと、もうどうにもならなかったのだ。

とはいえ、私的な、というより多くの人々の命がかかった、もつと大きな枠組みとして存在している懸案事項に関してじっくりと考える余力があるのは、彼女にとって不幸中の幸いだった。仕事が暇だからこそ、世界情勢を揺るがすかもしれない懸念について思案できたのだから。

とにかくある程度の考えはまとまった。『彼ら』が絶対なる自信を以て連邦へと戦いを挑む根拠の核心に迫ることはできなかったが、それでも今後煮詰めていくための素材は揃った。肝心なのは揃えた

材料を考察する『他者の目』だ。そして、最も適切な該当者は、他ならぬマチアス大尉その人である。

だが、こちらと違いマチアスら駐留戦隊はパトロール任務があるためなかなか時間が取れないのに加え、交代でこの時期の長期休暇を取るシフトになっているため、彼に余裕ができるのは年明けになつてしまう。電話やネットワークで討議することも考えたが、正直内容が内容だけに、万が一のことを考えるとあまり適切な手段ではないのは疑いようもない。

事態は切迫しているはずなのだが、手詰まりの今の状況を打破する手段という手段がない以上、静観するより他なかった。

小さく嘆息し、午後の光が差し込んでくる窓の方へと首を巡らす。今朝の天気予報では、夕方から曇りになるとのことだったが、今はまだ気配もない。

コロニーの天候はコンピューターによって完全に制御されており、当然予報も正確になるはずなのだが、時として外れることもある。ランダムで天候スケジュールを変更するよう、設計段階で制御プログラム自体に組み込まれているためだ。これは、過度の管理的、画一的状況が、宇宙での生活をする人間に余計なストレスを与えかねないという懸念を鑑みた上でのことだった。

一見地上と変わらぬ光景が広がるコロニーではあるが、厚い外壁を隔てた向こうに広がるのは、漆黒の深淵。人類は虚空の宇宙にオアシスを作り上げたが、そのオアシスを一步でも出れば、人の英知とて及ばない領域が遠く満ちている。

人類が宇宙に新天地を求め、早や4分の3世紀。

人外の地にて、人は再び業を背負おうとしている。

嵐の前の静けさのような暖かい日差しを、アヤリはただ黙って見つめていた。

「みなさん、準備できましたね？ いいですね？ もう出ますよ？」

腕時計へと幾度となく目をやりながら、オットーは課内全員に声をかけていた。時刻は午後5時10分。終業から既に10分が過ぎ、同時にそれは出発の時間から遅れていることを示している。

パーティー会場のピックアップ、アンケート、予約に至る一連の流れをオットーが執り行い、終業後から15分後に店へと入る予約をしていた。しかし、ラロシエが出立前に化粧直しにトイレへと立っていたためと、着替えを終えて出立準備を終えていたのに煙草を吸いに行ってしまったラメラらの件があったため、終業後すぐに出ることはかなわなかった。

「そんなに慌てなくても、別に5分10分遅れたところで罰金なものもないわよ」

制服から赤を基調とした私服に着替え、これまた派手な装飾がなされたコートを羽織っていたラロシエは、自分が遅滞の原因の1つとなっているにもかかわらず、まったくそんなことは知らぬ様子で毒づいた。

ところがオットーはオットーで、普段の気の弱いところなど嘘のように毒を受け流し、

「いえ、軍人たるものいかなる時も時間厳守が基本です！ そうですよね、課長！」

これである。妙なところだけこだわりのある新米士官に、急に話を振られた同じく新米課長は苦笑いしながら適当にはぐらかすのだった。

「オットー少尉はなんであんなにはりきっているんですかね。ただかクリスマス会ですよ？ 意中の可愛いあの子とようやく甘い夜を迎えられるわけでもあるまいし。見ていて面白くはありますがね」

再びラロシエと喧々囂々やりはじめたオットーを余所に、そつと近づいてきて耳打ちしたナグン伍長である。

「普段頑張ろうにもここじゃそんなに頑張れることなど、悲しいかなありませんからな。学校出たての少尉のような若者にとつては、こういう機会でもないで発散する場所がないのかもしれないですな」

反対側でナグンの耳打ちを耳敏く聞いていたラメラ軍曹は、腕を組んでことさら大げさに頷くのだった。

「課長も士官学校を出たての頃は少尉のような感じだったんですかね？」

と、興味ありげな表情でナグンが問いかけてきた。対し、まず答えたのはアヤリではなく、それまで聞き手に回って一連の会話に頷いていたヒタキだった。

「課長がオットー少尉みたいにははずないじゃないですか。そうですね、課長」

ナグンの問いも肩を竦めて答える系統のものだが、同意を求めているヒタキの主張もまた、苦笑するしかない類のものだった。

結局アヤリは苦笑いしながら肩を竦め、オットーの名誉を鑑みてヒタキの主張には触れず、答えた。

「私の配属先は海兵隊だったから。毎日が精一杯でまったく余力は残らなかったわ。勤務が終わったらあとは寝るだけ。顧みると、あの意味彼、ちよつと羨ましいかもしれないわね」

軍人の道を歩み始めてから現職にたどり着くまでは、緊張と忍耐に満ちた日々が続いていたのだ。今のようなゆったりとした時の流れに身を任せられるひとときなど、よく考えてみればハイスクール以来のことだった。

思えば士官学校に入学して以来、わき目も振らず、ただがむしやらに走り続けてきた。しかし、今は立ち止まって振り返ることができる。

こういうのも、もしかしたら、いいのかもしれない。

慣れない感覚に戸惑いはあるものの、決して不快ではない。ああだこうだと終わりのない舌戦を繰り広げているオットーとラロシエらを目にするとまた違った意味で少々不安になるが、それでもアヤリは、どこか困ったような様子を表情の片隅に浮かべながらも、柔和な笑みを見せていた。

「さて、傍観終わり。このまま彼らをほおっておいて観戦しているのも見ものだけど、お店に迷惑かけるわけにもいかないしね」

「おっしゃる通りですな」

同意するラメラ。彼はナグンに目配せすると、先方も頷いて汲み取った意図を実践し、

「オットー少尉、それで、時間は大丈夫なんですかね？」

その呼びかけに、当初の目的を忘却の彼方に押しやり、ひたすらラロシエとの軽口対決に費やしていたオットーはようやく我に返っていた。無論、その表情は一転、とても情けないものになっていたが。

結局20分遅れで課を出ることとなった一行は、エレベーターで1階に降り官庁機関専用ビルのホールから表へと出た。

外はほとんど陽光が落ち、薄闇が広がりはじめていた。天候もだが、コロニーには気候コントロール機構も備わっており、コロニーによって様々な気候に調整されている。

このコロニーペルナローゼは、温帯多雨夏冷涼気候に保たれ、四季も存在している。そのため、この時期はもちろん冬の寒さにさらされる。通りを歩く人々をはじめ、人材管理課の面々もみなそれぞれ私服のコートをまとっていた。

科学技術の粋を結集したコロニーにおいて気候すら完璧にコントロールできるというのに、このような寒暖の差を機械的になくさないのは、やはり地球上での人間の生活を極端に変異させず、精神面での違和感をなくすためであった。完璧なものをあえて崩すというまともに考えれば不合理なことも、宇宙という本来人類などが



生きてはいけない空間で生活するためには、実はある意味合理的なのだという。

1階ホールから出ると、陽が沈みまばらに雲の浮かんだ空には色とりどりの星々が瞬いていた。一部は本物の星の輝きなのだが、実は天頂方向のみで、少し緯度を下げた辺りで光る瞬きはコロニーならではの灯火だったのである。

コロニーは円柱形のシリンダー内壁を円底から垂直に反対側の円底まで6等分する形で、居住部である陸と外部から太陽光を取り込む集光用ミラーとに区分けされている。そのため、居住部から天を仰ぐと集光ミラーを挟み込むような形に他の2つの陸上部を見ることができなのだ。

空に別の大地があるというのはおかしい気分になるが、まぎれもなくそこでも人々が生活を送り、無数の建造物が建ち並んでいる。夜になると人家は明かりを灯し、こちらから見るとあたかも星々の瞬きのように見えるのである。

様々な明かりを空にいただいた街は、一面クリスマスカラーに染まっていた。街頭には飾りつけがなされ、街路樹にも様々なイルミネーションが装飾され、夜の闇を照らし出していた。通りに面した各商業店にはクリスマス特有の活気が溢れ、街路を歩く人々の関心をかい、また1つの賑わいを生み出している。

対立国ジオン公国との冷戦が長引き、彼の国が2か月前に国家総動員令を発令するなどきな臭さも極まっていた時期だからこそ、暗い時代を吹き飛ばしたいという世の流れが、もしかしたらこのような陽気な空気を呼び起こしているのかもしれない。

「みなさん、急いで移動しますよ！はぐれないようついてきてくださいね！」

「つても例のラ・トルテでしょ、店って。はぐれるもなにも、いつも行ってるじゃない」

焦りに焦っているオットーに、容赦ない横槍を入れるラロシエ。とはいえ、ラロシエにとってみれば単に年下の青二才士官をからか

っているに過ぎない。

階級的には課でアヤリに続いて2番目に位置するオットーではあったが、4月に任官されたばかりの新米士官はさすがに肩身が狭かった。ラメラやナグンはもちろんのこと、軍属とはいえ、既に6年軍で勤務をしているラロシエにも頭が上がないのは当然といえば当然というところか。

れっきとした士官である彼がそこまでへりくだることもないのだが、彼の性格からしてみれば無理もなく、一番若く彼より年下のヒタキと比べても年次としては彼の方が下のため、彼女に対しても一歩引いた態度をとっていた。

今回のクリスマスパーティーの幹事を自ら引き受けたのも、その辺りのことがあったからだが、少々空回り気味なのがまた彼の性格をよく表していた。

とはいえ、このままラロシエに突かれているのを傍観しているのも少々可哀想というものである。

苦笑いは隠せなかったが、アヤリはラロシエを諷めてオットーに助け舟を出してやろうとした。

「まあまあラロシエさん。そのくらいにして、お店に  
アヤリの言葉が止まった。言いながらなにげなく移した視線の先に、彼女にとって無視できない記号が存在していたのだから。

突然言葉を詰まらせた上司に不思議に思ったのか、部たちも彼女の視線の先を追っていた。

そこには、通りの路肩に止められた黒塗りの豪華なリムジンが鎮座しており、丁度前席のドアが開いて初老の執事風の紳士が降り立ったところだった。

彼はこちらへと向き直り、深々とお辞儀をしていた。無論、その礼はたった1人の人間に対して行われているものだった。

「課長、あの人知り合いなの？　すごいリムジンから降りてきたけど」

ラロシエの問いかけに顔が強張る。それでも彼女は作り笑いをど

うにか浮かべ、答えた。

「え、ええ。ちよつとね。ごめんなさい、見ての通り急な所用ができてしまつて。申し訳ないけど、先に始めててくれないかしら。私もすぐに行くから」

詫びを行つてその場を足早に去ろうとする。突発的な事態に動転したためか、オットーが焦つた面持ちで異を唱えようとしていた。それを遮つたのはラロシエだった。

「了解了解。先に行つて始めてますわよ、課長殿。ではではみなさん行きましようか。課長、早くこないと飲み物も食べ物もなくなつちやうから、そのつもりでね」

動揺するオットーの手を取り、無理やり店の方へと連れて行く。その時、彼女は軽く笑みを浮かべて片目をつむっていた。ラロシエは色々と問題もあるが、とつさの機転が利く姐御肌の人物でもあった。こちらの事情を慮つてくれた上の措置だろう。今は彼女の配慮が素直にありがたかった。

オットーをふん捕まえたラロシエを先頭に、三々五々移動を始めた部下たちの背中を見送りつつ、アヤリはくだんのリムジンへと足を向けた。

直立不動の状態で待機していた執事風、いや執事のバトルネは、間近に寄るとようやく破顔して再び頭を垂れた。

「お元氣そうでなによりです、アヤリお嬢様」

「今のところそれだけが取り柄みたいになつてしまっているけどね。バトルネこそ変わりなく。といつても、先々月会つたばかりか。あなたも度々こんなところまで遣いに出されて 大変ね」

「左様でございます。老体にはさすがに堪えるゆえ、今日こそはお嬢様にご同意していただきたく心よりお願い申し上げる次第でございます」

いやに真剣な面持ちで語るバトルネ。彼の様子と、黒塗りのリムジンから、アヤリは悟つた。

「そう、来ているのね。あなたを何度も遣して、やっと自らご足労

いただいたというわけ？」

辛辣なスパイスを十二分にも塗した台詞を吐くも、バトルネはそれに答えず、黙したまま後席のドアを静かに開けていた。なにも言わずにそのまま立っているバトルネは、次になにをすべきかを視線で訴えかけている。

アヤリは小さく嘆息すると、彼の意図を汲み取り、肢体をリムジンのなかへと滑り込ませた。クッションの利いたシートへと腰を落ち着けると、バトルネがドアを閉めた。

対面式の後席の前側に座ったアヤリは、必然的に後側と向かい合わせることとなる。当然、そこに座っている人物とも。

何年ぶりの再会だろうか。

バトルネよりも年齢的には上の、同じく初老の男性がどっしりと腰を落ち着けている。齢を重ねてきた証が皺となつて肌を穿っていたが、身体から発せられている精気が実年齢よりも若く感じさせる。染めているのだろうか、黒々とした髪も違和感がない。

街灯の明かりだけが頼りの車内においても、その鋭い双眸は多くの部下を抱える大財閥の総裁たる威厳の光を湛え、微塵の迷いすら感じさせなかった。

「今日はあなた自ら足を運ばれたのですか、父様」

抑揚のない声で、アヤリは『父』へと問いかけた。

カイト「ハヤカワ。そう、彼こそが世界に名を馳せ、月の大企業アナハイムエレクトロニクスとも業務提携を行っているハヤカワ財閥のトップであり、他ならぬアヤリの実の父親であつた。

大財閥の総裁でもあり、財界のトップの1人でもあるため、休む間もなく働き続けているのが彼である。その父がこんなところにスケジュールを割いてきている理由はただ1つ。彼の目的は考えるまでもなく分かつていた。それまで既に、彼の代わりに先のバトルネが名代としてその目的を果たすべく遣わされていたのだから。

「ならば、わしの誠意も十二分に理解しているということだな。理解しているということはつまり、その誠意にどう報いなければなら

んかも、おまえは分かっているはずだ」

誠意を見せていると言いながらも、言葉には高圧的な姿勢がありと含まれている。それに、アヤリは奥歯をかみ締め、眉間に皺を寄せた。

「何度もバトルを遣わしておいて、今さら誠意もなにもないでしょう。それに、私の返答は彼に何度も伝えたはずですが」

「兵隊ごっこももう十分だろう。いつまでもそんなことでいいと思っっているのか？」

平然とんでもないことを口にするカイト。あまりに自然と言われたために、一瞬そのまま聞き逃しそうになってしまったが、彼が言ったことを脳内で反芻し、アヤリのはらわたは瞬間的に煮えくり返った。当然である。職責をまっとうすべく命を賭して日夜職責に励んでいるその仕事を、真っ向から侮辱されたのだ。

それでも表情には出さず、あくまで胸の奥に炎を灯しただけにとどめたのは、彼女が軍人としてよく訓練され、高い能力を持っていることを物語っていた。

それを知ってか知らずか、カイトはあくまで自己のペースで話を続けていた。

「おまえも来年には25だろう。腰を落ち着けて仕事をし、家庭を築くべきだとは思わんのか。そもそも軍人など女がするような仕事ではない」

「では、父様が私に従事させたい仕事というのは、その『女』である私にでも適任と？」

怒りを抑えれば抑えるほど面持ちから表情は抜け、凍てついた視線と冷め切った声で切り返す。

そもそも、カイトには本質的に女性を蔑視する古い体質があった。その彼が、自身の考えを曲げてまで、それこそ本来なら娘とはいえ彼女などを絶対に就かせたくないポストに就かせようとしている彼の矛盾に、アヤリも容赦なく斬り込む。あからさまな皮肉をもって

カイトは答えなかった。さすがに巨大グループの総裁は簡単に感情を吐露しない。代わりに、わずかだが眉間に縦筋の皺が刻まれた。彼も機械ではなく、人間である。彼なりに感情を揺さぶられているのが垣間見えた。

「少なくとも、軍人などという野蛮でなにも生み出さんものなどよりはるかに建設的で文化的な仕事だ」

皮肉は、侮蔑となつて返ってきた。さらに空気が張り詰める。アヤリは、膝に置いた拳を握り締めた。

父、カイトが言う仕事。

それは、ほかならぬ早河財閥現総裁である彼の後継者としての職務であつた。

もちろん、彼の本心などでは毛ほどもない。だが、今となつては彼女を後継の座に就けるしかないのである。

本来、その座に就くのは男であるリクトこそが適任であり、事実彼は大学卒業後は次代の後継者として財閥中枢へと迎え入れられるはずだった。そのためにリクトは大学にて経営学を専攻し、大財閥をコントロールできる専門教育を受けるはずだった。

だが、カイトの遠望は霧散し、塵と消えた。不審船襲撃事件とともに。

代わりに浮上したのは、本来であればありえなかった人事である。とはいえ、直系相続による体制維持にこだわるカイトにとってみれば、それ以外に選択肢はなかったのだ。

そう、アヤリを早河財閥の後継者として迎え入れる以外には。実子がリクト以外には彼女しかない現状を鑑みれば、この選択肢を選ばざるを得ない。

しかし、彼が不本意な人事に嫌悪を抱いているのと同様に、娘にとつても到底受けいられる話ではなかったのである。

アヤリとカイトの親子関係は昔から決して良好とは言えなかった。アヤリがハイスクールに上がる頃には会話らしい会話も既になくなっていたほどである。

なぜそのようになったのか？ それはカイトがリクトに期待の全てを向け、アヤリに対する関心を失ってしまったためだ。

そのことをアヤリもよく理解していた。ただ、彼女はそれに対して憤るでもなくひたすら冷静だった。

理由の1つは、弟のことを心から愛していたことだ。そのため、彼が可愛がられ、期待を一身に受けることにまった く異存などない。自分ではなく、彼ばかりに父親の関心が 集まることはむしろ喜ぶべきことだった。

もう1つ。関心がないのにこちらから干渉し、わざわざ関心を向けさせるようなことをどうしてしなければいけないのか、という思いもあつたためである。裏を返せば、彼女自身も父親に関心がなかった、ともいえる。

もちろん彼女とて完全に割り切れていたわけでもない。父親から見向きもされない自分の「存在意義」ということについて、多少なりとも悩んだこともある。

だからこそ、彼女は一刻も早い自立の道を選んだ。家から出ることによって本当の自身の居場所を確立するために。

彼女が選んだのは身一つですぐにでも独立できる軍人の道だった。名目上、軍は財力も門地も問わない世界でもあるのだから。

そして、今の自分がある。この道を選んだことに微塵の後悔もない。それを、その道を父は否定し、強制的に軌道修正をしようとしている。自身が変わらずアヤリのままでいるためには、そのような強権行為には断じて屈するわけに はいかなかった。

「育てていただいたことには感謝しています。しかし、私は18の時、自らの生き方を自ら決断し、軍に入りました。これまでも、そしてこれからも、私は私自身の信じた道を進んでいくつもりです」

一端言葉を切る。カイトが早々に抗言してこないことを確認すると、アヤリは固い意思を込め言葉を紡ぎ出す。

「あらためて返答します。私に早河財閥を継ぐ意思は一握りすらありません」

父の鋭い眼光に負けないぐらいの、射るような視線を向けながら、彼女は断固たる思いを明示した。

しばしの沈黙。静寂のひと時は、しかしすぐに破られる。

嘆きの吐息をつき、頭を振るカイト。

「わかつとらんな。おまえには早河の家を守る義務がある。おまえは早河本家直系の娘だ。そのおまえが家を継がずして誰が継ぐというんだ？」

直系だの傍系だの関係ない。世襲になんの意味があるのか。

カイトのたたみかけのような指摘に対し、アヤリも身を乗り出すようにしてそう切り返そうとした。だが、彼女が返す前に、父は最後の切り札を持ち出したのだ。

「おまえは、責任を取らなければならない」

わずかに身を竦ませるアヤリ。彼がなにを言わんとしているか、瞬時に感じとったからだ。それはすぐに的中する。

「それはわかっていているようだ。そうだ、リクトはおまえに殺されたようなものだ。その責任をおまえは取らなければならないのだ」

リクトのことをカードとして切ってくることは、誰でも予想のつくことだ。が、ここまでストレートに言われるとさすがのアヤリも絶句して二の句が出なかった。

彼女の胸中にて、沈鬱で悲しい記憶が首をもたげ始めていた。リクトを失った日の記憶とともに、その後の、彼女が激しく責められた日々の記憶が。

軍、政府、世論。不審船襲撃事件に関して皆が好意的な感情をアヤリに対して持っていた。だが、もちろん全ての人間が彼女の行為に対してよかれと思っているわけではなかった。

主として身内に彼女を否定する人間が多かったが、その代表格こそ、彼女の眼前に座っている人物だったのである。カイトは、リクトを失い忘我の淵を彷徨ったアヤリに対しても容赦なくそしり、なじった。彼にとっては当然のことである。次代の宝を、ある意味では彼女のせいで失ったのだから。



精神的に凄まじいダメージを受けて意思薄弱になっている状態もあり、アヤリは彼らの叱責をどうすることもできず、ただただ受け入れるしかなかった。その度に、彼女の心の傷はより大きく穿かれていったのである。

自分に責任の一端があることは他の誰よりもわかっている。責められるのも当然のことだとも思っている。

それでも、忘我の淵を彷徨っている時にことさら声高に責めを受けるなどということはあまりにも惨すぎた。彼女は二度、心に刃を突きたてられたのである。自殺しても不思議ではなかった。

普段、意識的に分離し、平静を保てるよう自己認識することによって、彼女は立ち直りを果たした。

しかし、あれからまだ1年も経っていないのだ。記憶は、いくばくも劣化していなかった。

明らかに娘が動揺している様を目にし、父は攻め時を過たずに言葉が続けた。

「本来ならばリクトがわしの後継となるはずだった。今となってはそれもかなわん。だとしたら、後継者を無為にしたほかならぬおまえが代役を務めることは当然のことだろう。それを放棄するのはあまりにも無責任というものだ」

アヤリは反駁しなかった。反駁する材料がないというわけではない。彼女は、完全に父の言葉に吞まれて、反駁できなかったのである。その表情は青ざめ、普段の優秀な女性士官の面持ちは既になくなっていく。精神的に追い詰められ、危険な状態になろうとしている。身体を小刻みに震わせ、その視線は泳ぎ始めた。

だが、まだ陥落したわけではない。カイトが次に放った言葉が、彼女に反撃の狼煙を上げさせることとなった。自身の発する言葉に高揚させられたのか、彼の発言はますますエスカレートし、こう言ったのだ。

「そもそも、リクトを最初に脱出させていればこんなことにはならなかったのだ。度し難いことをしてくれたものだよ、おまえは」

単にリクトを失った責任のみを根拠に後継者の道を迫れば、あるいは彼女を完全に追い詰めることができたかもしれない。しかし、カイトは自身の感情的な部分を優先させたことにより、その可能性を失ってしまったのである。アヤリ の表情が一変する。

「私は！」

アヤリに精気が戻った。カイトの言葉を遮り、毅然と言い放つ。

「私は軍人としてあるべき道を選びました。今もそのことについては後悔していませんし、間違ったことをしたとも思っていないません！」

さすがにその表情には青ざめた色が残っているものの、先ほどまでの呆然自失寸前の状態からは完全に脱却している。それほど、カイトが放った言葉には彼女を踏みとどまらせる要素が含まれていたのだ。

なぜなら、不審船事件の際にとった行動は、彼女の軍人としての信念に基づいたことであり、彼女の最も根底に位置することだったからだ。それは彼女そのものであると同時に、彼女のよりどころでもあった。

その信念まで否定してしまつては、彼女は本当に廃人となるしかない。彼女の存在そのものを否定することになるからだ。だからこそ、アヤリは我を取り戻すことができた。信じた道を害する言葉に抗するために。

結果はともかく、リクトを残した行為自体については、彼女はいまだ間違ったことをしたとは思っていない。逆に今その思いを変えることは、笑顔で最後の脱出に同意してくれたリクトに対し、重大な背信となることをよく理解していた。だからこそ、あのようなことを言い放つ父に屈することなど断じてできなかった。

「姉として、家族として、彼を救えなかったことは事実ですし、そのことについて責任は深く感じています。しかし、私が責めを負うのは彼自身に対してであつて、早河家に対してではありません」

決然と、最も言いたかつたことを突きつけた。リクトを最後まで

残したことに並び、それもまた、彼女にとって不動の信念だった。リクトに対する贖罪ならばいくらでも受け入れよう。だからといって、後継の道を継ぐことがその贖罪になるとは到底思えない。

簡単なことだ。やはり受け入れることはできない、それだけである。

さすがにアヤリの発言を言いくるめる材料がすぐに思いつかないようで、それまでとはうってかわって言葉に詰まるカイト。

攻め手が手詰まりになったことが、次の一言からでもよくわかる。

「わしが一声かければ、おまえなどすぐにも軍から追い出すことはできるのだぞ」

苦し紛れの発言ではあるが、威力は十分だ。無論、一般の人間にとつてはだが。

では、アヤリに対してはどうか？ 答えは火を見るより明らかだった。

「恫喝ですか。いいでしょう。やれるものならどうぞ勝手に。軍に志願した時から命を投げうつことになるかもしれないという覚悟を決めている身です。いかなる恫喝も、私には通用しません」

失うことの恐ろしさはとうに味わった。これ以上失うものがないし、恐ろしいものもない。毅然とした態度で脅しをはねつけるアヤリ。会合の趨勢は決した。

「これ以上問答を繰り返していても貴重な時間を無駄にするだけです。もうお引き取り下さい。私はあなたの、早河家の力にはなれません。失礼します」

カイトがなにも言わなくなったのを見計らい、アヤリは席を立った。もはや語るべきことはない。

ドアを開け、外へと降り立つ。その背中に、

「わしは諦めんぞ」

一言、投げかけられた。アヤリは、だが振り向かず、後ろ手にそのままドアを閉めた。

互いの思惑の緊迫した応酬からようやく開放され、それまで張り詰めていた気持ちが解れていく。

だが、彼女にとって今気持ちが緩んでしまうのは精神面においてかなり危険な行為であり、そのことを理解しつつも、彼女はつい肩の力を抜いてしまったのだ。もともと、一時は精神的に追い詰められながらも必死に踏みとどまったことを考えれば、そこで力を使い果たしてしまっていたとしてもいた仕方ないことだった。

とたん、それまで気丈に押しとどめていた感情が堰を切ったように具現化し始める。

震え出す身体。瞳を濡らし、刹那、溢れ出す涙。嗚咽もこぼれ始めそうになるのを、手で口元を押さえ防ぐ。

「お嬢様」

ただならぬ彼女の様子に、外で待機していたバトルネがたまらず声をかけてくる。対しアヤリは、

「ごめんなさい」

一言だけ残し、彼を振り切って駆け出した。それだけ言うのが精一杯だった。

官庁機関ビルへと舞い戻り、周囲の目をはばからずにホールを突っ切ると1階奥にある女子トイレに駆け込む。そこで、全てが開放された。

へたりこんで洗面台に突っ伏し、アヤリは慟哭した。子供のように声を上げ、泣いた。

克明に記憶を呼び覚ましてしまったのだ。彼女が責めを負ってしまったあの日のことを。

もちろん、今日まで忘れたことはない。

それでも自身の精神が潰されないようにする程度に、悲しく辛くそして重い十字架である記憶と一定の距離をおいてきたのだ。そうすることで日常生活を送れるよう、努めて今日まで生きてきたのである。弟に対する贖罪の道を見つけ、果たすその日まで普通に生きていられるように。

そう、今日こうして普通にいられたのは、彼女自身の精神制御の賜物であり、実際のところその心に穿かれた傷は癒されたわけではないのである。危ういバランスの上で小康状態を保っていたただけなのだ。

元々芯の強い女性のため、アヤリの精神制御は安定していた。それでも、カイトのようにあまりにもはつきりと彼女の心をつ言葉にはなす術がなかった。

鮮明に蘇った記憶は深層心理に埋め込まれた彼女の自責の念を瞬く間に増幅させ、その精神を追い詰めた。父と論戦している時は信念が助けてくれたが、会合が終わってしまえばそれも無為となる。

くぐもった嗚咽が室内に響き、溢れ出す涙がとめどなく洗面台にこぼれる。

いつ果てることないこの涕泣を、アヤリはただただ受け入れるしかなかった。

『ラ・トルテ』は官庁機関ビルから5分ほど歩いた通りにあるピアレ스토랑で、周囲に商店はあれど満足な飲食店がない上、良心的な価格帯のため、仕事帰りのサラリーマンに人気のスポットだった。

基本的に常に満席で予約を入れなければ待つこともしばしばなのだが、ほどよく照明が落とされて落ち着いた雰囲気が出された店内に入ると、今日は空席が目立った。

理由は簡単である。今日はクリスマスイブだからだ。この夜は家族と過ごすものであり、基本的に誰もが足早に帰宅する。席を賑わせているサラリーマンたちは独身者や単身赴任者というところか。

それでも彼らは今の時間を思う存分楽しんでいる。学校や企業によつては、明けた当日であるクリスマスから年始までの長期休暇が始まるため、明日のことを考えずに騒げるからだろう。

一方で、テーブルに並べられた料理にまったく手をつけず、他のテーブルとはうって変わって静かな一団もいた。そう、人材管理課の面々である。

責任者たるアヤリが所用で遅れているため、店に来たはいいもののパーティを始められないでいるのだった。アヤリは先に始めておくようにと言ったのだが、言葉通りに始めてしまうわけにもいかなうと考えたのだろう。

各々の個性が強いため一見連帯など皆無に見える人材管理課だが、表面だけでは窥えない絆のようなものも確かに存在している。その一幕を垣間見たようで、アヤリは重苦しい心が少し軽くなったような気がした。

「あつ、課長！」

彼らのテーブルへと歩み寄ると、真っ先に気づいたヒタキが声を上げた。声につられた全員の視線がこちらへと向けられる。

「遅かったじゃないですか」

「ごめんなさい。野暮用が長引いてしまって」

少し慚然とした様子のオットーに謝罪しつつ、努めて平静を装いながらラロシエに勧められた彼女の対面席へと腰を下ろす。当然のことながら、彼女と目が合った。すると、

「課長」

と一言発してこちらをまじまじと見ている。部下のおかしな様子にアヤリは怪訝そうに首を傾げた。

「どうしたの、ラロシエさん」

不思議な行動について問いかけてみると、彼女は急に立ち上がった。

「ちょっと、化粧室行きましょう。ほら、早く」

突然そう申し出たラロシエは、テーブルを回り込んでアヤリのもとまで足早に歩み寄ると、彼女の腕を取って店の奥へと誘った。アヤリはというと、強引な行動にとまどいながらもそれを無下に拒絶することもできず、ラロシエに連れられるまま化粧室へと続いた。

化粧室に入りドアが閉まると、それでもさすがにどういう見なのかは聞かずにはいらなかった。

「こんなところへいきなり連れてきて、なにかあったの」

「なにもかにも、その顔じゃ皆になにがあつたか丸分かりになっちゃいますよ」

問いかけると、彼女はアヤリを化粧室の大鏡に向かわせた。派手なラロシエといつもと変わらぬ地味な自分の姿がそこには映し出されている。

「メイク直したつもりでしょうけど、私にはわかります。課長、泣いてきたでしょう?」

なにを言い出すかと思えば、いきなり核心を突いてくるラロシエ。アヤリの全身が強張った。

「そのメイクの仕方じゃ駄目ですよ。課長は元々ナチュラルメイク

だからもつと利かせないと」

言いながら、携行したハンドバックからメイクアップキットを取り出している。全てを見透かされているようで、アヤリは二の句が出ない。

それをわかってか、ラロシエは頬を緩めて、

「なにがあつたか知りませんが、課長も女の子なんだからもうちょっとメイクテクも学んだ方がいいですよ」

普段の辛辣な様子はまるでなく、優しい暖かさが伝わってきた。突然のできごとといつもと違うラロシエの様子に、アヤリは言葉を返すタイミングがつかめず、やっと返せたセリフも本来すべきものとはかけ離れた頓興なものとなってしまう。

「そ、そんなにおかしい？」

もちろん、意図して奇をてらったわけなど毛頭ない。精神状態が不安定な上に突発的な要素が複数生じたため、混乱した脳が情報を処理しきれなくなったがゆえの反応である。

しかし、今度はアヤリが普段まったく見せない行動を見せたためか、選手交代、狐につままれた顔をするのはラロシエだった。

アヤリの顔を覗き込むようにして目をしばたかせ、ほおけたような顔をしていたが、やがて小さく吹き出し、破顔した。

「ヒタキみたいな仕事一直線娘やボンクラ男どもはともかく、私の目は誤魔化せないですね。似たような経験もありますし」

悪戯っぽく片目をつむっておどけると、ちよつと失礼、と一言断り、アヤリの前に回りこむラロシエ。手にしたクレンジングジェルを彼女の顔に塗りつけて化粧を落としてはじめる。

「泣き顔をメイクで誤魔化すにはコツがあるんですよ。人生経験豊富なこの私に任せて損はないですから、安心してくださいね」

鼻歌混じりに手際よくメイク再構築作業に入ったラロシエに幾分戸惑いながらも、アヤリは彼女が十二分にこちらのことを慮ってくれているのを感じていた。

「もつとも私の似たような経験つてのは、昔バーベキューパーティ



―した時に煙をもらにかぶって涙が止まらなくなつて、ぐしゃぐしゃになったメイクを慌てて直しただけなんですけどね。自分で言うのも変ですが、失恋やら不遇なできごとで泣いたりするのは向いてないみたいで、そういうので号泣したことなかったりして―

手を動かしながらおどけたように小首を傾げるラロシエ。 気の利いた小話も彼女ならではの配慮で、胸に染みだ。 おかげで混乱も収まり、素直に礼の言葉が口を突く。

「ありがとう、ラロシエさん」

「え？ ああ、気にしないでください。 困った時はお互い様ってやつですよ」

気負った様子もなく、ごく普通に返してくるラロシエ。 いささか軽いところもあるが、元々姐御肌で人情派の人物である。 今はそれがありがたかった。

洗顔剤も使い手際よくメイクを落とし、彼女は新たにメイクをし直すためにリキッドファンデーションを用意していた。 もはやなされるがままに彼女に任せていたアヤリは、幾分冷静になったところだ、

「なにがあつたか、聞かないのね」

と軽く尋ねてみた。 おおよそ人は『そういうこと』に興味を抱くものだ。 にもかかわらず、ラロシエは一向に尋ねてこなかったからである。

するとラロシエは、当たり前のように、ええ、と頷いた。

「野暮用だったんですよね。 だったら、それこそ聞く方が野暮ってものですよ」

鼻歌を続けながら言つてのけた台詞は小気味よく、彼女ならではのものだ。 それで十分だった。

心中はまだ穏やかになつたわけではないが、元々この数か月で不安定な心をコントロールする術は身に着けていたため、以前に比べて落ち着くのも早かった。 それを確認するかのように小さく溜息をついたアヤリは、薄く笑みを浮かべることをもって応えた。

「さて、それじゃなるべく急ぎますからね。皆待ちくたびれてお腹すかしてますし。さつさと戻って、楽しくパーティしましょ。あ、それでも手を抜くわけじゃないですよ。私のスペシャルテクニクで磨きかけてあげますからね」

腕まくりをするような仕草をして気合を入れるラロシエ。

「そんなに気合入れてくれなくても」

「いいえ、駄目です。だいたい課長、元々美人さんなんだからもつとそれを高める努力しないけりやいけませんよ」

「美人だなんて思ったこともないわ。お化粧もあまり興味ないし」

困ったように眉間に皺を寄せると、彼女は両手を腰にあてて肩を怒らせつつ、むくれた顔を近づけてきた。

「そういう考えでいると、さえない見てくれを必死になってメイクアップしてどうにか見られるようにしている女の子を敵に回しますよ」

「そんな」

「そんなじゃないです。だいたい、課長は主観で見てるからそうは思わないかもしれないですけど、客観的に見ればかなり美人さんなんですよ。ナチュラルメイクでも映えてるのがその証拠です。って、言ったらなんだか腹が立ってきた。わかりました。私だけじゃ説得力ないでしょうから、本気で凄いに仕上げちゃって皆を驚かせちゃいますよ。覚悟してください」

唇の端に不敵な笑みを浮かべ、アイシャドーブラシを手にした彼女がにじり寄ってくる。

彼女の言う本気で凄いに仕上げるとは、覚悟までしないといけないことなのだろうか。なにか冷たい汗が背中を伝ったが、ここまできるともう完璧になすがままにされるしか他はなさそうだった。

化粧室のドアを開け、薄暗い店内を進む。部下たちが待つテープ

ルは化粧室とは対極にあり、遠くから彼らの姿を確認することになった。

さすがの彼らも待ちくたびれたようで、一様にだらしく足を投げ出すように座ったり、テーブルに突っ伏していたりと死屍累々の様相を呈している。

「お待たせ。課長のメイクアップに付き合っていたら時間がかっちゃって。でもほら、今までのぐだぐだ感を一気に吹っ飛ばしてくれる当の課長のご登場よ」

先行したラロシエが、よせばいいのに見事に煽ってくれる。頭を抱えて逃げ出したかったが、それでもアヤリは覚悟を決め、店内全体とは異なりしっかりとした照明があるテーブル下まで歩み寄った。

最初に反応を見せたのはオットーだった。よほど空腹だったのか、テーブルに視線を落としてうなだれている彼が視線を上げてこちらを見ると、目を見開き、豪快に大口を開けて驚いていた。

続いてナグンとヒタキが似たような反応を示し、最後にラメラも控えめながら同様に感嘆の声を漏らしていた。

彼らの反応を見、

「ほら課長。言った通りでしょう？」

と鼻を鳴らして勝ち誇ったような笑みを見せるラロシエ。一方、当のアヤリはただただ一同の反応にとまどうばかりだった。

だが、彼らの反応は当然といえば当然だったのである。

ラロシエの言うスペシャルテクニクは大言壮語ではなく、言うだけのことはあるレベルを持っていた。

彼女の言う通りアヤリは確かに端正な顔立ちをしており、『絶世の』という形容詞がつかないまでも十人並みとは一線を画していた。

惜しむらくは『華』がないことである。どんなに端正でもそれを際立たせる適切なメイクをしなければ、華やかに見栄えることは難しい。ラロシエはその華を咲かせる工夫、つまりアヤリの面持ち

に即したメイクをしたのだ。

泣き顔を隠すメイクが大前提のため、目元や頬など要所要所で若干濃い目のメイクとなっではいるが、基本的にはアヤリの素地を生かし、口紅なども薄紅色を上手く使って小さな唇を彩っていた。

結果、しっかりした土台に支えられた装飾は見事に花開いた。大成功であることは課員の反応が如実に物語っている。

しかし、当のアヤリはここまでわかりやすい反応で迎えられたことなど、もちろん生まれてこの方経験したことはない。ただただ戸惑い、ラロシエに促されるまま着席するだけだった。

「いやあ、これは驚きましたな。見目麗しい方だとは思っていましたが、さらにお綺麗になるとは。どこの姫殿下がお越しになったかと思いましたよ」

いまだに口を開けたままにいるオットーらとは異なり、驚いてはいるもののさらりと仰々しい感想を述べるラメラ。良くも悪くも年の功というものか。この反応に対し、メイク担当者はまるで自分のことかのように胸を張り、鼻高々に満面に喜色を浮かべていた。

それにしても、皆の視線が気になってしょうがない。なにしろラロシエ以外の課員の視線が全てこちらに注がれているのだから当たり前である。

「ちよつと、そんな皆見ないでよ。恥ずかしいでしょう、もう」

さすがに照れも極まり、言わずにはいられない。ほんのり頬が朱色に染まり、頬紅と相まってまるでリンゴのようになってしまう。

「あらま。課長紅くなっちゃって、なんて可愛い」

今度はラロシエが小さな驚きを浮かべ、その反動が棒読みのように感想を述べていた。さらに、彼女の感想を受け、ナグンとヒタキが啞然とした表情のまま無言で同意を表すかのように何度も頷いている。さらにオットーを見る と、なぜか彼も頬を真っ赤に染め一心不乱の様子でこちらに見入っている。

ある意味一種異様な雰囲気気圧され、腰を上げたい気になってくる。こうなるともはや苦笑いするぐらいしかない。

「さてさて、お腹もすいたことだし、全員揃ったところで乾杯しましょ、乾杯」

視線集中攻撃をされてこれ以上なく居心地が悪いなか、現在の状況を作り出す要因を構築した当人は本領を発揮　して我が道を進んでいた。大好きなアルコールを思う存分あることができるからか、その表情は満足げだ。

それが羨ましくも、恨めしくもあり、アヤリはアイコンタクトでその心情を送ってみるが、彼女の興味は丁度店員が運んできたジョッキに注がれおり、まるで届いていない。彼女に促され各々がジョッキを手にするなか、自分も黙ってそれをつかむほかはなかった。

肩を落としながらも生ビールがなみなみと注がれたジョッキを手にすると、先ほどまでは意に介していなかったにもかかわらず、今度はまっすぐと視線を向けてくるラロシエ。ひと目で乾杯の音頭を促しているのが分かった。調子のいいものである。

しかし、いかなる理由があるかとパーティの開始を遅延させたのは自分に原因があり、皆に迷惑をかけたこともある上、彼らの責任者でもある以上はここは大人しくさっさと音頭を執って始めるのが筋というものだった。

簡単な挨拶を述べ、乾杯を手早く済ませる。

さすがに飢えていたのか、この時ばかりはアヤリの美貌に気をとられることなく各々美酒をうまそうにあおっている。花より団子ということだろうか。現金なものである。

釈然としない思いに駆られながらも、アヤリもジョッキをあおった。久しぶりのアルコールが喉に染みる。

正直ビールはあまり好きではなかったが、アルコール自体は嫌いではない。耐性も強い方である上に、これまでいた部隊では周りが男ばかりだったこともあり、かなり飲んできたものである。どうしてもトイレに行く回数が増えてしまうので、それが嫌で暴飲するのは避けるようになったが。

人材管理課の面々とはあまり杯を酌み交わしたことはない。ただ、

意外にもほとんどの課員が『酒飲み』であるということは知っている。真面目の塊のようなヒタキですらいける口であったのは少々意外だったが、違う意味で真面目路線のオットーが唯一下戸だったのは思った通りというところ だろうか。

次々とアルコールが入った皆があつという間に上機嫌になるのに、その時間はかからなかった。

アヤリのメイクシヨックも、順次装填されるアルコールによって吹き飛んだようで、談笑というよりはお約束の下ネタがラメラとナグン、そしてなぜかラロシエの間で飛び交い、異様な盛り上がりを見せている。彼らの馬鹿話に入らずも、ヒタキは興味津々に耳をそば立てつつちびちびとビールをすすり、オットーは早くも戦線離脱気味に青い顔をし、半ばテーブルに突っ伏している。

お酒は人間の本質を浮き彫りにするというが、確かに非常にわかりやすい。アヤリは彼らの様子に苦笑いしつつも悪い気分はしていなかった。

「あつ、課長。なに笑ってるんです？ 課長もあんなことやこんなことのお話したいんですね！」

すっかり酔いがまわり視線が怪しくなってきたラロシエが、目敏くこちらの様子に気づき絡んできた。

本当のところはアルコール同様、これまでいた部隊が男ばかりだったので下ネタに関しても思う存分鍛えられてきたのだが、だからといって好んで聞きくなるほど浸りきつてもいない。アヤリは引きつった笑顔をしながらもやんわりと 拒絶する。

「え、いや、私はそういうのはあまり」

「またまた。ねえねえ、ラメラ軍曹もナグン伍長も課長を交えて盛り上がりたいたいよねえ？」

制止する間もなく、すっかり下ネタ中年とエロ青年に成り果てていた2人に大分ろれつが怪しくなってきたラロシエが問うと、いやらしい目つき丸出しで激しく頷いていた。

忘れもしないはずなのに忘れていた。ラロシエの酒癖がことのほ

が悪いことを。

以前酒の席に同席した時、酷い目にあつたのをすっかり過ぎるほどすっかり失念してしまつていた己を呪うアヤリ。

期待に溢れたアルコール漬けの視線を一身に浴びながら、どうしたものかと困り果てていると。

「課長！ 死ぬほど綺麗です！ 星です！ 太陽です！」

突然立ち上がったかと思うと、わけのわからないことを叫ぶオットー。一同の視線が彼に集まるなか、当の本人は両の拳を握り締め、似たようなことを5回ほど連続して叫ぶと、満足したのか崩れるように座り込んでまた青い顔をしたまま突っ伏した。弱いなりにまわつてはいるようだ。

それでも彼の見事な奇行のおかげで、ラロシエたちは自身らがなにをしていようとしか完全に失念したようであり、再び3人で猥談に花を咲かせ始めた。

オットーのおかげでどうにか危機は脱した。引き換えに、酔いはすっかり醒めてしまつている。このまま傍観しているのも癪なので、アヤリは安物のワインを注文した。

彼女は確かに出自は財閥令嬢であるが、成人する前に家を出ている上に特殊訓練も受けている身である。令嬢時代に口にした美食から、食べられる雑草や昆虫まで受け付ける舌を熟成させていた。美食家が不味いと即断するワインとて、それなりに愉しむ心得は持ち合わせている。第一、好みではないビールよりはるかにましだ。

執事のバトルネが見たら物凄い形相で止めに入るであろう安物ワインをグラスに注ぎ、嚥下する。値段にしては悪くない味だ。

空になったグラスにワインを注ぎ、グラスを傾ける。やはり自分にはこちらの方があつていると、いい気分になるアヤリ。

先ほどまでとは違う要因で頬をほんのり朱色に染めつつ、あいも変わらず猥談盛りの3人を見、困つたような笑みを浮かべた。

そこでふと思う。おかげで先ほどのカイトとの一件についてまったく触れられなていない。よしんば皆が気を遣つて尋ねてこなくと

も、少しはぎこちない雰囲気になったろう。例え、アルコールが入ったとしても。

それはやはり、アヤリのメイクが皆の気を逸らした上、そのままアルコールが入ったために考える余地がなかったからだろう。おかげで自分だけでなく、皆を重苦しい雰囲気に沈めてしまうこともなかった。

ひとえにラロシエのおかげだ。そこまで緻密に考えての種々の行動だったかどうかは怪しいところだが、結果としてせっかくのパーティを台無しにすることもなく、楽しい時間を皆が過ごせている。

ありがとう、ラロシエさん。貴女のおかげで救われたわ。

胸中で深く礼を述べる。そのまま口に出してもいいのだが、今伝えてもどのみち正確には伝わらないだろう。しかも、飽きもせずに恥ずかしい話をこれでもかというぐらいしている姿を見せられると、本当に彼女に助けられたのかど。うかも疑問に思えてくるので、アヤリは今日何度目かの苦笑いを浮かべて再びワインボトルを取った。

まだ飲みすぎというほどは飲んでいない。きっと冷えたボトルの表面が汗をかいて濡れていたのだろう。彼女が手に取ったつもり  
のボトルは、その手を滑り床へと落下していった。

もはや間に合うはずもないのだが、慌ててそれを拾おうと追いかける。ところが、途中まで差し伸べかけた手は止まり、彼女の視線だけが落ちていくボトルを追っていた。

当然のことながらボトルは床へ落ちて四散し、なかに残っていたワインが一面に飛び散る。酔いの回った課員たちに気づいた様子はなかったが、破碎音を聞きつけた店員が慌てて駆けつけてきた。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

当然ながら割れたワインボトルや汚れた床のことより、客であるアヤリのことを心配する若い店員。

しかし、当の彼女は店員の声などまるで耳に入っていないように、ワインボトルが四散した床を食い入るように見つめていたのである。



様子がおかしいことに慌てた店員が必死に呼びかけた何度目か、ようやく我に返ったアヤリは、店員の姿に気づくと怪我はないと告げ、ワインボトルを落としてしまったことを詫びた。

店員は問題ない旨を述べると手際よく床を片付け、気を利かせて持ってきた新しいワインボトルを置くと、引き続きお楽しみくださいと言残して頭を下げたその場を去った。

なに、今の。

店員の背中を見送りながら、彼女は先ほどのことを脳裏らせた。手から滑り落ちたワインボトルが床で割れ、中身とともにび散った。事実としてはそれだけのことである。

しかし、あたかもデジャヴを見たかのように強烈な印象となつて網膜に焼きつき、得体の知れないなにかが彼女の心を突き上げた。

いったいどういうことなのか。人間が生得的に持つ本能が潜在力を発揮し、なにかの警鐘を鳴らしているのか。あるいは予兆を教えにくれているのか。

彼女はワインボトルをつかんでいた手のひらを見直してみるが、それでなにかがわかるわけもない。呆然と視線を泳がせるだけだった。

「課長？ 大丈夫ですか？」

声をかけられたが、彼女が我に返って声の主へと向き直るまで、3度ほど呼ばれることを要した。

呼びかけてきたのはヒタキだった。彼女もかなりアルコールが入っているはずなのだが、さすがはラロシエを上回る酒豪。頬を上気させているのに加えてまぶたが重たげではあったが、視線はしっかりと定まっている。

「ええ、大丈夫。なんでもないから。あ、ヒタキさんはワインはいける？」

「いけますいけます。ワインも大好きです」

呆然としてしまったことをこれ以上気兼ねさせないよう、新たなワインボトルを手にして尋ねると、妙に嬉しそうな表情で空いていたグラスを差し出してくるヒタキ。その姿が妙に可愛らしくて、アヤリは自然と微笑みを浮かべた。

すると、当のヒタキは呆けたように口を半開きにしてこちらを見入っている。なんだかどこかで見えた絵だ。

「普段から美人さんだなあとと思ってましたけど、メイクでさらに綺麗になられて。微笑んだ表情なんて、まるでどこかの国のお姫様のよう。女の私でも見とれちゃいました」

浮ついた夢見る少女のような声音で、熱病にうなされた様にうつとりとした表情をしている。普段が普段だからか、たがが外れると反動も大きいのだろう。

それにしても言うほどそんなに変わっているのだろうか。化粧室でメイクアップした自分の姿をもちろん見てはいるが、確かに普段よりはるかに華やいだ感じになったものの、彼女たちが騒ぐほどのこととは思えなかった。世の中には自分などとは比較にならないほどの美しい女性が星の数ほどいるだろうに。

それとも、常識的な美的感覚と自分の感性は海よりも深い隔たりがあるのだろうか。ヒタキが引き続き妙に熱っぽく褒めちぎるので、引き込まれるように自身も脱線した思考に走ってしまうアヤリ。

危うく泥沼にはまりかけたところでどうにか軌道修正し、ヒタキの熱弁に対して適当に相槌をうちながら先ほどの一件へと思考を戻す。

あの、心を突き動かした感覚。重要なのは、それが『これまでも感じたことがある感覚』だったことだ。

空になったヒタキのグラスにワインを注いでやりながら過去を顧みていたアヤリは、ふと飼っていた犬が死んだ時のことを思い出していた。

プライマリースクール（小学校）に通っていた頃だ。授業を受けている時、突然えもいわれぬ感覚に襲われ、震えが止まらなくなっ

たことがあった。慌てた教師の配慮で保健室で休んでいると、脳裏をよぎるのはなぜか愛犬のことばかり。

自分でもいったいどうなっているのかわからないまま時間だけが経過し、結局放課後には状態も落ち着きそのまま帰宅したのだが、そんな彼女を待っていたのは愛犬の死だった。それまで元気に走り回っていたのにもかかわらず、突然痙攣しそのまま呆気なく息絶えたとバタルネから伝え聞いていた。

思い返してみると、今回受けた感覚は愛犬が死んだ時に感じた感覚に酷似していたのだ。

当時は幼かったため、その感覚自体がどういうものか理解することもできなかったが、今はわかる。あの焦燥感に似た感覚は間違いない、言うところの『虫の知らせ』だった。愛犬の死の予兆を、直接見聞きできないにもかかわらず感じていたのである。

オカルトの類に興味などまったくなく、特に信心深いわけでもない。

しかし、一方で科学では推し量ることのできない事象が存在していることを否定もしていなかった。偶然である可能性もある。だが、なにより自身が不可思議な現象に立ち会っているのだ。今回の一件も単なる気のせいと片付けることはできなかった。

では、つい先ほど感じたものはいったいいかなることに対しての虫の知らせなのか。

愛犬の時はいくだんの感覚の他に震えがきた。今思えば、愛犬の痙攣して苦しんでいる様が伝わってきたからなのかもしれない。

とすれば、今回のものはワインボトルが落ちるのを見て感じたことだ。そこになにかが秘められているのかもしれない。

ヒタキがこちらのグラスにワインを注いでくれるのを受けながら、これまでのことを色々と考えていると、マチアスと会談した時にも感じた胸の奥を刺すような嫌な予感がこみ上げてくる。

この懸念が単なる取り越し苦労であってくれれば。

時が経つにつれて深まる憂慮を洗い流すように、アヤリはグラスを

一気に飲み干した。

「もう飲めませえん。隊長、本官はお腹一杯であります！」

ヒタキに肩を借りながら千鳥足で歩いていたラロシエが、いきなりろれつの回っていない声で意味不明な叫びを上げた。幸いなことに街路に人通りは少なく、歩いていたとしても同じく酔っぱらいなので、ことさら目立つこともないのが不幸中の幸いだった。

異様な盛り上がりを見せたクリスマスパーティーもオーダーストツプで終焉を迎え、2次会を開こうにも近くで開いている店がないために結局そのまま帰路につくこととなった。よたよたと先頭を歩くヒタキ、ラロシエ組に、完全にダウンした オットーを両脇から支えたラメラとナグンがこれまた危うい足取りで続いている。

一方でアヤリは、自身も久しぶりに大分飲んだものの、バスから降りて年の瀬の冷たい夜空の下を歩いていたらすっかり醒めてしまっていた。部下達が上機嫌で歩いている最後尾を、彼らを見守りながらゆっくりと歩いている。

全員が寮住まいのため、帰路の方向はもちろん同じだ。ラメラ以外は独身者のため問答無用で寮住まいが義務づけられており、またラメラもペルナローゼに単身赴任しているため、強制ではないが寮に住んでいた。

寮は官庁機関ビルよりバスで20分ほどの場所にあり、勤務先に比べてさらに中心街より遠くに位置していた。全長30キロクラスのコロニーであるペルナローゼの末端に位置する宇宙港まで3キロほどと言えば、中心部からは大分外れていることがわかる。

アヤリたちが居住している寮は名ばかりのもので、実際はペルナローゼで働く公務員用のアパートメントだった。

ペルナローゼで働く軍人のほとんどは宇宙港や駐留戦隊に勤務しているため、軍専用の寮は宇宙港の一角に設けられている。本来ならばアヤリたちもそちらに居留するのが筋なのだが、軍専用寮の定

員は軍施設としては後発の出張事務所が設立された当初から既にぎりぎりの状態だったのだ。

このため、出張事務所の人員は代々公務員用アパートメントの一角を間借りすることとなったのである。

と、いうのは表向きのこと。出張事務所に勤務する人員はしょせん軍の爪弾き者ばかりだ。正規軍の精鋭と同類に扱うわけにはいかないと考えた浅薄な一部上層部の差し金だということは、耳を塞いでいても聞こえてくる。意図して出張事務所の人員は隔離されているのだ。

とはいえ。

差別的な冷遇を受けていても、彼らのなんとも逞しいこと。

軍人としては確かに種々問題はあるかもしれないが、人としての彼らは、一部の栄達のことしか考えていない高級士官やギャンブルやドラッグ、不正行為漬けの下士官及び兵に比して、はるかに好感が持てるというものだ。

紆余曲折あったとはいえ、言うなれば自分も彼らと同様のドロツプアウト組である。

しかし、恥じるどころなどまったくない。彼らと同じ時間を過ごすことができたことは、傷ついた心の癒しにもなったのだから。

思えば、こんなにもゆったりとした時を生きるのは何年ぶりのことだろうか。

ハイスクールを卒業し士官学校へと進んでからこれまで、とにかく身体の休まる暇がなかった。特殊な所属ということもあって、自分の時間というものがほとんどなかったものもある。

それが、今はまるで悠久の時の流れに身を任せるかのような余裕がある。戸惑いを覚えるほどに。もちろん、悪い気はしない。これまで任務でしか飛ばしたことのないヘリ　それも『ガンシップ』などという物騒なものだった　というものを、レジャー用ではあるが飛ばせた時は、まるで初めて空を飛んだかのような感動があったものだ。

もちろん、今のままの時間を過ごすことにはやはり違和感がある。自分の本来いなくてはならない場所でないこともわかつている。

それでもほんのわずかな心休まる今を生きてるのは、疲れた翼を休ませ、いまだ見えぬ進まねばならない道へと歩み出すための英気を養っているのだとも思う。

アヤリは、懷に手を差し入れると、ところどころ傷のついたブローチを取り出した。リクトのブローチである。

スラトス号から宇宙へと放り出された彼を搜索する過程で発見されたものだった。通信機能は完全に故障しており、今では本来のブローチとしての役割しか果たせない。

それでも、これは彼女の大切な弟の最期の形見だった。心神喪失状態に陥った時でも、これだけは決して肌身から離さなかった。

もう、愛しい弟はこの世にはいない。だが、自分はまだ生きている。

この両端の事実が、これからの生き方に大きく寄与することは間違いないことだと思っているし、そうでなければ今後果てしなく無為の時を生きるようになってしまっただろう。

「おや、雪だ」

と、前に行くラメラが漏らした。言われてアヤリも反射的に空を見上げる。

目の前を過ぎる白い影。空から幾つも降ってくる。街灯の灯りに照らされたそれは、まぎれもなく雪だった。頬に当たる冷たさが実感を湧かせてくれる。

そういえば夕方にはまばらだった雲がいつのまにか空をおおい、星の灯りも天上の大地の灯りも今は見えない。

肉眼で雪を見るのはしばらくぶりのことだ。日本で生活していた頃になるので、まだジュニアハイスクール時代になる。

「これは積もるかな」

「どうでしょうかね。積もるぐらいに底冷えされると、明日出勤するのが嫌になりますね。休んじまおうかな」

「そりゃあいい。決裁者もいらっしやることだしな」

聞こえてないとも思っているのか、ラメラとナグンが調子のいい酔っ払いトークで盛り上がっている。まったく困ったものだ。

やれやれ、と苦笑いを浮かべ、アヤリはあらためて空を見上げた。

本格的に降り始め、白い軌跡が次々と舞い降りてくる。それが街灯に照らし出されてなんと幻想的な光景をかもし出している。年の瀬を飾る、いい思い出になった。

宇宙世紀0078年もあとわずか。アヤリにとってこれまでの人生で今年ほどひどい年はなかった。一生癒されない傷を心に負ってしまった、悲しみの年。

明くる0079年はいつたいどんな1年になるのだろうか。

多くは望まない。平穏無事に時が過ぎてくれさえすれば、それで十分だ。

ホワイトクリスマスに見守られながら、アヤリは心からそう願うのだった。

ようやく朝日が射し始めた閑静な住宅街。人通りなどまだほとんどない街路を、スウェット姿のアヤリハヤカワは快足を飛ばしていた。肩までの黒髪をジョギングの邪魔にならないよう軽く結い上げてまとめており、その頬や額には健康的な玉のような汗が浮き出ている。

時折腕時計を確認し、一定のペースを保てるよう速度を調整しながらテンポ良く駆けていた彼女は、住宅街の一角、4階建てのアパートメントの敷地へと入った。階段を駆け上がって3階へとたどり着くと、今度は廊下を走り抜ける。

ようやく足を止めたのは、301というナンバーが振られた部屋、自室の前にたどり着いた時だった。

軽く呼吸を整え、ポケットから取り出したカードキーをドア横に付けられた端末にかざすと、オートドアが開いた。首からかけたタオルで顔や首筋の汗を拭いながら部屋に入ったアヤリは、カードキーをリビングのテーブルの上へと放り、そのままシャワールームへと直行する。

汗ばんだスウェットと下着を脱ぎ捨てた彼女は、熱めのシャワーを頭から浴びた。朝一番のトレーニングの後は、このシャワーが骨身に染みて気持ちよかった。

海兵隊に所属していたの当時、当然のことながら日々の鍛錬を欠かさなかったが、習慣とはある意味恐ろしいもので、現在の部署へと配属されてからも続けていたのである。そのため、ほとんどデスクワークが占めている現職においても彼女の身体は引き締まっている上、厳しい任務中についた複数の白い傷跡もあり、同年代の女性のそれとは明らかに異なっていた。

それでも女性らしい豊かなカーブを失ってはいない。過酷な任務に必要なだけの筋力を身につけ、余計な筋力を増強していないとい



う非常に合理的な肉体を完成させていたからだ。彼女の肉体を一言で表現するなら『均整の取れたしなやかな肢体』というところだろうか。勢いよくシャワーから放たれてくる湯滴を弾く、弾力に富んだ肌がその一端を証明していた。

全身の汗をくまなく洗い流したアヤリは、バスタオルで水滴を拭き、髪の水も拭き取ると、用意しておいた新しい下着と彼女らしい地味なシャツ、ジーンズを身につけていく。ドライヤーでさっと髪を乾かしながらかし、こざっぱりした状態に満足した彼女は、リビングへと移るとテーブルの上のホームシステムの端末を手にとった。

ホームシステムとは、リビングの壁に掛けられている大型ディスプレイを中心としたテレビ、記録媒体、映像電話、ガス水道電気及びセキュリティ等を集中管理しているものであり、この端末1つでほぼ全ての室内備品を操作できた。

テレビを起動させた彼女は、チャンネルをニュース番組へと合わせると、ボリウムを大きめにしたままキッチンへ向かった。

宇宙世紀0070年代最後の年を迎えて早3日目。昨年あんなにも緊張した情勢になったのにもかかわらず、ニュースは今年の経済見通しや新年のイベント情報をひたすら垂れ流している。

もちろん静かなことにこしたことはないが、世界がジオンという爆弾を抱えている以上、この静けさはかえって不気味だった。

トースターでパンを焼きつつ、レタスを水洗いしながらニュースを耳にしていたアヤリは、表情を少し曇らせた。

とりあえず明日、こちらに合わせてどうにか時間の取れたマチアスと会合する予定だった。

互いに情報を整理し、今度は然るべき対応を取らせるべく上層部へと上申するつもりだったのである。状況証拠だけの段階とはいえ、ジオンが動く可能性は非常に高い。手をこまねいているだけの時間は、もう終わっているのだから。

考えれば考えるほど気分が陰鬱になってくる。今ここで自分が沈

み込んで仕方がないので、アヤリは頭を振ると、レタスを軽く振って表面についた水滴を切った。

長期休暇は明日1月4日までで、勤務が再開されるのは5日からとなっている。人材管理課の面々はほとんどが寮に残って年を越していた。

アヤリの場合は帰省する家などないに等しい状態であるのに加え、友人知人もこのコロナーにはろくにおらず、ましてや恋人の1人2人もいない現状では寮で1人であることの方が気が楽なのは確かだった。他の者も似たようなもので、唯一の妻帯者であるラメラだけが家族の待つ地球へと帰省していた。その彼も明日、このペルナローゼに戻ってくる予定である。

5日からはまたあの平穏で退屈な日々が始まる。それでも、最悪の事態が勃発するよりは何万倍もましだった。

皆が無事で、日々何事もなく過ぎてくれれば。それがアヤリの願いだった。

彼女の思いは当然のものであり、多くの人がそれを望んでいることだろう。

しかし、運命の女神とはとても非情で時に人類にあだなす存在でもあった。彼女の思いは、刻一刻と崩れ去ろうとしていた。

ホットサンドを作り、皿へと盛りつけている時だった。

添え物のミルクを入れるためのカップに誤って手をぶつけてしまい、キッチン台から落としてしまったのである。

慌てて反応し、手を伸ばすが時既に遅し。カップは床に到達し、幾つかのパーツに分解して辺りに飛び散った。

これに、アヤリは身体の硬直をもって応えた。バラバラに散ったカップの残骸を片づけることなく、割れたそれらを凝視している。

どこかで目にした光景だった。

もちろん、これまでも皿やカップを落として割ってしまったことがなかったわけではない。戦場では意識を研ぎ澄ませているせいか、平時では意外とそっかしいところがあるのは自覚していると

ころだ。それでも、この光景を見たことで感じた『得体の知れない感覚』は、そう何度も体験した覚えはなかった。

「そうだ、あの時の」

記憶の糸をたぐりよせ、懸命に過去の事柄を脳裏に描いていると、浮かび上がってくる1つのできごと。

そう、昨年末のクリスマスパーティーで、ワイングラスを割ってしまった時に感じた感覚とまったく同じだったのである。

確かに、あの時も今もグラスとカップという違いはあれど、食器を落として割ってしまったてことは同じだ。

しかし、なぜこの2回に限ってこのような感覚が湧き起こってくるのか。異常なことだった。

「いったい、どうして」

怪訝な色を顔一面に浮かべ、しゃがみこんで割れたカップの破片を拾い出したアヤリは、虫の知らせ、という可能性を考えたことも思い出した。

もしかしたら、なにかが訴えかけてきているのかもしれない。そう考えると、単なる偶然と割り切ることもできず、彼女はカップが落下し、割れる時の光景を今一度脳裏に浮かべ、反芻してみた。

カップが落下し、割れた。円筒形のカップが落下して、床に当たって四散した。

その時だった。まるで稲妻を受けたような衝撃的な光景が浮かんだのは。

あまりにも恐ろしい光景だった。想像を絶するとはまさにこのことを言うに違いなかった。

一瞬にして彼女の顔から血の気が引き、言葉を失う。動揺のあまり真っ直ぐその場に立っていらなくなり、後へとよろめいて壁に背中をぶつけてしまう。

身体が震えだし、急激な胸焼けに襲われる。口元を押さえたアヤリは、よろめきながらも流しへ向かうと洗い置きしてあったコップを取って水を注ぎ、それを一気に飲み干した。

冷たい水を喉を鳴らして嚥下すると、とりあえず吐き気は抑えることができた。

「まさかそんな。でも」

動揺は幾分緩和されたとはいえ、顔は青ざめたままだ。それでも我に返った彼女は、まるでバネじかけの人形のようにリビングへと駆けた。カップの破片を飛び越え、ホームシステムに走った彼女は、震える手で映像電話を起動させる。

宇宙港の駐留戦隊へ電話を繋ぐと、交換受付の女性兵士が壁掛ディスプレイに現れた。懸命に自身を落ち着かせながら所属と官・姓名を告げ、宇宙巡洋艦リヨン機関科のマチアス大尉を呼び出してもらう。この際、セキュリティのことなど考えている場合ではない。

しばらくお待ち下さい、と女性兵士が告げ、青いバックに『Just waiting』の白抜き文字が表示された画面へと切り替わる。

待ち時間がたまらなく長く感じ、それこそ悠久の時の流れに巻き込まれるようなどうにもならない焦燥感が彼女の精神を蝕んだ。

おそらく時間にしてはそれほど経過はしていないのだろうが、彼女にしてみれば1秒が1時間にも匹敵するほどのもどかしさが積み重なっていく。

焦りも限界に達しようとした時、画面が切り替わり見慣れたマチアスの顔が映し出された。

『よう、元気か。直接機関科に連絡してくるなんて珍しいじゃないか。どういう心境の変化だ？ デートのお誘いなら喜んで招待されるぞ』

画面に現れるなり、いつもの調子で冗談めかして陽気にしゃべり出すマチアス。が、アヤリの深刻で思い詰めた表情を強烈に網膜に焼きつけたためか、険しい表情へと急変させた。

『どうした、なにがあつた』

「大尉落ち着いて聞いて下さい。わかったんです、彼らがどうやってジャブローを叩くか」

『なんだと?! 本当か!』

マチアスの問いに、アヤリは彼を見据えたまま頷いた。そして、迷走した先にたどり着いた結論を述べる。

「彼らの狙いはコロニーです。スペースコロニーをジャブローへとぶつける気です、大質量兵器として」

呆氣にとられ、口を開けたまま驚いているマチアス。当たり前である。冷静なアヤリ自身ですらあまりの衝撃の事実には嘔吐しかけたぐらいなのだから。

『そんな、馬鹿な』

啞然とし、お決まりの台詞を一言口にした彼の気持ちがよくわかる。

それでも努めて冷静であるような心がけながら、彼女は核心部分へと踏み込んでいく。

「これだけの質量です。並の核兵器の威力などとは比較になりません。しかも、この手の兵器は広範囲かつ地下深くまで深刻なダメージを与えることができます。たとえジャブローへ直撃しなくとも、アマゾン中心部へと撃ち込めばジャブローが被害を免れることはできないでしょう。万が一被害を最小限に抑えられたとしてもおそらくジオンは第2撃を放ってくるでしょうし、巨大なコロニーがもう一度空から落ちてくる光景に連邦軍は耐えることができて、統合作戦本部ならびに連邦政府首脳が耐えられるとも思えません」

『しかしそんな大がかりな作戦を奴らは本当にできるだろうか』

「敵に例の機動兵器があるのなら。これを使った電撃作戦で制宙権を確保した後コロニーを奪取。核パルスエンジンを取り付けることによってコロニーを軌道から移動させることは可能でしょう。少なくとも、ルナツーや軌道艦隊を直接相手するよりも、戦力が分散配置されていて各個撃破しやすいコロニーを狙う方が実ははるかに容易なことだと思います」

じわりと脂汗が喉を伝う。

これらはあくまで仮定の話ではあるが、それでも数々の状況証拠

からこれ以上ない高確率の現実化を秘めていることは疑いようのないことだった。

重苦しい空気がたちこめ、互いに二の句を継げなくなる。沈黙のひと時。それを打ち破ったのはマチアスだった。

『わかった。とにかく、今の話を司令部に至急報告しよう。ことがことだけに急ぎすぎて悪いことはなにもない。すぐにこられるか？』報告は貴官がしないと意味がないぞ、と彼の目は訴えていた。

望むところである。どんなことをしてもサイド2駐留艦隊司令部を納得させ、さらに上層、ジャブローの統合作戦本部までも早急に動かし、連邦政府に然るべき対応をさせるつもりだ。

「15分、いえ、10分で向かいます」

『よし、それで』

マチアスの言葉を遮り、突然画面が切り替わった。青バックのシステム待機画面である。それはつまり、回線が断線したことを意味していた。

「大尉？ マチアス大尉！？ 大尉、どうされました！ 返事をしてください！」

懸命に呼びかけてみるが反応はない。こちらのホームシステムの故障を疑い、アヤリは統括システムを呼び出して確認をとるが、ダウンしている箇所は皆無だという。

となると、基地局か先方のシステムに異常が生じた可能性が高かったが、このタイミングでの断線である。話していた内容が内容だけに、単なる故障と素直に考えていいものかどうか、にわかには判断がつかない。

もっとも、彼女の躊躇など簡単にうち消してくれる事象がすぐそこまで迫っていた。

それは、ついに始まってしまったのである。

突然起こる地響き。床下から伝わってくる震動に、戸棚に飾ってあった写真立てが倒れた。

「地震！？」

アヤリは生粋の日本人である。少女時代を地震大国日本で過ごした彼女が、この震動にそう反応するのは至極当然のことだった。

だが、すぐにそれを打ち消す。

違う、そんなわけではない。

ここは『スペースコロニー』である。シリンダーのなかに広がる大地はあくまで人工のものだ。地下にあるのは土石ではなく、ましてや地殻やマンツルがあるわけでもない。コロニーの構造体は何層にも渡り、配管配電用の通路や点検用の通路が張り巡らされている。そして、その向こうに広がるのは、真空の宇宙だ。地殻変動現象たる地震が起きることなどありえなかった。

だとするとこの異常震動はいつたいなにを意味しているのか。危機を知らせる心の警鐘が盛大にオーケストラを奏でていた。それは、彼女にとにかく行動に移すよう呼びかけていた。

目を見開いたアヤリは、跳ね起きたバネ仕掛けの人形のように駆け出した。寝室へと駆け込み、ベッドの下からサバイバルキットをひったくるようにしてつかみ取る。返す刀で寝室から飛び出すと、そのまま玄関から通路へと躍り出た。

「あれか！」

この揺れに関わっているであろう現象がすぐに目に飛び込んできた。コロニーの中央部にある中心街の方に立ち上る煙の柱を目にしたからである。

通路の柵側に駆け寄ったアヤリは、サバイバルキットの中から双眼鏡を取り出し、柵から身を乗り出すようにするとレンズの先を中心街へと向けた。

この双眼鏡はサバイバルキットに常備されているものなどではなく、アヤリが入れたものだった。彼女自身で行ったことなので、当然のことながら軍用双眼鏡である。

オートフォーカスで倍率を調整し、中心街と煙を正確に捉えた双眼鏡は、徐々に煙のなかにうごめく巨大ななにかを映し出していた。

その構造上、スペースコロニーには高層建築を造ることができない。

1つに、シリンドー内部に高層建造物が存在すると、コロニーの重心を狂わせその自転に影響を与えかねない点。もう1つに、コロニーの重力はシリンドーを回転させその遠心力に依っているため、回転軸の中心部へ接近すればするほど無重力に近くなる。すなわち高層になればなるほど低重力の問題が発生する点があるからである。

そのため、コロニー中心街だとしても、大都市になじみの超高層ビルなどはなく、せいぜい10階程度のビル群があるだけだ。

だが、煙をかきわけビルの谷間を進むそれは、ビル群に比する巨大な『人影』だったのである。いくら高層建築でないとはいえ、10階ほどのビルと言えば地上高は20〜30メートルとなる。そのような巨大な人影、『巨人』が存在するはずがない。人間では。

「ジオンの、人型」

搾り出すようにつぶやきながら、アヤリは双眼鏡から目を外し、肉眼で中心街の方を眺めた。

双眼鏡のレンズの向こうに映った、緑色の巨軀に、頭らしき箇所にも光る赤い単眼。

あれは人などではない。ジオンが開発に成功したという人型機動兵器に間違いなかった。

「おい、なんだあれ!？」

「いったいどうなってるんだ?!」

緑色の巨人に目を奪われていると、耳を打つ男たちの声が。アヤリと同様、突然の揺れに驚いて通路に飛び出してきた公務員宿舎の住人たちだった。不気味な巨人の存在を目にし、彼らは一様に驚愕の眼差しを中心街へと向けている。

しかし、巨人の存在など、まだ序曲にしか過ぎなかったのだ。

次の瞬間、突然目もくらむばかりの閃光がコロニーのなかを照らし出した。



手をかざして遮りつつ、アヤリはその光源を探る。光はミラーを使ってコロニー内部へ陽の光を採光するために作られた開口部から射し込んでいた。大地と大地を分かっていることから、『河』とも呼ばれている強化ガラス繊維等で作られた長大な採光窓から、太陽の光に似てはいるがあのように優しい温もりなど皆無な禍々しい閃光が射し込んできていた。しかも、それは1つではなく無数だったのである。

陽光によく似た、狂気の煌き。

その正体に気づいたアヤリは、心理的ショックのあまり膝から崩れ折れそうになるのを通路の柵に腕をついて身体を支え、

「遅かった」

と、こみ上げてくる歯がゆさ、口惜しさを押し殺すように震える声でつぶやいた。恐れていた最悪の事態は、今まさに、彼女が筋書いた予測通りの事態へと移行しつつあるのだから。

漆黒の宇宙を彩る死の光が意味するところは、たった1つの真実。この世を恐怖と苦痛、そして憎悪に満ちた世界に変える地獄の門は、ついに開かれてしまったのである。

「か、課長、あれはいいたい」

肩を落として狂気の閃光 すなわち、核兵器の起爆閃光に呆然と見入っていたアヤリは、聞き覚えのある声が鼓膜を打ったのに反応し、ふらつきながらも彼らに正対した。

怪訝と驚愕を表情に貼り付けたオットーがこちらに駆け寄ってくるところだった。以下、ナグン、ヒタキ、そしてラロシエも後に続いている。異常な震動に、みな通路へと飛び出してきたのだ。

「大丈夫ですか、課長。顔、真っ青です」

心配そうにヒタキが声をかけてくる。心配されるほど酷い顔をしているのがよくわかるが、あれを見せつけられてしまっただけなのかもしれないというものだ。

敵は本当に核兵器を使ってきた。しかも、あれは連邦軍に対して使用しているのではない。

間違いなくスペースコロニーに対して無差別攻撃を仕掛けているのである。かなり大規模な複数の起爆閃光を確認できることからそれがよくわかる。1コロニー単位の駐留戦隊程度を相手にするならば、2、3発の戦術核弾頭でこ と足りるのだから。

そもそも各駐留戦隊が迎撃に出ていることなど絵空事に違いない。事前に知るよしもなく、出鼻を挫かれて出港することも叶わないだろう。そう考えるとマチアスの安否がますます懸念されたが、だからといって彼に対して今できること はなにもない。

では、今自分がすべきことはなにか。それを指し示してくれたのは、皮肉にも敵のさらなる攻撃だった。

不安げな面持ちのまま、こちらの身体を支えるように手を伸ばしてくれたヒタキに礼を言いながら丁重にその手助けを断った時、巨人が徘徊する中心街から、複数の炸裂音が響き渡った。

これに反応したアヤリは再び中心街の方を向き、双眼鏡を覗き込

む。

すると、巨人がその巨大な手に持ったランチャーのようなものからロケット弾を四方に放っていた。炸裂音はロケット弾の発射音だ。

噴煙の尾を引きながら散っていったロケット弾は、やがてビルの谷間に消えていく。当然、その直後に爆発が起き、赤黒い爆煙が幾つも立ち上ることと思ひ、アヤリは表情を強張らせた。

ところが、爆発の閃光や爆音が起きるところか、いつまで経っても爆煙も立ち上らない。白い煙が上がってはいるが、あれは着弾時の単なる粉塵だ。

不発？ しかし、敵は複数のロケット弾を放っている。そのいずれもが不発などということがありえるだろうか。

爆発しないロケット弾。それじゃ、炸薬の代わりにいつたいなにを積んで

胸中で言いかけ、そこでアヤリはまたしても恐ろしい事実に気づいてしまった。自身も想定していたことだ。敵が核を含めた大量破壊兵器を使用することは。

双眼鏡から視線を外したアヤリは、震える声でつぶやいた。  
「ガスだ」

間違いない。敵は化学兵器を使用している。核攻撃すら辞さない敵が、通常弾等の類を使わなくともなんらおかしくはない。

だとすれば、ことは一刻を争う。双眼鏡をサバイバルキットのなかへと格納して背中に背負うと、険しい表情でオットーらに向き直った。

「みんなよく聞いて。敵はこのコロニーを攻撃するのに化学兵器を使ってる。このままだと皆殺しにされるわ。いい？ 付近の住民をシェルターに大至急避難させるのよ」

努めて落ち着いた声で彼らに伝える。

猶予は多く残されていない上、適切かつ迅速な対応が求められる。判断を誤れば、待っているのは即ち死。アヤリたちは、逃れられない

い生と死の分岐点に立たされたのだった。

「ラロシエさんとヒタキさんは先行して、ここから一番近いL-4のシェルターを開放。やってくる住民をシェルター内に誘導して頂戴。オットーさんとナグンさんは私と付近の住民に避難を呼びかける。いいわね」

だが、アヤリの言葉は彼らを動かせなかった。これまで体験したことのない事態に、元々実戦部隊にいたナグンでさえ棒立ちになり、宙に視線を泳がせている。彼ですらそのような状態なのだ。新米士官のオットーはもとより、あくまで軍属であり軍人ではない事務専門職のラロシエ、ヒタキが動揺して足が竦んでしまうのも無理はないことだ。

「みんななに突っ立っただっているの？ ラロシエさん、ヒタキさんほら早く！ オットーさんとナグンさんも行くわよ！」

先ほどより幾分強い口調で指示を出す。彼らの置かれてきた立場を考えれば、突如として慣れないことをしなければならぬ境遇になって動揺するのも理解できるが、彼らの働きを得られねば、彼らの安堵は守れても多くの人々を命を守ることはできない結末を迎える。ここはなんとしても彼らに動いてもらわねばならなかった。

「か、課長、いったいどういうことなんでしょう、あ、あれはなんなんですか」

オットーだった。彼がどうにか口にすることができた言葉は、依然混乱につつまれ、不安に苛まれている現れを至極内包していた。

これを受け、アヤリは理屈で彼らを動かすことがもはや不可能と判断した。

「Attention！」

腹の底から振り絞った怒声が辺りに響き渡った。

とたん、条件反射的に踵を揃え、姿勢を正すオットーとナグン。やや遅れて、ラロシエとヒタキの2人も同様に背筋を伸ばした。

それは、軍隊用語で「きをつけ」を意味する言葉だった。これに対する動作は基礎訓練の段階で骨の髄までたたき込まれており、訓

練が終了する頃には誰もが敏感に反応するようになる。軍人ではないが、ラロシエたちも軍属であるため敬礼の仕方等の基本的な動作訓練を受けているために、完全ではないとはいえ反応したのであった。

直立不動の姿勢となった彼らに対し、アヤリは容赦ない怒声を叩きつける。

「貴様らそれでも連邦軍人か！ なにを吞まれている！ 目の前で起きていることを見極め、迅速かつ適切な対応するのが軍人の務めだ！ 陣頭に立って民間人の命を守る貴様らが我を忘れてどうする！」

彼らにはこれまでに一度たりとも見せたことのない苛烈な面。

女だてらに海兵隊などという最前線の実戦部隊で、危険で過酷な任務を乗り越えてきた『誇り高き戦士』は、温厚な窓際士官という仮面をかなぐり捨てた。これがアヤリの真の姿だった。

「これは命令だ。ラロシエ、ヒタキ両名は至急1・4シエルターに向かい、すみやかに住民をシエルター内へと誘導。オットー、ナグン両名は私と共に周辺住民の避難誘導にあたる。急げ！」

あらためて最低限の指示を、今度は「命令」として告げる。彼らの心情を考えている暇などない。心を鬼にして、アヤリは軍隊において最も洗練され、最も非情な面の1つを行使したのである。

閑職についているとはいえ曲がりなりにも連邦軍人・軍属である。アヤリの急変にとまどいながらも、与えられた命令に対して忠実に反応し、シエルター担当の2人は駆け足で目的地に向かい、オットーとナグンも直ちに後続につけるようアヤリの傍についていた。

2人の背中を見送ったアヤリは、ことの顛末を呆然と見ていた公務員宿舎の住人たちに向き直る。

「あなたたちも公務員なら、民間人の避難誘導を手伝って欲しい。よろしいか」

彼女の激昂を見せつけられた彼らがこの申し出を断るはずもなく、誰もが2つ返事で受けてくれる。

効率よく避難誘導をかけるべく、ブロックごとに分担を区切り直ちに向かわせた。オットーらには宿舎内にいる他の公務員らを動員し、現段階でフォローできていないブロックの避難誘導を命じた。

部下たちと別れたアヤリは、一端自室に戻り、駄目もとで映像電話やネットワークを使いペルナローゼ駐留戦隊、サイド2駐留艦隊司令部、サイド2官公庁、ペルナローゼ各種役所等々、主だった公の機関へと次々連絡をしてみる。が、全て不通。これでこの助力も仰げないことが決定した。期待はしていなかったが、こうなると独力で最大限の結果を出すしかない。

自らも住民の避難誘導をすべく退出しようとした時、彼女は思いだしたように踵を返してベッドルームへと向かった。枕元へと駆け寄ると、ベットの頭側に設置されている棚に置かれたブローチを手にする。

リクトの遺品だった。それどころではないことは理解してはいたが、これだけは置いてはいけなかった。

ジーンズのポケットにそれをねじ込むと、自室を飛び出した。通路に出て宿舎周辺を見下ろすと、避難誘導に出した公務員たちの働きが功を奏したのか、とまどいながらも周辺住民たちが着の身着のまま避難を始めている姿が目に入る。

安堵するにはほど遠い現状下だが、少なくとも破滅から逃れるための抵抗は順調に進んでいる。

今の風向きと風力を考えると、中心街のガスがこちらへ到達するにはそれなりの時間がかかるはずだ。加えて、拡散するために効果の減衰が期待できる上、そもそもあの巨人はコロニーの外壁を打ち破って侵入してきている。侵入路からの空気漏れに伴い、ガスも同時に流出することも期待できた。

とはいえ、それはこちら側にとって都合のいい考えであることもアヤリはよく理解していた。なぜなら、この予測はあくまで中心街のみにガスが発生した状況を対象としているからだ。

コロニー中心部のみにガスを投入する方法でも、天井知らずの量

を使用すればコロニー1つ壊滅させることは可能だ。

しかしながら、この方法は極めて非効率であり、まともな戦術とはいえない。

子供でもわかることだ。効率よくコロニーを潰すためには、ガスの有効範囲を厳密に計算し、定点ごとに散布した上で侵入経路を塞ぐことが最も適切なのだ。これならば、ガスをコロニー外へと流出させずに、最短時間で末端に行き渡らせることができる。

だとすれば、アヤリは「その時」の到来が少しでも遅くなることを祈った。

だが、祈りは無情にも打ち砕かれた。

爆発音。続けて吹き上げる粉塵。

宿舎から100メートルほど離れた所で巻き起こった事象に、アヤリは目を見張った。

立ち上る噴煙のなかに揺らめく、巨大な人影。噴煙が急激に逆流して人影の下半身側へと吸い込まれていくことにより、その姿はすぐに鮮明になる。

光る赤い単眼に緑色の体表を持つ巨人。そう、中心街に姿を現したタイプとまったく同じ人型機動兵器が、コロニーの外壁を突き破って侵入してきたのである。これが意味するところは、先ほど想定した通りの結果をもたらすということだ。

巨人は手にしたランチャーから次々とロケット弾を周囲に向けて放った。その瞬間、アヤリは階段に向かって駆け出していた。

あの巨人が侵入してきた穴も巨人サイズのため、コロニー外への大気の流出はかなり激しいものになる。その影響がすぐにアヤリのところまで伝播し、猛烈な風が巨人の方へと吹き始めた。

身体を持っていかれそうになるのを必死で堪えながら宿舎敷地から脱出したアヤリは、避難誘導から漏れ、暴風に抗うのが精一杯といった体で通りを彷徨っている住民たちにあらん限りの声を振り絞って呼びかけた。

「みなさん！ シェルターへ！ 早く、シェルターへ逃げて下さい

！

吹きすさぶ風音にかき消されそうになりながらも懸命に叫び、手近な住民たちには身振り手振りでシェルター行きを急かす。

この暴風は強敵だが、こちら側の風上にロケット弾は飛来していない以上、ガスに関しては助けとなった。この暴風のおかげで、今のところガスがこちらへは流れてこないからだ。

そして、その風上の方角にはL-4シェルターがある。まだ道が断たれたわけではない。

自力では暴風に太刀打ちできないでいた小柄な女性とその子供を助けながら、自らもシェルターを目指す。身体を前に傾け気流に抗い、できうる限りの速度で前に進む。

「頑張つて！ もうすぐ、シェルター、ですよ！」

激しい風の流れに息をするのも困難ななか、それでも2人を励まし懸命に助力した成果が、やがて住宅街のなかに作られた小さな丘が見えてくる。芝が植えられたそれは一見単なる丘にしか見えないが、その縁には分厚いコンクリート製の開口部が設えてあった。シェルターの入り口である。

このシェルターは大まかな各ブロックごとに用意されており、外壁破損による空気漏れやコロニーという密閉空間では致命的な事態を引き起こしかねない伝染病の発生など、万が一の事態に備え住民が避難できるようにするため に建造されている。

シェルターにはブロック住民分のノーマルスーツやまとまった数の衣食が常備されており、独立した発電・酸素循環システムも備えていた。もしコロニー内から空気がなくなったとしても、隣のコロニーから救援がきて救助されるまでは保たせられるよう設計されている。

風の流れが弱くなってきた。侵入路を塞いだ？

シェルターを目前にして、あれほど強かった暴風が急激に衰えているのに気づいた。侵入路を塞ぎ、空気の流出を防いだのだとすれば、いよいよもってこの境界も危なくな る。



アヤリは子供を抱きかかえると、子の母親を伴い、一気にシエルターへと向かった。

入口では、1人の女性が住民をシエルター内へ誘導していた。ヒタキである。

「課長！」

こちらに気づいたヒタキが、感極まった声を上げた。

「ご苦労。ラロシエはどうした」

「は、はい。避難した住民とオットー少尉がトラブルを起こして、その仲裁に」

考えるまでもない。オットーからなにか起こしたのではなく、気の弱そうな士官に対して血気にはやった住民が、この理不尽な状況に対する怒りの矛先を向けたのだらう。

早速手のかかることが起きているのに舌打ちしながら、避難誘導に当たったもう1人の部下の所在を確認する。

「ナグンは？ まだ来ていないの？」

「はい。ラロシエさんがなかに入った後も、私はここから離れずに誘導に当たっていたんですが、ナグンさんのお姿は確認していません」

「わかった。ここはもういいから、貴女はなかに入りなさい。それと、住民全員にノーマルスーツを。もちろん、貴女たちも着用するのよ」

抱きかかえた子供をヒタキに預け、その母親とともにシエルター内へ入るよう促す。

「課長は」

「私はここで住民の誘導をしながらナグンを待つ」

言って、早く行きなさいという意味とよくやったわねという意味を込め、ヒタキの肩口を軽く叩く。

ヒタキはアヤリを残していくことに後ろ髪を引かれるような表情をしていたが、それでも大人しく従い、母子を伴ってシエルター内へと消えていった。

ヒタキたちの背中を見送ると、踵を返して住宅街へと視線を張り巡らせる。何人かがシエルターを指摘し、ほうほうの体で逃げ込んできると、ナグンの姿はまだない。風は吹いていないが、あの距離でガスを散布されたのである。空気漏れが収まった時を起点にして、時間的にこの辺りまでガスが拡散してきてもおかしくはない状況だ。

彼の安否不明に表情を曇らせ、息せき切らせて走ってきた新たな住民2人をシエルターのなかへと導いた時だった。

住民たちを誘導し終え再び外へと目を向けると、路地影から姿を現す、老婆を背負った男の姿が網膜に飛び込んできたのだ。他でもない、ナグンだった。負傷したのか、片足を引きずりながら必死にこちらを目指して向かってきていた。

考えるより先に身体が動いていた。駆け出したアヤリは、すぐに彼のもとへとたどり着く。

「ナグン！ よく無事で」

「申し訳ありません。ヘマやらかして、飛んできた瓦礫の破片を足に受けちまいこのさまです」

部下を労うと、彼は痛みにも顔を歪めながらも苦笑して答えた。見ると、ズボンの膝横辺りが裂け、赤いものが流れ出ている。

「シエルターはすぐそこだから、おばあちゃんは私が」

ナグンにこれ以上負担をかけさせないため、背中のお婆を自分が背負おうとした。アヤリの言葉は途中で途切れた。

視界の端に映ったものが、鼓膜に届いた叫び声が、彼女の動きを止めさせたのだ。

シエルターに向かって彼女たちの後方、シエルターを指摘して逃げてきた若い男女2人の住民が、たて続けに倒れ伏していた。苦悶のうめきを上げて。

なにが彼らをそうさせているのか。考えるまでもなかった。

ここで、天はアヤリに決断を迫る。行動如何によつては最悪の結果を引き起こすことになるのだ。しかも、決断を思慮する時間は、

刹那の間しか与えられていなかった。

倒れた2人は苦しそうに咳き込み、目が痛いのか懸命に 目元をこすっていた。神経ガス攻撃を受けた典型的な症状 だ。

さらにこのガスは、肺に吸い込むことによって効果を発露するだけでなく、皮膚接触によっても甚大な被害をもたらした。

対し、アヤリには防毒マスクすらない状態だ。だとすれば、選ぶ道はただ1つのはずだった。

「ナグン、行け！ 死ぬ気で走れ！」

老婆を背負った彼の肩を叩いて急かしたアヤリは、呆然としているナグンに背を向け、なんと倒れた住民たちに向 かって駆けだしたのだ。彼には悪いが、あの程度の負傷なら命に別状はなく、多少悪化させても問題はない。ならば、老婆は彼にまかせ、危急に瀕している住民を全力で助けるのが先決だ。

彼女はサバイバルキットを背負ったまま手探りでミニペツ トボトルを取り出し、さらにポケットから取り出したハンカチ にペツトボトルに入ったミネラルウォーターを振りかける。濡らしたハンカチを口元に当てたアヤリは、のたうち回っている住民2人のもとへとたどり着いた。

「頑張つて！ シェルターはすぐそこですよ！」

ハンカチを口元に当てているために声はくぐもったが、それでもできるだけ声を振り絞った。これが功を奏したのか、苦しんでいた2人はアヤリに気づき、震えながら助けを求めてきた。激しく咳き込んでいるためにまともに喋ることができないようだが、助けを懇願する言葉であるのは間違いない。

「喋つては駄目！ これを口元に！」

なんとアヤリは、息を止めると、自分の命を守る濡れハンカチを住民の口元へと押し当てたのだ。さらに持っていたポケットティッシュを濡らし、女性の口元へと押しつけ、余ったものを自分用にしていた。

「さあ立って！ 力を振り絞って！」

より症状の重い女性の肩に腕を回して抱き起こし、男性の方には発破をかけて小走りにシエルターまで駆け出す。

シエルター口には既にたどり着いていたナグンが待機し、急ぐよう声を張り上げていた。それに応えるかのように、アヤリは持てる力を振り絞って突き進む。

「課長！ 早く！」

シエルター口まで後少しと迫った時、負傷しているのにもかかわらず、たまらず飛び出してきたナグンが、独力でシエルターに向かっていた男性を助け、シエルターに導いていた。アヤリも女性を引きずるようにシエルターへとなだれ込む。

「閉鎖！ 閉鎖しろ！」

シエルター内に入り、助けた住民ごと床に転がるやいなや、アヤリは叫んだ。それに応えたナグンが、手動式のシエルター扉に手をかけ、全力全速で入り口を閉鎖する。

アヤリたちが駆け込んだのは、シエルターの玄関ともいうべき空間で、正確にはまだシエルター内に入ったわけではなかった。奥にあるエアロツクの向こうが本当のシエルターであり、ここは通路よりは広い、シエルターへと入るための待機所のようなものだった。もちろん外気とは隔たれているためにガスは遮断したものの、ここで悠長に時間を浪費している場合ではなかった。

「エアロツクへ移動だ！ ここは汚染された可能性がある！」

濡れティッシュを放り捨てて叫ぶと、ぐったりとした女性を抱えて横スライド式のドアが立ち上がるエアロツク口へと向かう。

「連れ来ていたお年寄りはどうした」

「なんとか自力で歩行はできるとのことでしたので、先に行かせました」

圧搾空気で開いたエアロツク口を通り抜けつつ、先ほどの老婆のことを案じると、問題ない旨が返ってくる。ならば、今は全力でこの2人を助けることを優先させるべきだった。

エアロツク内に入ると、入口のドアが閉まり密閉状態になる。コ

ロニー災害用のシェルターのため、エアロックが装備されているのは当たり前といえば当たり前だが、これを設計した人間もよもや毒ガスから住民を守るための用途に使われるとは想像だにできなかったろう。

「ナグン、気道確保。それから彼の上着、曝露したところだけでいいから脱がせて。もちろん貴方もよ」

女性を仰向けにして床に寝かせ、顎を反らして気道を確保すると着ていたブラウスのボタンに手をかけて脱がしにかかる。アヤリに指示を出されたナグンは、一瞬とまどったものの、すぐに彼女の意図を察して彼が担当している男性の服を脱がしにかかった。そう、神経ガスが付着しているものをいつまでも着せておくわけにはいかない。

女性の衣服を脱がせて下着姿にしまうと、アヤリは自らもシヤツとジーンズを脱ぎ捨てた。もちろん、ジーンズのポケットからリクトのブローチを取ることは忘れない。取り出したブローチを着と胸の間に指し込み、ナグンたちも服を脱いだことを確認すると、壁に備え付けられた端末を操作する。

「ヒタキ、ヒタキ聞こえる？」

シェルター内壁に備え付けられたスピーカーに直結したインターフォンが端末に据えられていた。しばしの時間をおき、端末にある小型ディスプレイにシェルター内の端末に向かったヒタキの顔が映し出された。

『課長！ ご無事だったんですね！』

感極まった様子のヒタキだったが、今はかまっている余裕はない。

「酸素マスク2つとバスタオル、それから毛布をそれぞれ4つ、かき集めてエアロックまで持ってきて。大至急！」

必要最低限のことだけを伝え、とまどいながらも復唱したヒタキの姿を確認するとインターフォンを切った。

次に、エアロック内の換気を行った。強制的に空気を循環させ、

新鮮な酸素を送り込ませた。この空気はシエルターに併設されている生命維持装置から発生しているもので、当然外気ではない。これにより、移動に帯同して流れてきた汚染空気はほぼ除去できたはずである。

そして彼女は、衣服を脱ぎ捨てた際に床に放ったサバイバルキットに手を伸ばした。なかをあさり、ペンケースのような金属製の小さな箱を取り出した。これもまた、当然のことながら正規のサバイバルキットに入っているものではない。

蓋を開けると、なかには手のひらサイズの円筒が2つ収められており、そのうちの1つを手にとると、器用に親指で一端を覆っていた力バーを弾いた。

目の痛みと息苦しさを訴えつつ、だらしなく涙と鼻水、唾液を垂れ流し、さらに失禁までしている女性の腕を取り、円筒を皮膚に押し当てる。針を使わず、空気圧で薬液を体内に送り込むタイプの自動注射器だった。

「課長、それは」

「HI-6とアトロピンの混合薬よ。こんなこともあるのかと思つてね」

空気が抜けるような音がしたかと思うと、体内に薬液が注入された衝撃のためか女性の身体が大きく震えた。

まさかそんなものまで、という眼差しをナグンが送ってきていたため、馬鹿正直に真に受けている彼に対して補足してやる。

「貴方も61式に搭乗していた時には携行していたかもしれないけど、私がいた海兵隊は抜き身で戦うから、なおのこと対化学兵器用の応急処置キット携行を厳守としていたの。私の場合、当時の習慣が惰性になっていまだにお守り代わりに持ち続けてたけど、まさかこんな時に役に立つなんてね」

皮肉なことだが、今は己の惰性がありがたかった。

HI-6とアトロピンとは、神経ガスに対して有効な解毒剤だった。

神経ガスは筋肉の収縮に関わる神経伝達物質アセチルコリンを分解する、酵素アセチルコリンエステラーゼに作用する。この酵素は神経ガスによりその活性を阻害され、こうなると自らの活動を制限するもののいなくなったアセチルコリンは無軌道に神経細胞から放出され続け、これが筋肉神経のレセプターに筋肉を動かし続けるという信号を送り続けることになった。

つまりところ筋肉の痙攣状態につながり、結果的に呼吸器官も麻痺して窒息死に至る。眼痛や体液の流出等はその初期症状と言えた。

対し、H I - 6 はアセチルコリンエステラーゼの再活性化を行い、アトロピンはアセチルコリンが結びつくレセプターに先に接触してアトロピンの活動を阻害する。これによって神経ガスで受けたダメージは次第に軽減され、後は人間が生得的に持っている解毒能力によって回復していくはずである。

自動注射器は1本で3回使えるだけの薬液を内蔵しており、針を使わないために使い回しができた。

「彼に打ってあげて。それから貴方も打っておきなさい」

まだ後2回使える。ナグンに自動注射器を手渡し、処置を指示する。

刹那。急に視界が狭くなったような、辺りが暗くなったような気がした。加えて、眼球自体と鼻孔に違和感を感じる。ついに自身の身体にも神経ガスの影響が現れ始めているのだ。曝露していた時間はほんのわずかな上、応急的とはいえ濡れハンカチという対ガス防護をしてもこれだ。神経ガスというものは非常に即効性の猛毒であることが窺い知れる。

アヤリはもう1本の自動注射器を取り出すと、自分の腕に押し当てた。今ここで倒れるわけにはいかなかった。

ものの1、2分後。

ヒタキがエアロックへとやってきた。

シエルター側の扉の外に備え付けられたインターフォンから到着

した旨を報告してきたことを受け、アヤリはエアロツクを開いた。

「課長、ご無事」

持つてくるように命じた物を両手一杯に抱えた彼女は、アヤリの無事に喜びの声を上げたが、言葉は途切れた。理由は簡単に想像がつく。なにしろエアロツクにいる4人は、全員が下着姿の半裸状態だったからだ。インターフォンの小型ディスプレイではこちらも顔しか見えていなかったであろうことに加え、神経ガスに対する知識などないヒタキにしてみれば、ただただ啞然とするしかないのも無理はない。とはいえ、今彼女に説明している暇はない。

「こっちはこれからエアロツクで身体の洗浄作業に入るから。住民のノーマルスーツ着用状況は？」

ノーマルスーツをまだ着用していない彼女に言って、身じろぎしているヒタキから酸素マスクを受け取る。

「は、はい。8割方完了しています。あと数分で完全に着用し終えるかと」

「わかった。ここはとりあえず大丈夫だから、バスタオルと毛布はそこに置いて、貴女も戻ってノーマルスーツを着用すること。いいわね」

エアロツク口にバスタオルと毛布を置かせると、ヒタキをシエルター内に戻させる。ここに待機させていてもできることはもうないし、なにより彼女にも早くノーマルスーツを着てもらわなければならない。

ヒタキは戸惑いながらもわかりましたと返答し、この場を後にしようとした。

「ヒタキ」

アヤリはそんなヒタキの背に声をかけた。怪訝そうに振り向く彼女。

「これ、ありがとう。それから、さっきは軍属の貴女にまで怒鳴ったりして悪かったわね」

礼の意味を込めて酸素マスクを軽く眼前に掲げつつ、アヤリは避



難指示を最初に出した時のことを詫びた。

確かにヒタキは軍属ではあるが、あくまで事務官であり、本来軍務以外の仕事の責めは負っていない。普段訓練もしていない彼女に、いきなり避難誘導を高圧的に命じたのはやりすぎだったかと反省したためのことである。

これにヒタキは頭を振った。

「いえ、非常時ですから当然のことです。それに、こんな時に不謹慎かもしれないですけど、私は嬉しかったんです。私もちゃんと軍に所属している一員なんだって思えましたから」

軍人を志し、身体的問題で挫折した彼女ならではの言葉だった。確かにこんな時に、ではあるが、アヤリは別段責めることなく彼女の言葉に黙って頷くのだった。

ヒタキの背中を見送ると、エアロックを再び閉鎖。住民2人の容態を確認する。体液の流出は依然続いていたものの大分収まりつつあり、劇症の危険性はほぼなくなっていた。痙攣も見受けられず、瞳孔の収縮もない。自動注射の解毒作用が効果を発揮し、安定期に入ったと見なしてもよかった。

「今後も安静が必要だけど、重篤な状態からは脱したわ。ナゲンは身体に違和感ある？」

「いえ、別段ありません。快調です」

部下の身体にも異常はない。翻って先ほど異変を感じた己の身体も、今では違和感も収まりつつあった。

だが、油断は禁物だ。衣服は脱ぎ捨てたが、神経ガスに曝露した頭部やその他衣服に守られていなかった部分に依然としてガスの成分が付着している可能性がある。NBC兵器による攻撃を受けた場合、体表に付着した危険物質を一刻も取り除くことが求められた。そのためには水で10分〜15分ほど丹念に洗い流すことが重要なのだった。

エアロックには汚染除去のための洗浄設備が整えられており、これを使わない手はない。

体力を消耗している住民2人にとっては、勢いよく噴出してくる水流に抗じて呼吸するのはさらに消耗を促しかねないので、彼らは用意した酸素マスクを被せる。

「しっかり身体を洗ってあげて。もちろん、自分の身体もよ」

ナグンに男性住民をまかせ、アヤリは壁の端末を操作する。すると、天井と両の壁から勢いよくシャワー状の水が噴き出した。

アヤリは女性住民の顔からまず丹念な洗浄に取りかかった。顔や脇の下、太股の内側などは角質が薄いため、吸収が他の部位よりも早いためだ。

「もう大丈夫ですからね。今、綺麗にしますね」

酸素マスクが外れないよう気をつけながら女性の頬を優しく洗うと、彼女は力無くもうっすらと笑みを浮かべ、か細い声で『ありがとう』と口を動かしていた。

その反応に、この女性ができるだけ安心できるよう、アヤリも笑みをもって応えるのだった。

眼球洗浄までも終え、身体についた水滴をバスタオルでしっかりと拭いた後、体温の低下を防ぐために毛布で女性の身体を包み込む。それが終わると、アヤリは自身も身体を拭いて毛布にくるまった。

「ナグン、足は大丈夫？」

救助した女性の介抱が一段落したため、部下の負傷を思い出したアヤリはナグンを見やった。

「こんなの屁でもないです。ブツが当たったところは腫れちまいましたが、出血も止まったんで。後は唾でも塗っとけば勝手に治るってもんです」

決して痛くないわけではないだろうに、軽口を叩くナグン。ただ、確かに思っていたほど傷は重くはないようだ。出血も彼の言う通りもう見受けられない。

部下に大事はない。また、救助した2人の避難民に対し、設備の整っていない現状でできることは全て行った。後は然るべき施設に2人を搬送し、専門家に委ねるだけだ。もつとも、それがあまりにも困難であることは重々承知していたが。

しかし、いつまでもここににいるいわれはない。アヤリは端末を操作し、再びヒタキを呼び出した。

「これからシエルターに入る。なんでもいい、着替えを持ってオットーと誰かもう1人男性を連れて、ストレッチャー（担架）を持ってきて」

ところが、小型モニターの向こうで、ヒタキは気まずそうに言葉を濁した。理由を問うと、彼女は困惑の色を表情に織り交ぜながら答えた。

『それが、オットー少尉なんですけど、先ほどの住民の方とまだ揉めているんです。ラロシエさんの仲裁でも収められていなくて』  
なんたることだ。どんな理由があろうとも、この状況下で長々と

いさかいを起こしているなど言語道断。外ではもう何人もの罪のない住民が命を絶たれているというのに。これには冷静なアヤリも露骨に眉をひそめた。

大きくため息を吐いて頭を振ると、彼女は苦虫を潰したような表情で言った。

「住民の件は後で私が処理する。話の途中でもなんでもかまわない、とにかくオットーを引っ張ってきて。いいわね」

『わ、わかりました』

可哀想だが、有無を言わずに告げる。ヒタキなりに現在の状況を受け入れているのならはこちらも気を遣うことはない。今は非常時なのだ。

サバイバルキットもガスの洗礼を受けたため、洗浄した中身を点検しつつアヤリは彼女を待った。

ノーマルスーツ姿のヒタキがやってくるのにそれほど時間はかからなかった。エアロックの外にある端末から到着した旨を告げてきたのである。

これに、アヤリはエアロックを開けて彼女を迎え入れた。命令通りオットーと避難した住民のなかから男性を1人連れてきていた。もちろん、彼らもノーマルスーツを着用済である。ただ、なぜかオットーの左頬に赤みが差していた。

「ヒタキご苦労。オットーは 貴方、殴られてきたわね」

一目瞭然。片頬だけで恥じらいの朱を浮かべるなどという器用なことができるわけもない。先ほどから揉めているという住民に暴行されたに違いなかった。

アヤリは彼の傍に寄ると、そつと頬に触れて状態を確認した。痛みが走ったのか、たまらず小さく声を漏らすオットー。

「それで、貴方はやり返した？」

「い、いえ。私はなにも」

「結構。よく我慢したわね」

彼の性格を鑑みれば、『やり返す』などという行為に及ばないの

は容易に想像できたが、あえてそう言ってみる。彼がいつまでも不平住民につかまっていたことを責めてもなにも始まらないならば、殴られてしまったことを労う方が彼の精神衛生上プラスになるというものだ。ただ厳しくあたるだけでは潰れてしまふ人間もいることをアヤリは熟知していた。

なにより、『士官』というもつと大きな責めを負うべき地位にある彼には、まだ潰れてもらうわけにはいかない。

「大事ないわ。戻ったら濡れタオルかなにかを当てて冷やしておきなさい」

それほど強くは殴られてはいない。オットーにその後の処置を示すると、ヒタキが差し出してきた着替えを受け取った。

「ナグン、着替え。彼にも着せてあげて」

着替えはシンプルなスウェットの上下と、おろしたての下着だった。ナグンに手渡すと、今度は自分と住民女性の番である。肩にかけた毛布を脱ぎ捨てた。

と、ヒタキが気を利かせてその毛布を手にとって広げると、アヤリと住民女性を守るようにして男性陣から隔離してくれた。

この状況下なので自分は特に気にならないが、被害を受けた女性意識を失っているわけでもないのもいかないだろう。ヒタキの配慮に礼を言い、アヤリは手早く住民女性を着替えさせると、自らも新しい衣服に袖を通した。リクトのブローチを、新しい下着の胸元に挟み込むことも忘れずに。

「ヒタキありがと、もういいわ。オットー、ナグン、それと貴方。2人をストレッチャーに。体力を消耗しているから、ゆっくり」

男性住民の方をナグンと手助けに来てくれた避難民に任せ、自らはオットーと女性住民をストレッチャーへ移した。

準備を整えた一団はエアロックを後にし、シエルターへと続くスロープを下って地下へと進んで行く。エアロックからはそれほど距離は離れていない。ものの50メートルほど歩くと、シエルター本体の入口が見えてくる。シエルターの入り口は分厚い二重のスライ

ド式ドアで仕切られており、それが最終的な防壁とも言えた。一団がその前に立つと、自動的に開かれる。

その向こうに広がっていたのは、ただ広い空間。天井にある照明からの十分な光量に照らし出されたシエルター内は、万単位で避難できる場所としてのスペースを十二分に持っていた。内部には基本的ににもなく、壁のあちらこちらに扉がある。それらは食料や装備を保存しておくための倉庫であり、循環式トイレであり、いずれも扉が開かれており既に使用したことがわかる。

一方、避難した住民たちかというとヒタキらの指示が徹底したおかげか全員ノーマルスーツを装備していたものの、広々としたシエルターの一方の壁側にかたまり、疲れ果てて肩を落したり、不安げに視線を泳がせていたりと様々な様態を呈していた。

アヤリの表情が曇った。

一目瞭然。広大な空間に比して、避難民の数が圧倒的に少なかったからだ。

しかも単に少ないだけではない。万単位で避難可能なこのL-4シエルターの収容量に対し、実際にそこにいた人数は桁が2つ少なかったのである。それどころか、さらに1つ桁を落としかねないほどの避難民しかいなかった。

皮肉なことだが、この少ない避難民のために、オットーの身代わりとなったラロシエとくだんの住民たちの姿を用意に見つけることができた。怒声がこちらまで響き渡ってくる。

「説明しろよ！　いつたいどうなってるんだよ！」

「だから何度も言ってるでしょう！　こっちだってなんにもわかっていないんだ！」

そこへ、隣にいた別の住民が、

「馬鹿野郎！　てめえそれで済むと思ってんのか！」

と怒声を上げながらラロシエの肩口を小突いた。

「なにすんのよ！　こっちが大人しくしてたら手え出してくるわけ！？」

住民たちの怒声と無礼な態度に、さすがに腹を立てたラロシエが息巻いた。

このまま放置しておけば、状況は最悪の方向へと向かってしまう。「オットー、ゆっくりストレッチャーを降ろして」

アヤリが動いた。ストレッチャーを床へと降ろすと、彼女はラロシエのもとへと駆けた。

一方、先のラロシエの発言を受け、住民はさらに激昂してしまっていた。腕を振り上げ、拳を叩きつけようとする。

「やかましい、このくそアマ！」

「お止めください」

怒声を張り上げた住民に対してその背後から音もなく走り寄ると、押し殺した声を向け、振り上げた住民の腕をつかんで止めた。

さすがに驚いたのか、わずかに身体を跳ねるように震わせると、彼はアヤリに腕をつかまれたまま振り返った。すると、瞳に映りこんできたのが若い女性だったためか、突然腕をつかまれたために怪訝の色を浮かべていた表情はにわかに豹変し、きつい口調がアヤリへと向けられた。

「なんだ、あんた」

「彼女の上官でハヤカワと申します」

「あんたも軍人か？　なら言わせてもらうがな、これが落ち着いてられるか！　わけのわかんねえ化け物は出てくるし、ミサイルが飛び交うし、戦争してんのか！？　いったいどうなってんだよ！」

男はなお声を荒げ、アヤリを威嚇する。だが、彼女は一步も引かず、毅然とした態度で立ち向かった。

「おっしゃりたいことはわかります。しかし、現在小官らが把握している情報は皆無に等しく、正確にお答えすることができない状況です。引き続き、情報収集にあたりつつ関係官庁にコンタクトを取り、然るべき対応を取れるよう全力をもって善処いたしますので、住民の皆様にはこの場で肅然と待機いただきたいのです」

臆することなく言い放つ。確かに、彼らの不安は当然のものであ

るし動揺を隠せないのはある程度仕方ないことだ。だからと言って、それらを全て許容することはできない。少数の人間の勝手により、多くの人々を危険にさらすわけにはいかないからだ。

とはいえ、彼女の考えを相手が以心伝心理解してくれることもなく。

「えらそうになに言ってやがる！ だいたいおまえら連邦軍はなにやってんだよ！ コロニーのなかでドンパチやってんだぞ！ こんなもん事前に防ぐのがおまえらの仕事じゃねえかよ、この税金泥棒が！」

いまだアヤリにつかまれた腕を振り払おうとしながら、一気にまくしたてた。

彼女は腕を離さなかった。それどころか、さらに強い力を込めつつ射るような視線を逸らさないまま、先の言葉を繰り返した。

「重ねてお願い申し上げます。肅然と待機ください」

口調こそ丁寧ではあったが、そこには有無を言わさない断固たる意思が込められており、それは見た目にはわからない気迫となってアヤリからほとばしっていた。

短い言葉だった。だがそれは、冷静さと冷徹さが内在した彼女の視線とともに絶大な効果を発揮していた。

それまであれだけわめき散らしていた住民は、身体をこわばらせ、額に脂汗を浮かべている。射竦められた、とはよく言ったもので、まさにアヤリの気迫こもった言葉とその鋭い眼差しによって身じろぎ1つできなくなってしまったのだ。帰趨は決した。

手から力を抜いて男性を解放してやると、彼は畏れの色を表情に浮かべたままよろよろと後退さった。人間とて生物。本能的に自分ではかなわないと悟ったのだろう。もはや喚き立てることもせず、大人しくなってしまった。これを見ていた他の住民も同様、以降声を荒げることはなかった。

場を鎮めたアヤリは、彼女の応対を呆気にとられて見ていたオットーたちに向き直ると、立て続けに指示を出した。



「オットーとラロシエは避難住民の員数確認、それから傷病者がいないかチェックして。ナグンはノーマルスーツを着用したら、ヒタキとシエルター施設設備の現状把握。備品チェックなどはおおよそでいい。終わったら報告すること。以上、解散」

的確な指示は、動揺している脳にかえってストレートに伝達する。どうにも見慣れない上司の気迫にまだ驚きを隠せない部下たちのようだが、彼らも軍人・軍属。命令には素直に従い、散っていく。

彼らの背中を見送ったアヤリは、ノーマルスーツが格納している倉庫へと向かい、3セットを抱えて救出した住民2のもとへと戻った。ストレッチャーに寝かされたままの2人にノーマルスーツを着せてやると、後のことは看護士だという他の避難住民に託した。

ここでようやく自らもノーマルスーツ着用。着慣れない一般用のノーマルスーツだが、贅沢は言っていられない。ヘルメットを装着し、一度バイザーを閉じて生命維持装置の作動を確認すると、再びバイザーを上げた。

一段落したことに小さく安堵のため息を吐くものの、すぐに表情を引き締める。こうして今生きていることがさらなる災厄の到来を暗示していることを彼女は認識していたのだから。

確かにペルナローゼは化学兵器攻撃を受け、甚大な被害を被った。多くの住民を収容できるこのシエルターに、わずかな避難民しかないことを鑑みれば、居留している住民がどれだけ死傷しているか見当もつかない。

だが、コロニー自体が壊滅したわけではない。ここがポイントだ。なぜなら他のコロニーは核攻撃を受けているのである。

核兵器の破壊力は、起爆と同時に発生する熱閃光及び爆風に依る。熱閃光はあらゆるものを焼き尽くし、爆風が全てをなぎ払う。

爆風を伝播する大気が存在しない宇宙空間ということと、非常に頑強な構造体で建造されているコロニーが標的ということを差し引いても、その威力は計り知れない。コロニー全てを破壊できずとも、その横腹に巨大な穿孔を生み出すことや、内部ならば爆風で掃討す

ることは可能だ。

さらに、核兵器ならではの放射線による攻撃も生物である人間には大いなる脅威となる。コロニーなどという限定空間に居住している以上は、郊外に逃げ延びるという選択肢はありえず、近距離からの強烈な放射線によって即死するケースも多いはずだ。

これらを考えると、コロニーへの核攻撃はコロニーという建造物を含めた全てを殲滅するために行われるものに他ならない。

では、ペルナローゼのように化学兵器を使用したケースはどうか。人間にとって毒ガスが脅威なのは間違いないし、使用されているのがびらん性でなく致死性の高い神経性ガスだったことも鑑みると、コロニー住民を殲滅するために使用されているのは明白だ。

それならばコロニー自体はどうか。毒ガスによって汚染はされようが、構造自体にはなんら被害はない。攻撃を受ける前と見た目はまったく変わらないのだ。当たり前である。コロニー自体を奪取することが目的で、ガスの使用は邪魔な住民を一掃するためなのだから。

そう。ほかでもない最終目的のためには、コロニーを傷つけるわけにはいかないに違いない。彼らがこのペルナローゼを使って『コロニー落とし』という戦略攻撃を成功させるためには。

「課長、避難民の員数及び傷病者のチェック、完了しました」

「避難民は155名。うち、課長がお連れした負傷者2名を含めて傷病者は15名ほどですが、傷の具合は軽微ですし急病人はおりません。避難誘導に協力してくれた公務員、それから我々を含め、シエルター内に避難できたのは総勢168名になります」

暗雲どころか、危険な放射性物質で満ちあふれた死の雲を頭上に置いたような前途に表情を曇らせていると、ラロシエとオットーが戻ってきた。早速報告を受けるが、避難できた人数はやはり恐ろしいほど少なかった。

万単位の人員を収容できるシエルターに、わずか168名。それは、シエルターに避難できなかった近隣住民のほとんどが死滅した

ことを意味していた。あまりにも厳しい現実だった。

「ご苦労。そう、168名だけ、か」

伏し目がちになりながら、アヤリは唇を噛みしめた。

なんと自分は無力な存在なのか。罪もない多くの人々を救うことができなかった。

もちろん、原因はこのような非道を起こした敵にある。しかし、こうなる危険性は予期していたのだ。もっと積極的に、もっと迅速に調査活動を行い、早い段階で上層部へと具申していれば、あるいは未然に防げたのかもしれない。そのことを思うと、彼女は自身が情けなく思えた。堪えようのないほど歯がゆかった。

だが、そう遠くない未来、自分と仲間、避難住民を道連れにしてジャブローへとこのコロニーが落ちてしまう現実がある。もちろん、そんなことなど断じて認められない。

過去を振り返ることよりも、もっと大切なこと、しなければならぬ責務が彼女には存在していた。

くじけることはいつでもできる。ただ、今はその時ではない。それだけだ。

決して少なくはない人々の命が自身の双肩にかかっていることを深く噛みしめ、気持ちを改め、伏せていた目を見開いたその時。

『姉さんが助けに来てくれたから、僕もみんなも無事さ』

唐突に蘇る、黒髪の少年の言葉。かつて、彼を救出に向かった時、彼が投げかけてくれた言葉。それが、どこからともなく脳裏に響き渡ったのである。

「リクト、どうして」

不意に届いた声に、アヤリはつい彼の名前を口に出してしまう。言って、彼女は慌てて口をつぐんだ。

もちろんいくら慌てても手遅れで、ラロシエとオットーが怪訝そうな表情をしている。

だからといって説明しようのないことであり、困惑していると、助け船のようにナグンとヒタキが丁度戻ってきた。

「課長、こちらでもシエルター設備のチェック完了しました」

「チェックリストがありましたので、ご確認にはこれをどうぞ」

チェック完了報告とともに、ヒタキがチェックリストを差し出した。設備の状態や備品の在庫チェックをするためのリストであり、シエルター備え付けのものを探して使用したのだろう。全ての項目に丁寧な書き込みがなされていた。

先ほどの声に対する訝しさは残ったもののどうにか気を取り直し、2人を労いつつリストを見ると、ほぼ完全な状態でシエルターは機能し、備品の備蓄状態も問題なかった。

最中、リストのなかにシエルター内部の見取り図を見つけた。そこで、アヤリの目が止まった。おおよその構造は事前に知ってはいたが、彼女も知らなかった事実がそこには明記されており、そしてそれは今後の展開によっては非常に有効な使い方ができるものだった。

手詰まりに思えた現状に、駒が1つ生まれた。だとすれば、次の一手、いや、先の先を想定し、最善の未来をつかむための駒を増やすためにも、行動に移すことが求められた。

敵を知り、己を知らば百戦危うからず 遙かなる古の時代に名を馳せた兵法者が説いた言葉だ。己のことは知った。であれば、次は敵のことを知る必要がある。

「ナグン、これから私はオットーと2人で外の状況を確認してくる。1時間以内には必ず戻るから、ここは任せた」

留守居役は先任下士官で現場任務にも就いていたナグンが適任だった。なにより足を負傷しているため、無理を続けさせることができない。ナグンもそれをわかってか、告げた指示に了解と復唱していた。

そんな彼に、片肩にかけていたサバイバルキットから双眼鏡と鞘に入った小型ナイフを取り出し、残りを手渡す。

「じゃ、後はよろしく。オットー、続きなさい」

双眼鏡のもち手部分とナイフの柄頭にそれぞれついたカラビナフ

ツクを腰のアタッチメントに取り付けて下げると、ノーマルスーツの手首に仕込まれた時計を合わせてバイザーを降ろす。

そして、呼びかけに対しうわずった声で返事をしてきたオットーを伴い、アヤリはシエルター口に向かった。

きつと外に広がっている、地獄の世界を覚悟しながら。

時刻は1月3日午前10時を回っていた。

年始休日とはいえ、そろそろ誰もが起き出し、街は活気に溢れ始める。それが自然の光景だ。いつもと変わらぬ、普段の日常であれば。

街は静まりかえっていた。人が発する音、声がまったくない。それどころか、人の気配がなかった。

シエルターから出たアヤリは、この世のものとは思えぬ世界をその瞳に焼き付けることとなったのである。

敵の存在を警戒しつつ壁づたいに住宅街に行くアヤリとオットーは、倒れ伏し、絶命している市民の姿をそこかしこで目にする事となった。そこに差別などなく、老若男女全ての者に等しい死が訪れていた。

街角で、軒先で、商店のなかで、人々は苦悶の表情を浮かべて死んでいる。呼吸中枢を攻撃する神経ガスは、呼吸困難に人を陥らせて殺す。つまり、人間を苦しみ抜かせた後に死に至らしめるのだ。遺体のどれも、壮絶な形相をしているのは当然だ。

後ろを歩くオットーは必死に嘔吐を堪えているようで、青い顔をしている。ノーマルスーツを着ている今嘔吐したらどういうことになるか、それだけを支えに何とか頑張っている様が窺えた。

肩越しに彼の様子を確認すると、アヤリは再び視線を前へ向けた。オットーと違って遺体は見慣れているとはいえ、ここまで多くの

市民の遺体を目にすると違う意味で吐き気をもよおしてくる。

はたして、こんな卑劣で残酷で凄惨なことが許されるのだろうか。誰に、彼らの人生を奪い去る権利があるというのだろうか。

答えは分かり切っている。

否、それ意外にありえない。たとえどんなに崇高な目的があろうとも、こんなことは絶対に許されてはならなかった。

あらゆる体液をだらしなく垂れ流したまま息絶えている小さな女の子を、同じく凄惨な姿で絶命している母親の遺体が必死に抱きしめたまま路肩に転がっているのを目にし、このような行いを絶対否定する思いを心底噛みしめる。

はらわたが煮えくり返る思いに駆られながらも、アヤリたちは歩みを止めることなく、中心街方面に向かって住宅街10数ブロックを通り抜けた。そこでさらに凄惨な光景を目にすることとなる。

住宅街の一角、L-4シェルターと同様の体裁でL-3シェルターが設置されていたが、シェルター口は開いたままになっていた。異変に気づいたシェルター近くの住民が殺到し、我先に退避しようとしたがために結局シェルター口を閉じるタイミングを逸し、結果、扉の内外で大勢の住民が折り重なって息絶えることとなったのだ。

コロニーに設置されているシェルターはこれほどの緊急を要し、かつ住民が大挙して押し寄せるという事態に対応できるようには設計されていない。隔壁に穴が開いた際でも、巨大なコロニーには十分な量の大气が充填されているため、ブロック単位で避難するよう行政が指示を出すやり方でも余裕がある。伝染病の発生等の際しても隔離と避難を統制立ててするので、突如として出現した巨大人型機動兵器により化学兵器攻撃がなされたことでシェルターに人々が大量して駆け込む、などという事態はそもそも想定されていないのである。

また、巨大なシェルターのため幾つか出入口があるのだが、道路沿いに面してここからでも見る事ができる隣のシェルター口に人々が押し寄せた形跡はない。

群集心理とでも言うのだろうか。視野が狭くなり、誰もがこの入り口しか目に入らなかったに違いなかった。悪いことが重なるとはこういうことを言うのだろうか。生を求める生物としての防衛本能が悲しくも発揮された光景であり、目を覆わんばかりの惨状だ。

「こんな、こんなことが許されていいのでしょうか」

低く押し殺しているものの、やり場のない怒りのこもった声が背後から投げかけられる。半身だけ振り返ると、あまり我を露わにしないオットーが肩を震わせてうつむいていた。握りしめた拳には痛いほど力が込められている様が窺い知れる。

「住民たちになにか過失があっただんでしょうか。彼らが殺されなければならぬ理由がなにかあったんでしょうか。どうして、こんな」  
青い顔をしながらも、目の前に広がる悲惨な光景に純粋な怒りを感じているオットー。士官としての能力には確かに多少問題はあるが、1人の人間としては至極まともな感情を露わにしていた。

「彼らに罪なんてあるわけない。これは戦闘でも戦争でもない。ただの虐殺だわ」

吐き捨てるように言って、アヤリは足を進めた。

見るに堪えない光景に目を背けたくなるが、シエルター内にはまだ生きている人間がいるかもしれない。敵の接近に備え、オットーを入り口付近に見張りとして残し、彼女は住民たちの亡骸の間を縫ってシエルター内部へと入った。

息を呑んだ。なんと、エアロックにも人々が殺到しており、二重扉は開け放たれたままの状態になっていたのである。これではエアロックが本来の機能を発揮するわけがない。煉獄と安息の地を分け隔てるための希望の城壁は、今や単なる死者の回廊と化していた。

なお一層の落胆がアヤリの心を襲う。焦燥感が湧き上がり、自然と奥歯を強く噛み締めていた。

「えっ？」

死屍累々を見回していた視界の端に、不意に白いものが映り込んだ。慌ててその白いものへと焦点を合わせる。

白いものは折り重なる遺体の隙間から垣間見えた。歩み寄り、一礼して遺体に敬意を払いながら力を込めて軀の数々をどかしていく。アヤリの表情がにわかに驚きのものへと変化した。

下から姿を現したのは一般用の白い構造材で設えられたノーマルスーツ姿の人物だったのである。慌てて助け起こし、その人物の顔を覗き込んだ。

丸い銀縁眼鏡と左目の下の泣きぼくろが印象的な、栗色の髪の若い女性だった。美人ではないが、愛嬌のある優しい顔をしていたのだろう。生前は。

彼女はヘルメットをつけてはいたが、バイザーは上がっていたつまり、顔が暴露していたのである。これまで見てきた犠牲者のなかで唯一ノーマルスーツを着ていることを鑑みると、突如起こった事態にどう対処していいのか理解している人物だったのだろう。それを踏まえると、彼女のバイザーが上がっているのは、群衆に押し潰されたかなにかの拍子で開いてしまったとしか考えられなかった。

「折角ノーマルスーツを着ることができたのに」

無念を訴えかけるかのように大きく目を見開き絶命している女性の顔に手を添えると、その目を閉じてやる。どうか安らかに眠って欲しいという思いを込めて。

陰惨な気持ちになってくる。とはいえ、まだ最後の希望はあった。エアロックを抜け、L-4シエルターと同一の造りをしたスロープを抜けると、シエルター本体の入り口が見えてくる。たとえ外扉もエアロックも駄目でも、シエルター本体の扉さえ閉じられていればまだチャンスはある。わずかな希望を託し、彼女はスロープの先を窺った。

足がはたと止まった。肩を震わせ、瞳を閉じて天井を仰ぎ見る。

三度同じ光景を目にするとは。

眼前に広がる無情。そう、シエルター口、エアロック同様の光景が本体入り口においても行われていたのだから。



シエルター本体の入り口も大きく開け放たれ、周辺には倒れ伏す住民たちの姿。その光景はシエルター内部にも展開されている。これではシエルターとしての役割を果たせない。壊滅状態だった。

深いため息を吐くも、アヤリは気持ちを無理やり切り替え、奥へと足を進めた。念のため内部を確認するのである。

人々が進入したことにより自動的にシエルター機能が作動しているため、通路もシエルター内も照明がついている。もちろんシエルター独自の独立した空調も作動しているのだが、外気が流れ込んでいるし、なにより換気の恩恵を受ける人々は全滅している。

人のために作られた機械が、目的を失ったままだただ動いてる。皮肉な光景だった。

ここまでの状況を鑑みれば、考えるまでもない結果がシエルター内部に展開していた。入り口付近に倒れ付した遺体群以外、人気はまったくない。がらんとしたただ広い空間だけが静かな居住まいを見せている。

生気の失せた無機質な空間には絶望のみがただよい、そこに明るく未来はない。ように感じられた。感じられたのだが、アヤリはそれだけではないなにかが胸に迫るのも感じ受けていた。

なにかしら。胸が、ざわめく。

誰もいないシエルター内部を端から端までゆっくりと見回す。異変はない。ではいったいなぜ。

と、ゆっくりと動いていたアヤリの視線が壁に設えられたあるハッチの前で止まった。シエルターの壁には幾つも倉庫や設備のハッチが設えられており、彼女の視線が向けられているのは避難民用のノーマルスーツが格納されている倉庫のものだった。

間違いない。直感が、胸騒ぎの原因はそのハッチの向こうにあると囁く。アヤリは足早にハッチに駆け寄った。警戒しながら近づき、ハッチの横の壁に背をつけると、壁に設置されたハッチ開閉用の端末を操作する。

入力に応じ、作動音とともにハッチ開放。腰のナイフに手をかけ

つつ慎重になかの気配を窺ったアヤリは、開け放たれたハッチの向こうからかすかな声を耳にした。

胸騒ぎの原因に間違いない。不毛の地となり果てたこの場所に最もそぐわない声。子供のすすりなく声だった。

そつとなかを覗き込むと、ハッチからそう遠くない場所、ノーマルスーツを10体格納しておけるコンテナがはるか奥まで複数列に渡って整然と立ち並ぶ通路に、小さな白い人影が2つ。小さな影がさらに小さな影の肩を抱くようにして身を寄せ合い、互いに身体を震わせながら幼い身体をさらにちぢこませていた。子供用のノーマルスーツを着込んだその体格から、2人ともまだ3、4歳程度であることが窺えた。

どうして、こんな子供がこんなところに。

それも、このタイミングで、だ。

コロニー住民ならば、防災訓練の一環でノーマルスーツの着用方法は必須として覚えているはずで、それは小さな子供とて例外ではない。命を守る手段なのだから当然である。とはいえ、大人ですら満足に対応できずに死んでいる現状下、機能していないとはいえシエルターに退避した上、問題なくノーマルスーツを着用できているというのはいくらなんでもできすぎだ。

そこで、もしか、と脳裏に浮かぶこと。アヤリはそれを確かめるべく、彼らにゆっくりと近づいた。

「泣かないで。もう、大丈夫だから」

努めて優しい声を投げかけつつ、彼らの側へと歩み寄る。すると、連れの肩を抱きしめている方のノーマルスーツがこちらを見上げた。女の子だった。年の頃は4、5歳ぐらいだろう。愛らしい面立ちを涙で濡らしながらも、どこか毅然とした雰囲気漂わせている

そんな印象を持たせる少女だ。

一方、彼女に肩を抱かれている方は、彼女より年下に見える男の子だった。こちらは年相応の感情を露わにし、泣きじゃくっている。2人の様子を見て、アヤリはすぐに気づいた。彼らは姉弟である

うということに。なぜなら、幼少期の自分とリクトの姿が、今の彼らにごく自然に投影できたのだから。幼い頃は気弱だったリクトをどんな時でも守り通した当時の自分が、姿を変えて今、目の前にいる。

「こんにちは。お姉ちゃんはね、アヤリって言うの。お姉ちゃんは兵隊さんで、貴女たちを助けにきたのよ」

しゃがみ込んで少女の目線にあわせると、警戒させないようごく自然な微笑みを浮かべながら声をかける。

すると、少女は頭を振って拒絶の意思表示をした。

「どうしたの？」

「駄目。だってママがここで待ってなさいって」

なるほど、もつともな理由だ。しかし、少女の言葉が、もしやと抱いた仮定を確信へと昇華させる。

意を決し、アヤリは自分の左目下辺りを指さしながら少女へと問いかけた。

「ママは銀色の丸い眼鏡をかけていて、ここにほくろがある人かな？」

とたん、少女のはしばみ色の瞳が大きく見開かれる。同時にこぼれる、

「ママを知ってるの!？」

という不安と歓喜がないまぜになった声。

間違いない。この2人は、シエルター口で見たあのノーマルスーツの女性の子供だ。再び天井を仰ぎたい気分になった。

「ねえ、ママはどうしたの？ どこにいるの？ どうして戻ってきてくれないの？」

涙を頬に貼り付けた少女は、こちらに現実を逃避する時間を与えてくれなかった。小さな手をこちらの手に乗せ、すぐるような視線を送ってくる。

つぶらな瞳は、嘘を見逃さない光を湛えていた。アヤリは小さく一息つき、思い切って少女に向き直った。

「お名前は？」

短く、問う。

「エナ」

こちらも一言、返してくる。

「エナちゃんか。いいお名前ね」

言いながら、アヤリは少女の肩にそつと手のひらを置き、真つ直ぐに彼女の面持ちを見据えた。

「ね、エナちゃん、よく聞いて。ママはね、もう戻ってこれなくなっちゃったの。ママは遠いところに旅立っちゃったのよ」

果たしてこの年の子供がその意味するところを正確に理解するのかどうかはわからない。だが、さしものアヤリも、ストレートに彼女の母の死を告げる勇氣はなかった。ところが。

「ママ、死んじゃったんだ」

驚くべき一言が小さな口からこぼれる。アヤリは目を大きく見開き、絶句した。

「ママ、死んじゃったんだね。そうなんだね」

重ねて言うエナ。まなじりには大粒の涙が生まれていた。

まだ5歳にも満たないような少女だから、と軽んじた自分をアヤリは恥じた。彼女は幼くともちゃんと死というものがどういうことか、理解していたのだ。

ならば、もはや言葉はいらなかった。アヤリは沈痛な表情で静かにエナの問いにうなづいた。

とたん、少女の顔が悲痛にゆがみかける。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。ママ、ママは」

エナの感情の爆発は唐突に入った横槍に押しとどめられた。まぶたをすっかり泣きはらし、ヘルメットのバイザーを水蒸気で白くした彼女の弟がひとまず泣き止み、姉とアヤリのやりとりのなかにあった『ママ』という言葉に反応したのである。

「ママが帰ってきたの？ ねえ、お姉ちゃん」

弟の言葉に涕泣をこらえさせられる形となった少女だが、言葉を

返すことまではさすがにできなかったようだ。エナは戸惑い、視線を泳がせ、動揺していた。

考えるまでもなく姉としての責任感がエナの感情の爆発、年相応の幼さを封じてきたに違いなかった。だからこそ、母の死という最大の悲劇を知っても、自分よりも弱い存在が同じことを知り、悲しみに打ちひしがれてしまうことを阻止したいという思いが働いているのだろう。弟にかける最良の言葉を搜している様が窺えた。

いじらしかった。アヤリは腕を回し、弟ごとエナを抱きしめた。「エナちゃん、貴女偉いわ。自分もとっても悲しいのに、弟のことをまだ考えてる。優しくて最高のお姉さんね」

しっかりと胸に抱きながら少女の耳元に囁きかける。かつての自身を思い出しながら。

すると、アヤリの優しさにそれまで堪えていたものを押しとどめておけなくなったのか、エナはとうとう胸のうちを曝け出した。火がついたように泣いた。声を上げて、涙を流していた。それに触発されたのか、あるいは姉の悲しみの原因を直感的に悟ったのか、一端は落ち着いた弟もアヤリの腕のなかで再び泣きじゃくり出す。

幼い姉弟の慟哭が胸に迫り、苦しかった。

こんな思いはもうたくさんだ。

数え切れない人々が死に、たくさんの思い、人生が失われていった。

だが、もうこれ以上無垢な市民たちを死なせたくない。

既に犠牲となってしまうた人々の死を無駄にしないためにも、エナたちや、L-4シエルターに避難した生き残りの住民たちを絶対に守りきる。思いは、不動となった。

その時だ。

犠牲となった人々の死を無駄にしない。この言葉が彼女の心を揺り動かし、胸の中に一筋の閃光が煌いた。

覚醒というものはいつも突然やってくるもの。鮮明となった真実に、彼女は大きく目を見開く。

そうだ、そうだったんだ。私はいつたい、今までどうして忘れてしまっていたんだろう。

リクトがこの世を去ってから、その事実には嘆息、凋落した自分だが、忘れてはならないことを忘れていた。いや、悲しみに逃げ込み、直視しようとしてこなかった。

簡単なことだ。

リクトはなぜ死んだ？ 民間人を救助するという姉の役目に理解を示したからこそ、彼は他人を生かすために自らの命を失うことになった。アヤリを信じて死んでいったのである。

彼が殉じてくれた崇高な役目 人々のために働くという職責を全うすることこそが、リクトの死を無駄にせず彼の御霊に応える唯一の方法なのではないか。すなわち、腕のなかの小さな命を始めとした危急に貧している避難住民を、ひいては望まれぬまま始まってしまったこの戦争によって、図らずも被害を受けることになる弱い存在たちを守り助け、戦うことこそが彼女の使命なのである。

暗雲が満ちていたアヤリの心の底に射し込んだ一条の光は、またたくまに彼女の胸の内を光りで照らしつくした。

『姉さんが助けに来てくれたから、僕もみんなも無事さ』 脳裏に響いたあの声は、きつとリクトが、いつまでも迷い煩っている出来ないな姉を叱咤する思いで伝えてくれたに違いない。

自分という存在がなぜ今も生きながらえているか。それが、ようやくわかった。

必ず、守るから。それが私の使命。そうだよ、リツくん。

悲しみに打ちひしがれている幼い姉弟を優しく抱きながら、アヤリは迷いを断ち切り、死んでいった弟に確かめるように決意を固めるのだった。

親族の死ほど胸を引き裂かれる思いになるべきことはない。ヘルメットを取り素顔になった母親の遺体にすがって泣いている幼い姉弟を見ていると、自分も母親が病死した際のできことや、弟が還らなかったできごとを思い出してしまい、締めつけられるように胸が苦しくなってくる。そして、本当にこれでよかったのかという思いも脳裏を過ぎるのだ。

エナ姉弟を保護したものの、彼らを救助してL・4シエルターへと転送するにはシエルター口を通らねばならず、そこには母親の遺体があった。

当初は彼女たちを抱き上げ、ろくに周囲を見せないままシエルターから脱し、L・4シエルターへと向かおうと算段した。できることなら母親の遺体を見せない方がいいと思ったからである。

しかし、その考えを敏感に察したのか、エナが母の遺体に会いたいと言ってきたのだ。とはいえ、会えば悲しみが募るだけだ。アヤリは説得を試みようとしたが、涙に濡れてはいるもののエナの瞳には有無を言わさぬ固い思いが込められていることに気づき、結局なにも言えなかったのである。

考えてみればこうなってしまった以上、凄惨で悲しい体験から逃れることはたとえまだ未熟な彼女たちとて逃れる術はない。母の無惨な姿はおろか、ペルナローゼの犠牲者たちを目にする機会はこれからいくらかでも発生するのだ。アヤリがどんなに2人の目から遠ざけようとしても。

であるなら、いつそ母親との今生の別れを遂げさせてやる方がいい。アヤリはそう結論づけ、2人を伴いエアロックまでやってきたのである。

2人は母の遺体に対面するなりすがりついてむせび泣いた。それはあまりに哀れで、見ていられない姿だった。それでも、彼女たち

にとって、母との最後の対面は生涯決して後悔することはないだろう。

時間はあまりなかったが、しばし母とのひとときを家族だけで過ごさせてやろうと、アヤリはエアロックから出てシエルター入り口へと向かった。入り口付近には、シエルターのハッチの影にしゃがみ込んで身を潜めつつ外を警戒しているオットーがいる。彼のもとへと歩み寄り、彼のヘルメットをポンと軽く叩いて自らも傍らしゃがみ込んだ。

「オットー、周囲に敵の気配は？」

「今のところは。それにしても不憫でなりません、あの子たちが」

言いながら、半身だけ身体をシエルター内に向け、エアロック内で依然涕泣しているエナたちに憐憫の眼差しを送っていた。2人を連れてエアロック口へとやってきた時こそ絶望のなかの奇跡に気色ばんだものの、追って事情を知るとたちまち肩を落とした。無理もない。奇跡の裏には大きな代償が隠れていたのだから。不憫でならないという台詞もこぼれるというものだ。

「そうね。でも、あの子たちは悲しみを乗り越えて必ず生き残らなくてはならないわ。あの子たちを命がけで守った母親の死を無駄にしてはならないもの」

悲嘆にくれることなら生き残った後にいくらでもできる。悲しいこと、辛いこと、それも全て、生きていてこそ味わうことができるのだ。

「そのためには、私たちも頑張らないと」

オットーの肩に手をかけて立ち上がりつつ、腕時計を見る。出立してから40分が経過しており、約束の時間まで残り少なかった。

とはいえ、目的の偵察行動は達成したとは言い難い。実際、収穫と言えば1・3シエルターが生存者2名を残して全滅していることを確認し、当の生存者を保護したことだけだ。残りの時間、少しでも情報を手に入れたかった。アヤリは、エナたちをオットーに任せることにした。



「こっちは落ち込んでいる暇なんてないわよ。オットーは2人を連れてL-4シエルターに戻って。私は高所から長距離偵察を試してみ」

言いながらなにげなく空を見上げたアヤリの言葉がとぎれた。次にその小さな口からこぼれたのは、それまでとはまったく異なる、ともすれば現在置かれた状況とはあまり関係のないものだった。

「今日の天候スケジュールは、確か快晴だったはずよね」

唐突に天候のことを聞かれ、とまどうオットー。それでも、そのはずです、と返してきた彼に、そう、と一言返した。

アヤリが見上げたその先には、白い雲が描き出すライン。空、つまりコロニー中心部に帯状の雲が大量に発生し、丁度コロニーの港側から反対側まで長大な群列となつて伸びていたのである。

L-4シエルターを出る時にも雲は出ていたが、霧のような状態だったため特に気にすることもなかった。しかし、今はどうだ。曇りの日だとしても、ここまで大規模な雲の発生はスケジュール通りの日でも見たことはない。明らかに異常だった。

天候はコンピューターにより管理されており、時折ランダムに変更されるプログラムが動いているため、スケジュールにない変動をすることもある。しかし、快晴からここまで大量の雲が発生することなどこれまでにあつたらうか。

「どうして急にこんな」

普段ならばありえない現象である。ならば、きつかけとなつた要因があるはずだ。しばし考え込み

「そうか、減圧だ。コロニーの気圧が彼らの侵入で急激に低下したから、飽和水蒸気量が低下してこんなに雲が発生したんだわ」

となると、コロニーの大気循環設備にも異常が発生している可能性が高い。通常ならば急激な減圧という事態に遭遇しても、コロニー内大気を管理するシステムがそれを察知し、できる限り通常の数値へ戻すべく修正をかけるはずである。それが機能していない。

「気象システムの故障なんでしょうか」

「それはいくらなんでもタイミングがよすぎる。今置かれている状況から見て、敵が港にあるコロニー公社ペルナローゼ・システム統括センターを占拠し、気象システムをダウンないし破壊したと考えると違いなさそうね」

コロニーの全て機能はこのセンターによって集中管理維持されているため、センターを占拠するということはコロニー全体を占拠するに等しい。ゆえに、このコロニーを奪取するならセンターの占拠は必要不可欠であり、彼らがそれを為すのも当然のことだ。

全システムを把握してしまえば、コロニー住民は為す術がない。電気、ガス、水道等生活インフラに関することから、情報や移動並びに通信手段までも奪われる。思えばマチアスとの通信が切れたのは、その時点でコロニーのコントロールを奪われたからに他ならなかった。

当然と言えば当然なのだが、やることが徹底している。言わばコロニーにおける『神の力』を手に入れたにも等しく、万が一ガス攻撃から逃げ延びた住民がいたとしても、敵はそれを捕捉・殲滅する術を持つことになるのだ。

捕捉する術？

思案したことを胸中で反芻したアヤリは、訝しげに眉間に皺を寄せ、そして、当たり前のことに今さら気づいた。とたん、彼女の顔面から血の気が引き、漆黒の双眸が大きく見開かれる。

「Shit! どうしてこんな初歩的なことに今まで気づかなかったの、私は!」

叫びたいのをグツと堪え、押し殺した声で自らを罵るアヤリ。それはそうだ。ともすれば致命的な失態になるのだから。

「ど、どうしたんですか課長」

上司の急変に驚いたオットーが、立ち上がってこちらを覗き込んできく。これにアヤリは、ノーマルスーツのためつかめない胸倉の代わりに彼の首根っこに手を回し、思い切り引き寄せた。勢い余ってアヤリのヘルメットのバイザーにオットーのそれが当たり、止ま

る。必然、バイザーとバイザーがくつつく至近距離で2人は見合う形となった。

予期しない接近にどきまぎしているオットー。だが、すぐに困惑したものへと変化する。なぜなら、アヤリが苦虫を噛み潰したような表情をしていたからだ。

「いい、オットー。統括センターを占拠するってことは、コロニーの全ての機能を掌握すること。これはわかるわね」

焦りのこもった射るような視線を向けながら問うと、彼は慌てて首を縦に振った。

「ということは、ほんの一角とはいえ、まぎれもなくコロニー構造に組み込まれている各シェルターの状況を把握することも可能ってこと。それがどういうことか、わかる？」

とたん、戸惑っていたオットーの顔は、見る間のうちにこの世の終末を見たかのごとく変形した。

「え、L-4シェルターに住民が避難していることも敵に筒抜けってことですか!？」

「そうなっているもおかしくないってこと!」

己の浅薄さを呪いつつ、アヤリはオットーから引き剥がすように身体を離して立ち上がり、急ぎエナたちのもとへと向かう。

「課長!？」

「来て。弟の方は任せたわ」

オットーに背を向けたまま命じ、彼女は母の遺体にすがっている姉弟のもとへ駆け寄った。

「エナちゃんごめん。もう行かなきゃならないの」

問答無用で少女の身体を抱き上げる。突然母親の遺体から引き離されたエナは、手を伸ばして身をよじった。

「ママの、ママの!」

声を上げるエナに、最初は母との別離に抵抗しているのだと思っただが、懸命に手を伸ばしている様から違う意図を読み取った。彼女が伸ばした指先には、母親の首もとに銀色のネックレスがノーマル

スーツからこぼれていたのだから。

エナを抱き上げたまま、アヤリは急ぎ遺体からそのネックレスを外し、彼女の手のひらへと握り込ませる。

「ママの形見、ね。なくしちゃ駄目よ」

形見という言葉をこの幼い娘が知っているかどうかはわからないが、彼女が母親の身につけていたなにかを今際の別れにあたり本能的に欲したのは間違いない。握り締めたエナの拳を手のひらで優しく包んでやると、こちらを見上げた少女は唇を真一文字に閉じ、うなづいていた。

そこへ、弟を抱き上げたオットーが。

「課長、どちらへ」

「決まっている。L-4シェルターに戻るのよ。敵に察知されているかどうかはあくまで可能性の問題に過ぎない。諦めるのはまだ早いわ」

敵の狙いがコロニー奪取並びにコロニー落としてある以上、そこに居留している住民の抹殺は倫理的な是非はともかく、確かに至極合理的なことだ。自分がもし、目的のためには手段を選ばない軍人で、あらゆる手を講じてコロニーを保全したまま住民を処理する任務を命じられたとすれば、迷わず化学兵器を使用したことだろう。

なぜなら、下手に住民を残しておくと作戦遂行上障害になる可能性があるからだ。住民は軍人ではないが、抵抗意識を持てばなにをするかわからない。ましてやそれが自分の生き死に関わってくることならばなおのことだ。

とすれば、徹底して住民を殺戮するのは自明の理で、化学兵器で処理できなかった住民を掃討するはずである。当然、シェルターなどは重点的にチェックするに違いない。

だからといってシェルターに住民を避難させなければ第一撃の化学兵器攻撃で全滅していた。避難させたこと自体は決して間違いではない。問題なのはその後どう対応するかだった。

救いになるかもしれないのはコロニーに点在するシェルターの数

と、なにより敵がシステムをダウンさせたこと自体だった。

1千万をゆうに超える住民を避難させるために用意されたシエルターは数百を数える。敵の規模は不明だが、これだけの数を確認するには統括センターのシステムを使用したとしてもそう易々とできることではない。ましてやシエルター以外の場所まで検索をかけるとするならなおのことだ。

また、様々な生活インフラの機能が停止していることから集中コントロールの元からシステムが落とされたはずだ。それが逆にこちらにとっては有利に働く。根本からシステムが停止することである。は、セキュリティコントロールも失われているということである。つまり、各シエルター等の状況をチェックする術までもなくしているに他ならない。L-4シエルターへと敵の手が及んでいない可能性を考えるのは、まさにそれらの点に依る。

もつとも、これらの仮定が事実だとしても時間的猶予はそれほどないはずだ。

敵がシステムをダウンさせたのは住民の動きを封じるためである。その住民も大多数がガスにより死亡している。頃合いを見計らってシステムを復旧させ、残存住民の掃討に一部セキュリティを活用するのは当然のことだ。そうなれば、シエルター数を鑑みるとチェックは易くはないとはいえ、時間を経るとともに確実にL-4シエルターを捕捉される確率が上昇していく。

とにかく今は一刻も早くL-4シエルターに戻ることに。それが最優先だった。

エナを抱えたままシエルターのハッチを潜り、警戒しながら外界へと出る。シエルター前の通りには、見渡す限り敵の姿はない。これならば大丈夫だ。ところが、不意に胸に迫った嫌な感覚が彼女の足を止めさせた。

「どうしたんですか？」

アヤリに続いていたオットーは、突然足を止めた彼女の背中に抱き上げた弟ごとぶつかりそうになったのか、慌てた声を上げていた。

驚く彼を余所に、この感覚がなにかの警鐘であることをこれまでの経験上瞬時に察した。そのまま後ずさりし、オットーにも促して再びシエルター内へと退いたアヤリは、意識を集中して耳を澄ます。今はわずかでも身を持ち出して外を窺うことはできない。最悪の事態を想定すると、ヘルメットをかぶっている状態では隠密性など皆無だからだ。

聞き耳を立てるしか方法はなかったが、彼女は自身の耳に託した。わずかに、自然のものではない物音が聞こえたような気がする。だいたい、自然のものだとしても、それを生み出す存在は人間にかかわらず全てが失われているはずだ。物音をたてるものなど今の状況ではありえない。だとすれば、アヤリは胸に抱いたエナを降ろし、オットーへと引き渡した。

「2人を連れて奥へ。ノーマルスーツ保管庫に隠れなさい」

「いったいなにがあったというんです。まさか」

「いいから、早くさがれ」

説明は後だ。今は子供2人を安全な場所に避難させることが先決だった。困惑しているオットーを問答無用でシエルター奥へと追いやると、アヤリはしゃがみこんでヘルメットの方耳側を床につけ、目を閉じた。視神経にかかる注意を聴覚へと傾け、最大限研ぎ澄ませるためだ。

心を無にし、聴覚を大地を伝って響いてくる目的の音だけを拾うために使う。

穏やかな水面のようになった心。そこに、ほんの小さな一粒の石が投げ込まれた。たちまち水面には同心円状の波紋が広がり、大きく波及していく。

間違いなかった。刻一刻と近づいてくる、モーターの振動音とアスファルトの上をタイヤが走行する音。

「エレカだ」

一粒の石。それはアヤリの耳に届いたエレカ（電気自動車）の走行音だった。コロニーという閉鎖空間においては排気ガスを撒き

散らすガソリン車は厳禁であり、宇宙移民草創期からコロニー内の移動は全てエレカによって行われている。

文字通りエレカは電気駆動のため、走行時に発する音はガソリン駆動車に比べて極めて小さい。外に出た時、その音を耳にすることができずとも不思議ではない。なにより、遠くから走行してきたとなれば、外に出た時点ではまだ可聴範囲にすらいなかったことだろう。

しかし、今は違う。もはやすぐそこまで音源は接近してきおり、コンクリートの床を介さずともはっきりと確認できるようになっていた。彼らがいったい何者なのか。その目的はなんなのか。それが重要だ。

誰かしらが接近していることを確認できた以上、自分もこんなところにおいては危険が高い。相手が敵だった場合、ここでは対処しきれなかった。アヤリは物音を立てないよう立ち上がると、自身もエアロックを抜けてシェルター内へと後退した。

最終ハッチを抜け、シェルター本体の壁際に身を潜ませる。オットーらの姿はシェルター内にないたため、指示通りノーマルスーツ保管庫に隠れたに違いなかった。

息を潜めて彼らの動向を窺う。もし敵であればこのシェルターを調査するだろう、生存者を確認するために。ただ、ハッチやエアロツクの惨状を見て、全滅したと判断し、その場を後にする可能性もある。その確率はあまり高くないと思われたが、シェルター内まで入ってこられた場合、各倉庫、それこそノーマルスーツ保管庫も調べられる算段は高く、そうなるここにいる自分は当然のことながら避難しているオットーたちまでもが危ない。

彼らが本当に敵であり、仮にここまで侵入してきた場合、取るべき手段は1つしかなかった。

足音とともに声が聞こえてきた。静まり返ったシェルターへの通路が伝声管のような役割を果たし、よく響いてくる。アヤリの淡い期待は否定された。

意を決し、彼女はいつでも柔軟に対応できるよう腰を落とし、アタッチメントから下げられた小型ナイフへと手をかけた。

すると、腰を落としたことで視点が下がったこともあり、最終ハッチ付近に横たわる幾つもの遺体が違う角度から網膜に焼きついてきた。彼女の瞳に映る、ある遺体の側に転がった手鏡。床に落ちたなにかに載っているのか、傾いて転がっている。近づいてくる足音とともに、その鏡面に一瞬だけ映りこんだ影を彼女は見逃さなかった。

と、足音が急に止む。おそらく、セオリー通り最終ハッチに入る前にハッチ両脇に2人が分かれ、タイミングを合わせて銃を構え突入してくるつもりだ。

アヤリはナイフを抜いた。片膝をつき、腰をより一層落として相手の視界から極力身を隠しつつその時を待つ。迷うことはない。鏡に映った相手は、間違いなく『敵』だった。

刹那、予想通り小銃を構えた敵が勢いよく飛び込んできた。同時にアヤリも反応。先に突入してきた敵の横合いから背中へと飛びかかる。首筋に左腕をからめ、後ろへと引き倒す。その際、捕捉した相手が動揺して反射的に小銃の引き金に指をかけているのを見逃さなかった。

ナイフを持ったまま回した右腕で瞬時に小銃を持つ敵の腕を払い、その銃口を続けて突入してきた仲間へと向けさせたのだ。瞬間、立て続けに乾いた発砲音が響き渡ったかと思うと、仲間の銃弾を全身に浴びたもう1人の敵が声もなく床へと崩れ折れた。敵にとっては悪夢の、アヤリにとっては絶妙なタイミングでの見事な同士討ちだった。

「動くな」

仲間を殺して動揺している敵の首を締め上げたまま、アヤリはナイフを喉元のヘルメットとノーマルスーツの接合部に押し当てた。

「強化繊維で守られているノーマルスーツの他の箇所ならこんな作業ナイフ程度では貫けないが、間接や接合部は別だ。特にヘルメッ



トとの繋ぎ目は」

冷徹に言い放ちながら、彼女は逆手に持ったナイフを接合部にめり込ませる。

「や、止める！」

とたん、敵は情けない悲鳴を上げて身を竦ませたが知ったことではない。こちらにはまず確認せねばならないことがあった。

「貴様たちはこの周辺を搜索しに来たんだな？ 隣のL-4シエルターには、貴様たちとは別の兵士が仕向けられているのか、どうか！」

切っ先をさらに突き立てた。もちろんまだ接合部は切っ先を徹していないが、接合部を通して首筋に十分過ぎるほど圧力をかけている。いつ突き破られやしないかという恐怖が相手を襲っているのは間違いなく、敵は泡食ったように叫んだ。

「と、隣のシエルターの搜索も俺たちが担当している！」

「エレカに乗ってきたのは貴様たち2人だけか！？」

「そうだ！ だ、だから止めてくれ！」

その悲鳴は決して演技ではない。そこでようやく、そのまま突き入れんばかりに押し当てたナイフをわずかに引く。

そうまでして聞き出したのも当然だ。もし彼ら以外にも既にこの辺りの搜索に動いている人員がいたとしたら、L-4シエルターに避難している住民を発見されてしまう。そうなれば統括センターがどうのセキュリティこうのという話ではない。

ともすれば全てが一瞬にして無に帰してもおかしくはなかったが、今終わってしまう事態は避けられたようだ。表情にこそ出さなかったが、アヤリは心のなかで小さく安堵のため息を吐いていた。

「では、銃を捨てて、両手を頭の上にゆっくりと。少しでも妙な動きをしたら」

言って、再び喉元へとナイフを押しつける。先ほどの威嚇がよほど効いていたのか、敵はあっさり小銃を投げ捨て、ゆっくり諸手をヘルメットの上で組んだ。

「次は床にうつ伏せになれ。足を開いて、ゆっくりだ。ナイフが貴様の首筋を狙っていることを忘れるな」

威嚇する姿勢を崩さず促す。捕獲した敵の練度はそれほど高くはない。敵に後ろを取られたからといって闇雲に小銃を撃ち放ってしまふ事実がそれを教えてくれる。油断さえしなければどうという相手ではない。もっとも、敵にはもはや抵抗する気はないように、大人しく片膝をつき、続けてもう片方も膝をつく、上体を屈めて床へと腹ばいになった。もちろん足は足の字に開かれている。

アヤリは喉元からうなじ辺りにナイフの切っ先の位置を変えつつ、敵の右足へと手を伸ばし、横すねに固定されていたホルスターから拳銃を抜き出した。銃床をちらと覗き見、弾倉が装填されていることを確認すると、そこでようやくナイフを首筋から離す。もちろん代わりに銃口が背中を狙っているので結局状況は変わらない。

「重ねて言うが、少しでもおかしな挙動をすれば即刻射殺する」

ナイフを納めつつ、銃口を敵の背中に合わせたまま、相手の頭の方へと移る。その際、投げ捨てられていた小銃を拾い上げ、シヨルダーストラップで肩から下げた。

敵を完全に無力化したところで、あらためて相手の頭から足先までを見る。銃も、小銃も、そして身につけた特徴あるダークグリーンノーマルスーツも全てジオンのものだった。確信を抱いていたとはいえあくまで仮定にすぎなかった敵の正体は、この時確定へと変わったのである。ついにジオンが地球連邦との開戦に踏み切った。その事実を受け入れなければならなかった。

突きつけられた核心に唇を噛みたい思いにかられつつも、アヤリはこの機会を有効に活用することを忘れない。本来ならば一刻も早くL-4シエルターに戻るべきなのだが、このジオン兵を連れての迅速行動などできるはずがないし、そもそも捕虜など持つ余裕などない。また、途中で反抗されたらそれこそ無駄なタイムロスを招くだけだ。

とはいえ、目の前に情報源がある状況を利用しない手はない。偵

察行に割いた時間を無駄にしてはならなかった。ならば、早急に情報聞き出し、4シエルターに撤収する。それが彼女の思い描いた筋道だった。

「こちらには時間がない。手早く質問に答えてもらおう。貴様の所属、姓名を名乗れ」

手始めに確認するこれらは、相手がどの階層に位置し、どれだけの情報を手にしているかいい指針となる。もちろん、先方が虚言を弄する可能性はあるが、階級に関しては首筋に階級章があるはずだ。厳密にジオンの階級章と階級をリンクして覚えてはいなかったが、おおよそはわかるつもりだ。また、氏名などはノーマルスーツの胸元に張りつけているはずで、いざとなれば立たせて確認するだけだ。なにより、この状況下で相手が嘘をつく余裕があるとも思えない。よほどの訓練を受けた者でもない限り、背後から銃で狙われている状況下でまともな神経を保てるはずがないのだから。その点を見越しつつ、泡食っているジオン兵に対し、

「時間がないと言った」

と、ことさら声を低くし、脅しをかけた。さらに相手を追い詰め、逃げ道を断って全てを話さねばならない状況に陥らせるために。その甲斐あってか、先方は腹をくくったようだった。

「じ、自分はジオン公国宇宙攻撃軍第二揚陸大隊旗下、リンド中隊所属のドリトル・ケージン伍長、です」

「揚陸大隊？ 海兵隊ではないのか？」

「か、海兵はまた別にあつて。じ、自分らの揚陸大隊は、本作戦に併せて機械化歩兵連隊から派生して新たに組織されたが、部隊なんだ」

新規に急造された揚陸部隊。なるほど、それならば合点がいくというものだ。

海兵隊は敵陣を強襲して橋頭堡を確保する尖兵であり、侵攻の初期段階で大きな力を発揮するスペシャリストだ。今回の開戦にあたり、ジオンも海兵隊を駆使しているに違いないが、出会い頭のあの

有様を見せつけられるととても精強な海兵隊に見えなかった。

とはいえ、一般部隊から急遽かき集められた揚陸部隊ならば説明がつくというものだ。もちろん、兵士なのだから当然訓練は受けているだろうが、このような市街戦とも言える状況下で満足に戦闘を行える訓練まではなされていないはずである。

もともと、一般市民がその人口のほぼ全てを占めているコロニー内部で、しかも化学兵器によって無力化されている現状ならば、この程度兵士で構成される部隊でも十分役割を果たせるに違いない。人員には限りがあるもので、海兵隊を始めとする精鋭はもっと重要な領域へと投入するはずなのだから。

「よろしいケージン伍長。では、話して貰おうか。貴様たちが計画した、作戦の全容を」

正直、伍長クラスのこの兵士がどこまで情報として与えられているかは不明瞭だ。しかし、得られるものが少しでもあるのなら、その可能性にかける意義はあった。

捕らわれのジオン兵はおずおずと自身が知る事実を語り出す。その内訳は、かねてから想像していたことからそれほど遠く離れていない内容だった。

ジオン公国は、地球連邦がバルド政策という経済制裁を武器に仕掛けてくる覇権主義を打ち砕き、真の意味でジオンの民が自主独立するための独立戦争を決定。

この崇高な独立戦争を戦い抜くため、最初期に連邦側のコロニーを打倒すべく、本日午前7時20分に行われた宣戦布告のわずか3秒後、ジオン艦隊はサイド1、2、4の各コロニーへ攻撃を開始したという。ジオン独立戦争の意義はスペースノイドの自治権確立ではあるが、同じ志を持つ人々は既にサイド3へと移民したとみなし、他のコロニーはあくまで連邦政府の配下にあるアースノイドとしてこれを打破する結論に帰結したからとのことだった。

「崇高な独立戦争　面白い御旗を掲げてくれるな。いったい、どちらが覇権主義か」

舌打ちするアヤリ。連邦政府がスペースノイドを軽んじていたことは事実であり、バルド政策にそういった趣旨が含まれていたこともまた事実である。

しかし、それがすなわち覇権主義と断ずることはできない。バルド政策が発動されたのは、そもそも連邦の一地方自治体にすぎなかったサイド3が当時共和国として強行独立したからだ。これに対し、制裁を構成している要件はともかく手順として経済制裁を選ぶのは、国益の保護と他の自治体への牽制のためにも本国たる連邦政府として必要なことではあった。即武力行使という強行手段を用いなかったのは、腐っても民主国家の体を為している連邦政府ならではのが、こうなるとそれがはたして正しかったのか間違っていたのかはもはや霧のなかである。

「なるほど、サイド3以外のコロニーを敵性集団とみなし攻撃する

これはわかった。だが、それが貴様たちの目的なのか？ コロ

ニーを撃破して、それで連邦を降伏させたとしても？」

「そ、それは」

観念したはずの伍長は口ごもった。これまで彼が口にした内容は、実質既に終わったことである。ある意味、敵に漏らしたからといってどうということではない。だが、これに続く内容はこれから起こることであり、それこそ軍機、軍事機密に抵触する部分に他ならない。銃口を突きつけられていたとしても、軍人ならば軍機に抵触することがどういうことになるかはよくわかつているはずで、いざ口にしようとするれば躊躇もしよう。

だとしても、それははいつくばっているこの伍長の事情だ。

「先ほども言ったが、こちらには時間がない」

冷徹な声で銃を構え直すアヤリ。その際、銃ならではの軽い金属音が響き、敵にあらためて銃口が狙っている様を想起させる。彼が身を強ばらせたことからその効果が窺い知れた。

「軍法会議にかけられたとしても、敵から拷問を受けて軍機を漏らしたという理由なら情状酌量の余地を考慮してくれるだろう。自軍

の寛容を信じ急ぎ知る限りを話してこの場を生き延びるか、それとも自軍の軍律に恐怖して潔くここで生涯を閉じるか、どちらだ」

有無を言わさぬ選択肢。ドリトル・ケージン伍長はしばし悩んだ後アヤリの脅迫に屈し、やがて今度こそ本当に白旗を揚げた。

真実を耳にしても、アヤリはもはや驚くことはなかった。わずかに眉間に皺を寄せただけだ。

ジオンがコロニーを攻撃したのは、純粹に連邦側の領域を蹂躪するのと、そのことにより連邦に心理的打撃を与えることが目的ではあったが、真の目的にとってそれらは手段に過ぎなかった。彼らが宇宙における連邦側の純軍事的施設たるルナツーを狙わず、あえてコロニーを狙ったのはやはりコロニーそのものを手に入れるためだったのだ。

なぜか？ もはや考えるまでもない。

戦略上最大の要所・地球連邦軍総本部ジャブロー。ここにコロニーを質量兵器としてぶつける。やはりそれが、ジオンの真の狙いだったのである。

彼らはサイド2のコロニーにその質量兵器たる白羽の矢を立てた。保険も兼ねて幾つかのコロニーを保全し、それ以外は核攻撃によって壊滅させる。また、保全したコロニーも住民らによる不測の事態を想定し、化学兵器によって住民のみを抹殺する。まさに、アヤリが思案した通りの作戦が組まれていたのだった。

化学兵器攻撃が仕掛けられたのはこのサイドで3基。アイランドトスカリア、イフィツシュ、そしてペルナローゼだという。

3基のコロニーのなかで、要となる第一目標は8バンチのアイランドイフィツシュ。このイフィツシュを使用できなかった時、トスカリアないしペルナローゼが使用されるということだった。

重心を安定させるために3枚のミラーを全て切除した後、コロニーには核パルスエンジンが装着され、点火。月の重力を利用したスイングバイ飛行航路を取った後、一路地球へ。目標のジャブローを灰燼に帰すために。

この一連の作戦に与えられた名称は『ブリティッシュ』だということ。かつての大航海時代に世界へ覇を唱え、『陽の沈まない国』とまで謳われた大英帝国が、その後植民地の大多数を失ったことで凋落の一途をたどった結末を、地球連邦に当てつけた皮肉だろう。

作戦に投入された戦力は、ジオンが要する総兵力の8割以上。そして、『モビルスーツ（MS）』と呼ばれるあの人型機動兵器も多数投入されているとのことだった。

核兵器も使用できる彼のMSが次々とコロニーを沈め、さらに化学兵器をまき散らし、驚くべきことはそのまま核パルスエンジン取り付け作業にも従事させられるという。考えるまでもなく、あの手の手合いは工作機械が発展して兵器になったものなので、それぐらいのことはできて当たり前といえば当たり前だが、戦闘から工作まで多目的行動を可能にした万能兵器が実際に出現した現実を突きつけられると、いかに革命的な兵器をジオンが開発したかを思い知らされる。

宣戦布告後、サイド2に殺到したジオン艦隊はMSを各コロニーに進ませ、各個核攻撃を開始。一方、保全目標の1つたるこのペルナローゼにはムサイ級軽巡洋艦2隻が仕向けられ、発艦したMS2個小隊が化学兵器弾頭を使用したロケット弾による住民抹殺と、港湾部に駐留している連邦戦隊への攻撃、ならびにコロニー保全のための警戒任務に就いたとのこと。ケージン伍長の部隊もその際にペルナローゼへと上陸し、残存住民の掃討と警戒任務に就いた後、現状に至ったとのことだった。

まさに用意周到。完全に機先を制された連邦軍は今のところ満足な抵抗などできてはいないだろう。

だが、連邦軍も張り子の虎ではない。ブリティッシュ作戦にルナツー攻撃が含まれていないのなら、当の小惑星に駐留している艦隊は無傷だ。

ジオンの新兵器の力とミノフスキー粒子を駆使した戦術を考えると、数ではるかに上回っても連邦軍が勝利を得るのは難しいかもしれない。

れない。しかし、まだ無傷のまとまった戦力がある以上、さらなる多大な被害を抑えられる可能性を無視できない。各サイドへの無差別攻撃はもはや取り返しのつかないことであるが、コロニー落としなどという蛮行はなんとしても阻止しなければならなかった。

自分には直接彼らを止める力がない。だとすれば、連邦艦隊にどうあっても動いてもらわねばならない。

既に彼らもジオンの意図を察知しているかもしれないが、確証はなかった。

避難住民をコロニーから退避させるだけじゃ駄目だ。ルナツーに連絡を取って、ブリティッシュ作戦を阻止させないと。そのためにも。

そのためにも目指さねばならない、たった1つの目的地。

もはやし 4 シェルターに避難住民を待避させておくことは限界に近い上、シェルターではルナツーにコンタクトなどできない。予測できない危険が待ち受けているであろうが、そもそもコロニーを脱出するためにもどのみち行かねばならない場所だった。そう、宇宙港へと。

そのための布石を彼女は既に手の内へと収めており、後は行動するだけだった。

ただ、最後に確認しておかねばならないことがある。

「ケージン伍長、よくわかった。これが最後の質問だ。第一目標であるイフィッシュを完全に制圧し、核パルスエンジンの取り付けがなった暁には、当然トスカリアもこのペルナローゼも用済みになる。その時、貴様たちはこれらのコロニーをどうするつもりだ？」

彼らのやり方はもうわかってる。その問いの解は容易に推測できたが、この耳で確認しなければ気がすまなかった。

これに、銃口の先のジオン兵は怯えたような声で答えた。

「か、核攻撃で全て破壊してしまう計画だ。作戦の支障にならないように、と」

気がすむはずだったが、実際に耳にしたら小康状態を保っていた



怒りがにわかに上昇のカーブを描き始める。

彼らにとつては、それは至極合理的な行為には違いないだろう。

が、L 4 シェルターに残してきた人々のことを考えねばならないアヤリにとつてはそうはいかない。ペルナローゼの総人口に比すれば米粒ほどの人数ではあるが、その米粒たちは紛れもなく生きており、彼らの命は今やアヤリの双肩にかかっているのである。このような理不尽な行為は、絶対に許してはならなかった。

「貴様たちはよくもこんな愚劣で醜悪なことができるな。軍人相手ならばともかく、コロニーの住民は非戦闘員だ。軍に関係している者など数パーセントもないというのに。罪もない一般市民を無差別に抹殺しておいて崇高な独立戦争だと？ 笑わせてくれる。人類史上類を見ない虐殺の上に成り立つ独立など、亡国の始まりにしか過ぎない。こんな恥知らずの行為に加担する貴様はいつたいなんだ？ それでも人間か！？」

淡々とした口調が途中からだんだんと熱を帯びてくる。無理もないことだ。外道とも言える行いを聞いて、なおも冷静でいられる人間は感情が欠落しているか、偏見に凝り固まった独善的差別主義を信奉しているかいずれかだろう。

対し、一方的に言われるがままとはいきや、伍長は意外にも抗弁してきたのである。

「あ、あんた、なにも知らないからそういうことが言えるんだ。俺は、俺は外からサイド3に入った移民だ。移民は2級市民として、既存の住民 - 1級市民と激しく差別される。自由も、権利も、あらゆるところで。あんたには分からないよ、俺たち2級市民がどれだけ酷い扱いを受けているか。けどな、そ、そんな俺たちが生きていくためには、こういう仕事をするしかないんだよ。こうやって下積みを重ねて、はい上がっていくしかな」

「ふざけるな！！」

聞くに堪えない身勝手な主張に、冷静沈着で知られる若き女性士官は積もり積もったたぎる感情を爆発させた。伍長の言葉を遮る怒

声とともに、彼女は躊躇することなく引き金を引いた。打ち出された銃弾はケージン伍長のヘルメットをかすめ、床に跳弾し、シエルターの奥へと飛んでいく。最後の一線は理性が踏みとどまって制御したが、感情のままに発砲してしまうなどという普段ならば絶対にありえないことをしてしまふほど、抑えがたい怒りをあらわにしたのである。

彼女は腹ばいの彼のもとへ背後から肩を怒らせて歩みよると、腰を落として彼のヘルメット後頭部へ銃口を突き当てた。

とたん、発砲に身を竦ませていたケージン伍長は、大きく体を震わせつつ情けない悲鳴を上げていた。

一方、そんなことなど知ったことかという勢いで、アヤリはさらに怒声を放つ。

「このコロニーには1千万人を超す住民が暮らしていた！ サイド2全体では10億近くだ！ いや、他のサイドも加えれば、数十億の住民が平和に暮らしていた！ 数十億だぞ！？ その彼らを殺し尽くす手助けをすることで、自分勝手な安寧を手に入れようとする貴様はいったいなんだ？ そもそも、誰かに頼まれてサイド3に移民したのか？ それともジオンが貴様を拉致したのか？ 否、自分の意思で移民したんだろう！？ その責任を放棄して、自分の不遇を他者を貶めることで挽回しようとする……まともな人間がすることじゃない」

一気にまくしたてた彼女は、肩を震わせていた。身勝手な論拠に対し、人として当然の怒りを胸一杯にたぎらせて。

だが、この矮小な下士官をいくら罵ったからといってなにかが変わるはずもなかった。怒りが最高点に達したところで、理性がそのことを冷静に伝えてくる。アヤリは震える肩を落ち着かせた。

深く息を吸い込み、気を沈ませる。まだ、気持ちを切ってしまうわけにはいかなかった。

「ところで」

先ほどまでの感情が表に出た声色が、再び元の冷徹なものへと一

変する。

「貴様の理論であれば、保身のためなら他人の犠牲をいとわないということになるんだが、それが自身に適用される可能性を考えたことはないのか？」

言わんとしていることはただ1つ。

「私はなんとしても生き延び、貴様らの野望に虐げられる人々を守る戦いに身を投じねばならない。そのためには、貴様をこのまま原隊へ戻すわけにはいかない。私の存在を知られるわけにはいかないんでな。つまり、貴様が謳った理論をお手本にさせてもらうわけだ」  
そこまで言つて、先方は彼女がなにを突きつけているのかをようやく理解したようだ。

「ゆ、許してくれ！ 殺さないでくれ！」

実にわかりやすい反応だった。もつとも、自分が行っていたことが跳ね返つてこようとしているのだから、他の誰よりも過敏に反応するのも当然といえば当然だ。

「自分が他人を犠牲にするのはかまわなくて、その逆は否か。なんとも身勝手なものだな」

呆れた姿だが、一方的な自己利益を追求すれば人間誰でも彼のようになる可能性はある。だからこそ、人は相手を思いやり、慈しむ心を忘れてはならないのだ。人間の最も汚い部分を露骨に見せつけた薄汚い伍長を見下しつつ、アヤリは人を捨ててまで自らの利益を追求するようには決してなるまい、と当たり前のことだが改めて肝に銘じるのだった。

尋問は終わった。語るべきこともはやない。

アヤリは震えるジオン兵に対し、拳銃の安全装置をかけた後、無造作に腕を振り上げた。

「ああ、課長！ ご無事で！」

ノーマルスーツ保管庫の入り口を抜けると、気配を察知したオットーが姉弟を連れて保管コンテナの陰から飛び出してきた。

「なかなか戻られないので、なにかあったのかと」

「なにかあったわ。堪えようもなくなるぐらい腹に据えかねることがね。はい、これ持って」

不安から一転して安堵したことをこれ以上もなく顔に出して出迎えたオットーに、アヤリは出会い頭、制圧したジオン兵から回収し肩に下げていた2丁の自動小銃のうち、1つを彼に手渡した。

「これ持ってって、こ、これ、ジオンの銃じゃないですか!？」

「当然でしょ。あ、それと拳銃も。予備の弾倉は各1個ずつね」

無造作に小銃を渡されて唖然としていたオットーは、続けて拳銃と予備弾倉を押し付けられ、一層困惑の色を表情に浮かべていた。

「どうしてジオンの銃を課長が」

言って、自分が発言した内容自体からことの真意　ジオンが戦端を開いたこと　に気づいたのか、彼は口を大きく開けて絶句した。

「そのまさかよ。つい今しがたも、彼らの掃討隊がここまで攻めてきたところ」

「掃討隊？　ジ、ジオンがここまで来たんですか!？」

「だからジオンの銃があるんですよ。生存住民を掃討するために2人組で搜索していた。1人は同士討ちで死に、もう1人は種々聞き出した後昏倒させて、これで縛り上げて倉庫の奥のそのまた奥へ放りこんできたわ」

万が一の際に使用する、ノーマルスーツ補修用の強力な粘着テープが入った腰のアイテムラックを示すと、アヤリはしゃがみこんでエナたちの視点に合わせる。

「大丈夫？　怖かった？」

幼子2人の顔を見回し、確認する。エナも弟も涙こそ止まっていたがその表情は疲れきっており、アヤリの問いにも泣き腫らした目のままうなづいていた。

「ごめんね、不安だったよね。これから避難している人たちのところへ行くからね」

言って大きく腕を回して2人を引き寄せ、抱き締める。不安に苛まれていた時は、優しい声、優しい表情、なによりこうして抱き締めてやるのが一番だ。

はつきり言えば現状は絶望的だ。最初の核攻撃は運良く免れたが、コロニー内は化学兵器に汚染されてほとんどの住民が死滅。わずかに生き残った住人たちも、周りを掃討目的で固めているジオンに阻まれ身動きできない。かといってこのまま座したままでは、最悪の場合全てを無に帰す核攻撃によりペルナローゼは木っ端微塵になる。手詰まりなのは誰が見てもあきらかだった。

それでも、アヤリは諦めてはいなかった。諦めたらそこで終わる。なにもかもが闇に閉ざされてしまうのだ。

では、諦めなかったら？

もちろん、だからと言って100%状況を打破できるとは限らない。

しかし、諦めて可能性が0%になってしまふのと異なり、たとえば0.001%でも生への可能性を見出すことができる。

できることはまだあるはずである。なにより今、生きているのだから。生きていれば、なにか方策を考え、行動に移すことができる。だからアヤリは、絶望的な話を聞かされても悲痛な表情にもならず、ともすれば平然とした様子でオートーやエナたちに接しているのだ。そこには不安を感じさせて彼らを動揺させないという配慮もあったが、根源には彼女自身が『皆とともに生き延びる』という鉄の意志を固めたことがあった。

なんとしても生存者たちとともにこの理不尽な状況下から脱し、生をつかみ取る。揺るぎない思いは、わずかながらもいい意味での余裕すら生み出した。彼女の平素と代わらぬ有様はその思いに支えられているのである。

「じゃ、行こうね。エナちゃん、背中におんぶしてあげる。オート

「、弟の方をお願い」

抱擁を終えると、アヤリはしゃがみこんだままくりと姉弟の方へ背を向ける。最初は戸惑った様子のエナだったが、おずおずと彼女の背中に身体を預けてきた。

少女の太股を抱えて立ち上がると、同じようにオットーも弟を背負ったことを確認する。

「それじゃ行くわよ。ついてきて」

「は、はい。しかし、ジオン兵がうろついているような外に行くことができないのでしょうか」

オットーを伴い、ノーマルスーツ保管庫のハッチへと足を向けると、彼がもつともな質問を投げかけてきた。

対し、アヤリはハッチからシエルター内へと出たところで足を止め、半身だけ振り返った。

「いい指摘ね。だから私は試してみたいの」

言って、視線をシエルター本体の外界へと続く入り口とは反対方向へと巡らせた。

視線の先にあるのはシエルターの壁面に並ぶ幾つかの倉庫ハッチ。命を繋ぐ第一の方策は、そこにあった。

「LT23、てことはこつちね」

真つ暗な通路。T字路に差しかったところでL-3シエルターの倉庫で手に入れたライトを壁にかざしブロック表示を確認すると、アヤリは右方向へと進路を取った。

本来なら緊急時には非常灯が最低でも灯されているはずののだが、通路には光源の欠片もない。圧倒的な漆黒の闇に対してはあまりに無力なハンドライトだけが頼りだった。

「オットー、ちゃんとしてきてる？」

「だ、大丈夫です」

時折後ろを振り返り、部下の様子を窺う。単に後に続くだけなら問題はないのだろうが、今彼は自動小銃で武装した上に子供を背負っている。20キロを超える背囊を背負い込んで武装行軍しているのにも等しく、肉体派でない彼にとっては決して容易ならざるに違いない。

それでも弱音一つ吐かずについできているのは、能力の優劣はどうあれ、ジオンが為した残虐行為に対する人としての純然たる怒りから湧く力のためだろう。さすがに息を乱しているようではあったが、時折背中の中の弟 エナからミトという名前であることを聞いていた を肩越しに元気づけている様からも心配はないようだった。それならば、と注意を再び前方へと向ける。ライトの視界はわずか十数メートル。ブロック表示でだいたいの現在地はわかるが、まったく初めて通る道である。気は抜けなかった。

アヤリたちが歩いている闇の回廊は、人々が居留するコロニー地表から潜ること数十メートルの地下に網の目のように張り巡らされた点検用の地下通路だった。

大気循環装置、ガス・水道管、電気、通信その他諸々の設備は地上に据えられることなく、一つ残らず地下に配されていた。これは

美観の問題もあるが、コロニーの地下という空間は多重スペースが存在しており、地上に出しておく必要のないものをそこに巡らせることは、限定的なスペースしか持たないコロニーにおいて至極当たり前のことである。

一般市民にとっては、いや、コロニー公社以外の全ての人々にとってまったく馴染みのない地下施設ではあるが、これこそが追い詰められたアヤリたちを救う血路となったのだ。

地上移動は会敵確率が高く、危険。であるなら地下を行けばいい。まったくもって単純な発想ではあるが、実践するのはなかなかどうして、難しい。そもそも地下通路への入り口を知らなければ机上の空論となる。

しかし、アヤリは知っていた。だからこそ『試してみたい』などという台詞が土壇場で出てきたのだった。

L-4 シェルターに入り部下に設備の点検をさせた時、シェルター内部の見取り図が手に入った。これを見たアヤリはすぐに気づいたのだ。縦横無尽にコロニー地下を走る地下通路への入り口の1つが、シェルターの倉庫奥に設置されているということに。

なぜそのような所に入り口が設置されていたかは不明であり、せいぜい建設中の資材搬入用かなにかのために設置された云々かしか思い当たらない。

言えることは、今はその入り口が設置された理由などはどうでもいいということだ。地下通路からL-4 シェルターへと入ることができる、それだけで十分だった。

もっとも、それらを実際に使用するのは多数の避難民とともにコロニーを脱出する際、と想定していたため、よもやこうも早く利用することになるとは思ってもみなかったが。

ただ、不安がまったくなかったわけではない。L-4 シェルターにかようなハッチがあることは確認していたが、それがL-3 シェルターにも当てはまるかという点と確たることは言えなかったからだ。L-3 シェルターはL-4 シェルターと同等の規格で建造されて



いたが、『箱の外』の状況まで同じとは限らないためである。

『試してみたい』などという台詞が口を突いたのはまさにそのためだったのだが、杞憂は無用だった。アヤリの読みは的中したのだから。

L-3シエルターの備品貯蔵庫奥、事前に知っている人間でなければわからないような暗がりにはそれはあった。地下通路へのハッチが。

『ここから先はコロニー公社の管轄区域であり、許可なく立ち入ることを禁じます』といった内容の警告パネルがハッチに貼られていた上、電子施錠されていた。とはいえ、それは大した障害にはならなかった、からめ手を使うことによって。

こうして一行は無事地下通路へと入ることができ、一路L-4シエルターへ向けて移動を開始したのである。

懸念は地下通路のセキュリティだったが、闇に閉ざされている現状が心配は無用と教えてくれた。地下通路の機能は専用の電源経路によって稼働しており、セキュリティもそこから電源の供給を受けている。

ところが、普段作業員のみが使用するのみの地下通路とはいえ、通常ならば等間隔に設置されている照明が常時点灯しているはずなのだが、それが完全に落ちていた。意味するところは、地下通路の電源経路が現状、死んでいる状態。つまり非常電源もセキュリティも機能していないということなのだ。

これならば地上を移動するのに比して段違いに安全にL-4シエルターへと向かえる。通路は網の目のように張り巡らされており、地上と異なり家屋等の障害物を迂回せずに最短経路で目的地まで到達できるため、時間も短縮できた。あと2ブロックも抜ければ、早くもL-4シエルターが見えてくるはずである。

「もう少しで皆のところに着くからね。そしたら少し落ち着けるから」

背中少女を気遣い声をかけると、彼女は「うん」と返事をして

くれた。心の傷はもちろん癒える暇もないだろうが、もう涙は流しておらずちゃんと反応してくれている。生き延びるためには、気持ちが死んでいては本当に死人になってしまう。挫けない心、それが幼い彼女たちにとって今最も必要なものであり、特にエナにはそれがあつた。この子の両親もさぞ今後の成長を楽しみにしていたことだろう。

両親？

ふと気がついた。母親は亡くなってしまったが、では父親は？

一瞬躊躇したが、これは聞いておかねばならないことであると割り切り、切り出す。

「エナちゃん。答えられたらでいいんだけど、いいかな？」

自分の肩越しに彼女を横目で見ると、エナはおずおずと問いにうなずいた。

「エナちゃんたちのパパって今どこでなにをしているの？」

するとエナは泣きはらした目を瞬かせた。どうしてそんなわかりきったことを聞くの？ とでもいうように。

「パパは天国にいるんだよ。エナが赤ちゃんの時に病気で死んじゃったんだって」

続けて発せられた言葉が全てを表していた。

アヤリは、はたと気づいた。この子の芯の強さは、既に父親を亡くし母親に育てられたという逆境があつたからではないかと。長子ゆえに幼くとも母を支え弟の面倒を見るといふ心が養われ、それが今の彼女を形作つた。そう考えると、悲哀の淵に立つてはいるが決して悲しみの渦に身をまかせることはいないエナの姿勢にもうなずけるというものだった。

こんなにも小さいのに、母親を失うという幼子にはあまりにも衝撃的な体験をしているというのに。そう思うと、アヤリの胸は切なさに締めつけられそうだった。

ただ、同時に彼女への思い、素直な感嘆の思いが言葉となって唇からこぼれる。

「えらいわね、エナちゃん。私とは大違い」

自身を揶揄する言葉が同時に出る。ただ、自虐のためのものではない。強がってはいるがいつ壊れてもおかしくない心根を持った自身を逆に鼓舞するためのものだった。

エナのような少女ですらここまで強く生きているのだ。大人の自分がいっしょにしなければ。アヤリは今一度、皆と共に生き延びるという決意を胸中で繰り返した。

「なあに？」

口を突いて出た言葉は小声だったため、エナに聞かれることはないと思ったのだが、どうやらなにかしら耳に届いたらしい。

「なんでもないわ。ほら、もうすぐそこよ、L-4 シェルターは」

LT-23 ブロックを確認してから5度ほど通路を曲がった先、暗がりのなかハンドライトの明かりに照らし出された突き当たりの壁になに文字が描かれている。それは、歩を進めると次第に明確になっていく。

「大正解。オットー、無事戻れたわよ」

やや遅れて到着した部下を振り返ると、彼はさすがに顔を苦しそうに歪めながらもホツとした様子でため息を漏らしていた。

壁には閉鎖されたハッチが設えてあり、そこには大きく『L-4』という文字が描かれていた。間違いなくことが始まった当初にアヤリたちが待避したシェルターだった。

エナを背中から降ろすと、早速アヤリは腰についているエマージエンシーパッチ（ノーマルスーツが破損した時の緊急補修用シール）の入った小さなケースを開く。そこには、先ほど使用し、携行するために入れておいた点滴用の太い注射針が入っていた。

L-3 シェルターの倉庫にあった医療キットのなかから拝借してきたもののだが、これが大きな力を発揮したのである。

ハッチの傍らにひざまづき、壁に取り付けてある電子施錠の端末と対峙する。ハッチはカードキー方式で開錠されるため、端末は縦にスリットが入ったシンプルなものだった。そのスリットに、慎重

に注射針を射し込む。

読み取りセンサーの心臓部がある辺りを針先で確かめながら探る。肉眼では確認できないため、微妙な感触の違いでそれを捉えるしかない。

まるでこそ泥になったような嫌な気分にも胸中で苦笑しつつも、アヤリは「そこ」を探り当てた。

意を決し、思い切り注射針をひねり込む。とたん、端末が火花を散らしてはじけたかと思うと、施錠が外れる軽い金属音とともにハッチが音もなく横にスライドした。

そう、電子回路をショートさせる方法で施錠を解き、カードキーがなくともハッチを開かせる手段をL-3並びにこのL-4シエルターハッチに講じたのである。

もちろん誰にでもできることではなく、単に注射針をスリットに射し込むだけではなにも起きない。またこのような方法で施錠を破壊する不審者に対抗するための方策も講じられていた。

とはいえ、それはあくまで構造をよく知らない者に対する処置だ。構造を知り、弱点を知る者にとっては対策も役には立たない。そしてアヤリは、この手の電子施錠システムについて一通り構造を把握していたのである。注射針で開閉センサーをショートさせる程度のことはお手の物だった。

立ち上がって振り返ると、呆けたように口を開けてこちらに見入っている青年士官が1人。

「OK、これで障害はなくなったわ。なんて顔してるの、オットー」

「いえ、海兵隊って電子施錠まで開けてしまう技術まで教育されるところなのかと思うと、なんだか感心してしまっ」

「C-4やらショットガンでドアと鍵を粉碎して強行突入する海兵隊がこんなこと正式に教えてくれるわけないでしょ。ま、確かに海兵隊時代に覚えたことだけど、教えてくれたのは同僚よ。自営の店が倒産して行くところがないから、とりあえず海兵隊に入隊したって軽く言ってくれる自称元鍵職人の」

あの彼が本当に鍵職人だったかどうかは疑問だが、習った「手口」は実務く安全上、C-4火薬を使うことのできなかつた突入作戦などにおいて実際に立つこともあった。もつとも、おかげで軍を退役した後は隊長のことだから義賊にでも？ と冗談で部下にかわれたこともあったが。

思えばあの頃は正規に教育される技術以外にも多くの人々から様々なことを学んだものだ。

自身では特に意識したことはなかったが、それまでは紛れもなく市井の様々な物事と一線を画した財閥令嬢としての人生を歩んでいたのである。もしそのまま一生を終えるのであれば決するかような経験をするとはなかったことだろう。

では、この人生に後悔があるかと尋ねられれば、答えは否だ。あのまま駕籠のなかの鳥で居続けることなど、考えるだけでも身震いする。

いずれにせよ、どんな技術でもそれを悪用しなければこうして役に立つというものだ。こそ泥のような情けない思いも、どうにかそう自分に言い聞かせることで霧散したような気がした。気がしたのだが、こちらを見上げる視線に再び気まずい思いをさせられる。

向けられるつぶらな瞳に、わき上がるえもいわれぬ罪悪感。悪行を犯しているわけでもないのだが、子供の無垢な視線はそこに非難の意図がなくともなぜか痛い。

「エナちゃん、真似しちゃ駄目だからね」

アヤリはやや頬を引きつらせた微笑みを浮かべ、的を得ているようにうでその実およそ今気にすることでもないことを口にする。

すると、またしてもオットーが意外なものを見たような顔をした。「課長でも焦ったりすることがあるんですね」

「うるさい。口が多い男はモテないわよ」

彼の言葉にはからかい等の他意がないと容易に窺い知ることができるとため強く言い返すこともできず、アヤリは肩を竦めて彼から視線を外した。

それにしてもなんとも悠長としたやりとりをしている。とても死の危険がすぐそこまで迫っているとは思えない。

ただ、だからこそこのような「間」も必要なのだとも思う。人に緊張の糸は必要だが、天井知らずというわけではない。あまりに強度のストレスはまずいい方向に人を導いてくれはしないのだ。

なんと言ってもまだ余裕があるという事実に他ならない。余裕に慢心してはいけないが、精神的に退路が立たれていない状況は歓迎されるべきだ。

後は、このハッチの向こうにいる人々が同じ空気を吸い、共に手を携えてくれるかどうか。

化学兵器や核兵器の脅威、いつ来るかわからないジオン軍の追手、困難な脱出……立ちふさがる難題を挙げるとキリがないが、まず片付けなければならぬのはシエルターにいる避難民たちにこの状況を説明し、協力を仰ぐことである。彼らの賛同を得ずして全員での無事脱出はありえない。

銃を取って戦うよりもある意味難しいことが立ちはだかっているが、決して避けては通れない道だ。

エナの手を取り、ハッチの向こうに設置されているエアロックへと足を踏み出したアヤリの表情は、自然と引き締まっていた。

L-3 シェルター同様、L-4 シェルターの地下通路への入り口は数ある倉庫の1つに設置されていた。

エアロツクを抜けた一行は、倉庫の片隅に設えられたハッチを通り倉庫内に入る。生活雑貨が貯蔵された倉庫内は静まり返り、あたかもシェルター自体の現状を暗示しているようだった。

左手首の時計を見る。時刻は午前11時20分。予定した帰着時間を大幅に上回ってしまった。

もし、ジオンの搜索の手がL-4 シェルターに及んでいたら？ 確率的に現状ではまだ低いとはいえ、100%ありえないとはいえない。一抹の不安が胸中を過ぎるが、歩みを止めるわけにはいかなかった。

バイザーを上げたアヤリは、所狭しと乱立した備蓄棚に挟まれた通路を抜け、シェルターと倉庫を分け隔てるハッチの前に立った。にわかに安堵感が胸のなかに広がっていく。ハッチの向こうから避難民たちの声 武装した敵兵に追い立てられているようなものではない が聞こえてきたのだから。懸念だった避難民たちの現状での安否はこれで払拭された。

ハッチを開きシェルター内に入る。そこには、シェルターを後にした時とほとんど変わらぬ光景が広がっていた。あらゆる物事に怯えるかのようにシェルター壁面近くに腰を下ろし、こちらが倉庫から姿を現したことなど気づきもしないほど焦燥しきった様子で皆一様にうなだれている。

無理もなかった。自らの未来はおろか、自らが今置かれている立場すらろくに把握できていないのだから。

その彼らにこれから厳しい現実を突きつけねばならないことを考えると、たまらなく気が重くなる。その思いを振り払うようにしてアヤリは留守を頼んだ部下たちの姿を探した。

彼らの姿はすぐに見つかった。

しかし、アヤリの視線は彼らとともにいた、1人の人物に注がれていた。

ナグンたちはシエルターの一角に設えられている情報端末に集まり、アヤリが見つめた人物が端末を操作するのを取り囲むようにして見守っている。

いったいどういうことなのか。

エナをオットーに任せ、アヤリは足早に彼らのもとへと向かった。

「ああ課長！ ご無事で！」

最初にこちらに気づいたのはヒタキだった。開いたバイザーの奥で顔一杯に笑顔を広げている。

軽く手を挙げて応えつつも、アヤリは笑顔を見せない真顔のまま、留守の間責任者としての立場を任せたナグンのもとへ歩み寄った。

「よくお帰り下さいました。折り目正しいシャツのような『あの』課長が定刻になっても戻られないので、きつとなにかあったのだらうと往生しましたよ」

預からせていたサバイバルキットを差し出してきたナグンは、想定していなかった方向からアヤリたちが来たことに対する驚きと、彼女らが無事戻ってきたことに対する安堵の様子が如実に現れている表情をしていた。ただ、アヤリは彼に対してもにこやかな微笑みをもって応えることはしなかった。

「色々とおったわ。けど、まず確認したいの。貴方たちはここでのなををしているの？」

自然と口調が厳しくなる。ナグンを始め部下たちが独善的な暴走などしないことは8か月つきあってきたてわかっている。

しかし、端末に集まっている事実が好ましくない推測を呼び起すため、さすがに軽い声では尋ねられなかった。

彼女の意図を口調と表情から読みとったためか、とたんナグンの顔がこわばる。アヤリの態度が硬化していることに対し、思い当たる節があるからに違いなかった。



「課長、実は」

「他のシエルターとの接触を試みているのさ」

ナグンの声を遮るように響いたのは若い男の声。その場にいた者の視線が全て声の主へと集まる。

引き出し式のレストバーに腰を下ろし、端末を操作していたノーマルスーツ姿のその人物は、ゆっくりと立ち上がるとアヤリの方へと向き直った。

目を剥くほど高い身長を持ち主ではないが、それでもアヤリより10センチ以上は大きいだろう。自然、彼女は相手を見上げる形となった。

自他ともに認める彼女の野暮な美的センスから言っても、開いたバイザーの向こうにある彼のほっそりとした顔立ちは彫りが深く精悍に見えた。どこか冷めたような雰囲気を漂わせており、20代半ば位に見える年齢にしては必要以上に落ち着いているようだった。

彼は褐色の縁をした眼鏡をかけており、その奥に光る深い碧色の双眸は知的な雰囲気なたたえていた。もっとも、顔立ちに比例するかのようによく形の整った唇から放たれた口調には知的さをまったく感じさせなかったが。

それでも年相応の女性的感覚があるなら、彼の碧い瞳と見つめ合う形となれば大抵の女性は頬の1つや2つほんのりと朱に染めてしまふところだろう。

が、幸か不幸か彼女はそのような乙女心を持ち合わせていなかった。真っ向から彼の視線を受け止め、一步も引かずに切り返す。

「他のシエルターと？ この端末で？」

「ああそうだ。なにせ情報が足りん。この状況下だ。『立っている者は親でも使う』じゃないが、使えるものはなんでも使うのが鉄則。そうだろう？」

絶句した。

注意を払って行動して、なおも自らの行動に齟齬がなかったか、その行動が行き着く先に果たして悪い影響を及ぼしていないかどうかどう

かまで憂慮している彼女のこれまでの努力を、この男は見事に打ち砕いたのだから。

コロニー内に無数建造されているシエルターは独自の回線で相互リンクしており、たとえシステム統括センターがダウンし全てのインフラが使用不能になったとしても、シエルターが自己完結しているのと同様、リンクも使用可能だ。

ゆえに『閉鎖ネット』と呼ばれているが、それは決して回線自体がスタンドアローンの状態であることを示さない。端末は外部の回線にも物理的な接続がなされているし、閉鎖ネットという名称は外の変事に左右されないという意味で名づけられているのだ。

よって、端末を起動し使用すれば『そこに誰がいる』ということを外から知ることやりようによつては可能なのである。コロニー全てを統べる　今はジオンの手に堕ちているであろう　システム統括センターからならばなおのことだ。

それがなにを意味するのか。言葉を失ったまま呆然とした表情をして立ちつくすアヤリにとって、考えるまでもないことだった。

「あんた、なにか誤解してやいないか？　俺が端末を使う際、防護手段を講じていないとでも思っていないやしないだろうな」

神経を逆撫するような声が彼女の鼓膜をなぞった。

彼だ。胡散臭い物を見るように無遠慮な視線で見下ろしてくる。対し、若干血の気が引いてしまっていたアヤリも、気丈に眉をしかめて応えた。

「防護、手段？」

「そうだよ。あんたが危惧したのは、この端末の起動を外部から察知されて避難民がここにいることを突き止められることだろ？　大方。そんなもん、当然手を打つてに決まっているだろうが。万が一外部から接触があったとしても、そいつらは俺が細工した端末の上っ面　稼働停止している一部分　を素通りして、『未起動』の判断とともに手ぶらで立ち去っていくさ」

台詞の途中から、彼はアヤリに背を向けて再びレストバーに腰を

下ろすと、端末のキーボードを操作してある画面をディスプレイに呼び出していた。彼が細工したという、外部接続のラインが端末上層を素通りしている様がよくわかるメンテナンスモードを、これみよがしに示すかのように。

アヤリはコンピューターのスペシャリストではないが、ある程度は知識として身につけている。そうでなければ、数ある任務のなかで幾度となく搭乗することとなった電子装備の固まりのような現用戦闘兵器を乗りこなすなど到底できない。よって、彼が示した端末が置かれている現状も理解することができた。この端末の心臓部は、確かに外部からは不可視になっており、作動停止しているようにしか見えていないということ。

彼の仕事は完璧だった。文句のつけようがない。だが、それ本当にいいのだろうか？

危うく納得させられかけていたアヤリは、まだそうなってはならないと本能が囁いていることに気づき、踏みとどまる。

そもそも、この青年はいったい何者なのだろうか。コロニーが何者かの攻撃を受けていることは一歩譲って認識できていたとしても、避難した先まで彼らが追跡の手を伸ばしてくるのを予測しそれに抗じるための手段を実際に履行することなど、ただの一般市民にできるだろうか。一見無防備な背中を晒したまま端末を操作しているように見えるが、その実、隙が一切ないことも彼の不審さを表している。こんなことは訓練されなければできない。

考えれば考えるほど、目の前の彼という存在は得体の知れないものだった。そのことを問い 詰めようとした時、端末のディスプレイの方を向いたまま再び口を開いた彼の言葉がアヤリを遮った。

「彼らを責めるなよ。情報を収集するために俺に任せてくれたというのもあるが、あんたの帰りが遅いのを心配して、という要素もあったんだぜ。そういう意味ではあんた、いい上官みたいだな。指揮官としての才覚は別にして」

誰が聞いてもわかる。ぞんざいな口調に『皮肉』という薔薇の棘

が幾つも散りばめられていることは。緊張の糸がアヤリと青年の間には確かに張り巡らされており、ナグンを始め、先ほどから輪のなかに加わったオットーやエナは息を呑んで見守っていた。

「どういう意味です」

「どうもこうもない。そういう意味さ」

どこかニヒルな喋り方を隠そうともせず、彼はレストバーに腰掛けたまま腰をずらして振り返り、言葉を続けた。

「アヤリ」ハヤカワ中尉、24歳。UC0064年、かのハヤカワ財閥の令嬢として誕生。日本自治区で少女期を過ごした後、地球連邦軍ナイメーヘン統合士官学校へ入校。この時の総合成績はまあそれほどズバ抜けたものじゃなかったが、指揮管制と射撃、それから兵装の扱いにかけては他の追隨を許さず、半ばスカウトされる形で少尉任官後海兵隊畑へ。これが大当たりとなり数々の功績を挙げるなかでも今年の2月に解決したサイド4不審船事件は見事な手腕だった。任官してから数年足らずの並の若手士官じゃできないことだと、そこまでは肯定的だった話の流れは一転する。肩を竦めてため息をついた彼の挙動とともに。

「とはいえ、少々買いかぶっていたようだ。あんた、閉鎖ネットのことは知っていたな」

言葉とともに向けられてくる青年の視線は厳しかった。それは間違っても好意的なものではなく攻撃的であり、さすがのアヤリも気持ちの上で押されそうになる。これに対するためにも、彼女は毅然とした態度で即座に返した。

「ええ、存じ上げておりました」

「だったら、どうして使わなかった」

「物事には順序があると考えたからです。この切迫した状況下、まずなさねばならなかったのは避難した168名の市民たちの安全を確保すること。そのためには、危険が迫っていないか周囲の状況を肉眼で確認する必要があり、そのためにも早急にシエルター外へ出て偵察しなければなりません。それに、閉鎖ネットはそのまま

使えば第三者に使用を察知される可能性があります。その危険から防護する措置を取れる人間がこのなかにいるとは到底思えませんでした。だから私は、閉鎖ネットよりも偵察行を優先させました」

「なるほど、一面的には正しい。だが肝心なことを忘れてるぜ。あんたほどの人物でも先入観に負けるんだな」

彼の目元がより一層厳しくなった。物事の核心をあたかも暴きだすかのよう。

「なぜ確認しなかった、端末を操作できる人間がいるかどうか」

一言。たったその一言がアヤリの胸を貫き、そして彼がこれまでいっただいなに言わんとしていたか全てを悟った。目を見開き、果然とするアヤリ。

一方、明らかに動揺している彼女の姿を目にしつつも、彼は口撃の手を緩めることはしなかった。

「これが数百人、数千人、数万人を相手にするなら話は変わってくるかもしれないが、たった168人だ。ひと声かければ名乗り出る奴がいるかいなかを確認することに1分もかからん。あんたの言う早急な偵察つても正しいが、その前に端末に細工できる人間を捜し、偵察と同時進行で他のシエルターに接触を試みることがより適切な対応じゃなかったのか？ あんたは端末をいじれる人間はこの少ない避難民のなかにいないという、士官が絶対に犯しちゃんらない『先入観』に見事はまっちゃったんだよ」

物の言い方の是非はともかく、話の筋はまったくもって彼の言う通りだった。アヤリは大切なことを、あつてはならないことを見落としていた。

端末関係のことは確かに知っていた。それを使うことも視野には入れてもいた。だが、シエルターに入っただけに使う、という選択肢はなかったのである。まさに彼の指摘通り、『端末を扱える人間が避難しているとは考えなかった』からだ。

あの状況下でそこまで考えられるかどうか、常識的に言えば難しいことかもしれない。

ただ、彼女は『中尉』というれっきとした地球連邦軍士官の看板を背負っているのだ。

士官という階級がなぜ存在し、なぜ指揮権を持っているのか。それは、緊急時に数少ない情報から瞬時に最適な道を選び出し、自己の判断で自己が受け持つ部下に対し帰趨を決する命令を下すためである。それは、高い階級には相応の人の命がかかっていることを意味していた。

それだけに、彼女には自己の身分に対して果たさなければならぬ責務があった。彼女は予断を排除し、客観的な選択肢を盛り込んだ最終判断を下さねばならず、くだんの端末の件は、まさに『気づかねばならない責務』だったのである。端から端末について知らなかったわけではなく、気づいていた上、その使用も選択肢の1つに入れておきながらもこれを放置したことがさらに問題を大きくしていた。

現在の状況は過酷だ。一般人はもちろんのこと、訓練されたエリート軍人でも論理的・客観的に思考し、適切な判断を下せるかどうかは微妙な環境下に置かれている。アヤリは確かに優秀な士官ではあったが、神ではない。不測の事態が続き、満足な情報もない現況下では彼女としてミス犯すこともあるう。

ただ、彼女の能力から言えば、この一件についてはミスを犯す領域でのことではなかったのだ。ほんの些細な、100回に1度ほどの稀有なエアポケットが生んだ結果だった。

だからこそ彼女が負った責任は大きかったのであるし、あつてはならないことだった。

誰よりもそのことを当の本人が理解尽くしていた。自然と頭が垂れ伏し目がちになる。下唇をかみ締めた。

「残された時間が無限でないのなら、できることは同時かつ迅速に進めるのが現実ってもんだ。1つ片付けてから次の一手、とのん気にやってたら手遅れになることは、あんたも頭のなかではわかっているだろ？ もっとも、わかっててもやっちまうのが人の為せると

ころでもあるんだがな。いずれにせよ、あんたの行動はせずともよいところで少々性急すぎた。俺が協力を申し出ようとしているのすら気づかれず、外に出てかれちまったしな」

もはや返す言葉もなかった。さすがのアヤリも、高揚していた意気は落ち表情は曇っていた。

意外な助け船が現れたのはその時だった。

「ちよつと待つて下さいよ、黙つて聞いていれば言いたい放題で！あ、貴方はいったい何様のつもりなんですか！？ 課長がどれほど皆のことを考えて動いているか、貴方になにがわかるっていうんですか！」

声を荒げ、つかみかからんばかりの勢いで例の彼に詰め寄ったのは、意外にも偵察行に同行したオットーだった。普段の神経質で内気な彼からは想像もできないような剣幕を見せていた。

が、青年の方はそれにまったく動じてはいなかった。

「ここで端末をいじっていただだけの貴方に、幾多の危険を冒して命をかけて皆のために尽くしてきた課長を責めることなんてできるんですか！」

「ああできるね。軍人の本分は『国民の生命と財産を守ること』、これが全てだ。命がけで皆に尽くしてきた、というがそれがどうした。極論を言えば、国民を守るためなら自己の命を投げうってでも行動する。つまり『真つ先に死ぬ』のが軍人の務めだ。でなければ軍人なんぞ張子の虎、いや、狸にしかすぎん。だいたい、国民に対する職責を果たせていない公職者が責められない方がおかしい」

一通り反駁した後「どうだ、俺は間違っているか？ 間違っているなら言い返してみろ」と言わんばかりの鋭い視線をオットーに向けている。対し、オットーはそれまでの攻勢が嘘のように口をつぐんでしまった。再反駁せずに奥歯をかみ締め悔しげに顔を歪めているのは、相手の言葉が正しいと認めたからこそだった。

思いもよらない援護射撃には正直驚いたが、オットーの気持ちは素直に嬉しかった。それがアヤリに冷静になるきっかけを与えてく

れた。過ぎてしまったことを振り返るより、もっと大事なことが待ち受けていることを。

そう、残された時間は無限ではないのだから。

後戻りは許されない。今は、前を向いてただ進むだけ。アヤリの瞳にたぎる確かな意志の光は失われてはいなかった。顔を上げ、オットーの方へ向き直る。

「ありがとう、オットー。でも、確かに彼の言うことは正しい。私の配慮が足りなかった。助かるための方策はどんな可能性でも考慮し、迅速かつ的確に行使するべきだったわ」

言って、今度は例の彼へと踵を返すと、アヤリは頭を下げて言葉を続けた。彼に詫びと礼を伝え、そして彼を問い直すために。

「貴方の言は正しい。至らぬ身で、ご迷惑をおかけしました。貴方の行動がなければ、小官はもしかすると皆を巻き込む致命的なミスを犯していたかもしれません。その点についてはお詫びとお礼を申し上げます。ただ」

一旦言葉を切り、顔を上げる。つい今しがた謝罪と礼を述べたことなど打ち捨てるかのごとく、翻って逆に彼を射るような視線で油断なく見つめ、再び唇を開いた。

「ただ、この危急的状况下においての小官の責務は、避難民の安全とともに整然とした秩序を守ることです。それは、1人の勝手な行動が、全員の命を危険に晒してしまう可能性があるからです。失礼ながら、貴方の行動は確かに適切でしたが、そこまで判断し行動に移すのは専門的教育や訓練を受けていない一般市民には難しいことです。つまり、貴方には不審な点がありすぎる。カタログスペックだけならともかく、どうして小官の士官学校での経歴までご存じなのか。端末に細工を加える高度な専門技術をなぜ扱えるのか。なにより、一般市民では知りえない、考えつきもしないようなこと残された時間があまりないなどということを出せるということも含めて」

彼が言ったことが妥当なら、またアヤリの口にしたこの台詞も妥



当だった。彼はあまりに的確すぎた。不可能、とまではそれこそ『先入観』となってしまうためもちろん言い切れないが、ただの一般市民にここまでのことを考えうることなど容易ではない。少なくとも、不自然なのは明白だ。

決定的なのが残された時間関係の発言である。このコロニーが攻撃を受けていること自体は理解しているだろうが、ただの市民にこの先どうなるかまでを予測できるかどうか。しかも、最悪の結末が待ち受けていることをあたかも知っているかのごとく口にできるなど明らかにおかしかった。

もつとも状況から言って、万が一つにも彼がジオンのスパイやそれに類する者であることはないだろう。警戒するにしても最も序列として後方に属するものとなる。彼がもしジオンに連なる者であるならば、とうにこの現状を自軍に報告しシエルターは壊滅しているに違いないのだから。

もう一つ。アヤリは不思議な感覚を彼から受けていた。確かに不遜な態度は眉をしかめて然るべきだが、それでもなにか初めて会ったような気がせず、どこか憎めない。言うなれば、『同じ臭い』がしたのだ。

とはいえ。どこか釈然としない思いにかられながらも、しなければいけないことは忘れない。万に一つ、ただの一般市民がアヤリら並に様々なことを知り得ていたとしても、それこそなぜなのかを今明らかにすればいいのであり、正当な理由があればよし。なければ相応の対策を取る、ただそれだけだ。これ以上の問答は時間の無駄であり、早急に処理して次の段階へと移るためにも必要な確認事項だった。

「貴方はいつたい何者なのです？　ことと次第によっては保安上貴方の身柄を拘束しなければなりません」

正体不明のこの若者に対し、アヤリは実にさりげなく右手に持っていた拳銃の安全装置を親指で外した。彼の返答如何によっては即応できるように。

「おいおい待つてくれよ。また得意の先入観を發揮させ、俺をふん縛るつもりか？」

「では貴方は正体不明の相手を前に、いかなる状況が発生しても臨機応変な対応を取れるようにする準備すら『先入観による行動』と言うのですか？」

驚くことに青年はこちらの対応に気づき皮肉を飛ばしてきたが、もう相手のペースにははまらない。さらに、安全装置を外すほんの極わずかの所作を見抜いた対応に、間違いなく彼が一般人ではないことを確信した。

張り詰めた糸があたかも見えてしまうように空気が緊迫する。

ひと時の静寂。アヤリと青年の視線は、固く絡みついたまま止まっていた。

この沈黙を破ったのはナグンだった。

「か、課長、実はですね」

そこまで言いかけ、止まる。アヤリを見据えたまま青年が再び立ち上がり、またもナグンを手で制したからだ。今度は彼に軽く頷いて礼を表しながら。

「そうだ、あんたには名乗ってなかったな。俺の名前はリフィル」「キンゼイ」フィックス。零細企業のしがないネットワーク管理者さ。それから」

ずり下がってもいない眼鏡の真ん中のフレームを中指であげるきざな仕草をし、続けるリフィル。驚くべき核心を携えて。

「元がつくが、地球連邦宇宙軍ルナツー司令部付情報部情報1課で、スパイまがいのことをしていた宇宙軍大尉だったこともあったかな」さすがに目が丸くなった。開いた口が塞がらないとはこういうことなのか。まさか連邦軍の情報将校だったとは。

だが、それならば一連のできごとについても説明がつく。情報処理に長け、隙のない所作をしていても、こちらの経歴を知っている、なにより今起きていることについてなんらかのことを知っていたとしても。

なるほど、ナグンが先にも今も言いかけたのはこのことであり、彼の元大尉は一応はナグンに端末の使用を断ったということか。

さらに言えば、先ほどから感じていた彼から受けた不思議な感覚だが、自分と『同じ臭い』を感じたのもさもありなん。『同業者』なのであれば同じ臭いがするのも当たり前である。

「……なるほど、フィックス大尉、ですか」

「元、だ。今年の春先までのな。どうした中尉、そんな顔をして」よく言えたものである。仏頂面をさせたのは当の本人だというのに。知らなかったのは自分だけ、とくれば憤懣やるせなさが表情に出てしまうのも無理からぬことだ。

さらに、どういう意図か相手がわずかながら不敵な笑みを浮かべていたのだからなおのことである。彼はこんな状況にもかかわらず、こちらの反応を見て楽しんでいるのではないか？ などという憶測すら浮かんでしまう。

「気にしないで下さい、地の顔ですから。そんなことより」

いちいち気にしている場合ではないので彼の意図を受け流し、これまでのできごとを整理して話を進めようとした。したのだが、アヤリの言葉はそこで途切れる。いつの間にかに集まってきた数人の避難民たちの視線に気づいたからだ。

集ったのは避難民のなかのごく一部、比較的高い年齢層の男女だった。おそらく避難直後に起こったひと悶着を鑑み、良識ある年長者を代表的な存在として押し立て、この場を取り仕切るアヤリたち軍関係者と理性ある話し合いができるよう彼らのなかで相談したのだろう。膠着状態になった現状に不安を抱き、偵察に出かけていたアヤリら帰還したのを見計らって状況を確認することを。

彼らの出方を黙って窺っていると、避難民の代表なのか老年期に差ししかかった男性がアヤリの前へと一歩踏み出してきた。

「あんた、連邦軍の指揮官なんじゃよな？」

「ハヤカワ中尉であります。部隊の指揮官ではありませんが、便宜上この場を統括しております」

幾分強張っていた男性の表情は、アヤリが礼を逸しない落ち着いた態度で返したことにより、安心したかのように和らいだ。その心根が舌を滑らかにしたのか、アヤリの返答に言葉を続けた。

「なら、教えてくれんかのう。いったい今、このコロニーはどうなっているのか。シエルターの外へはいつ出られるのか」

言って、彼は後ろを半身になって振り返った。視線の先には疲れ果てて座り込んでいる避難民たちの姿が。彼らの表情は沈み、怯えていた。

「みんな心細いんじゃない。こういう時最も不安なのは『いったい今、なにが起こっているかわからない』ということ。あんたもわかるじやろ」

当然の主張だろう。先にあった避難民とのトラブル原因もしかり、避難民の総意であるのも間違いなかった。

もとより、避難民たちへの状況説明は想定内のことだ。これからの難局を乗り切るためには、彼らの協力は必要不可欠。生き残った人間全てが一致団結してこそ乗り切れる難局だ。

「おっしゃる通りです。実は、これより皆様へのご報告の席を設けるところでした。誠にお手数をおかけしますが、避難民の方々を集合させていただけないでしょうか。その上で一連のできごと、そしてこれからのことについてのご報告させていただければと」

よどみなく、あくまで真摯な態度にて整然と願い出るアヤリ。

それが功を奏したのか、意外にもすぐに状況説明の要請を聞き入れられたからか、代表の男性はしばし黙した後、一言わかったと口にし、同行した者たちを連れて避難民らの元へと戻って行った。とたん、耳を突くのは彼の声。

「ここに初めて来た時に頭に血が昇った避難民を跳ねつけた対応といい今の冷静な対応といい、実に鮮やかだな。災害時を想定した教練映像かなにかにそのまま登場させたいぐらいだ」

「散々な批判の次は褒め殺しですか。色々忙しい方ですね」

いちいち評論してくれるリフィルの言葉には意外にも悪意を感じ

なかった。思ったことをストレートに口に行っているだけなのだろうが、おそらく生来のものなのだろう　　なにか言わずにはいられない上、どこか言葉に棘があるのは。

さすがに軽いなす言葉が出てしまったが、それこそいちいち気になどしてられない。だいたい、避難民の彼らに活路を示す前に、確認しておかねばならないことがあるのだ。ことは至急を要する。

「みんなよく聞いて。時間がないから端的に報告するわね。フィックス大尉、貴方も共に聞いて下さい。その上で、貴方が他に知りえているなにか情報がありましたらお話いただけると幸いです」

性格にいささか問題があるものの、先に披露していた見識は確かなものだった。今がどんな状況なのかをリフィルにも知ってもらい、その上で助力を仰ぐのは理に適っている。もともと、当の本人はそれが当たり前かのように、クールな表情を別段変化させずにいたが、

さておき。皆へ一連のできごとの詳細、背景、偵察行で起こったできごと、エナたちの保護などを駆け足で話すアヤリ。容赦なく厳しい事実、一同の顔色は驚き、そしてにわかに険しくなった。

「まさか、本当にジオンが戦争を仕掛けてくるなんて……」

「焼きが回ったって多分こういうことを言うんじゃない？　あいつ等、とんでもないことをしてかしてくれたわ」

「まさしく正気の沙汰とは思えません」

口々に思い思いの感情を吐露するヒタキ、ラロシエ、そしてナグン。

一方、リフィルは腕組みをしつつ黙したままだ。

「フィックス大尉。なにかご意見は？　今お話したこと以外に貴方が知りえていることがありましたら、どうぞ」

「いいやないね。コロニー落としのくだり以外は俺も知り得ていた情報から推測していたことだが、全てひっくるめてみんな現実として起きちゃったからな」

肩を竦め、お手上げの意を示すリフィル。元情報部の肩書きに多少なにか他に情報がありはしないかと期待したが、やはり半年前に

退役しているという壁は高かった。かなりのところまで推測していたのはさすがだが、現状をより深く解明するための情報源としては彼とて役には立たない。が、

「では、先ほど確認されていた『他のシエルターの状況』についてはいかがですか？」

この一件に関しては別だ。自分では知り得ていない情報を獲得しているかもしれない。前へ進むにはまずそれを確認してからだ。もしかしたらまだ生存者がいるかもしれないという淡い期待。

だが、それは無情にも打ち砕かれる。リフィルが首を横に振ったからだ。

「複数の閉鎖ネットから各シエルターにアクセスし、ここL-4以外にB 1、L 3、G 4の3基のシエルターが稼動しているのを確認した。シエルターは外郭ハッチが開放されれば自動起動するようになっているからな。稼動していないということは、そのシエルターは使われていないということになる」

「ここ以外にも稼動しているシエルターがあることは確認できたのですね？　なら、L 3はこの子たち以外全滅していましたが、今おっしゃったB 1やG 4のシエルターには生存者がいる」

「生存者はいない」

わずかな希望を求めたアヤリの想いは、冷静な、ある意味では冷酷なほど落ち着いたリフィルの声にかき消された。

「シエルターが自動起動していても壊滅するような事態を自らその目に焼き付けているあんたならよくわかるだろう？　L 3シエルターと同じことが他でも起きてるんだよ。シエルターに到着することができても、避難民の集中により正常機能しなかった末、結局壊滅しちまったってことが。万が一を想定してシエルター内の倉庫も検索してみたが、残念ながら生きている人間はただの1人もいない」

言って、リフィルはややまぶたを閉じつつ、さすがに声に沈鬱な色を乗せつつ、最悪の事態を結論づける言葉を続けた。

「このコロニーの生活空間で生き残ってる連邦側の人間は、新たに

2人加えたここにいる170名だけだ」

数千万人暮らしていたペルナローゼ。それが、今や200名にも満たない人々しか生存していないとは。

ある程度の覚悟はしていたが、現実のものとして事実を突きつけられるとさすがのアヤリも堪えた。天井を仰ぎ、目を閉じる。深いため息が自然とこぼれた。

「けれど、私たちは生きている。生きている者は生き残った責務を果たさなければならぬ。無念にも亡くなった人々のためにも……」  
ゆつくりとまぶたを開き、なにかを堪えるように押し殺したような声でそう言いながら、アヤリは皆へと向き直った。1人1人の顔を確認するように見回し、そして言った。

「ペルナローゼから全員で脱出する。成功する可能性は万全じゃない。でも、手はある。なんとしても、これ以上奴らの思い通りにさせるわけにはいかないわ」

息を呑む一堂。この、絶望的な状況下で決して諦めない、活路を見出す言葉を吐いたのだから極自然の反応だ。

もちろん空元気などでは毛頭ない。アヤリの頭の中には、これまで確認してきた事実に基づいた脱出手段が既に形となって展開されていたのだから。

皆を見回しているうちにリフィルと目が合った。彼はニヤリと不敵に口元を歪めた。それは嘲笑などではなく、どこかアヤリを認めたいような、彼女の意図に同意する意思の力を感じさせられた。

「いいだろう。聞かせてもらおうじゃないか、あんたの言う脱出計画とやらを」

「ヒットした。艦はまだ生きてるぞ」

端末ディスプレイとにらみ合っていたリフィルは、唐突に指を鳴らし、情報が表示されている画面を指差した。

「2隻ともですか？」

「ああ、2隻ともだ。リヨンもケルンも大破し、推進系統も損傷しているようだが、まだ死んじやいない。ブリッジと武装を潰す方に意識が偏りすぎて、奴ら詰めを誤ったな」

傍らに立って状況を見守っていたアヤリも、彼の肩越しに身を乗り出しディスプレイを覗き込む。そこには、宇宙港に停泊するペルナローゼ駐留戦隊所属サラミス級宇宙巡洋艦リヨンのサブコンピューターに接触した末の情報 自艦と、僚艦で同じくサラミス級宇宙巡洋艦ケルンの状況が克明に表示されていた。

2隻とも各部武装を全て破壊され、ブリッジも粉碎された上に主推進器にも攻撃が加えられていた。もちろん、これだけのことを行えるのはジオンのMSに他ならない。

では、なぜ撃沈しなかったのか？

否、できなかったのである。宇宙湾で2隻もの宇宙艦艇を撃沈すればどういふことになるか。撃沈によるジェネレーター損傷時の熱量は港湾部にあるシステム統括センターをも破壊し、ペルナローゼに関する一切のコントロールを失うことになってしまっからだ。

もつとも、現時点で戦力差が圧倒的である以上、艦を港外に出さなければそれだけでジオンの勝ちなのだ。港に足止めされた艦船など、たとえ宇宙巡洋艦だとしても張子の虎、石の狸であり、なんの役にも立たない。よって、頭と足、加えて武装さえ潰せば、わざわざ沈めることもなく無力化することができるのである。

これを忠実に実行した形だったようだが、リフィルの言う通り彼らは詰めを誤った。2隻とも、推進器のダメージは自力航行不能に



なるまでは至っていなかったのだから。

「これであんたの言う『脱出計画』、現実味を帯びてきたな」

「とんでもない。現実味、ではなく必ずそのまま『現実』にしますよ。それより生存者の確認、できますか？」

一連の事件が始まってから、いや、開戦して、会話中だった電話が断線してからずっと気になっていたことだ。リヨン機関長であり、アヤリのよき上官よき先達であるマチアス大尉の安否について。

胸を過ぎる不安を抑えながらリフィルの回答を待つ。

「艦内のセキュリティをハッキングしようとしてみたが、ホストが死んでる。サブコンピューターからだ状況確認ぐらいしかできないただ」

キーボードを操作すると、リフィルはLIVEと表示された小画面を幾つもディスプレイに呼び出していた。

「セキュリティの上っ面ぐらいはどうか使わせてもらえそうだ。

リヨンとケルンの艦内カメラ、乗っ取ったサブを引っぱたいて生きているのを片っ端から検索して呼び出してみたが……妙だな」

「なにがです？」

「そら、この辺りに見えるのは弾痕だ。艦内で一戦やらかした跡だな」

小画面に視線を巡らし精査していたリフィルが画面の一角を指さした。映し出されているのはリヨン内の艦内通路であり、画像は荒いが、言う通り指さした通路の壁には小銃弾の弾痕が刻まれているのが見て取れた。

「恐らく強襲してきた敵に対し、乗員も必死の抵抗を試みたんだろう。ただ、地の利があるとはいえ、状況を考えれば不意を突かれた乗員の方が圧倒的に不利だ。大体が、丘で戦うのが専門の陸戦部隊に船乗りが対等に渡り合えるわけがないからな。そう考えれば、残念ながら乗員側に多数の死傷者が出ていてもおかしくない。むしろ、出ていない方が不思議だ。しかしな、見る限りそこらに浮いてる乗員の遺体、数が少な過ぎるんだよ」

小画面の幾つかに映し出されている通路や室内のなかには、宙を漂う連邦軍のノーマルスーツ姿の遺体が見えるものがあった。無重力状態の港に浮かぶ宇宙巡洋艦艦内ならではの、飛び散った血液も小さな球体となって辺りに漂っている。

しかし、言われてみれば確認できるだけでもわずかに2体ほどしか遺体を確認することはできなかった。艦内カメラで確認できる場所が限定されるとはいえ、コロニー住民を全滅させる苛烈さを見せつけた相手だ。作戦に支障を及ぼすかもしれない障害を徹底して潰すに違いないことを鑑みると、艦内がもっと凄惨な状況に陥っていてもおかしくはない。

「抵抗虚しく、白旗上げて投降したとでも考えると説明できるんだが……と、待てよ」

首を傾げていた彼だが、次々と切り替えていたカメラ画像の1つになにかを見つけたようだ。

「これはリヨンの機関室、みたいだが　　おお、こいつはまいったぞ。見る」

片手で頭を抱え、驚いたような、それでいて嬉しそうな声を上げるリフィル。

「さすがあんたが認めてるといふ職業軍人だな、しぶとく生きてるようだぜ。この士官だろ？」

独特な彼流の言い回しで操作状況を説明をしつつ、指し示したくだんの小画面。そこには、壁に設置されている計器が放つほのかな光だけが照明となっている薄暗い室内で作業をしている連邦軍のノーマルスーツ姿の人影が数人映し出されていた。そしてその人影のなかに、薄明かりに照らし出されたなぜかひどく懐かしさを感じる顔を見つけたのだった。

「マチアス大尉！　よく、ご無事で……！」

これまで悲惨で絶望的な光景しか目にしてこなかったため、この吉報にはアヤリも感極まった。反射的に出そうになった歓声を口元を手で押さえて封じる。

正直なところ、マチアスと話していた回線が断線し、直後、現在置かれている状況に突入した際には、彼の安否は絶望的だと半ば諦めかけていたのだ。それが、杞憂に終わった。嬉しくないはずがない。

「『叩き上げの職業軍人』はこれだから恐れ入るってもんだな。それにしても、いったいこいつらはどうやって逃げ延びたんだ？」

一方、リフィルは感心したような、半ば呆れたような顔をして首を傾げていた。その様子がクールな彼に似合わずなんともおかしく、アヤリはさらに笑みを浮かべてしまいそうになったが、それを押しとどめて彼の疑問に答えてやる。

「全ては合流すればわかることです。それから念の為の確認ですが、先方への接触はやはり無理なのですね？」

「止めといた方が無難だな。今でもかなり危ない橋を渡ってるんだ。これ以上、閉鎖ネットから頭出すのは自殺行為だ」

彼の言う通りだった。

『脱出計画』をより確固たるものにするためには、宇宙港に係留されている駐留戦隊の存否を確認する必要があった。港湾部に到達できたとしても、万が一艦船が失われていたら計画を修正する必要があるってしまう。

とはいえ、閉鎖ネット内を泳ぐだけでも危ういというのに、港湾部の2隻に接触することなど外洋へ軽装で乗り出すようなものだ。危険性は計り知れない。

これまで得た情報から、港湾部の保全是敵にとって必要不可欠なことでアヤリは見抜いていた。よって、サラミス2隻撃沈されてはいないと結論づけ、当初は確認せぬまま計画を見切り発進させるつもりだった。

しかし状況は変わった。リフィル「キンゼイ」フィックス元大尉という存在によって。

彼の卓越した情報処理能力により他のシェルターの状況を安全に確認できたところか、飛躍的に危険性を低下させた上で閉鎖ネット

から外洋たる宇宙港の2隻への接触すら可能にしたのだから。

もつとも、さすがの彼でも今ここにある機材のみではそれが精一杯で、他のシステム、それこそシステム統括センターへのハッキング行為等の小細工はできないということだった。また、2隻のサラミスへの接触も100%の安全性はなく、敵に察知されてしまう可能性は否定できないという見解も厳に指摘していたのである。

これに、アヤリは即断した。すなわち、危険を冒してでも港湾部の2隻の状況を確認することを。

彼女は、物事には『勝負に出ねばならない時が必ずある』ということをよく知っていた。そして、その時が始まったということも。

だから彼女は、部下たちとリフィルに考案した計画の全容を語った後、元大尉に港湾部の探索を託したのである。今では全面的に彼の能力を認めて。

しかしてその賭けは見事成功し、求めていた情報を手にすることができた。これで、計画は一段階進んだわけである。

また、リヨンとケルンの乗員の安否もアヤリにとつての懸案事項であり、併せて確認できたことはできすぎと言えはできすぎだった。生存者へネットを介して接触するなどというある種離れ業は、さすがに期待するだけで終わったが。

「どうやら、こいつで俺が協力できるのはここまでのようだ」

安全を期し、用の済んだ端末を外部ネットから切り離すリフィル。確かに端末を使ってやれることはやり尽くした。ここからは自分の役割である。

「おかげで助かりました。活路を切り開くために多くの有益な情報を手にすることができたのですから」

「なに、今のところ俺にできることをしたまでだ。そんなことより、問題なのはこれからなんだろう？」

言って、リフィルは首を巡らせシエルターの一角を見た。追従し、アヤリも横目で彼の視線の先を見る。そこには疲れ切った避難民らの姿があった。代表者らによって集められた彼らは、後から派遣さ

れたナグンの介添えによって着座させられていた。

「そうですね。彼らの賛同を得るということは、もしかしたら敵を倒すことより難しいことなのかもしれません。ですが、選択肢が1つしかないのならば、たとえ困難な道でも後ろを振り返らずに突き進むしかないでしょう。私は、私に与えられた責務を精一杯務め上げるだけです」

悲壮な決意と言えばそうかもしれないが、そこに諦観的なものは一切ない。それが証拠に、アヤリは決して辛い表情を見せなかった。踵を返し避難民らの元へと向う際も、アヤリはリフィルに薄く笑みを向けて一礼したのだから。

と、歩き出した彼女の背中に投げかけられる声が。

「そうだ。1つ気になったんだが、あんた、俺が連邦の元大尉って言ってるのを疑いもしなかったな。俺が騙っているとは思わなかったのか？」

立ち止まって半身だけ振り返ったアヤリは、この問いに肩を竦めて答えてみせた。

「ここで騙ったとしても、貴方になんのメリットもないことはわかっていましたしね。それに、一度『連邦軍』というキーワードが結びつければ、言うところの『同じ釜の飯を食った仲』かそうでないかはわかりますよ。だいたい、騙る騙らないを言うなら、私たちも連邦軍の軍人であることを証明する物的証拠はなに1つないんです。その辺りはお互い様という着地点に落ち着くと思いませんか？ フックス大尉」

「だから元だ、元。散々ばら論破された腹いせの嫌味か？」

ことさら嫌そうに抗議してくるリフィルに対し、

「多少は」

と、アヤリは仏頂面で意地悪く答えた。すると、彼は『参った』とばかりに軽く手を挙げ、苦笑した。

「わかったわかった。わかったから『大尉』は止めてくれ。俺のことはリフィルとでも呼んでくれてかまわんから。過去の肩書きをそ

のまま枕詞に使われるのはどうも気持ちが悪くてかなわん」

彼の降参を受け、アヤリもやや表情を崩してフランクに対応する。「私のこともアヤリで結構です、と言いたいところですが、部下たちや避難民の方々の手前、さすがにそれは難しいでしょうね」

「現役軍人は瑣末な配慮に頭を悩ませられてご苦労なことだな。ま、よろしく頼むぜ、中尉殿。俺が張った防壁は完璧だが、あんたが敵兵を打ち倒したことで、この辺りは間違いなく搜索されるからな」

もったもなことだ。シエルターの稼働状況がシステム統括センターへだだ漏れになってしまふという事態は、リフィルが端末に施した不可視工作と同じ系統の細工を仕組むことで避けることができた。ネット上ではこのL-4シエルターは起動していないことになっている。

問題なのは、L-3シエルターでアヤリが倒したジオン兵の存在だ。彼らをやり過ごすことが事実上不可能だったことを鑑みれば、打ち倒して隠蔽するという行動は最も適切であった。

しかしながら、拘束して隠蔽してきたとはいえ彼らの存在自体が消えたわけではない。搜索に出ていた兵が帰還しないという事実が、なんらかの異変を示すことになるのだから。

帰還しない兵を捜すことに加え、なぜ帰還しないかという異変の原因を探るべく、ジオンが兵を派遣してくるのは目に見えている。

現在時刻は11時半を少し回ったところ。L-3シエルターで一戦行ったのは10時40分を回っていたはずだ。エレカに乗っけたことを鑑みて、彼らが任務を終えて原隊へ帰還するまであれから1時間程度と見積もる。

無線での連絡は、十中八九『ミノフスキー粒子』が散布されていることから考慮する必要はないし、そもそも無線封鎖が行われているはずだ。とすれば、彼らの帰還が遅いということが判明した時点で搜索隊が発するに他ならない。見積もった数字から算段すれば、おそらく正午前後には。

「あんたは悪くない。ただ、あんたから聞いている状況だと、奴らが

この辺りに搜索かけるのは間違いない。時間的にはここを今から30分以内に立しなきゃならん計算だ」

「30分もあれば十分です。むしろ、15分で終わらせませう」

「言ってくれるじゃないか。とはいえ、後はあんたの領分だ。お手並み拝見させてもらおう」

不敵な笑みを浮かべて見送っているリフィルに対し、アヤリは表情を引き締めて頷き応え、再び踵を返して避難民の元へと向った。

正直なところ100%避難民を説き伏せる自信などあるはずもない。もし世の中に満場一致で彼らの賛同を得られる文句なるものが存在しているというのなら、その文句を生み出した人物には最敬礼してでも教えを請いたいところである。

現実から逃避する選択肢などありはしないのなら、後はもう、体当たりでぶつかっていくしかない。根拠のない自信を口にしたのも、やるしかないということを目を自ら鼓舞した現れである。

「課長、避難民の集合、完了しております」

途中、先行して避難民の代表らを手伝い避難民を集合させていたナグンが報告に駆け寄ってきた。それに軽く手を挙げて頷き労いの意を表すと、そのまま着座している避難民たちの前に立った。

160名余の避難民たちの視線が一斉に向けられるのはかなりの圧迫感だが、アヤリはそれら全てを受け止めるかのごとく彼らを見回した後、おもむろにヘルメットを脱いだ。合理性のみを考えるなら、今ヘルメットを取る必要などない。そこを敢えて取ったのは、これから命を預けてもらう人間の素顔を彼らに対し見せやすくするためだ。

それが果たしてどれだけの効果をもたらすかはわからなかったが、顔もよく見えない人間がとうとうと能書きを垂れるよりは、素顔の全てを曝して協力を仰ぐ方が避難民との距離が縮まるのでは、と考えたのである。

額にかかった艶やかな黒髪を軽く頭を振って整えつつ、左小脇に抱えるようにヘルメットを持つと、集中する視線にわずかも臆する

ことなく始めた。

「皆さんお待ちせいたしました。便宜上この場を統括しております、地球連邦宇宙軍サイド2駐留艦隊所属のアヤリ」ハヤカワ中尉であります」

敬礼して軽く自己紹介し、少しばかり反応を見る。避難民らは静聴してくれていた。もっとも、この静けさはすぐにうち破られることになるだろうが。

「これまでに我々の目の前で起きた事態、先ほど近隣を偵察にて目にした光景、そしてその最中に遭遇した敵から得られた情報から導き出された事実を端的に申し上げます。本日早朝、ジオン公国は地球連邦に対し宣戦布告。同時に各サイドへの攻撃が開始されました」息、そして唾を飲み込む音があちらこちらから聞こえてきそうだった。まだ静寂は保たれていたが、避難民たちの顔に一斉に驚愕の色が浮かび上がったのがよくわかる。

ただ、これはまだ序の口だ。おそらく、次の発言が彼らの理性のたがを外してしまうだろう。それを乗り越えねばならなかった。

「当サイド2にも敵艦隊が襲来し、大多数のコロニーは熱核兵器の無差別使用により殲滅。本ペルナローゼは初期核攻撃からは免れたものの、神経ガスによる化学兵器攻撃により壊滅状態にあります。コロニー内の生活空間においてこの場にいる170名以外の生存者は、残念ですが皆無です」

全てを言い終えるか早いか、シエルター内の空気は一変した。冷えたグラスへと急に熱湯を注いだため走ったひび割れのように、張り詰めた幾つもの糸が一気に寸断されたかのように、それまで押し止められていたものが一気に噴出する。

先陣を切ったのは30歳位の女性だった。

「わ、私の夫、夫は中心街で徹夜の残業をしていたんですが、夫はどうなっただんですか!？」

血の気が引いた表情のままフラフラと立ち上がった彼女は、声を震わせながら叫んだ。それが契機となった。



「ボルトモント通りに娘夫婦が住んでおったんだが、無事なんですよ。うか！？」

「リガイに友達が住んでいるんです！」

「母が、母が！！」

次々に立ち上がり、我先にと声を上げる避難民たち。叫ぶこともできずにその場で泣き崩れる女性や、肩を落として呆然とへたり込む男性の姿もあった。

避難民らの間には津波が伝播するように恐慌状態が広がり、それまでの静寂が嘘のように怒号と喧噪、涕泣と悲壮に包まれる。

なかにはアヤリに詰め寄らんばかりに激昂する者もあり、ひたすら肉親の安否を尋ねる者はまだしも、露骨に敵意を剥き出しにし罵声を浴びせてくる者もいた。

想定していた状況が起きた。言葉のみで説明しようとすればこうなることは避けられないことなど百も承知である。

もちろん、最初から避ける方法がなかったわけではない。アヤリたちにはジオン兵から奪取した各種小火器があった。彼らに銃口を向けるなどもつての他だが、目につく所に武器を携行することによって避難民たちを牽制しつつ話を進めれば、混乱は避けられたのかもしれない。

だが、武力を盾にすれば、避難民たちのたがが外れた時の反動も大きい。小規模の暴動を強制的に武力で鎮圧しようとしたことが暴徒の憎悪と反発を増幅させ、かえって暴動を拡大させ、死傷者を多数出してしまうという取り返しのつかない状態にまで発展させてしまった事例は、歴史書を紐解けば数え切れないほど出てくる。

アヤリは収拾不能になる事態をなんとしても避けるべく、万が一の危険を推して、携行していた拳銃と小銃をナグンに預け、かつ武装したナグンとオートーは避難民たちの後背からシエルターの奥の奥へと下がらせて待機させたのである。

武器を持たずに彼らと向き合う道を選んだのは自分であり、その責任は当然己にある。ならば、最後まで彼らを説得するのもまた、

自らに課せられた責務だった。

「お静かに！！」

あらん限りの声を振り絞って叫ぶ。シエルターの天上を突き抜けるかのように高く大きな声を張り上げた。

「お静かに！ どうぞお静かに！！ 落ち着いて下さい！！」

一度叫んだぐらいでは避難民たちの声にかき消されてしまう。アヤリは立て続けに驚くほどの声量をシエルター中に轟かせた。

元々よく通るソプラノの声をしている彼女が、軍隊で鍛えられた経験を最大限駆使して声を出したのである。怒号と喧噪を押し退けるかのようにして、避難民たちの鼓膜を打った。あたかも引き波のように、彼らの間から声という音が消えていく。

それでも声を上げようとしていた中年の男性を目ざとく見つけた彼女は、射るような視線を飛ばしつつ、壁際で事態の趨勢を見守っていたヒタキの方を指さした。オットーから世話を引き継いだ彼女の足下には、エナ・ミト姉弟が寄り添っていた。

「その子供たちは、先ほど1・3シエルターにて奇跡的に救出された姉弟です。2人は実の母親の死を目の当たりにしました。彼女たちは今、泣き喚いていますか！？ 自暴自棄に当たり散らしますか！？」

幼い子供を引き合いに出すのは姑息かもしれないが、エナたちが悲哀を引きずりつつも健気に生きている様を見れば、自身のこゝとしか考えていない人間に対し、彼女たちを見習えと言いたくもなる。

さすがに幼い2人の姿を見て自らを省みたのか、アヤリに睨まれた男性はそのまま押し黙ってしまった。

「我々大人が理性を失ってしまったら、あの子らのような子供たちをいつたい誰が守るのでしょうか。このような時だからこそ、どうかご自分を見失わず、冷静な言動に努めて頂きますよう、深くお願い申し上げます」

先ほどの避難民にだけでなく、ここにいる全ての人々に対して

向けた言葉を口にしながら、アヤリは心からの願いを込めて頭を下げた。

瞬間湯沸かし器のように熱を帯びた彼らだったが、今度は一転、演目が始まる直前にある劇場のように静まり返った。家族なり知人友人なりを失ったかと思われる男女のすすり泣く声だけがシエルタ―内に響く。

頭を上げたアヤリの目に悲痛な面もちの彼らの姿が飛び込んできた。胸が痛かったが、感傷に浸って立ち止まることは許されない。

先を続けようとした時、1人の少女が恐る恐る拳手しているのを目にした。

どうぞ、と発言を促すと、少女は震えながら立ち上がった。

「ほ、本当にここにいる人だけしか、ペルナローゼには生き残りっていないんですか？」

傍らに父母とおぼしき男女がいるため、肉親の安否を気遣って、というわけではなく、友人知己のことを案じてのことだろう。涙を頬に貼りつけたまま、彼女は怯えたような眼差しを向けてきた。

「ええ、コロニー内居住区では。ジオンはコロニーを潰すために神経ガス、つまり毒ガスを使用しています。彼らは綿密な計算に基づいて攻撃を行っていました。極微量でも数千人を殺傷できる毒ガスを計画立てて大規模使用するということは、水をも漏らさぬ殺戮を目的としているからです。シエルターに避難できなければ、『死』から逃れる術はありません」

死、という言葉がことさら耳に張り付いたのか、少女は目を大きく見開いたまま、崩れ折れるようにしてその場にへたり込んでしまった。可哀想だがこれは逃れられない現実であり、目を背けるのは無事生き残ってから初めてできることなのだ。

「そ、そうだ！ 俺たちみたいに他にもシエルターへ避難している奴だって大勢いるだろう！？」

「違うない！ シエルターに逃げ込めば毒ガスにやられないなら、生きてる人間も沢山いるはずだ！ その子供たちがいい例じゃな

いか！」

アヤリの言葉を受けてか、2人の男性が立て続けに他のシエルターに希望を託す発言を重ねた。

「いいえ。シエルター間に張り巡らされている閉鎖ネットを使用して調査した結果、正常稼働しているのはここL-4シエルターのみと判明しております。また、先ほども申し上げた通り、あの子たちが生存していたのは万に一つとない奇跡だったのです。つまり、シエルターに避難できたのは我々だけとなります。希望を打ち碎かれるのは本当にお辛いことかと思いますが、あえて重ねて申し上げます。居住区で生存しているのは、ここにいてる170名だけなのです」

これに、くだんの男性らは表情を凍り付かせて頭を垂れた。

「他のコロニーは核兵器でやられてるって言いいましたね。どうしてペルナローゼだけが毒ガス攻撃をされたんでしょう」

今度は大学生だろうが、眼鏡をかけた知的な青年が、着座したまま淀みない口調で問いかけてきた。

「毒ガス攻撃を受けたのはペルナローゼだけではありません。他、トスカリア、イフィツシュ両コロニーにも行われました。これは、彼らの作戦目的が3基のうちいずれか1つのコロニーを地球の連邦軍本部へと落下させることにあるからです」

「だからコロニーを破壊せず、なかにいる人間だけを殺したということですか？ でもどうして皆殺しにする必要が」

「あるんですよ、その必要が」

青年の言葉を途中で遮るアヤリ。彼女は敢えて冷淡な口調で続けた。

「1基落とせばこと足るにも関わらず、3基ものコロニーを残していることからよくわかります。これほどの大規模な作戦です。万が一の失敗も許されない以上、遅滞なく作戦を遂行するためには不確定要素を極力取り除くことが求められますし、例えその要素が極小なものでも無視せずに排除するのは至極当たり前のことです」

一端言葉を切る。息を吞んで話に聞き入っている青年から、避難

民全体へと視線を移して見回す。

「歴史を顧みれば、一般民衆の力というものは概して侮り難いものです。時代を動かしてきた1つの要素として、政治家でも軍人でもない、どこにでもいる人々の力があります。彼らにとってコロニー住民は決して路傍の石などではなく、幾千の歯車が偶然にも噛み合った際には作戦を覆しかねない脅威として認識されたのでしょう。ですから、彼らにはコロニー住民を1人残さず抹殺する必要があるのです」

不安と焦燥、悲哀と怒りが入り混ざった避難民ら1人1人の顔を見やりつつ、彼らの切迫した心情をひしひしと感じながらも厳しい現実を突きつける。

「しかも彼らは、3基のうちいずれかのコロニーを使用した後、残りの2基は核攻撃で潰す算段でいます。ことが済んだ後は、無用なものとして」

静まりかえるシエルター内。空調が効いているにも関わらず、酷く淀んだ重苦しい空気が一面に立ちこめていた。

沈鬱な静寂がいつ果てるともなく続くかと思われた時、中年女性が叫んだ。

「そうだわ！ こっそり潜んでいるから彼らになにかするかもしれないって疑われて殺されてしまうんでしょう？ だったら、白旗を揚げて私たちは無抵抗だって出ていけば」

「そ、そりゃいい！ ジオンだって手を挙げて出てくる民間人相手に銃を向けたりしないに違いない！」

これ以上の妙案はない、とばかりの声はすぐさま賛同者を呼び起こした。追従した男性以外にも、次々と意を同じにする声上がり、にわかに活気づく避難民たち。

確かに手としては悪くない。民間人の彼らが非武装、無抵抗であることを示して出ていけば、攻撃を受けるどころか無事保護されることだろう。

ただ、それはあくまで一般論に過ぎない。

「お言葉ですが、それは自殺行為以外の何物でもありません」

氣勢を上げる彼らに容赦なく打ち込まれる楔。アヤリは、あくまで冷静だった。避難民たちの声がぱたりと止む。

「なんのために彼らが毒ガスを使用したのか、先ほど小官が申し上げた言葉を思い返して下さい。それに、あのような大量破壊兵器、理性ある人間がこれほど大規模に使用できると思いですか？ 既に数十億単位の人間を殺戮している彼らが、軍人であろうと民間人であろうと今さら極わずかな投降者を受け入れるメリットはなに1つありません。投降しても、彼らはそれを一切無視し、容赦なく冷たい銃口を向けてくるでしょう」

「じゃあ、じゃあこのまま死んじゃうしかないってことですか……？」

悲痛な声。目の前に座っているまだ10代半ばと思われる少女が、目に涙を浮かべてすぎるようにこちらを見つめていた。その肩には、友人だろつか、同年代の少女がすがりついてむせび泣いている。

同様に、あちらこちらで漏らされている嗚咽がアヤリの鼓膜を打った。親しい人を失った悲しみ、怒りが収まらぬうちに、今度は自らの命すら絶望的とわかれれば、もはや無力感に苛まれて涙することしかできないのも無理はない。

だが、諦めることはないのだ。彼らにはまだ生き延びる道がある。その方策をアヤリは持っている。

「大丈夫、貴女は死なないわ、絶対に。私が守るもの」

諦観が滲み出た濡れた瞳を、アヤリは優しい眼差しで見つめ返した。悲哀と不安を払拭してやるかのように。

先ほどまで絶望的なことばかり口にしていたアヤリが、よもやかようなことを言い出すとは思っていなかったのだろう。少女は目を大きく見開き、言葉の意味をそのまま捉えていいものかどうか戸惑っているようだった。それでもなにかを訴えかけようとしたのか、少女の少女の唇が動く。

「どうせ、どうせ死ぬなら、夫に会いたい。会いに行きたい……！」

初めはゆつくりと、だが次第に性急になった叫び声が上がった。

それは、くだんの少女が放ったものではない。顔を上げて声の主を捜すと、立ち上がって避難民の集団から脱し、シエルターのハッチへとフラフラ歩いていく若い女性の姿が視界に飛び込んできた。

「わしも自分の家で死にたい」

「俺も、彼女に会いたい」

「私も」

彼女に刺激された一部の避難民たちが、連鎖的にその後へと続いていく。刹那的な感情が瞬く間に増幅し、自暴自棄的な行動へと移らせていた。

「ごめん、と眼前の少女に断りを入れつつ、アヤリは駆け出した。

なにかに取り憑かれたようにハッチを目指す彼らを追い抜き、アヤリはハッチを背にして彼らの前に立ちはだかった。

「どいてくれ。わしらは死ぬんじやろ。なら、最期は好きなようにさせてくれ」

「いいえ、どきません。どうぞお戻り下さい。皆様には、まだお話することがあります」

初老の男性の訴えに対し、左手でヘルメットの縁を持ったまま両手を左右に大きく広げ、ここから先へは一步も進ませないことをアピールする。すると、その老人を押し退けるようにして、今度は若い男が前に出てきた。

「聞く話なんてもうないよ。どうしようもないってことはあんたが散々口にしていたじゃないか」

「事實は申し上げましたが、打つ手がないとは申しておりません。これからそのことについて皆様にご説明します。ですからお気を確かに持って、どうかお戻り下さい。お願い致します」

狼狽えず、気圧されず、ただただ冷静に答える。

眼前には十数名の避難民が押し寄せている。彼らが力任せに押し通ろうとすれば、押し留めることなどアヤリ1人では到底できるはずもない。彼女にできることは、魂の込められた言葉により彼らを

説き伏せること。が

「いいからどいてよ！ あんたになにがわかるって言うの！？ どうせあんたみたいな軍人なんて、自分の関係者は安全なところにいるんでしょ！ 大事な人を亡くしてもないくせに偉そうな口きかないでよ！」

ことのきつかけとなった女性が、泣きじゃくった後の酷い顔立ちのまま感情に任せて詰め寄ってきたのである。言いたい放題撒き散らしながら、彼女はアヤリの肩口を突き飛ばした。

だが、その女性は知らなかった。自らが口にした言葉に、アヤリの感情を最も揺さぶる意味が内包されていたことを。

努めて冷静に振る舞っていたアヤリの瞳に、熱い炎が灯った。能面のように落ち着いていた表情が一転、険しいものへと変化する。

「私も弟を亡くしています！」

感情を剥き出しにした怒声だった。本能に近い心理を逆撫でされたのである。抑止することはできなかった。

ただ、冷静さをかなぐり捨てた怒声は己の耳にもしっかり届き、それが逆にすぐさま我を取り戻させた。

ほんのわずかな間だったとはいえ、180度豹変したアヤリの様子に圧倒された避難民たちは身じろぎ1つせずに立ち竦んでいる。

一時の感情に任せてしまった士官としてはあるまじき未熟さを恥つつも、彼女は立ち止まったり、そのまま過去を振り返ったりはしなかった。リクトが指し示してくれた『進むべき道』　それが、

今は一条の光に照らし出されているかのように、よく見えているのだから。

「この場においてではありませんが、昨年、事件に巻き込まれ最愛の弟を失いました。ですから、大切な方々を失われた皆様のお気持ちには痛いほどわかります。心から、お察し申し上げます」

広げていた両手を降ろし、右手を胸元へと寄せつつ、表情を曇らせてややうつむく。しかし、なにかを振り払うかのように顔を上げたアヤリは、再び唇を開いた。



「悲しさ、辛さ、憤り……様々な思いがおりになるでしょうし、なにかもを捨ててしまいたくなるお気持ちもわかります。ですが、それで、この向こうで永久とわの眠りに就かれた皆様の大切な方々がお喜びになるでしょうか？ 逆にもし、皆様が不運にも命を落とされたとして、生き残った愛する人々に死を望まれるのでしょうか？」

半身になつて右手をハッチの方へとかざし、一言一言噛みしめるようにして彼らに訴えかけるアヤリ。偽らざる想い、心からの想いを言葉に込めて。

「無念にも志半ばで倒れた方々の分まで生きて、生きて、生き抜くことが、彼らの死を無駄にしないただ1つの道ではないでしょうか。どうか皆様、生きることを諦めないで下さい」

1人1人の顔をゆつくりと見回しつつ、アヤリは想いのたけ全てを伝えた。

これでも聞き届けてくれなければ、もはや手段を選んではいられない。今彼らを外に出すことは、彼らの生命を脅かすだけではなく、ここにいる全ての人間の運命すら左右してしまうのだから。

どうかわかつて欲しい　その想いは、もはや『願い』を越え、『祈り』に近かった。

「……ごめんなさい、酷いことを言って」

駄目か、と思ったアヤリの胸に届いた言葉は、意外なことに彼女に詰め寄ったあの女性の口から発せられたものだった。当の女性を見やると、取り乱していた先ほどまでとはうって変わって、落ち着いた表情を取り戻していた。

「悲しみに暮れて、私、自分を見失っていたわ。貴女の言う通り、私が死んだら……あの人はきっと立ち直れないくらい悲しむものね」

我を取り戻したとはいえ、決して悲哀のある現実が消え去ったわけではない。素直に自らの非を詫びた眼前の女性は、それでも泣き腫らした目を細め、力なくも極わずか、ほんの極わずかに微笑みを浮かべていた。

誰が見てもそれは強がりとよくわかる。自らを恥じ、気丈にも振

舞う彼女の姿勢は、外へと向おうとしていた他の避難民たちの瞳にも焼きついたようだった。

これが契機となっていくばかりでも冷静さを取り戻したのか、彼らは所在なげに視線を逸らしたりうつむいたり、頑なに死の世界へと向かおうとしていた意気を消失させていた。

ただ、我に返ったとはいえ、次にどうしていいのかまでは意識が回っていないのもまた、彼らだった。ならば、その背中をそっと押してやるだけでいい。

「戻って、いただけますね……？」

一言。それは契機の役目を十分に果たした。消沈した面持ちの者、ばつが悪そうにしている者、様相は様々だったが、皆大人しく来た道を戻りだしたのだから。

例の女性も哀惜の情を顔に浮かべてはいたが、小さく会釈して彼らに続いて大人しく戻っていった。

とりあえず騒動を収めることはできたが、これからの説明如何によつては收拾がつかない状態へと発展しかねない可能性を孕んでいる。

腕時計を見ると、時刻は11時40分過ぎ。半ば虚勢だったとはいえ、目標に掲げた時間に差し掛かった。この場から完全撤収し終えるリミットを正午前に想定するなら、遅くとも11時50分には移動を開始したい。アヤリは気を引き締めなおし、避難民らの前へと戻った。

離脱しかけた避難民らが集団に戻って着座したのを確認し、今一度彼らを見回す。ここから話す内容が今後全ての動向にかかり、全員の趨勢に関わってくる。さしものアヤリも、自身の脈動が幾分早くなったような気がした。

「お話を再開させていただきます」

間を取るために1つ咳払いをしてから始めた。

「先ほど申し上げたのは全て事実ですし、我々が置かれている状況は非常に厳しいと言わざるを得ません。しかしながら、絶望するに

はまだ早いのです。我々には、生きてこのコロニーを脱出する手段が残されています」

一旦話を切る。皆にとって有益な内容にもかかわらず、避難民たちに歓声はない。それまで悲観的な話しかなかったために、一転した内容をすぐには理解できず、戸惑っているのだろう。彼らの困惑を取り除くべく、アヤリは具体的な説明に入った。

「これからまず、宇宙港へと向います。もちろんコロニー内は敵の目がありますから出歩くことはできません。そこで、コロニー公社の地下点検通路を使用します。これを伝って宇宙港へと到着した際には、係留されているサイド2駐留軍ペルナローゼ戦隊所属の宇宙巡洋艦リヨンへとまず搭乗します」

さすがにそこまで話すと、避難民たちは顔を見合わせてる者や、目を瞬かせて信じられないといった表情の者、家族同士で肩を寄せ合い喜ぶ者の姿が見られた。にわかにはざわつきが広がる。

ところが、それを遮る声が。アヤリ当人であった。

「ただし、このリヨンでは脱出いたしません」

とたん、再びシエルター内が静まり返る。いったい、この軍人はなにが言いたいのか、脱出させるのかさせないのか、という訝しげな視線を向けてくる避難民もいた。なかなか安心できる核心を手に入れない彼らの気持ちはわかるが、脱出計画の全体像を知らせるには前段もしっかり説明しておかねばならなかったのだ。

「いいですか皆さん、肝心なのはここからです」

いよいよ最も重要な部分に踏み込んでいく。ここにいる170名全員が生き延びるための、活路開く術。

固唾を飲んで避難民が待ち受けるなか、アヤリは核心を淡々と語り出した。

避難民らの反応を見つつ、語りの速度に時折緩急を交えながらも決して澁むことなく脱出計画の全貌を皆に伝えていく。それを、彼らは一心に聞き入っていた。

もっとも、教師が生徒たちに読み聞かせるような時間は、長いよ

うでいて短かった。やがて呆気ない終わりを迎える。

「その後、進路をルナツーへと取り、そのまま慣性飛行。なお、ルナツーまでは約60時間と想定しております」

非常に事務的に落ち着いた口調で話し続けたためか、避難民たちは言葉を忘れたようになにも発しない。おそらく実感としてつかみ切れていないのだろう。アヤリは区切りをつけるためにも「以上がペルナローゼ脱出行程に関する全てでございます」と、説明が終わったことを告げた。

沈黙は、やがて小声でのささやきに移り変わる。戸惑いの色が消えておらず、アヤリのことを信じていいのかどうか考えあぐねているという有様が見て取れた。

確かに彼らが不安に思う気持ちも理解できる。なにしろ、彼女自身ですら100%成功する確信など持ち合わせていなかったのだから。

もちろん懸念を抱いているそぶりなど微塵ほど見せはしなかったが、毅然とした態度だけでは彼らも納得しないだろう。

とはいえ、脱出計画はまったく荒唐無稽なものではなく、様々な情報と状況を勘案して論理的に企図したものである。完璧な計画など世にあるはずもないが、決して成功率が低いわけでもなかった。

これを彼らに納得してもらわねばならないのだが、計画を安堵する物証がない以上は残り少ない時間のなか粘り強く説得する他はない。

だが、機先を制したのは避難民たちの方だった。

「政治や軍事のことはよくわからんが、本当にその方法で大丈夫なんですかね？」

気の弱そうな中年男性が、全ての避難民の不安をまさに代弁する発言をした。続けて、今度はまだ10代とおぼしき少女が、疲れきった色を表情に浮かべて言った。

「コロニーを脱出しても、外にはジオンがウヨウヨいるんでしょう

？ 彼らに見つかりでもしたら……」

尻窄みになる言葉。それが彼女の心の内をよく表していた。初め中年男性に、次に少女へと集まった避難民らの視線は、そしてアヤリへと向けられた。彼らが発した問いかけに、いったいどのような解をもたらしてくれるのか、と。

正念場であった。下手な言葉は彼らの心にさらなる不安を呼び起こす。慎重に言葉を選びつつ、それでも彼らの動揺を誘わないかという懸念と戦いながら、アヤリは説き伏せるために唇を開いた。

「この話、私は乗らせていただきますよ」

彼らに少しでも安心を与えようと、ことさら落ち着いた声を絞り出すために息を吸い込んだアヤリだが、結局突然耳を打った言葉にその先を遮られてしまう。

唐突に声を上げたのは、隣に妻とおぼしき女性、反対側に幼い娘を連れた30代半ばと思われる落ち着いた容貌の男性だった。

回りの視線が一齐に向けられているなか、彼はアヤリに視線を向けたまま続けた。

「ようやく思い出しましたよ。貴女のお名前、お姿、どこかで拝見したことがあると思っていました。まさか、あの『サイド4不審船事件』を見事解決された英雄がここにいらっしゃるなんて。気づいた時はさすがに我が目を疑いましたよ」

驚いたという有様を表現するかのごとく少し鼻で笑うと、彼は表情を引き締め直して続けた。

「少ない情報や戦力、さらにごく限られた時間という圧倒的に条件が悪いなかでの解決劇は実に驚くべきことでした。加えて貴女は、襲撃された民間船に肉親が搭乗していたにもかかわらず、お身内よりも他の乗客を優先して救出されていた。不幸にもお身内と乗員それぞれ1人ずつ還らぬ人となられてしまいました。貴女の取られた行動は腐敗も著しいと聞く連邦軍にあって目を見張るものでした。その貴女が私たちを導いてくれるというのなら、これに勝ることはない。他にいい手がない以上、私は彼女を、ハヤカワ中尉を信じま

す」

真っ直ぐ向けられた視線に揺るぎはない。彼が口にした台詞は、上辺だけのものでも、単に助け舟を出しただけのものでもなく、彼の心からの思いであることがよくわかる。

彼の思惑はどうあれ、その言葉は結果的に見事な援護射撃になった。ある意味、窮地に追い込まれていたアヤリを救い出したのだ。避難民らの空気が一変したことがそれを証明してくれた。

「そ、そうか。あんた、あの事件の少尉さんだったのか」

「私も知ってるわ。身を挺して多くの人を助けたのよね」

「英雄が俺たちに力を貸してくれるんだ。本当に助かるんじゃないか？」

「そうだ、そうに違いない！ 俺たちは助かるんだ！」

人間えてして現金なものだが、あれだけ不安げだった避難民たちがにわかに活気づいた。それはもちろん、先ほどの彼の言葉が効いているのだが、なによりアヤリその人がこの場にいたという事実が彼らを安心させたのだ。アヤリ自身が計画を安堵する物的証拠そのものとなったのである。

ごくわずかな時間で劇的なほど風向きが変わったことに、さしものアヤリも目を丸くして呆気にとられていると、いつの間にか背後に迫る気配があった。我に返って振り向くと、見慣れた不敵な笑みを唇の端に浮かべたリフィルがいた。

「あの男に出番を取られてしまったようだな。いざとなったら俺がサクラ役でもやってやるうかと思っていたんだが、どうやらあなたの功績はあまねく知れ渡っていたようだ。人間、善行は積んでおくものだな」

どうやら彼なりに自ら協力しようとしてくれた上に、言いたい放題言う割にはその実こちらを評価してくれたらしい。毛嫌いされていると思っていたので、これまた起こった意外な事態に怪訝な眼差しを向けてしまう。するとリフィルもその意図を読み取ったのか、勘違いするなよとばかりに表情を一変させて「なにをばやっとして

いる。彼らの気が変わらんうちに行動に移すのがあんたの役目だろ？」と素っ気無く指摘してきた。

協力的なことを口にしたかと思えばすぐにこれである。一体どう了見なのか問い詰めたくなるが、彼の言うことはいちいち正しい。腕時計を見ると50分がすぐそこまで迫っていた。

いささか流れに任せてしまっている感はあるが、彼らの思考が脱出に肯定的になっているこのタイミングを使わない手はない。

「時間がありません！ 移動を開始しますので、バイザーを降ろし機密確認をして下さい！ その後は各隊員の指示に従ってすみやかにシェルターから退去して下さい！ なお、コロニー公社関係者の方、技術者等の専門職の方がいらっしゃいましたらこちらへお申し出下さいますようお願いします！」

活路が開けたことに湧き立つ避難民たちへ声を張り上げて脱出と協力を促すと、彼らを囲むようにして立っていた部下たちに目配せして指示を出す。これを受け、事前に打ち合わせしておいた通りナグンとオットーは避難民らを点検用の地下通路へと誘導し始める。

また、地下通路へのハッチがある倉庫前に移動したヒタキとラロシエは、あらかじめ彼女らに準備させておいた緊急用の小型追加酸素ボンベや非常糧食が封入されている手持ちサイズの個人用エマージエンシーパックを、倉庫内へと入っていく避難民たちに配っていた。一方、アヤリの前には避難民の列から外れた人々が集まってくる。そう、彼女が呼びかけた専門職を生業とした者達だった。

残念ながらコロニー公社関係者はいなかったものの、その下請けで配電網の工事を請け負っていた会社にて電気技師をしていた人物がいたのは大きな収穫だった。彼は普段から地下で作業し、網の目のように張り巡らされた通路を熟知していたのである。水先案内人としてこれ以上なく強力な味方だった。

他にも避難誘導を手伝ってくれたペルナローゼ公職関係者や通信技師、看護師、加えてスペースグライダーのライセンスなど、今すぐには能力を必要とされずとも、力を借りることになるやもしれ

ない技能を持った人々が協力を申し出てくれたのである。なかには弁護士もあり、名乗り出てくれた意気はありがたかったものの、『今最も役に立たない資格の1つ』でもあったため困惑の苦笑いを浮かべてしまったが。

人の相談に乗ることには慣れているだろうと、とりあえず避難民たちの相談役になって欲しい旨を伝えつつ、速やかに脱出するように促し、先行させた専門職の歴々の後を追わせ弁護士の背中を見送ると、最後にあの援護射撃をしてくれた男性が家族とともにアヤリの前へやってきた。

「貴方は先ほどの。ご協力いたみます。おかげで時間的ロスを回避できました」

「どうぞお気になさらずに。全て事実なのですから。それに、私にも守るべき家族がいます。彼女たちを救うためなら、最も確率が高い生存の道を迷わず選択しますよ」

腕を回して娘の肩を抱く男性。そのさりげない所作に、彼の家族に対する深い愛情を感じた。

「トウロワ」ハーティと申します。開業医を営んでおりまして、貴女が始めてここにやってきた時に伴われた2人の患者を既に診させていただきました」

差し出された手にアヤリも手を重ねながら、彼の言葉を脳裏で反芻する。

避難民のなかに医師がいなかどうか確認するよう、幾つかの指示を出すなかの1つとしてナグンに命じていたこと。また、ガスに倒れて搬送した2人の避難民の面倒を当初頼んだ看護師以外にも医師が見つかり、その診察を受けたという報告を脱出計画の打ち合わせをした折に彼から受けていたことを思い出す。

「貴方が医師様でしたか。報告は受けております。2人の容態は安定しているですね」

「ええ。人の力を借りなければさすがにともに歩けません、衰弱した体力さえ回復すれば問題はないでしょう。精密検査を受ける



必要はありますが、初動処置が迅速かつ適切だったため、後遺症等  
は残らないかと。貴女の手腕ですよ、ひとえに」

先ほどから彼、ハーティには持ち上げられっぱなしである。加えて、落ち着いた感じの穏やかな表情で言われるのは、お世辞などではなく本心からの思いを向けられているように見え、言動をより確たるものに行っている。もともとあまり褒められ慣れていないアヤリにとってとはとまどうしか他なく、気の利いた台詞を吐けるわけもしに、ただ「い、いえ」と情けない声で謙遜するだけだった。

「とにかく、今後もなにかの力になればぜひ協力させていただきますよ。貴女には私の妹を救っていただいたこともありますしね」

今度は純粹に訝る話だった。少し困惑した色を表情を浮かべ、小首を傾げる。彼の妹を救ったことなどあつたらうか？

「不審船事件で貴女が救った乗客のなかに私の妹もおりまして。貴女の活躍がなければ、今頃妹はこの世に亡く、結婚したばかりの彼女の夫を忘我の淵へと追いやってしまうところでした」

戸惑うアヤリに配慮して詳細を話した後、その節は誠にありがとうございました、とばかりに頭を下げるハーティ。アヤリは恐縮してすぐに頭を上げさせた。

「こ、こちらこそどうかお気になさらずに。小官は軍人として当然のことをしたまです。妹さんが助かったというのであれば、その事実だけで小官は十分なのですから。ご協力、心から感謝いたします。避難民のなかにはお年寄りや小さなお子さんもいらつしやいます。脱出行の最中には体調不良を訴える方も出てくるかもしれませんので、その際にもお力になっていただければ幸いです」

微力ながら尽くさせてもらいますよ、と言う彼にあらためて礼を述べると、負傷者が出た時のためにとヒタキに用意させておいた救急医療キットを倉庫前で彼女から受け取ってもらう旨も併せて伝え、ハーティらを送り出した。

次は、と今後の手順に思考を巡らせながらヘルメットをかぶり、バイザーを降ろす。避難民らの退去誘導は部下たちが専従してくれ

ているので問題ない。今自分がなさねばならないのは手筈通りの『工作』だ。

「さっさと片付けるぞ」

素っ気無い声に振り向くと、いつの間にか『獲物』を手にしたりファイルが「ぐずぐずするなよ」とばかりに無遠慮な視線を送っていた。

そもそも、部下とこれからのことを打ち合わせした際、同席していたリフィルが「4シエルターを退去する際に施していく『仕掛け』についての提起を行ったことが発端だった。その目的は『敵の追撃をかわす、あるいは幻惑する』点にあったが、彼が説いた内容に疑問を挟む部下いた通り、まともに考えればまともな『仕掛け』とは言い難かった。

それでもリフィルの言を受け入れたのは、当人が情報戦のプロだったこと以上に、彼の提起には感覚的に通じるものがあつたからである。おそらく、自分も同様の結論にたどり着いたろうということに気づいたのだ。

よって、彼の言を受け入れ、避難民の退去が始まったら工作活動に移ることになっていいのだが、ナグンらは避難民の誘導等にかかるため、手隙なのはアヤリだけになる。

当然のことながら率先して『仕掛け』の任を引き受けるアヤリだったが、意外なことにリフィルも協力する旨を申し出てきたのである。発案者としての行動と考えれば当然のことなのだが、一応彼は今や民間人だ。アヤリらと異なり、先んじて退去すべき人間であるところを彼曰く、「言つたろうが。使えるものはなんでも使う」だそうで、そのためには自ら率先して身を粉にするのも厭わないということのようにだった。

有限実行の姿勢は見上げたものだが、相変わらず『我が道を行く態度』には辟易を通り越してむしろ天晴れとも思え、一連の彼の行動を顧みた彼女はつい失笑してしまう。

「なんだ、なにがおかしい」

「いえ、別に。癖なんでお気になさらないで下さい」

眉をひそめた彼の手から、『Keep Out! This s  
helter is under construction.』  
工事中につき立入禁止』と印字されたA4サイズの紙をその場を  
誤魔化すようにひったくる。

これに、

「人の顔見て笑い出すような癖は直した方がいい。人としての感性  
を疑われても仕方なくなるぞ」

と、切り替えされてしまう。もちろん、こちらが『癖』などで失笑  
したのではないことを見抜いた上での嫌味に相違ない。

見事にやり返されてしまい面食らったアヤリはつい目を剥きそう  
になったが、刹那で思いとどまった。

「私がこれ进行处理しますので、リフィルさんは配電系の方をお願い  
します」

さらりと流すように言つて、アヤリは彼に背を向けシエルターハ  
ツチへと向うが、慌てた立ち去り方は誰が見ても『逃げ出した』と  
見えるに違いなかった。

リフィルと会話を交わすとうも調子を狂わされてしまう。自分  
のペースで主導権を握れず、いつの間にか相手のペースになってし  
まうのだ。こんなことは初めてのことであり、ここに至ってはつき  
りと彼のことを『苦手』と認識したのだった。

とはいえ、彼の貴重な能力は脱出行にぜひと活かしてもらいた  
いという側面もあり、苦手だからと接触を避けることもできないと  
いう二律背反がのしかかる。

最も大変な相手というのは、ジオンでも避難民でもなく、実は彼  
なのではないか、などどちらもないことをつい考えてしまうが、  
くだらないことに頭を悩ませている自分に気づき、苦笑いを浮かべ  
胸中でつぶやく。

でも、こんなくだらないことを考えられるのも生きていれば  
こそ。負けるもんですか。必ず生きて脱出してやるから。

刻一刻と活路は狭くなっていくが、可能性がわずかでも残されている限りは絶対に諦めない  
表情を引き締め直したアヤリは、颯爽とハッチへと歩を進めるのだった。

宇宙世紀0079年1月3日正午。

奈落の底へと落とされた世界の悲劇は、依然、終わらない。

第一戦闘配備が発令され、灯火管制が敷かれているため赤色灯の照明と計器類の光だけが光源となっているプライマリーブリッジ（第一艦橋）。薄暗いブリッジ内からは、強化樹脂製の正面ウィンドウ越しに瞬いている星々の姿をことさらよく見ることができた。

人類の営みなど爪の先ほどにもならないほど悠久なる時の流れを渡ってきた天幕の子らは、突然光の尾を引いて右方向へと一斉に動く。

否、彼らが動いたのではない。取り舵 艦が大きく左へと転舵したのだ。

大きく艦体を左に傾斜させながら進路を変更するムサイ級宇宙軽巡洋艦ミュンストメル。ウィンドウからの眺望は、瞬く間に変化を見せる。

太陽光を反射している3基の巨大なミラー。その中心で回転している人類史上最大の建造物スペースコロニー群が、遠き星々の光を打ち消すように眼前の宙域を占めていた。

同心円状に整然とコロニーが配置されたこのラグランジュポイントとはサイド2 通称ハッテ と呼ばれており、まだかなりの距離があるにもかかわらず、一群の巨大さは妙な威圧感を伴って感じることができた。

とはいえ、宇宙に浮かぶあの無機質なシリンダー1つに数千万の人々が暮らしているなど、旧世紀の人間から見ればなにかの冗談に感じられるに違いない。

このサイドに配置されているコロニーは開放型と呼ばれるもので、太陽光をミラーの反射により内部へと取り込み生活光としているため、宇宙から内部を垣間見ることができる。幾重にも積層された対圧・対衝撃・対宇宙線等の防護措置がなされているとはいえ、生物にとっては死の世界である宇宙から地球上と変わらない生活空間を

透過素材ごしに目にするなど、それこそ冗談以外のなにこともないだろう。

内部に人工太陽を発生させて生活光を確保する密閉式コロニーで生まれ育った身としては、旧世紀の人間同様の印象を抱くのもおかしくはないと妙に納得する。

ミュンストメルブリッジ後方、通信士官席の傍らで計器の外枠に立て肘を支えにして立ち、ウィンドウの向こうに広がる世界を眺めていたマノン「ヘッセ大尉は、唐突に鼓膜をなでつけたどこか皮肉げな『男の声』に鶯色の瞳を内包する大きな目を細めた。

「いよいよすな」

「おお。目にももの見せてくれる、連邦の無能ども」

それは、例の『男の声』を受けての発言。マノンの視線の先、ブリッジ中央辺りに設置されたキャプテンシートに腰掛けるミュンストメル艦長と傍らに立つ副長のやりとりだ。

高揚した『男』の声はブリッジ中に響き渡り、艦長副長のみならずブリッジ要員全員が固唾を飲んで聞き入っている。当然だ。彼の言葉は、これから始まるできごと全ての引き金となるのだから。

顔を見ずともブリッジに詰める乗員たちの士気の高まりをノーマルスーツ越しに感じるができる。正直マノンはそこまで感情を高ぶらせていなかったが、大多数がはぐれ者の寄せ集めによって構成されたこの艦隊独特の雰囲気がまざまざと表れている彼らの意気は不快ではなかった。

「大尉。艦隊司令代行から入電です」

通信士官の若い少尉が、どこか遠慮がちに声をかけてきた。作戦直前に転属してきた生真面目な新米士官で、規格外の荒くれ者の多いこの艦隊はさぞ居心地が悪いことだろう。艦隊最精鋭の1人と自他共に目されている自分に対し、彼が一步引いた態度を取るのも当人にとっては当たり前なのに違いなかった。

とはいえ。

勇戦する様について畏敬の念を覚えられるなら気分も悪くないが、

実際にこちらの人となりを見聞きしたわけでもないくせに、伝聞だけで露骨に態度を決め込む根性が気に入らない。

「ご苦労」

そちらがその気ならこちらと同じ。マノンには短く酷く突っけんどんな声音を向け、彼を押し退けるようにして通信装置の前に立つ。痩身ではあるが、マノンの背丈は彼の少尉よりも大きく、威圧感十分である。ましてや、威圧される方が座席に腰掛けているのだから効果は倍増だ。彼はマノンに座席を明け渡すかの勢いで腰を引き、通信装置のディスプレイを明け渡していた。

自身の態度を貫き通す根性もないくせに背伸びをしてしまった見せかけ少尉のことなどもはや眼中に入らずにディスプレイに向かうと、不敵な笑みを浮かべてこちらを見つめている、艶光りする黒髪を背に流した眼光鋭い女性将校の姿が映し出されていた。

本来なら宇宙艦艇の艦橋になどあるはずのない猛獣の毛皮で飾り付けられたソファにゆったりと腰かけ、手に持った鉄扇をもう片方の平手へと暇をもてあそぶかのように打ちつけている。戦闘配置にもかかわらずノーマルスーツを着用せず、一欠けらの緊張も見受けられないその様子は、泰然自若という言葉がそのまま人の皮をかぶったような印象を与えた。

『なんだい、この期に及んで随分と余裕のある面をしているじゃないか。』

美しくもどこか妖しさを醸し出す30台半ばの艦隊司令官代行は、真紅の口紅で彩られた一際目の引く唇から妖艶な声を紡ぎ出した。

「とんでもない、これでも緊張しているつもりですわ。第一、シーマ様の悠然としたご様子に比べれば、わたくしなど星屑ほどもありませんもの」

肩を竦め、ある意味ふてぶてしい物言いですマノン。そこには皮肉じみた謙遜と本心からの畏敬がない交ぜになって込められているが、聞く人間が聞けば顔を青ざめるに違いない。

この艦隊でくだんの艦隊司令代行にこのような口がきけるのは、

マノン以外にはウリム中隊のウリム大尉、宇宙軽巡洋艦トラークルメル艦長ビオトープ大尉ぐらいなものであり、チンピラが軍服を着ているようなはぐれ軍人でも彼女に対しては襟を正す。御座艦であるチベ級宇宙重巡洋艦リリー・マルレーンの艦長コッセル大尉も系列的にはマノンらと同位なのだが、意外にも実直な彼は無駄口を叩かないため論外だった。

もっとも、艦隊の人間が彼女に対して背筋を伸ばすのは『畏れの念』があるから、という理由だけではない。純粹に彼女　シーマ　「ガラハウ少佐を慕う思いがあるからこそである。物怖じしてないとはいえ、マノンとて彼女に対しては例外なく心からの敬意と忠誠を抱いていた。

もちろんシーマも部下たちの心情を見抜いており、マノンの立ち居振舞いにも常に絶妙な返しを寄越すのだった。今回は『高笑い』という返しを以って。

『面白いじゃないか、マノン。それだけ吐ければ十分だ』

ひとしきり笑い倒したシーマは、一転、ずっと目を細めて鋭いナイフのような表情のない面持ちになる。彼女本来の姿が現れた瞬間だ。

『おまえにはペルナローゼの港湾部確保という重要な任務を託している。あたしらは一蓮托生だ。肝に銘じて暴れてきな。いいね』

「もちろんですわ。シーマ様のご期待を裏切ることなく、最大限の戦果を上げてまいります」

艶かしさのなかに強烈な威圧感を内包しているシーマの言に圧倒されてしまいそうになるが、そこは彼女の下で幾多の苦境を乗り越えてきたマノンのことである。薄っすらとこめかみに脂汗を浮かべながらも、受けて立つとばかりに唇の端に小さく笑みを浮かべつつ、敬礼をもって応えるのだった。

『その意気さね。吉報を待つ』

「はっ！」

襟を正したままディスプレイが暗転するまで待ち、シーマの姿が



消えるとともに若干肩に入っていた強張りを解く。大概の人物を相手にしても物怖じしない自信はあるし、それはシーマを前にしても同様とは思っているのだが、真なる彼女の姿を見せつけられるとさすがに自分では平静を保っているつもりでもどこか意識してしまふ。彼女への畏敬の念はもちろんのことだが、凋落した旧家 端的に言えば『没落貴族』という言葉が適切か 出で、ただでさえうだつの上がらなかつた自分を拾ってくれたシーマにはもとより頭が上がない大前提があるのもまた事実。古い説話に描かれているシヤカの手ひらにある云々と同様というところか。

だからといって不満などは欠片ほどもない。

むしろこうして彼女の下で働けることは喜ぶべきことだ。本来の司令官であるあのアサクラ大佐が遙任という形で任命されず、前線に出張ってきて指揮を取られたかもしれないことを想像するだけで反吐が出る。汚れ仕事は部下に押し付け、指揮官の最低限の務めたる作戦に対する責任を負うことを忌避するような人間を誰が受け入れられようか。

艦隊の誰もが『シーマ海兵上陸部隊』という正式名称に誇りを持っていることから、皆が同じ思いであることに疑いはない。

だが、部隊外の多くの将校から下士官・兵に至るまで、シーマは畏怖と嫌悪の眼差しでしか見られておらず、ひいてはシーマ艦隊の誰もが同じ穴の貉として蔑視されていた。昨年の国家総動員令が発令された後、マハルから多くのならず者、はぐれ者が集められて艦隊が今の形になったのも推して知るべし。

だからこそ、である。

だからこそ、このような作戦でも与えられたものは完遂し、上から見下している連中に一泡吹かせねばならない。シーマのためにもシーマ艦隊全ての隊員たち自身のためにも。

マノンが心中期する一方、事態は刻々と移り変わっていた。

時折緩急を織り交ぜつつ、およそ数分に渡る『彼』の演説は事前に伝えられていた通りの脚本をなぞり、いよいよ中盤を越え、佳境

へと差し掛かっていたのである。

「予定通りだ。全艦攻撃用意、最終チェック」

「了解。全艦攻撃用意、最終チェック」

艦長の指示を受け、オペレーターが待機中の各担当指揮官へと指示を伝えていた。

『その時』が近づいている。プライマリーブリッジに詰めていた用件　シーマからの檄を受けること　も完了した以上は、急ぎMSデッキへと戻り自己の中隊　ヘッセ中隊の指揮に移らねばならない。

艦長らへの挨拶もそこそこに、マノンは急ぎ格納庫へと向った。

ムサイ級のMSデッキはブリッジ直下、左右斜め下方に伸びた一対のメインエンジンナセルを支えるフレームの基部に設置されており、主砲や各部武装ならびに兵員の居住区や倉庫等のある前部ブロックも接続しているため、各ブロックの結節点に備えられた形になっている。

エレベーターで2ブロックほど降り、開いたドアの向こうに伸びる通路を抜け、バイザーを降ろしてエアロックを出ると、眼前には広大なMSデッキが。

本来ならそこには3機のMSが専用の駐機ベッドに固定されているはずだが、既に発艦・攻撃位置についているため今は1機の姿もない。さらに、艦の進行方向とは逆側に口を開いている発艦ハッチが全開になり、戦闘配置下の赤色灯のほのかな明かりのみとはいえ、わずかながら照明のあるMSデッキの薄暗さとは明らかに異なる深く重い暗幕が果てなく視界を占めていた。

だからだろう。MSデッキ中央に待機している5艇の強襲降下艇群など、実寸以下の大きさにしか感じないのは。

無重力ならではの利点　どこまでも生きる慣性保存の法則をこくなめらかに行使。軽く床を蹴り、靴底に仕込まれた電磁石の力が及ぶ範囲から脱すると、身体は緩やかに前方へと流れていく。見る間のうちに深緑塗装のなされた強襲降下艇が迫ってくる。

正確にはもちろんこちらから接近しているため、強襲降下艇が移動しているわけではないのだが、様々な対比で小さいと錯覚させられてしまっている視覚にとってみれば、実際の大きさを把握できる距離になればなるほど先ほどの感覚との誤差に戸惑わされても不思議はない。物を見る時に実は影響を与えている大気の干渉を受けない真空中という環境下にあることもまた、視覚の不確かさを助長させていた。

宇宙ではまず遠近感を鍛えることが必須でありその訓練を受けてもいるマノンなので、違和感は覚えても混乱することなく、視覚が捉えた映像とそれによって感じた空間認識に冷静な思考の補正を入れて対処することができたため、至極落ち着いた所作で深緑の地にホワイトで『01』と抜かれたナンバーを持つ強襲降下艇のもとへと降り立った。

強襲降下艇は任意の目標に迅速に兵力を投入するために建造された小型宇宙艇で、角材のような無骨で飾り気のない外観をした全長12メートルほどの船体は、艇首側に艇のほぼ横断面積に近いハッチがあり、硬質樹脂製の透過素材に囲まれたコックピットは艇尾上方少しせり出す形で設置されている。海上で使用する強襲揚陸艇と同様の構造と言えた。

個々が携行する兵装以外にも搭載する諸兵装があるため、1艇につき収容できる兵員数 - これはもちろん、立ったまま搭乗する数字である - は30名。4個小隊と指揮班の人員で構成されるヘッセ中隊の総員は164名であり、定員通りに搭乗すると14名も足が出ることになる。

元々余剰装備など一切なく、設計段階から必要以外のものは削られるだけ削っているのだが、コックピットのパイロットシートやエマージェンシー装備までも取り外してスペースを確保し、14名を5艇に分散搭乗させることでこれを解決していた。

必然、完全武装した隊員たちがすし詰めになり、艇内は戦闘する前から戦場のような有様を呈している。これでMSデッキのハッチ

が閉じており、空気が入った状況だったならば当然『声』も聞こえてくることになっていた。

暑苦しい男どもから不平不満の集中砲火を浴びせられずに済み、今は宇宙に大気がないことに感謝するばかりだ。

くだらないことを考えながら艇首側から艇内を覗くと、兵員を少しでも奥へと詰めさせようと奮起している士官の姿が。マノンはその士官のヘルメット後頭部側に自分のバイザーを接触させ、「ヴァイラント中尉、なにを遊んでいるのですか？ 作戦開始までもう時間がありませんよ」と、いわゆる『お肌の触れ合い回線』 接触した物同士の振動により音声を伝える方法 にて話しかける。無線を使用していない時は、真空中でのお手軽な伝達手段だ。

すると、驚いたためか、慣性保存の法則を最大限活かしてその場でフィギュアスケートよろしく大回転しそうな勢いで振り返ったヴァイラント中尉は、自分と大して変わらない年齢なものの、ことのほか幼く見える童顔を真っ赤にしてバイザーにバイザーをぶつけてきた。

「お戻り遅いですよ、大尉！ だいたい時間がない、などというのは私の台詞ですよ！ それより遊んでいたなどとは心外です！ 大尉がいらっしゃらないから私がどれだけ苦労したことか！」

目を剥き、口角泡を飛ばす勢いで喚き散らすヴァイラント。

中隊の指揮班でマノンの副官たる任についている彼は、いい意味でも悪い意味でもいい加減な人間の多いこの艦隊のなかでは数少ない堅物の1人だった。多少融通の利かないところは玉に瑕だが、自分もあまりまともではないと思っているマノンにとって彼のような副官は実際貴重であり、単に堅物なだけではなく事実有能なためありがたい存在でもある。先ほどのようにからかって体のいい玩具にしてしまうのはご愛嬌であり、本質的には心から感謝していた。

ヴァイラントもその点は心得ていてくれるようなのだが、面と向ってからかわれたのを受け流すしたたかさは堅物だけに持ち合わせておらず、童顔通りの若さを見事に露呈してくれていた。

「そもそもいくらシーマ様からの檄を頂くとはいえ、作戦開始直前に部隊を離れるなど」

「ああもうわかりましたわかりました。どうせわたくしが全て悪いんですわ」

ヴァイラントの剣幕を遮るように負けじと声を上げる。かと思わ  
せて、急に声のトーンを落とし、表情を曇らせ伏目がちに。急激に  
態度を変える中隊長の様子に目を白黒させた副官は、膨らませた風  
船を針で突いたかのごとくそれまでの勢いを失わせ、「た、大尉？」  
と人の良さを全開にして心配げに声をかけてきた。それを見たマノ  
ンは一転悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「なんて白々しいこと、わたくしが口に出すとても？　まだまだで  
すわね、ヴァイラント」

見事に引つ掛けられたことに遅まきながら気づいた当の中尉は、  
再び顔を真っ赤にし、あまりのことになにを口走っているのかわ  
からなくなったようで、丘にうち揚げられた魚のように口をぱくぱ  
くさせていた。

さらに、艇内の隊員たちが身振り手振りで囁し立てたのが留めと  
なった。声は聞こえずとも、中隊長と副官の夫婦漫才とも言つべき  
かけあいの中隊中に知れ渡っており、2人の仕草で全てを悟ってい  
た隊員たちはことの顛末に大満足とばかりにやんややんやと狭い艇  
内で盛り上がっていた。

肩を落として落ち込む副官に、くだらないことで喜ぶ単純明快な  
隊員たち。自分もその一味であることを棚に上げ、とてもこれから  
重要かつ重大な作戦に赴く一団とは到底思えないギャップに苦笑い  
しつつも、午前7時19分という時刻をノーマルスーツ備え付けの  
腕時計で確認したマノンは、ヘルメットに常備されたスピーカーの  
音量を上げた。とたん、例の『男の声』が鼓膜を叩く。演説は終局  
を迎えようとしていた。

先ほどから延々と流れてはいたのだが、内容を事前に知っていた  
上、『男自身』にはなんの興味もないために音量を絞っていたのだ。

いよいよ迫った運命の時は彼の宣言とともに始まる。

「ヴァイラント、全艇発艦用意。行きますわよ」

それまでのいい加減な有り様が霧散するかのように、マノンの整った顔立ちから表情が消える。ふざけた時間は終わりだ。

上官の二重人格ではないかとも思えるほどの切り替えのよさを熟知しているヴァイラントも伊達ではなく、金持ちのぼんぼんのように情けない立ち居振舞いをしていたのが嘘のように表情を引き締め、背筋を正して敬礼すると艇内後部のパイロットへと手信号を送っていた。

マノンは自身も艇内へと入ると、スピーカーの声に聴覚を集中させる。長々と続いてきていた男の演説はついに最後の一節へと到達するところだった。

「もはや取るべき手段は1つである。我がジオン公国は地球連邦に対し、ここに宣戦を布告するものである」

始まった。『男』 ジオン公国総帥たるギレン・ザビの高らかなる宣言は、確かにマノンの脳髓まで到達していた。

後戻りの許されない道への扉は、今この瞬間開かれたのである。

ジオン公国総帥の宣戦布告がなされてからわずか3秒後。

遠くの方から響いてくる揺らぎ。ミunstメルが目標、すなわちコロニーに向けて主砲の一斉射撃を開始したに違いなかった。

「ハッチ閉鎖。全強襲降下艇、発艦」

ミノフスキー粒子が周辺宙域に大量散布されているため、発艦すれば使用できるのはこれが最後となる個人無線を開き、中隊全体へと命令を下す。宣戦布告後、直ちに攻撃を開始するという電撃作戦が動きだした以上タイムロスは許されない。開放されていた強襲降下艇のハッチが閉じていき、完全閉鎖する前に見なしでMSハンガーから離床する。浮遊感とともに、横Gがかかる。バーニア噴射により強襲降下艇が移動を開始した証だった。

ヴァイラントが用意してくれていた戦闘ノーマルスーツ用の装備ハーネスを身につけつつ、ハッチ上方に備えつけの艇内小型モニターの電源を入れるよう彼に指示を出す。

強襲降下艇には複数の外部カメラが設置されており、コックピット以外からも外の様子を窺い知ることができた。

ヴァイラントが内壁に備えつけの端末を操作すると、モニターにはいきなりいく筋ものまばゆい光の柱が横切る光景が映し出される。艦砲射撃によるメガ粒子の束だ。

続けてカメラ視点を切り替えさせると、ブリッジにて先ほど目にしたスペースコロニー・ペルナローゼが画面一杯を占めるほどの巨体を見せつけていた。特別望遠もかけていないのにここまでの大きさであるのは、それだけ対象に接近していることを意味する。

モニターの中央にはペルナローゼの末端でありコロニー内外の結節点でもある宇宙港が捉えられ、本来ならば宇宙艦船の出入港以外、上下2つあるハッチは全て固く閉ざされているはずだった。

だが、今や上下港口は派手に粉碎され巨大なハッチさえ跡形もな

く吹き飛んでいる。宣戦布告に併せて開始された攻撃による結果だった。穿たれた巨穴の周囲は焼け焦げた上にめくりあがったような破損面を見せており、現代の通常兵器において最強の破壊力を持つメガ粒子ビーム着弾時特有の損壊状況を表している。そしてこれらは内部への進入路が確保されたことを意味していた。

強力なメガ粒子ビームは内部のエアロックをも破壊したため、港湾部から漏れ出た空気が盛大に噴出し、物資やそこで仕事に従事していた作業員や艦船の搭乗員らが宇宙へと投げ出されていった。

一方、これを待っていたとばかりに画面の死角からフレームインする2つの緑色の人影。否、人影ではない。MSハンガーの住人にして、ジオンが誇る決戦兵器。後背のスラスタから推進炎をほとばしらせながら飛びすさっていく緑色の巨人こそMS-06F、通称『ザクイー』だった。

開戦にあたって多く使用されているのは核攻撃を作戰行動に組み込んでいるMS-06Cであり、このF型は対核防護装備を外して身軽になった通常作戦に最適な機体になっている。

与えられた任務には核攻撃オプションが入っていないため、新たに配備が始まったF型は各精鋭部隊に優先的に配備され、シーマ艦隊にもまとまった数が揃えられていた。

一昨年MS教導団に派遣され、先代であるザクIことMS-05での搭乗訓練過程を修了しているのが、彼の『モビルスーツ』という兵器がどれだけの能力を持っているのかはマノンもよく知っている。艦砲射撃で港口をこじ開けた後、最初に突入して先制打撃を与えるのにこれほどの適役はいないということも。

2機のMS-06Fはまったく抵抗のない港口へと接近すると上下に散開。油断なくハッチ脇に一旦機影を潜める。CQBをかける特殊部隊隊員のごとく繊細かつ大胆な機動も可能にするのがこの新兵器の専売特許だ。

その形から、単純に人が使う自動小銃を巨大化させただけというイメージを想起させてしまいがちな主兵装のMMP-78/120



m m機関砲 通称ザクマシンガン だが、スケールは前世紀の戦車砲に匹敵する。むしろ、海上艦艇の一般的な主砲である127mm速射砲の方が存在としては近いかもしれない。

連射のできる艦砲を自由に持ち運びでき、どこでも使用できるということが攻撃目標にとってどれほどの脅威となるか。不幸にも今の時、ペルナローゼ港湾部にいた者たちは今からそれを知るだろう。

タイミングを計り、2機のMS-06Fは割り振られた港口からいまだ噴出す空気をものともせず一気に港内へと突入していく。ザクマシンガンを掃射しているマズルフラッシュ（銃口炎）と、着弾した対象が爆発した閃光が奔流となって港口から宇宙へと溢れていた。

数度同様の光景が繰り返されると、港の奥から今度は明滅する光が。第1波攻撃成功のモールス信号だ。

第1波攻撃はMSを使用し、港に停泊している連邦軍の艦艇を無力化し、さらに一般船の足を破壊することが目的となっている。

大型目標の無力化が第1波攻撃の目的であれば、これから行う第2波攻撃は海兵部隊による対人掃討を行った上での港湾部完全制圧が目的であり、そのためのヘッセ海兵中隊だった。

港内のMS隊からの連絡を受け、強襲降下艇群はこじ開けられた下部の出港用港口から一挙に突入する。

ペルナローゼの港口は入港を上部、出港を下部と割り振ることで滞りのない艦船の出入港を実現しているが、分割されているのはあくまで港口だけであり、艦船用のエアロックを抜けた先には円柱を横に寝かせたような形の港が奥へと広がっている。艦船は円柱棧橋に係留され、停泊するのだ。

ようやく港湾部の空気が抜けきりつつあるのか、勢いの弱まりつつある空気の流れに逆らいながらエアロックを抜けると、円柱形の棧橋のあちこちでコックピットと推進器系統を破壊された一般船艇がかく座し、白い煙を出していた。さらに奥の方では、見覚え

のある薄いブルーの艦体を持つコロニー駐留戦隊のサラミス級宇宙巡洋艦2隻が、各武装やブリッジを破壊されそれぞれ無力化されているのがモニターに映し出されていた。

大型目標は軒並み沈黙し、予想以上の戦果を上げているのがよくわかる。内部で合流した後、今も港の中央で周囲を警戒している2機のザクの面目躍如といったところだろう。

とはいえ、MSばかりに手柄を立てさせるわけにはいかない。揚陸・制圧作戦の主役が歩兵であることは旧世紀からの理だ。

ヘッセ中隊に与えられた任務はペルナローゼ港湾部の制圧・占拠。ヘッセ中隊はマノンを補佐する副官ヴァイラント中尉と伝令・庶務を務める下士官2名による指揮班とアイン・フィアまでの4個小隊にて構成されており、ツヴァイ・ドライ小隊はかく座した2隻のサラミス級宇宙巡洋艦艦内の完全制圧、フィア小隊は円柱形の港内全体の制圧という形で事前に任務が割り当てられていた。

一方、マノンの指揮班に帯同するアイン小隊の初動任務は、地球連邦サイド2駐留軍ペルナローゼ戦隊事務局とペルナローゼシステム統括センターの制圧・占拠である。両施設は港湾部の突き当たり、コロニー内まで続く港湾部施設区画に設置されているため、他の強襲降下艇とは違いより奥へと侵攻する。接舷し次々と上陸していく各強襲降下艇の各隊隊員たちを見送りながら、01強襲降下艇は港の最奥へと到達する。

姿勢制御をしながら強襲降下艇が最奥部の棧橋へと接舷したことを確認すると、パイロットにハッチを開放させる。

ライフルの安全装置を解除し、正面ハッチが開放されるのを待って全員突撃の手信号。とたん、01強襲降下艇に搭乗していた海兵隊員たちは雪崩れを打ったように艇内から飛び出し、周囲にいたペルナローゼの港湾関係者を次々と掃射していく。

彼らは軍人でもなければたまたまペルナローゼに立ち寄っただけの貨物船クルーなのかもしれないが、本作戦にあたり、港湾部に詰めている全ての人間は官民の別なくこれを殲滅せよという命令が作

戦本部から降りていた。

民間人をも殺戮するのは人として抵抗を覚えられないわけがない。

だが、これはブリティッシュ作戦を完遂させるために避けては通れぬ道なのだ。それでも忌避したいのならば、そもそもが軍人になどならなければいい。

軍人としてこの場に在る以上は、人としての本心はどうあれ誰もがこの作戦の完遂を目指している。その意味で、ヘッセ中隊隊員164名総員の心中に迷いはなかった。

港湾部施設区画への幾つかのハッチには港湾部スタッフが我先に逃げようと殺到していたが、アイン小隊は容赦なく襲いかかった。背中を向けて逃げようとしている民間人らに対し、隊員らは装備したT70Rアサルトライフルの銃口を向け、マズルフラッシュを次々と煌かせる。港湾部は無重力のため、被弾した人々から雨粒のような細かい血飛沫が散り散りになるとともに、魂を失った肉体が力なく明後日の方向へとゆっくり流れていった。

アイン小隊のエントリー班2つが動く者がいなくなったハッチへと取り付き、突入。先行して次々と出会う人間たちを一方的に無力化していく。

彼らが踏み鳴らした大地を、マノンら指揮班は悠然と続く。マノンの仕事は彼らを総合的に指揮し、2つの目標の制圧・占拠を完遂することである。時には直接戦闘に参加することももちろんあるが、今それは彼女の仕事ではなかった。

ハッチを潜るとエアロックが小隊を出迎える。港内は一応与圧はされているのだが、頻繁に出入港が行われているため気圧は低い。港湾部施設区画の気圧を一定に保つためにはこの場にエアロックを設置するのは当然のことだった。

エアロックを越えると、明るい照明に照らされた白い壁の小奇麗な通路が奥へと延び、正反対に力を失ったノーマルスーツが鮮血を噴出しながらそこら中に浮かんでいる。白い壁に飛び散った血液があたかも前衛的な絵画を描いているような光景を横目に見ながら、

アイン小隊本隊の警護を受けつつ床を蹴って体を前方へと流したマノンは、通路を漂う死体を押しのけて先を急ぐ。

本作戦は電撃作戦ゆえ、いかに素早くシステム統括センターを制圧・占拠できるかにかかっている。与えられている時間は突入からわずか10分間のみ。コロニー内へと強行突入するMS部隊との連携をスムーズに果たすためには絶対の条件だった。

通路を進むと左右へ続くT字路に行き当たり、隊員らは壁際に一旦隠れてから警戒しつつ左右の通路を掃討する。

マノンもT字路へと到着すると、腕時計をいちべつした。

「予定より20秒遅れていますわ。キスク、急ぎましょう」

作戦開始からの経過時間を鑑みると若干遅れが出ているため、先着していたアイン小隊長キスク少尉へと呼びかける。お肌の触れ合い回線を使用しなくとも、ここには空気があるために直接会話が可能なためできることだ。だからと言って決してバイザーは上げない。空気漏れの恐れがあるのはもちろんのこと、これからコロニー内で行われる作戦のことを鑑みれば当然の措置だった。

「了解。こちらはお任せください。すぐに挽回しそちらの支援に向かいます」

振り返ってそう答えたアーリア系の好青年は軽く敬礼すると部下を従えT字路右方向へ向かって行く。

一方、残されたアイン小隊の半数とマノンら指揮班は左方向へと向かう。キスクらは地球連邦サイド2駐留軍ペルナローゼ戦隊事務局へと向かい、こちらは最大目標のシステム統括センターを一路目指す。

途中、セキュリティが発動したことにより降りていた防護シャッターに幾度となく行く手を阻まれたが、これは想定済みだ。

アイン小隊半数の実質指揮権を委譲されたガルテン曹長の指示のもと、砲撃手が携行したロケットランチャーにより次々と爆破。なんな障害となることなく、マノンらはシステム統括センターの存在しているフロアまでたどり着いたのだった。

直線通路の途中、一方の壁に無造作に設えられた大型の両開きハッチが彼女らを出迎える。固く閉ざされたハッチには【Pelnar or ze System Generalization Center】と書かれたプレートが貼りつけられていた。

「なにが起こっているかは理解しきれないなくとも、とにかく危険が迫っているということは平和ボケした奴らの脳味噌でも気づけたようだな」

ハッチ横のIDコンソールを操作していた部下からいかなる入力も受け付けない報告を受けたガルテンが苦笑いして言う様に、アヤリは表情ひとつ変えず指示を出す。

「穴倉に籠ったというところですね。かまいませんわ。曹長、吹き飛ばしておやりなさい」

「了解。ひとつ派手にやってやりましょう」

まるでどこかの令嬢が執事に仕事を申し付けるかのように優雅な物言いにして、その実苛烈な内容。躊躇することなく強硬手段を取れるマノンの判断力は適切で、彼女を見知った部下は当然のことと受け止め、動じない。ラテン系の陽気な曹長はニヤリと口元を歪め、隊員らにC-4の設置を急がせたのだった。

設置担当の隊員以外はその間に十分な距離を置いて待避。やがて、C-4の設置を終えた担当隊員らも待避し、一見紙粘土のように見える高性能炸薬に点火した。

C-4プラスチック爆弾はその名の通り自由に形を変形させることができる上に、炸裂速度も秒速8,000mを超える威力を誇る。頑丈なシステム統括センターのハッチとはいえ、その耐久性はあくまで災害時を想定したもので軍用の爆薬で破壊されることなど想定しているはずがない。

乾いた炸裂音とともに、安全距離を取っていても猛烈な爆風がマノンらの間を駆け抜けていく。破壊されたハッチの瓦礫がそこら中に飛び散り壁や床に当たったカン高い音を立て、爆発によって生じた白い煙が増殖していくウィルスのように拡散していく。

だが、これで終わったわけではない。入手した港湾部施設区画の図面によると、くだんのハッチの向こうにはセキュリティエック用のゲートと警備員の詰め所がある10メートル四方ほどの小部屋が設えられており、システム統括センターはさらにその奥にある。

外のハッチが固く閉ざされているのならば、その先のハッチもまた然り。外ハッチの両側に展開した隊員らがT70Rにて援護射撃の体勢に入ると、爆破担当の隊員が室内に突入していく。

よく訓練された兵士の動きは疾風迅雷の如き。十数秒でC-4を設置し終えた隊員らが室内から待避してくると、すぐさま内部から閃光と爆風が沸き起こる。

「突入、制圧」

これで遮るものはなにもない。短く、そして至極冷静な声で命じたマノンに応え、ガルテンは隊員を指揮してシステム統括センター内へと一斉に突入していく。

C-4が炸裂した際に巻き起こった薄っすらと立ち込める白い煙が拡散していくなか通路を進んだマノンも、隊員らに続き外ハッチから中へと入る。

小部屋の中は破壊されたハッチの破片と、内部へ及んだ爆風によりなぎ倒されたセキュリティゲートや警備員詰め所の残骸がバラバラになって宙を漂っており、前へ進むにはかき分けて行かねばならなかった。詰め所の受付にあったと思われる机も真つ二つに割れて壁にめり込み、その下には血塗れになって押し潰されている警備員の遺体があった。

C-4の壮絶な威力を目の当たりにしつつ、マノンはそのまま小部屋を抜けてシステム統括センターへと入った。内ハッチは外ハッチよりも堅牢ではなかったことと、内部へ及ぼす影響も考慮して量を調整したC-4によって破壊されている。そのため、システム統括センター内は小部屋のように爆風の嵐に席卷されてはならず、入り口付近が多少破壊されただけで、全体には影響を及ぼしていなかった。

室内は50メートル四方の巨大な空間が広がっており、正面には壁一面を占める大型モニターが設置され、さらに入り口からモニターへ向かって下っていく形で段状のオペレーター席が無数に設えられていた。

システム統括センターに詰めるコロニー公社の職員たちはおよそ100名近くで、全員がノーマルスーツを着用していた。彼らは皆一様に恐怖に怯えつつ、ほとんどの職員はモニター近くに身を寄せ合って集まり、室内にくまなく展開してT70Rを突きつけているアイン小隊の面々へと恐れと不安をない交ぜにした視線を向けている。

彼らを一瞥し、マノンオペレーター席の間にある階段を悠然と降り、室内の中心部へと進み出た。

そこであらためて室内の職員らを見回す。こちらが何者であるかは昨今の世界情勢を注視していれば理解できるだろう。ただ、現状を受けての反応として、状況を甘受するだけで抵抗する素振りは一切ない。いや、丁度それまではなかった、と言うべきか。

マノンの腕が突如翻った。胸の装備ハーネスに差してあるスロージングナイフを投擲したのだ。

悲鳴とともに、いまだオペレーター席に座っていた1人の職員が手を押さえ仰け反るように立ち上がる。手の甲にはマノンが放ったスロージングナイフが深々と突き立っていた。

「直ぐに行動を起こす度胸がなかったのなら、最後まで大人しくしていなさい」

大きな鳶色の瞳を内包する目がスツと細められ、凍るほど冷徹な声が彩りを添える。マノンのそれは、銃口を向けるよりも鋭利な威嚇となって彼へと、ひいては急変した状況を目の当たりにした職員たちへと襲いかかった。

侮蔑の眼差しを向けつつくだんの職員の元へと体を流すと、ノーマルスーツを貫通し手のひらにスロージングナイフの切っ先が突き出た有り様に愕然としている彼を他所にオペレーター席を見る。

先ほど、マノンは拳動不審な彼を見逃さなかった。しきりにこちらを気にしつつ、計器の1つに手を伸ばしかけていたことを。

「いかがされました」

自ら武器を取ったマノンに、ヴァイラントが怪訝な様子で傍にやってきた。それに、マノンは厳しい目元のまま答えた。

「緊急閉鎖システムですわ。これを作動させれば、システム統括センターの機能は全てロックされ、入力を受けつけなくなります。でも、残念でしたわね」

再び職員へと視線を移す。口調は相変わらず優雅そのものだが、眼差しには一片の隙も慈愛もない。

「例え貴方がこれを作動させていたとしても、わたくしたちは事前に想定済みだったのですから。ことがなった暁でも、わたくしたちのエンジニアがいじらしい抵抗を無に帰してさしあげましたのよ。もつとも、そこまで到達することすらできずに終わるのですから、さぞや無念でしょう。ただ――」

言いながら、マノンは表情ひとつ変えずに軽く腕を上げ、スツと手首を前へ返した。

「ただ、同情はしてもこれで終わりにはできませんの」

彼女の合図を受け、離れたところから様子を伺っていたガルテンが隊員たちに顎をしゃくった。とたん、命令を待っていた彼らは2手に分かれた。

一方はオペレーター席につき計器を操作してシステムを乗っ取るべくホストの中枢を次々と掌握していく。

そしてもう一方は。

絶え間なく起きる銃声、人々の悲鳴。

凄惨な光景を目にし、手に突き立ったナイフの痛みをまるで忘れてしまったかのように目を見開き、立ち尽くす職員。

マノンはおもむろに腰のホルスターからヴァルタP8自動拳銃を抜き、彼の頭に突きつけた。

「次の人生が実り豊かになることを祈っておりますわ」



それは、事実上の死刑宣告。  
引き金に添えられた指は、静かに生殺与奪権を行使するのだった。

「我行くべき道」編 『Extra』 Blockhead

「ドリトルの野郎、いったいどこをほつつき歩いてやがる。俺の勝ち分をむしり取るまでは必ず見つけだしてやる！」

ノーマルスーツのバイザー越しに放たれた苦虫を潰したような怒声が、葉音すら聞こえないほど静閑な住宅街へ響き渡る。

ノメント伍長は苛ついていた。それは、バイザーを開けて愛すべき煙草を吸えないから、という理由からくるものだけではない。

ただでさえ使い走りのような任務をさせられて気が削がれている上、今度は『迷子』の搜索ときたからには愚痴の1つや2つ吐きたくもなるというものだろう。

早々に任務を終えて帰還しカードに興じたい彼としては、同僚の不始末の尻ぬぐいなど願い下げの面倒ごとに違いない。

ペルナローゼ攻略隊として派兵された宇宙攻撃軍第二揚陸大隊旗下リンド中隊の一員として、彼もサイド2のコロニーが1つ、このペルナローゼへと上陸した。作戦の主役はこの戦争から導入された新兵器モビルスーツが担っているため、彼ら歩兵の任務はコロニー内部の掃討・制圧にある。

もつとも、掃討任務、などと言えば聞こえはいいが、実際掃討する場面など皆無にひとしい。あつたとしても、それは敵兵を掃討するのではなく、無防備な住民をただ虐殺する行為に他ならなかった。ジオン公国が地球連邦に対して宣戦布告した直後、彼らによってこのペルナローゼは内部へ神経ガスを散布されていた。

ノメントが上陸した頃には、MSが散布した神経ガスによって住民はあらかた死滅していた。そこら中に死体が転がり、動く物はなに1つない状態だった。

まともな神経を持っている人間ならば、この凄惨な光景を見るなり嘔吐するか卒倒してしまうだろう。

しかし、揚陸大隊の兵士たちは事前に作戦について聞かされてい

た上、彼らにはスラム以下の生活を送らされていたマハルコロニー出身者が多かった。普段から地獄を見てきた彼らにとって、悲惨さの規模こそ比較にならずとも自分たちも酷い目にあつてきているため、本作戦がもたらす精神的衝撃は比較的少なかったのである。

加えて、多少の良心やらなにやらはあっても、この作戦を無事遂行した際に彼らが手にする「成功報酬」という飴を目の前にぶら下げられていれば、たとえ人類史上希に見る非道かつ残虐な作戦であったとしても、なまじの良心など軽く吹き飛ぶのが彼らという人種だった。他人の命よりも自身の利益、それが厳しい極低層階級社会で生きてきた彼らの処世術なのである。

半ば傭兵的な立場の彼らにしてみれば、どんなに残虐な殺戮が行われていようが所詮は他人事なのだ。壮絶なほどの死体の山を目の前にして決していい気分にはならないものの、思考回路はそこで180度切り替わるのである。早く帰還して、女を抱きたい、ギャンブルをしたい、美味しい飯にありつきたい、と。

ノメント伍長も同様だった。思っていたよりも凄まじい死体の数々にさすがに驚いたものの、死体自体は故郷で見飽きるほど目にしている。それにもっと悲惨な死に方をしている人間を何人も見えてきた。

彼にとって最優先なのは、任務のために中断しているカードを一刻も早く再開したいことなのだ。1人勝ちしている好機を潰したくない。その一心である。

ところが、順調に進んでいた任務は思わぬところで頓挫する。

同じく掃討任務にっていた同僚の1人であるドリトル「ケー」ン伍長のチームが音信途絶したためだ。

彼らはノメントと部下のヘリッツ2等兵チームが担当している住宅街ブロックとは隣接したブロックの掃討任務を与えられていた。

先行していた彼らは、本来ならばノメントチームよりも早々に司令部へと報告を行っていなければならなかったが、ノメントチームの方が早くに掃討任務を終えていたのだ。しかも依然として連絡は

なく、結果、ノメントらがドリトルたちの搜索へと派遣されたのである。

はやる気持ちを抑えて渋々作戦に従事していたノメントにとって  
はまさに降って湧いた話であり、しかも相手が巻き上げた掛け金を  
なかなか払わないカード相手ならば文句の1つや2つ言いたくなる  
というのも無理はなかった。

「まさか掛け金を払いたくねえからとんずらこいたんじゃねえだろ  
うな、あの野郎は。しけた野郎だぜ、ったく。おまえもそう思うだ  
ろ？ ああ？」

「えっ！？ あ、は、はい！」

延々と文句を垂れていたノメントは、突然ヘリッツへ同意を求め  
た。

癪癪持ちで海千山千の中年上官相手に、元来気が小さい青年兵士  
が肩を並べて歩けるはずもなく、辺り一面に転がる死体の山に顔を  
真っ青にしながらノメントの後ろをたどっていたのだが、その彼は  
まったく予期せぬ言葉の投げかけに慌て、しどろもどろに返すのが  
精一杯だった。

「馬鹿野郎！ てめえ、言うにことかいてドリトルを、上官を侮辱  
するってえのか！？」

上官の言うがままに同意したヘリッツに降りかかったのは、理不  
尽なノメントの叱責だった。ノメントにとってみればとにかく胸の  
内に充満した癪癪をぶちまけたいだけで、その矛先として手近な部  
下が血祭りに上げられたのである。

同意を求めているおきながら、同意したらしたで叱責されるのでは下  
位者はたまったものではないのだが、そこまで考える余裕など皆無  
だと言わんばかりにヘリッツは小さく悲鳴を漏らし、首を竦めて怯  
えていた。

こんな中でも本当にマハル出身なのかよまったく、とヘリッツ  
の情けない有様に呆れ、ノメントは道脇へ唾を吐いて苛つく感情を  
ぶちまけた。

腰抜けの相手なんぞいつまでもしてられるかとばかりにヘリツツのことを脳裏から外へと追いやり、一刻も早く終わらせたい任務へと再び思考回路を戻す。

ドリトルらが担当した住宅ブロックにはL-3及びL-4シエルターがあり、彼らを探して既に住宅ブロック全般とL-3シエルターの搜索を済ませた。収穫は一切なく、あるのは住民の死体ばかり。他と変わっていた点は、自分らが担当した区域で見られた使用されていないシエルターと異なり、L-3シエルターは使用された点があったことである。もつとも、住民達がシエルターへと殺到したためにシエルターを密封することができず、すべからくガスの洗礼を受けて彼らは壊滅していたが。

念のため、L-3シエルター内を検索してみたが、ドリトルらの姿を発見することはできなかった。

残すはL-4シエルターのみ。L-3シエルターを後にし、目的地を一路目指していた彼らの前に、やがて当のL-4シエルターが姿を現す。

L-3シエルターと同様、小さな丘の一角にコンクリート製の開口部が設置された造りをしており、周囲の景観が異なるだけで仕様はまったく同等である。

ただ、L-3シエルターと異なる点が仕様以外に1点存在していた。

ノメントらが当初割り振られた掃討住宅ブロックにあったシエルターに同じく、L-4シエルターには使用された形跡がなかったのだ。

さらに言えば、このシエルターは使用できない状態に置かれていた。シエルター正面へと回った彼らが目にしたのは、固く閉じられたハッチに貼られた1枚の紙片。

『Keep Out! This shelter is under construction』紙片には黄色地に黒でかような文言が綴られていた、工事中のため立ち入り禁止、と。

このシエルターは工事中だったのである。たとえ住民たちがシエルターの使用を思い立てたとしても、使えなければ無用の長物だ。

とはいえ、この内部も念のため検索をかける必要がある。通常の状態ならばともかく、工事中の現場となれば危険な箇所も多く、検査に入ったドリトルらが万が一にも事故に巻き込まれていない、とは言いいないからだ。

T70Rアサルトライフルを構え直し、いつ不測の事態が発生しても対処できるようにしつつ、ノメントはL-4シエルターの外部ハッチへと手をかける。

工事中のため施錠されているかとも思ったが、予想に反してハッチは簡単に開いた。

ハッチ横の壁に身を隠しつつ内の様子を窺う。内部は薄暗く、当たり前だが一切物音はない。携帯していた小型ハンドライトを銃剣ラッチに接続し、ヘリッツに援護を任せると、T70Rを構えて中へ飛び込んだ。

機敏かつ油断なくその銃口を周囲に巡らせて不測の事態に対応する。ライフルの銃口と銃剣ラッチは同軸のため、接続されたハンドライトが問題なくシエルター内を照らし出す。

彼らに危険を及ぼす存在は皆無で、ハッチの向こうにはすぐにまた新たなハッチがライトの光に浮かび上がった。それは外部とシエルターを気密的に隔てるためのエアロックハッチだった。

エアロックハッチは開いたままであり、壁を照らしてみると操作パネルが浮かび上がる。パネルにはシエルター入り口と同様の体裁で『Don't touch』と書かれた紙が貼られており、不用意に取り扱わないようになっていた。

紙を剥がし、試しにパネルのスイッチや摘みを2、3操作してみるのが、反応はない。通電している気配がなかった。

続けて床を照らすと打ち捨てられた工具が無造作に点々と転がっている。よほどのでたらめな業者でもない限り、保安のためにも工具の管理は徹底しているはずだ。

ノメントは訝ったが、開戦により作業をしていた作業員たちは現場をそのままにして慌てて逃げ出した、と考えるとこの現状も納得がいく。

「このままシエルターにいればまだ助かったかもしれないにな。ツキがなかったな」

つい先ほどまで平時であったことを踏まえると、彼らがノーマルスーツを着用する必然性は皆無だ。外気に直接触れる形で彼らがコロニー内へと逃げ出したとするならば、その末路は推して知るべしだった。

ノメントらはそのままエアロックを抜け、シエルターへと続くスロープを下る。50メートルほど行った先にはシエルター本体のハッチがあり、あたかも彼らを出迎えているように開け放たれていた。外部からシエルター内に突入した時同様、警戒を怠らずにエントリーする。

シエルターの最終防御でもある分厚い本体ハッチを抜けた先には、ただ広い漆黒の空間が広がっていた。ハンドライトの明かりは強力なものお指向性が強いためほんの一角しか照らし出すことはできなかったが、それだけに暗闇の深淵が無限に広がっているような印象を受ける。

万単位の住民を収容するために建造されているシエルターの広大さに改めて圧倒されつつも、ノメントはシエルター壁面に沿って内部の検索を始めた。

基本的に床にはなにも置かれていない。L 3シエルターでもそうだが、資材等々は各壁面奥に設えられた倉庫に格納されているためだ。エアロック周辺とは異なりここには工具等も落ちてはおらず、よく見ると未使用期間が長いことを表すかのようにつつすらとした埃が床一面に敷き詰められていた。

検索の最中、埃に印された大量の足跡を偶然見つけてにわかに緊張が走ったものの、よく調べてみると極めて限定した区画のみであり、大量と言えどこのシエルターの規模からすれば極少数のものだ

った。工事関係者のものと見て違いなかった。

ほどほどの緊張感はあるものの、実に平易な搜索任務。ドリトルらを発見することもできず、結局1-4シエルターにもめばしい手がかりはない。

こりゃ手ぶらで帰るしかねえな、とつぶやき白旗を揚げかけたノメントに、意外な人物の頓狂な声が投げかけられた。

「は、班長！　ちよつと見てください！」

ヘリツツの馬鹿がまたなに騒いでいやがる　青年2等兵の慌てぶりに辟易しながらも、ノメントは彼が指し示す壁際辺りの床を見た。

目を凝らすと例によって埃の上に印された足跡があつたのだが、そのなかの1つに他と様相を異にしていたのである。

「これって、子供の足跡じゃないでしょうか」

ヘリツツの言う通り、その足跡は他とは違い一回り小さく、人目で成人のものではないとわかる。

これは由々しき事態だった。

埃に印された足跡群が工事関係者のものであるとするならば、子供の足跡が混在しているのは明らかにおかしい。とすると、このシエルターは工事中のため『住民は誰も入っていない』という前提が崩れてしまう。

加えてもし子供がここにいるなら、この状況下で1人とは考えにくい。だとすると。

ノメントは眉間に皺を寄せ、これからなすべきことについて思慮を巡らせる。

ところが、彼の真剣そのものの表情は突如崩れた。信じていたものがうち砕かれたような、呆けたような、力のない表情へと変貌したのである。

なぜか？

彼の瞳に映り込んでいる『図柄』が、彼から緊張感を奪い去った元凶であることを雄弁に物語っていた。



「おい、ヘリッツ」

視線を動かさず、ノメントは全く気の入っていない声を出した。これに、当のヘリッツは意気揚々と応える。

まったくもっていいところなし、という己の才覚についてヘリッツ自身も自覚があるようで、だからこそ今回の発見は間違いなく手柄になると思いこんだ彼は、誰が見てもわかるほど有頂天の最中にいた。滅多にない機会とくれば当然のことなのかもしれない。

自身の栄達に想いを馳せているかのごとく、それまでのおどおどとした様子が嘘のようなヘリッツだったが、彼はすぐに現実の厳しさを知ることとなる。

「お前、これもちゃんと見たのか？」

ノメントが指し示したのは、子供の足跡があつた直ぐそばの壁。そこには、実にカラフルなイラスト、否、盛大な『らくがき』が描かれていた。

どんなインクペン、はたまたペンキ、あるいはスプレーを使ったのかわからないが、様々な色を駆使してこれでもかというぐらい賑やかな絵柄が壁面にちりばめられている。あちらで戦車が走り、こちらで宇宙人の家族が一家団欒を囲み、そちらでは巨木がそびえ立っていた。

「す、凄いらくがきですね。これも、ここにいた子供が？」

「ヘリッツ君。それは本気で言ってるのかな？」

唐突に丁寧な口調になったノメントに、ヘリッツは目を点にして訝しんでいたが、いまもって状況が理解できていない有様を丸出しにしている彼についてノメントの怒りは臨界点を突破した

「馬鹿かてめえは！」

ノーマルスーツのため胸ぐらをひつつかむことができない代わりに、ノメントはヘリッツのヘルメット後頭部に腕を回して引き寄せ、バイザーとバイザーをぶつけて怒りに満ちた顔面で彼の眼前を塞いだ。

「ここに住民が避難してきたとしたらだな、そいつらにとっての非

常時にこんならうがき描いてる余裕があると思うか!? 今日より以前にどつかの悪ガキが不法侵入して、いたずら描きしていったんだよ!」

もの凄い剣幕で怒鳴り散らすノメント。鬱積したストレスが爆発したかのような怒鳴りっぷりで、怒声とともに口からまき散らされた唾液がバイザー一面に飛び散っていた。

「一瞬でもためえの言うことに耳を傾けた自分が情けねえ。貴様は今日の晩飯抜きだ!」

「そ、そんなあ!」

情けない声を上げているヘリッツを放り捨て、ノメントはやつてられないとばかりにその場を後にした。

だいたい、もしここに住民が逃げ込んできているのならなにがしの気配や足跡そくせきがあるはずだ。くだんの子供の足跡がまったく関係のないものと判明した以上、今のところこれに代わる有力な物証はなく、L-4 シェルターもL-3 同様生存した住民の姿は見受けられないということになる。やはりここは工事中のシェルターだったのだ。

念の為、その後全ての倉庫を見て回ったものの、ドリトルらの姿はおろか人の気配すら一切なかった。

「時間を無断にしたな。行くぞ、ヘリッツ5等兵」

「か、勘弁してくださいよ、伍長」

ストレス発散とばかりにヘリッツの階級を3つばかり降格させてやったが、大して気張らしにもならず、情けない声を出しながら金魚の糞のように後をついてくる5等兵が余計に鬱陶しくなっただけだった。

「ドリトルよ、俺の勝ち分意外にも迷惑料をケツの毛までむしり取らねえところや割に合わねえぜ、まったく」

ひたすら愚痴りながらL-4 シェルターのスロープを上がったノメントは、漆黒の闇を後にした。

ペルナローゼは生き地獄そのものの有様を呈していたが、自然の

営みは人類の争いごとなど歯牙にもかけぬようで、何事もなかったように集光ミラーから陽光が差し込み、静寂に包まれているコロニー内を照らし出している。

ノーマルスーツのバイザーには宇宙空間での直射光を減衰させる限定遮光能力が付与されているため、それまで闇の中にいたにもかかわらず外の光は特段まぶしく感じない。

時刻は1月3日午後1時。

このL 4 シェルターには、奇跡的に避難することができた総計170名の軍人・住民たちがいた。

彼らは1人の連邦軍女性士官の導きにより、本シェルターを後にしたのだった。

ほんの、1時間ほど前のことである。

見下ろす先は、奈落の底のような深い闇。

夜空には星々の瞬きがあるが、そこからは恒常的に輝く光はもはや失われていた。

唯一の「希望の灯火」を除いて。

ゆらゆらと揺れながら少しずつ近づいてくる光点は、徐々にこちらの視界一杯に広がっていく。

光の後ろには非常階段を一定のペースで昇ってくる人影が2つ。

人影は重なり合ったようになっており、すなわち1人がもう1人を背負って階段を昇っているのだ。

この非常階段は梯子で代替してもおかしくないほどの恐ろしいほどの急階段だった。

普通であれば、これほどの急階段を人1人背負って昇るなど困難極まりないことだ。

だが、昇ってくる人物は事も無げに行程を消化している。

しかも、よく見ればあろうことが数段抜かしで階段を昇っていることがわかる。いや、それどころか物理的にありえない十数段抜かしも重力に逆らうかのように軽々とこなしていた。

日常ならば腰を抜かして驚くそれも、今この場では不思議な光景ではない。

この場には重力はほとんどない。

なぜならば、ここは「宇宙」なのだから。

「リフィルさん、後少しです。頑張ってください」

声をかけると、手に持ったハンドライトの光を小さく回して応える彼。無重力地帯とはいえ、大人一人を背負って、しかも片手にはハンドライトを持って慣性をコントロールするのは決して簡単なことではないはずだが、リフィルは涼しい顔でやってのける。

本当のところは彼のみぞ知る。ではあるが、常に平静でいる

のは彼が元情報部の軍人であつたからというのはもちろん、そもそもそういう人となりであることを表していた。

最後の行程を無難に昇り終えたリフィルは、非常階段の出口へと到達。アヤリは、背中のナグンを降ろす彼を丁重に迎えた。

「お疲れ様でした、リフィルさん。ナグンを背負ってくださいってありがとうございました」

「いちいち気にしなくていい。非常事態なんだ。もつとも、これが平時だったらレンジャー訓練を思い出しそうで、できれば御免こうむりたいところだろうけどな」

非常灯ですら落ちてしまっているの、この場での光源となるのは自分たちを含め避難民各自が持つハンドライトの明かりしかなかったが、小さな光源からでもノーマルスーツのバイザー向こうで憮然とした彼の「いつもの」表情はよく伺うことができた。

余計な一言さえなければ少々不器用な好青年の謙遜で終わつたに違いないが、彼にとつてはばやきの一言の方が重要なかもしれない。さすがに慣れてきたものの、右から左へと聞き流せるまで達観することもできず、同じく感謝の言葉を述べていたものの彼の返答に目を丸くしていたナグンと顔を併せ、アヤリは苦笑いを浮かべた。気を取り直してノーマルスーツの手首に取り付けられた時計を操作する。わざわざハンドライトを向けなくとも、バックライトで時刻が浮かび上がる為、暗闇でも時刻を確認することができた。

現在UC0079年1月3日16時15分。

L-4シエルターを出て、現在地　ペルナローゼコロニー主宇宙港湾部へと到達するまで既に4時間と10分が経過していた。

とはいえ、実際に移動した距離を計算したとして、概算でも5キロほどこしか移動していない。

一般的に大人が1時間に歩ける距離は3〜4キロと言われている。4時間ともなれば、途中小休憩を挟んだとしても10キロは踏破可能だ。

にもかかわらず、5キロ程度移動するのにそれだけの時間を費や

したのは、今回の移動が特殊な環境及び条件の下で行わなければならなかったからである。

それは、コロニーの構造を紐解いてみればよくわかる。

コロニーは円柱形をした構造体で、円柱両端の円形底辺中心部に艦船の出入りする港が主副それぞれ造られている。

一方、人々が居住する大地やその下に建造されたシェルターは円柱内壁に造られている。L-4シェルターも然り。

とすると、まずは円柱内壁を港のある円柱底辺まで移動しなければならぬことになる。

しかし、コロニーは紙細工で作った円柱ではない。内壁は居住区である大地から生活用の配管やメンテナンス通路が納められた地下層が広がっている。

退避行の目的地たるペルナローゼ主宇宙港に向かうため、アヤリらはまず移動にコロニー公社がコロニー補修に使用するメンテナンス通路を使用した。

地上を使えば遥かに短い時間で円柱底辺までたどり着くことができただろうが、丘を行くにはどこにジオン兵がいるかわからず、自殺行為に他ならない。

そのために安全性の高い地下通路での移動を選択したのだが、問題がないわけではなかった。

1つはセキュリティである。

コロニー全体を管理するシステム統括センターがジオンに占拠され、セキュリティは全て落とされた。それはアヤリたちにとっては吉と出た。

なぜなら、通常であればメンテナンス用とはいえ保安のために地下通路にもセキュリティは作動しており、もしジオンがセキュリティをダウンさせず使用していたら退避行を察知してしまう可能性があったためだ。

問題なのはダウンしている状態がいつまで続くか、だった。

港へたどり着くまで彼らがセキュリティをダウンさせたままでは

る保証はどこにもない。復旧されるリスクはゼロではなかったのである。

そのため、ただでさえ直線距離で進めない地下通路を、万が一にもセキユリティが復活した際にも引つかからないルートを選択せざるを得なかった。つまり、ある程度の迂回も止む得なかったのだ。

不幸中の幸いは、迂回等したとしてもその中で最も効率的なルートを知る配管工が避難民の中におり、協力者として手を貸してくれたことだ。

彼のおかげで地下通路の移動を最小限に圧縮することができた。何箇所かは、どうしても扉の開閉がセキユリティの復活した途端に引つかかってしまう箇所を通らなければならなかったが、運を天に任せてなんとか無事クリアすることもできた。

もう1つの問題は避難民そのものだった。

少人数での移動ではない。コロニー住民の全体から比較すれば絶対数は極めて少ないとはいえ、1つの集団として考えてみれば170名もの避難民は軍で言えば1個中隊にも相当する人数である。

人数では一個中隊でも、彼らは訓練された兵士でもなんでもない、市井の人々だ。統制だてて効率よく移動するには限界がある。

なにより、性別、年齢も多種多様。老人もいれば乳飲み子、移動困難な負傷者もいる中、効率だけではとても移動できない。

脱落者を出さないためには必要最低限に抑えても小休憩は挟まなくてはならず、必然的に退避行に要する時間も増大せざるを得なかった。

とはいえ、それでも地下通路の移動はスムーズに行われたのである。

多くの時間を割かねばならなかったのは、照明のない地下通路をハンドライトの明かりを頼りに抜けた先に待ち受けていた「難所」だった。

それは、宇宙港までの垂直方向への移動である。

Ｌ-４シエルターから地下通路で３キロほど移動し到達した場所は、コロニー最端部　つまり円柱底辺外縁である。宇宙港がコロニー回転軸たる円柱底辺中央にあるということは、円の直径分今度は垂直方向に移動しなければいけないのだ。

コロニーはいわゆる図形的な円柱ではなく、円柱の両端に丁度御腕を被せたような構造となっている。港は丁度御腕の底中央辺りにあり、アヤリたちがたどりついた円柱底辺外縁は御腕の縁に当たるというわけだ。

すなわち、湾曲した御腕の斜面を今度は昇らなければならないことになる。

実際の構造として、コロニー内部では、その斜面は丁度山岳部を模した岩壁となっており、その地下に各種エレベーターや非常階段が作られていた。

しかし、依然電力は落とされたままで当然エレベーターも使えない。たとえ送電が復旧してエレベーターが使えたとしても、電力の復旧はセキュリティの復旧にも等しい。エレベーターの使用は自殺行為となる。

そのため、移動当初から斜面地下の移動も当初から非常階段の使用は織り込み済みだった。

ただし、この非常階段こそが最大の難所だったのである。階段を昇るには普通に歩く何倍もの労力を消費する。

しかも、この階段は３階４階昇ればいい、というレベルの階段ではないのだ。

コロニーの直径はおよそ３キロ。すなわち半径は１・５キロとなる。

御腕の中央たる港湾部施設区画が大体１キロ程度占めているので、その区画端まで単純計算でも御腕の外縁から直線距離で１キロは昇っていかねばならない計算となる。

１キロ。

ビルで言うならば２５０階級の超々高層建築に相当する。



屈強な青年男子でもはたして昇りきることができるかどうか怪しいところだ。老人や乳飲み子、負傷者は言わずもがなである。

それでもこの行程をアヤリが強行したのは、踏破できる目算があったからである。

自分たちのいる場所。それがコロニーだったからこそ、この道を選んだのだ。

コロニー内の重力は円柱状のコロニー自体が円心を中心軸として回転することによる遠心力によって得られている。

この遠心力は内壁から回転軸、つまりコロニー中心部へと近づけば近づくほど弱まり、回転軸附近では0G、つまり無重力状態となる。

非常階段も同様だ。始めのうちは1Gの重力に苦勞させられるが、階段を昇れば昇るほど重力による負担は徐々に軽減され、より少ない労力で行程を進むことができる。

すなわち、老人や乳飲み子、負傷者がいても、彼らを補助してやることさえできれば行程の踏破は十分可能だった。

もちろん、決して楽な行程ではない。

いくら重力の影響が軽減されるとしても、踊り場を折り返す際の切り替えしや、切り替えしてから推進するのに力を使うので労力がゼロなわけではない。ここでも小まめな休憩が必要となった。

170人もの人間が休み休み昇っていくため、結局この行程に3時間ほど費やし、現在地である港湾部ブロック最端部へ到達できたのは16時を回ったこととなった。

時間は重要な要素である。なぜなら現時点において最大の問題は、いつこのペルナローゼが核攻撃されるか、という点にあるからだ。

脱出計画が円滑に進んだとしても、脱出前に核攻撃されてしまっ  
ては全てが無に帰してしまう。

敵の最大目標であるコロニー・イフィッシュがいつ保全され、移動用の核パルスエンジンの取り付けが完了し、トスカリアとペルナローゼの破棄が決定して核攻撃が行われる時刻が分かれば、タイム

リミットを正確に計算して行動できるのだが、その情報は皆無だ。アヤリがL-3シエルターで出会った兵士は核攻撃の事実を知っている時刻までは知らなかった。

そうなれば、核攻撃の時刻については過去の経験や知識から推測するしかない。

L-4シエルターを脱出する時点でアヤリには1つの読みがあった。開戦からまだ半日から経っていない状況で核パルスエンジンの取り付けなど不可能だろう、という。

勘ではない。小惑星移動用の核パルスエンジンの取り付け作業に40時間以上かかったというデータを見たことがあったからだ。

ただ、その時活躍したのは作業ポッドという作業艇に毛が生えた程度のもに対し、ジオンにはMSと<sup>モビルスーツ</sup>と呼ばれるあの人型機動兵器という存在がある。

兵器としての彼の存在は、元をたどれば作業用ロボットへと行き着く。その、作業ポッドの系譜にあるMSが核パルスエンジンの取り付けを行えることは自明の理だ。

しかも、その作業効率は何十倍になるだろう。作業ポッドの何十倍のパワーに加え、なんと言っても人間同様の四肢を持っているのだ。力仕事から繊細な作業までこなせる万能マシンにかかれれば、核パルスエンジンの取り付け作業もはるかに短時間で完遂できるはずである。

とはいえ、コロニーを動かすほどの核パルスエンジン。石ころを持ち運ぶわけではない。

小型化され複数基に分かれているとはいえ、1基はMSよりもはるかに巨大であり、どんなにMSが優秀な能力を持っていたとしても艦艇並みの大質量の慣性をコントロールするには必要な時間というものが必ずある。

そもそもが開戦時に戦場すぐ近くに核パルスエンジンを同行させているわけがない。一定の距離を置いた宙域に待機させているはずである。

開戦し、ある程度コロニー周辺を制圧した後でないと何が起こるかわからない。核パルスエンジン自体は脆弱なので、対艦攻撃を食らえばあっさり撃破されてしまう。作戦の成功率を高めるためにも、制宙権を確保してからでなければコロニーには接近させないだろう。アヤリは、敵は制宙権の確保を開戦から1〜2時間程度で終わっていると見ていた。彼女が10時台に偵察に出た時には、コロニー外での閃光、爆発光を見ていない。それは外での戦闘は終了していることを意味していた。

と、すると。9時前後には待機宙域を発ち、午前中にはサイド2へ核パルスエンジンが到着していたことだろう。

では、昼頃から核パルスエンジンの取り付け作業を開始したとして、いったいどれほどの時間がかかるのだろうか。

そこで彼女は、様々な角度から工程を鑑み、そこに自身の知識や経験を加味してMSを投入した取り付け作業時間推測した。

タイムリミットは制宙権確保から13時間、と。

では、作業開始から13時間は安全が担保されているか？ というと、答えはノーだ。

作業途中で峠を越えれば、ペルナローゼとトスカリアは完全に用済みになる。後顧の憂い無くするためにも、その時点で核攻撃をしてくるだろう。

つまり、13時間よりも前の段階でペルナローゼは消滅する可能性は消えていない。

いつ崩れるかもしれない断崖の縁に立たされていることに変わりはなかった。

しかし、ピアノ線の上を歩く綱渡りのような状態であったとしても、また一方では活路が消えたわけではない。

イフィッシュへの核パルスエンジン取り付け作業の峠に差し掛かるまでにこちらの脱出作戦が完了していれば、核攻撃前に逃れられる可能性もまた、確かに存在しているのだから。

核パルスエンジンの基部をコロニーに据え付け、ロックする工程

が最大の難所 峠となるのは間違いない。

制宙権確保からサイド2への移動、さらにイフィッシュまでの移動を鑑みると、コロニーへの据え付け作業が開始されるまでに5時間前後は必要となるだろう。

となれば、実際の峠となるのは取り付け作業開始から6、7時間辺りが怪しくなってくる。

9～10時には制宙権が確保されたであろうことを考慮すると、作業開始は13～14時頃。そこから考えると、タイムリミットは19～20時頃となる。

あと2～3時間の猶予。しかも絶対ではない猶予。

可能な限り、1秒でも早い脱出が求められる。

喻えようのないほど厳しい道のりだ。  
だが。

アヤリは非常階段口とは反対側を見た。

まっすぐ伸びた通路には、そこかしこに点灯しているハンドライトの灯火。避難民たちだ。

一様に疲れた様子は漂わせていたが、その表情に諦めの色はない。せざるを得ないとはいえ、過酷な移動を強いている中、彼らの「生きることを諦めない」姿勢は大きな希望の1つと言えた。

彼らが諦めない限り、必ず活路はある。

169名にのぼる命の灯火を導く責務は何よりも重かったが、今彼らを導ける者は自分しかないのだ。

だからこそやり遂げなければならない。

連邦軍の士官として。なにより、1人の人間として。

心新たに、アヤリは彼らを救うべく次なる行動を開始した。

「課長」

負傷した足に負担をかけさせないようナグンを後衛に残し、リフィルと共に避難民の列をすり抜けつつ通路を進み先頭にたどり着くと、喜色を顔一面に貼り付けた部下3名が迎えてくれた。オットーとラロシエ、それにヒタキである。

「1人の脱落もなく全員現着。避難民の数をカウントしながらここまで来たから漏れもないわ。そっちは？」

「今のところ特に問題はありません。通路前方にも異常なしです」前衛として避難民たちの先頭に3人を配置して待機させておいたのだが、避難列最後尾 つまりリフィルとナグンがたどり着くまで何事もなく済んだようだ。

ホッと胸を撫で下ろしたが、いつまでもこの状態でいるわけにはいかない。避難行程は時間との勝負だからだ。

「中尉、落ち着いている暇はないんだろ？」

胸の内を見透かしたかのように彼が言葉を投げかけてくる。リフィルだ。

「この付近に倉庫があるはずですよ。彼らを一時そこに避難させます。私とオットーが先行しますので、合図を待って移動を開始してください。ラロシエ、ヒタキ。伝令に走って」

意図を汲み取った2人は復唱すると、移動を開始する旨を小声で皆に伝えながら避難民の列後方に向かって行つた。

「オットー、この先ゆるやかに左へ湾曲している通路を2ブロックほど進んだらT字路があるわ。左方向20mぐらい進むと右手の壁にハッチがある」

緊張した面持ちのオットーに言いながら、アヤリは避難民らとは反対方向へと向き直つた。

「そこは民間の倉庫になつていてね。荷があつても200人ぐらい

入れるぐらいの広さがある。私が保安確認した後、避難民を誘導して中で待機させることになるから」

通路先の床をハンドライトで照らしながら床を蹴って体を前に流す。避難民たちがいなければ通路に遮蔽する物はないので、無重力の恩恵を最大に使うことができる。

もつとも、この通路はゆるやかな左コーナーなので、途中で上手く壁を蹴って進路修正が必要となるが。

ここまでのルートは協力を仰いだ配管工が周知していたが、港湾部に関しては軍施設があるため度々出入りしていた自分の方が造詣は深い。この辺りのブロックのことも良く知っているため、先導するに不足はない。

ブラインドコーナーの先にいよいよＴ字路口が顔を覗かせた辺りで、一端進行を止める。急な停止にそのまま飛んで行きそうになるオットーの腕をつかみ、床へと着地させた。

「大丈夫？」

「な、なんとか。正直、無重力の感覚はなかなかつかめませんが」「すぐに慣れるわ。危ないと思ったら、とにかく床でも壁でも足から着くように気をつけて。手から着くと、下手すると手首を捻挫するわよ」

地球育ちで各種訓練も主に地球で行っていたオットーにとって慣れない無重力は困惑するばかりだろうが、ゆっくり馴染んでもらう時間はない。酷だろうが、実地で慣熟してもらうしかなかった。

サバイバルキットの中からハンドミラーを取り出すと、ハンドライトの灯りを落としたアヤリは音を立てないようにＴ字路まで体を流して壁際に張り付く。

港湾部とはいえこの辺りはまだ与圧区画のため、酸素 空気がある。空気があるということは、音が伝播するということだ。

CQBのエントリーよりしく通路に躍り出て左右に銃弾をばらまくのは手っ取り早い、それでは銃声が辺り一面に響き渡ってしまう。

避難民を後ろに引き連れている今、敵に発見されてしまうのは絶対に避けなければならない。通路の先を確認するのも慎重にならざるを得なかった。

しゃがみ込み、床スレスレのところからそつとハンドミラーを目の前に横たわる通路へと差し出す。

通路は闇に閉ざされている。ハンドライトの灯りを落としたままではハンドミラーなど本来なら役に立たない。

それでもアヤリは目を凝らし、ミラーに映し出されている通路の闇を見つめる。

ゆつくりと、わずかながらだがそれは姿を現し始めた。

初めにぼんやりと何かが見えてくる。

やがて、少しずつ、おぼろげながらも通路の輪郭が見えてきた。

さらに目を凝らすと、壁にハッチや配電盤があることや通路の向こうの方まで分かるようになってくる。

昔から夜目は効く方だったが、海兵隊に在籍していた時訓練でさらに強化していたため為せる業だった。

通路左の奥には誰もいない。

通路右も確認。同じく、人の気配は感じられない。

同時に念の為監視カメラの存在もチェックするが、この通路には設置されていなかった。

さらに左手通路の先、20mほどをミラーに映し出してみると通路奥側にハッチがあった。件の民間倉庫入口である。

「オットー、伝令。みんなをここまで移動させて、消灯してこの場で待機。倉庫へと移動する旨を伝えてあげて」

身を起こすと、やや後方で成り行きを見守っていたオットーの元まで戻り下命する。

タイムリミットは常に意識しなければならないが、一時の手間を惜しむ行為や油断が全てを無に帰してしまう可能性もある。

迅速かつ慎重にというおよそ矛盾しているかのような行動を取り続けなければならない。それは非常に精神と肉体をすり減らしてい

くが、生きるための労力ならば欠かすわけにはいかなかった。

ハンドミラーをしまいオートーを下がらせたアヤリは、再点灯したハンドライトを逆手に持った左手首を支点にして、右手で拳銃を構えて通路に躍り出た。

すぐさま床を蹴り、Ｔ字路左方向に体を流す。目標の倉庫ハッチが瞬く間に近づいてくる。

足を着いて勢いを殺すとすぐさま壁のコントロールパネルを確認。例によって電源が落ちているため、計器は一切沈黙していた。

電動ではハッチを開くことができない。であれば。

アヤリはしゃがみこむと、拳銃を床に置き「EMERGENCY」と注意書きのなされた小さなハッチに目を向けた。

開くためのつまみはあるが、施錠されており開けられないようになっている。

「緊急用って言っても鍵がかってたら意味ないわね。まあこの持ち主のための設備だろうけど」

ぼやきながらもサバイバルキットの中からピン留めを取り出す。

もちろん、髪を留めるために入れておいたものではない。大手を振っては人に自慢できない技術であつさと解錠してしまうと、つまみに手をかけ小口ハッチを開いた。

中には引き出し型のクランク型ハンドルが設えてあつた。彼女は迷わずハンドルに手をかけ、矢印が記載されている方向に回す。

すると、ゆっくりとではあるが開いていくハッチ。半ばまで開いたのを確認すると、後は人力で力任せに戸袋へとハッチを押し込んだ。

拳銃を拾い上げて構えると、ハンドライトで前方を照らしながら慎重に開け放たれたハッチ中へと進入する。

室内は確かにいわゆる「倉庫」であり、巨大な荷棚が幾つも立ち並んでいる。そこに梱包された大量の荷物が整然と並べられていた。油断なく歩を進めると、奥に深い倉庫内の全貌が見えてくる。

この倉庫は通路に対して縦長の構造で、入口付近を含め倉庫の壁



に沿う形で荷棚が配置されていた。

一方で中央は荷物を整理するためか何も置かれていない床が広がっており、人であればゆうに2、300人は手を広げて立てるぐらいのスペースがあった。

以前所用で立ち寄った時のままの状態だ。これなら避難民を一時的に待機させられる。

念の為、敵の足跡や倉庫内のセキュリティの状態をチェックし保安の確認を終えると、ライトを消して再びT字路まで戻った。

T字路口には指示通りオットーに誘導された避難民たちが息を潜めて待機しており、アヤリが戻ると再点灯した彼女のハンドライトに照らされたオットーを始め皆が安堵の表情を浮かべていた。

「倉庫を確認したわ。倉庫口まで先導して、その場で誘導役よろしく」

オットーの肩を叩き、通路へと進ませようとする。すると、困惑している彼。理由はすぐに分かった。

「ライトを使ってもかまわないでしょうか」

一瞬目を丸くしたが、彼の言はもつともだ。自分は夜目が効くがそれはあくまで例外であり、オットーらではこの闇の中、ライトの灯りなしでは前に進むことはできない。

ライトを使わせるか。いや、できる限り倉庫前通路では灯火は抑えたい。

ならば自分が先導して倉庫口につくか。

だが、T字路から通路左右を警戒する要員を担当しなければならぬ。緊急時に避難民の移動をコントロールする役割も兼ねるため、戦闘行動に不慣れな人材管理課のメンバーには荷が勝ちすぎ、交代は難しい。

どうするか。しばし思案していると、思わぬ人物から助け舟が入った。

「夜目なら俺も効く。俺が共に先導しよう」  
リフィルだった。

オットーと共に避難民らの先頭にいた彼は、自分とオットーとのやりとりを見て申し出てくれたのだ。

夜陰にまぎれて行動することもある元情報部員で、さらにレンジャー訓練も受けているという彼である。誇張などではないのは彼の真剣な表情が物語っていた。

迷っている時間はない。アヤリは即断した。

「すみません。お願いします」

言って、肩から下げていた自動小銃をリフィルに差し出す。

鹵獲した武器の管理は人材管理課の面々にて行っており、自動小銃はアヤリとナグンが、拳銃はアヤリとオットーが所持し、元軍人とはいえ今は民間人であるリフィルには武器を渡していなかった。

しかし、やもうえなくとも先陣を切らせるならば彼を手ぶらで行かせるわけにはいかない。

リフィルは黙って頷き銃を受け取ると、オットーの肩を叩いて共の先陣を促した。オットーも応え、前進を開始する。

「一時退避場所の倉庫へと移動します。ハンドライトの灯りは倉庫の奥に入るまではつけなくてください。前の方の肩に手を乗せ、ゆっくりでいいですから進んでください」

オットーらの後ろにいた避難民に呼びかけ彼に続かせると、列をなす避難民たちへ同じように呼びかけて先へ先へと前進させる。オットーに伝令させておいたおかげで、彼らは自分たちが何をしているかをよく理解しており、そのため移動は非常にスムーズだった。

その間、アヤリは倉庫口通路の左右に注意を払い、何かあればすぐに銃撃できるよう拳銃を構える。

途中、避難民の子供たちに付き添っていたヒタキ、ラロシエが通過していく際、彼女たちには倉庫内での避難民らの統率を指示した。わずか20mの移動ではあったが、170名近くが列をなして移動するにはまとまった時間がかかるため、警戒に当たったアヤリは緊張の糸を張り巡らせていた。

幸い、倉庫への移動は何事もなく順調に進み、殿についていたナ

グンの姿が見えてくるとの背中を軽く叩いて先行させる。代わりに殿の役目を務め、後方警戒しながらアヤリも移動列に続いた。

避難民らが倉庫内に避難するのを見届けると、倉庫口で誘導にあたっていたオットーとリフィルの腕を叩いて彼らも中へ入るように促した。

全員が倉庫内に入ると、アヤリはしゃがみ込んで拳銃を置き、ハッチ内側横の壁に点灯したハンドライトを向けた。

そこには表側同様の小口ハッチが存在していた。違うのは、内側はセキュリティーゾーン内のためか施錠がされていないことぐらいで、つまみをつかんで小口ハッチを開くと中にクランク型ハンドルが設えていた。

急ぎハンドルを回すとハッチがゆっくりと閉まり出し、やがて完全に通路と遮断される。

これで一先ず避難民らの身柄を保全することができた。湧き上がる安堵感はずがにごまかせず、やり遂げた溜息が出てしまう。が、これで終わりではない。幾つもある難関をまた1つ越えたただけだ。

すぐさま気を引き締め、立ち上がって倉庫奥へと向かった。

左右に立ち並ぶ荷棚の森の向こうにはハンドライトの灯りが幾つも点灯し、ただ広い倉庫中央の荷処理スペースを浮かび上がらせている。そこでは束の間の休息を取る避難民たちが腰を下ろし、互いの無事を喜び合っていた。

家族が、恋人が、友人が、それぞれ思い思いに生きていることを噛みしめている姿を見ていると、心が震えるかのような勇気が湧いてくる。

だから彼女は、休む間もなく次の行程に取り掛かるのだ。腕時計の時刻は16時30分。死へのカウントダウンは待つてはくれない。中央スペースの中でもハッチ側に集まっている避難民たちの端で、リフィルとともに立ったままこちらを待っていた人材管理課の面々を確認し声をかけた。

「みんな、お疲れ様。おかげでどうにか予定通り港の倉庫に到着できたわ」

彼らの頑張りを労うと、

「心身共にすり減って、もうなんも残ってないですけどね」

ラロシエが疲れたように溜息をつき、よっこいしょと言いながら腰を下ろす。生地の厚さから易々と揉めるはずもないのだが、彼女はさも肩が凝ったと言わんばかりにノーマルスーツの肩口に手を当てて揉む仕草をしていた。

いかにも彼女らしい所作が日常を思い出させてくれ、一同に久方ぶりの笑みがこぼれる。

「みんなも一息入れておいて。港への行程はさらに命がけだから」

「違う、と頷き、腰を下ろすナグン。彼に続いてオットーとヒタキも腰を下ろした。」

皆が腰を落ち着けたのを見届けると、アヤリは彼らを見回し次の段階についてのブリーフィングに入る。

「聞いて。私はこれより斥候として港に進出。ルートの保安確認を行いながら予定通りリヨンに接触する。ここから港まで15分。リヨンに接触して下準備をするのに20分。戻るまで10分。10分余裕を足して、50分から1時間程度で帰還するわ」

それらは事前に決められていたことだった。

最終目的地は宇宙港のサラミス級リヨンだが、いきなり避難民たちを連れて宇宙港に入るのはリスクが高すぎる。

敵の、ジオンの兵力配置もわからぬままに進入するのは明白な自殺行為だ。

アヤリとしても、数人の敵と自身だけが対峙するならともかく、決して少なくはない避難民らを守りつつ1人も犠牲を出さずに港へ進出することなど不可能に他ならず、事前偵察は必須であると判断していた。そのために避難民たちを倉庫に一時退避させ、彼らの身柄の保全を図ったのである。

偵察に出るのはアヤリのみ。

今回は敵の橋頭保でもある港湾部に入るためリスクが高い。

L-3 シェルター 検索行ではオットーが同行したが実戦経験不足は否めず、彼を同行させたとして彼の安全まで守りきれんかは保証できないからだ。

また、負傷しているナグンも連れて行くわけにはいかないし、事務官であるラロシエとヒタキに至っては戦闘訓練すらしていないため論外だ。必然アヤリ単独で斥候を務めるのが最も効率が良いということとなる。

いよいよ本格的に脱出計画の核心へと迫り始めた今、しばしの休息模様だった一同の面持ちから表情が消える。

しばしの静寂。

皆それぞれに思うところがあり、噛みしめている様子だった。

沈黙の時、それは彼によって破られた。

「俺も行くぞ」

驚いた一同の視線が彼に、リフィルに集中する。

「システム関係に長じた人間の同行は何かと都合がいいだろう」

皮肉じみた言動が多い彼ではあるが、脱出計画については積極的に助力を申し出てくれるし、実際かなり助けとなってくれている。

とはいえ、ここから先はいつ命を落としてもおかしくない領域に入っていくのだ。

確かに先ほど先陣を頼んだとはいえ、今回は危険も距離も全てにおいて各段に桁が跳ね上がる。

彼はあくまで民間人。その彼をみすみす死地になるかもしれない状況へと連れて行くわけにはいかない。

本音は彼の意気に嬉しさを感じていたが、それを隠しアヤリは責任ある軍人として丁重に断ろうとした。

言えなかった。

なりふり構っている場合じゃない、たとえ命をかけたとしても。

そうだろ？   こちらにまっすぐ向けられた彼の視線に込められた思いが、アヤリに発言させなかったのだ。

彼は彼なりに覚悟を決めていたのである。自分と同じように。皮肉屋で口も悪いが、元とは言えやはり彼も軍人なのだ。

今の自分に与えられた役割というものを正確に見極め、実行しようとしている。そしてそれは理にかなっている。

この期に及んで彼の申し出を断る言われはもはや存在していなかった。

だとすれば。

アヤリは言おうとしていた言葉を飲み込み、あらたな言葉を紡ぎだす。

「市街戦やCQBのご経験は？」

唐突な問いかけ。だがそれは、彼の同行を認めたからこそその言葉だった。

リフィルもそれを十分わかっている様子で、望むところだとばかりに珍しく鼻で笑った。

「後者はあるな。テロリストと嫌になるほど」

「結構。同行を許可します、リフィルさん」

死地への輩に、アヤリは手を差し出す。貴方を信頼する。その証として。

これにリフィルも応えた。真摯な面持ちで手を重ねてくれる。思いは、同じであった。

アイコンタクトを交わすと、リフィルは早速倉庫のハッチへと体を流していた。

「それじゃみんな、また後で」

腰を下ろしていた部下たち全員が立ち上がり、敬礼にて見送ってくれることに答礼して応えようと、保安目によるハッチ閉鎖の為にオットーを伴ってアヤリもハッチへ向かった。

ハッチでは、リフィルがクランク型ハンドルでハッチを開放して待っていた。

彼の前にて足を着き、無重力下を流してきた体を制止させる。すぐ後方には、同じように不器用ながらもそのまま体が流されていか

ないよう、オットーも床へと足を着いていた。

振り返るアヤリ。

見送りに対する礼を言われると思っていたのか、あまり緊張感のない表情でいるオットーの顔が、ハンドライトの灯りに照らされたノーマルスーツのバイザー越しに見ることができると。

その彼の顔色は急に戸惑いに変わった。

なぜなら、彼の上官は険しい表情で彼のことを見据えていたのだから。

「オットー、貴方には話しておかなければならないことがある」

オットーの向こうにいる部下たち、そして避難民らと十分に距離が離れていることを確認してから、アヤリは唐突に内心に留めていた懸案を紡ぎ出し始めた。

「私が1人で斥候に向かうのは効率がいいからだけじゃない。最大の理由は、万が一のことを想定しているからよ」

言葉の真意をさすがにわからないよう、新米士官は怪訝な顔をしている。

一方で、その言葉だけで自分がこれから何を言わんとしているのか理解した人間がいた。

「最後の手段、か。そうだな、今伝えなければもう伝えられる機会はないだろうからな」

半身になって声のした方を見る。リフィルだった。

発言の意図を鑑みれば、彼が自身の言わんとしていることを事前に見通していたことは明白。

それでもこれまで口出しすることがなかったのは、彼の配慮に他ならない。

「ありがとうございます。私に判断を委ねてくださって」

「なんとか落ち着きを保っている避難民を恐慌させても、何も得るものはない。中尉の判断は正しい」

あくまで彼は冷静で、的確な答えを返してくれる。

初対面の時こそ独特な人当たりに敵意すら感じたが、今では客観

的な見地からの彼の進言に頼ってすらいる自分がいた。

「いったい、何の話なんですか？」

戸惑っていたオットーも、途中からリフィルとのやりとりとなつてしまったことにより疎外感を受けたのか、さすがに割って入ってくる。

彼の方に向き直ると、アヤリは包み隠すことなく単刀直入に答えた。

「タイムスケジュールの1時間を過ぎても私が戻らなかったら、その時は、私は『戦死』したものと思いなさい」

オットーの反応はなかった。否、できなかったのだろう。

彼は顔にまだ訝しさを貼付けたまま。それはつまり、こちらの言葉の意味を理解できていないことを意味していた。

「斥候はピクニックではないから、最悪私でも戦死するかもしれない。その時は貴方が次席士官として、皆の先頭に立って指揮を執るということよ」

噛み砕いてわかりやすくした上で、さらに補足までして説明したところでようやくこちらが言わんとしていることに気付いたようだ。

一瞬にして顔色を真っ青に変えた彼は、呆けたように口を開いたまま目を丸くしていた。

「わ、私ですか!？」

「他に誰がいるの? それに、こうして時間的リミットを切っておけば、私が戦死はもとより被弾して身動きが取れなくなっても皆の行動を妨げないでしょ?」

まったくもって予期していなかった話だったのか、彼は言葉を失ってしまった。

それでも、アヤリは理想ではなく現実を知らしめる為に言葉を続ける。

「1時間経つても戻らなかったら、皆を率いてD-4ルートから港湾部レベル5のA16ブロックへ向かいなさい。ここからだったら30分もあれば避難民を伴っても行けるわ。A16ブロックなら港



口から戦術核を2、3発撃ち込まれでもしない限りやり過ごせる可能性が高いから」

それは、本当の意味での最後の手段だった。

自身の力が及ばなくなった、死して手を尽くせなくなった場合においてもお、彼らを生き延びさせるために考案しておいた窮余の策。

L-4 シェルターで避難民に脱出計画を伝えた時、この策は既に彼女の胸の奥底には秘められていた。

フェイルセーフを考えるならば、シェルターを出る際にもオートーへと伝えておくべき内容だった。

タイミングを逸してしまったために先送りとなっていたが、もはやこれ以上の猶予が許されない。今こそオートーへと引き継がれるべきことだったのである。

「貴方たちだけでは当初の脱出方法は使えない。でも、このままいけばこのコロニーはコロニー落としに使われることもない。核攻撃さえしのげば、生き延びられるチャンスも増えるわ」

それでも決して樂觀できる状況には毛頭ならないが、絶望するよりは遙かに前向きだ。

後は、任官してからまだ1年満たないこの青年将校次第。

その彼は、うつむき加減になりながら弱々しい声でつぶやいた。

「だからこそ、『士官』なんですよ……」

確かに声は力ないものだった。

しかし、彼は彼なりに自覚をしていた。口にした言葉が何よりの証拠だった。

「そうよ。他でもない、私の次席士官は貴方なんだから」

アヤリはオートーの手を取り、もう片方の掌で彼の手の甲を包み込む。

彼女の手から離れたハンドライトが、そのまま宙に漂いながら彼の顔を照らし出しているのは無重力ならではのことだった。

突然手を取られたことに驚いて顔を上げた、ほのかな光に浮かび

上がる彼の瞳を真つすぐ見つめる。

「脱出のために一生懸命付き従ってくれている避難民に対して、まだ起きてない話をして熱意を削ぐ必要はないでしょう？ でも、事前によくない『IF』を認識していて、かつ『TF』が『REAL』になった時どう行動するかを判断できる人間は必ずいなければならぬ。それが貴方の責務」

目を逸らさず、また異を唱えることもなく、黙って聞いてくれているオットー。

彼の心に直接語りかけるかのように、アヤリは一呼吸おいて熱を込めて続けた。

「それともう一つ。途中までの段階でリスクの多寡を鑑みたら港湾部に籠城した方がリスクは低いと思うわ。でもその先は？ 相手の出方に依存するしかない籠城プランは受け身で手がとても狭まってしまう。だから採るべき方法としては最後の手段であるし、今皆に言つて無為に意気を落とす必要もない」

宇宙の深淵のように黒いアヤリの瞳は、オットーの瞳を捕えて離さない。

「大切なのは諦めないこと。諦めなければ道は開けるわ。、ミルズ  
「オットー少尉」

包み込んだ彼の手を力を含め、思いを託す。

言葉は返つてこない。

ただ、彼は静かに頷いていた。気弱さを『覚悟』で押しとどめて彼も共にコロニー内の惨劇を見て憤った同志だ。幼い姉弟を救出した際に見せた義憤は、決して上辺だけのものではなかったのである。今はそれで十分だった。

「行くわ。時間も無いし、もたもたしていたら皆が不審に思う」  
ハッチ口からなかなか出ていかないことに、他の部下たちが怪訝そうな視線を倉庫の奥から送ってきていた。

いつの間にかにリフィルが開けてくれていたハッチから通路に出る。外では周囲を警戒しながら当のリフィルが待機していた。

床に足を着き、ハッチに背中を向けたまま通路を進もうとするも、踏み留まる。

彼女は振り返った。

「ああは言っただけど、私だってまだ死にたくないもの。心配ないわ、殺されたって意地でも帰ってくるから」

それまでの真剣さから一転、悪戯っぽく片目をつむってうそぶくアヤリ。

彼女なりの気配りであることを重々わかってか、急に軽口を叩いた彼女の様子にも戸惑わず、オットーは落ちついた声で一言つぶやいた。幸運を、と。

敬礼をもって見送る部下に軽く答礼すると、一足先に床を蹴って通路を進んだりフィルの背中を追いかける。

無重力ならではの『浮遊しての移動』のため、まるで飛んでいるかのように長い通路を流れていく。

先行していたリフィルの隣りに肩を並べると、彼はこちらを一瞥した後、再び前を向いて一言向けてきた。

「一時の別れは済ませたか」

「歯がゆくて仕方ありません。運を天に任せるにも等しい手しか残せないなんて」

一転してアヤリの表情は沈んでいた。続けた彼女の台詞がその理由をよく物語っていた。

「そもそもは、あまりにも綱渡りで属人的な脱出計画しか立てられなかった私の能力的限界が遠因となっています。もっと機転を利かせられれば……」

それは誰にも言えずに自問自答していたこと。他に手はないと自分に言い聞かせ、ごまかし、強気で押してここまできた。

しかし、オットーへ激励を送ったことが返って考えさせられる契機になってしまったのだ。

一転、弱気になりつつあるアヤリ。その表情は力なく曇っていた。その、消沈していく彼女の意気を救ったのは、意外な人物だった。

「元々こんな状況で200人近い避難民を抱えて脱出するというのが荒唐無稽なことだ」

アヤリの耳を打ったのは、前を見据えたままのリフィルの声。

「何もない条件のなか、1人の脱落者もなくここまでこられただけでも奇跡に近い。この上、不運に全滅したとしても誰も中尉を責められんよ」

あまりに手放しで擁護してくれるリフィルの言葉に耳を疑う。これまで多少フォローしてくれたことはあったが、ここまで全面的にこちらを認めてくれることなどなかったのだから疑心暗鬼になっても無理もない。

だが、彼の次の言葉を聞いた時、アヤリは眠りから覚めたかのように目を見開いた。

「ただ、それでもなお自身を責めるといふのなら、それは『驕り』というものだ」

胸に響いたリフィルの声。立ち込めていた霧が一拳に晴れていくような感覚を感じる。

「中尉は全てを見通すことのできる神か何かか？」

全てを見通せるはずもないし、ましてや神がどうのこうのというのは論外だ。

いいえ、と即答すると、

「では、そういうことだ」

静かな答えが返ってきた。

『一人で全て抱え込むな』

リフィルの言わんとしていること

が、彼女の弱気を断ち切った。

サイはとうに投げられているし、そもそもそのサイを投げたのは敵であるジオンである。

元々マイナスからの出発なのだ。そのことに苛まれているだけでは何も解決しない。

「皆が中尉のことを信じている。ならば、どれほど不確定要素があったとしても、走り出した以上は最後まで駆け抜けること　それ

こそが中尉の責務なんじゃないか？」

いつの間にか、首を傾けてこちらに視線を向けてきていたリフィル。その表情はこれまで見たことないほど、穏やかで優しかった。これまでに感じたことのない違和感を覚え、反射的に視線を逸らしてしまう。ただそれは決して不快な感覚ではなかった。

なんとか動揺した心を落ち着かせ、リフィルの言葉を脳裏で反芻する。

見えてくるのは、策に溺れかけた自分の姿。

「……そうですね、おっしゃる通りです。どうかしていました、私」  
慎重であることは悪いことではない。

だがここまで異常な状況下において、過度の慎重さはそれこそ手遅れとなる事態を招きかねないのだ。

オットーに大層な口を聞いたくせに、木を見て森を見ようとしなかった自分が恥ずかしかった。

「それでこそ、中尉らしい」

すでに再び前を向いていて、ぶっきらぼうに一言つぶやいたリフィルの声はどこか温かった。

もう逃げていたばかりの時間は終わったのである。

アヤリたちの攻勢は、今この時始まったのだった。

狭く、四つんばいにならなければ移動も覚束ない換気口。迷路のように入り組んだ配置の中で、記憶と勘を頼りに進んだ先によってや  
く到達地点が見えてくる。

ハンドライトに照らされた進行方向には、斜めにスリットの入った蓋が行き先を遮っていた。

蓋は外部から閉じられているため、工具でこちらから開けられない。ならば、取る手は一つしかない。

「リフィルさん、ちょっと戻っていただけますか？」

後続のリフィルに声をかけ、アヤリは四つんばいのまま少し手前のＴ字路まで戻ると体勢を入れ替え、足の方から丁度後退する形で再び通路を進む。

この狭い通路を進むのは確かに重労働ではあるが、なにしろ重力がない。そのため、思っているよりはるかに少ない力で進むことができる。気をつけなければならないのは、逆に勢い余って壁に激突しないよう慣性を制御することの方だった。

その為、幼児のハイハイのように進まずとも手で水をかくように通路を後ろに押しやろうとすると、楽に前に進むことができる。膝はほとんど使わない。

後退はその逆だ。通路を前に押しやろうとすればよいのだ。

進行するよりも勢いをつけていき、足先から弾丸のように蓋へと向かっていく。

全体重と慣性を乗せて、アヤリはそのまま蓋へと突っ込んだ。それほど頑強に取り付けられていなかった蓋はあっさりと降伏。換気口とは反対方向に弾け飛んでしまう。

一方、アヤリはというとそのまま蓋の向こう、開け放たれた空間へ慣性のまま飛び込んだ。

足先をハンドライトで照らしたまま突入した彼女は、冷静に進行

方向を見極め、すぐに迫った壁に向かって足裏を突き出す。膝のばねを上手く使い慣性を殺していた。

すぐさま射撃体勢に移り、ライトの灯りと銃口を飛び込んだ空間四方に向ける。

人の気配はない。危険な存在も皆無だった。安全を確認したアヤリは銃を下ろした。

そこは、壁一面に複数の大型モニターが設えられ、その手前には様々な制御機器が配置された大きな会議室ほどの部屋だった。

点検口から真つ直ぐ突き抜けて降り立った先、つまり足元にもモニターが。部屋の壁に立ってしまっている為で、アヤリは軽くモニターを蹴って本来降り立つべき床へと体を流した。

「随分と荒っぽいな」

壁際の制御機器類に近づき機能を確認しようとした時、換気口からノーマルスーツがゆっくりと姿を現した。

「工具もないですし、時間短縮ですよ。本当ならショットガンで吹き飛ばしたいところですが」

皮肉じみたリフィルの言を特に気にするでもなく応えるアヤリ。実際、あの場面では最も適切な手段だった。

また、殴りつけるのはノーマルスーツを損傷してしまう危険性があるため、強化された足裏で破壊することが最短時間で突破する方法だったと言える。すると

「違いない。特に後者はな」

肩を並べて制御機器に対面したりリフィルは、意外にも同意する旨を口にしていた。

ショットガンのくだりにわざわざ賛同していることからみると、皮肉じみた言はいつもの彼の『何か言わずにはいられない』で、狭く入り組んだ換気口を延々と進んで蓄積されたストレスに彼も辟易していたのだろう。

彼の口からこれまで愚痴らしい愚痴を聞いたことがなかったので正直驚いたが、その珍しさがともすれば張り詰め過ぎていた緊張の

糸を適度な張りに緩めてくれた。

「なんだ？」

いつの間にかに制御機器の前にある座席に着いて機器を操作し出していたリフィルがこちらを訝しげに見上げていた。

「い、いえ別に」

「あからさまに怪しい和んだ表情を浮かべていて『別に』もないと思うが。まあいい、なんでもないなら早く港に向ってくれ。休んでいる時間はないんだろ？」

明らかに疑っている眼差しをこちらに向けていたが、すぐに彼は制御機器に向き直り、キーボードを操作して手始めに室内の照明を点けると、続けてディスプレイや計器を次々と起動させていた。

確かに休んでいる時間はなかった。

おかげで気分もあらためられた今、いつもと変わらぬ調子のリフィルの指摘通り1分1秒、無駄にはできない。

「わかりました。では、打ち合わせ通りここはお任せしてよろしいでしょうか」

尋ねてみるもそれが愚問であることは彼のキーワークを見れば一目瞭然だ。立ち上げたシステムを迷いなく操作し、次々と処理を行っている様子に隙はない。ああ、と短く答えた彼の素っ気なさが逆に安心感を呼び起こす。

ならば、自分は自分の行動を早急に起こすだけである。

ハンドライトをサバイバルパックにしまうと、アヤリは室内の壁際に体を流し、片膝を着いてしゃがみこんだ。

壁はともかく、床には1m四方のパネルが張り付けられ室内一面同じ作りになっている。ではなぜ同じ作りの中でもその場所ではないのか。

おもむろに手のひらを床につき、床パネルを撫でるように触っている最中に答えが明らかになる。

ここと思ったポイント　パネルとパネルのつなぎ目付近で、彼女は絶妙な力加減で床を押した。すると、そこはテコの原理を応用



した形の蓋となっており、パネルの一部がひっくり返ってその下に小さな空間が現れたのだ。

「隠し蓋」の下にあった空間にはテンキーとディスプレイが備え付けられており、アヤリは記憶に残されていたコードを迷わず入力する。

9桁のコードを入れ込みエンターキーを押し込むと電子音が鳴り響き、続けてしゃがみこんだ位置からほど近いパネルが鈍い解錠音とともに僅かながら床から跳ね上がった。

床とパネルの隙間に手を差し込み、ハッチのように開け放つ。

ハッチにはスイッチの機能もあるのだろう。開いた途端、内部に照明が灯され、床下に向かって縦抗が数メートル沈み込んで伸びているのがよくわかる。さらに、縦抗の底からは横に通路が口を開けていた。

「中尉の言う通りだったな。お偉いさんの腹黒さも極まれりというところか」

横目でこちらを一瞥し、すぐに作業に戻ったリフィルがぼやいた。「しかし、今の我々にとっては彼らの腹黒さが活路を開いてくれます。公の舞台でお礼を申し上げれば、きっと彼らも涙を流して喜んでくれると思いますよ」

そんなことをすればまったくもって正反対のことになるのは明白だったが、本当にこうして生きるための道のりが開ければ嬉しさに冗談の1つでも言いたくもなる。

リフィルとのかけあいに加え、蜘蛛の糸のように頼りなくも途切れない一筋の希望が自身の精神的疲労を幾ばくか癒してくれていることを感じながら、アヤリはサバイバルキットから格納しておいた拳銃を取り出し、ハッチの中へと下半身を滑り込ませる。

「では」

「ああ。港のセキュリティはなんとかしておく」

この場合はリフィルに任せ、縦坑を下ろうとした。すると、ちょっと待て、と制止する声が。

ハッチの縁をつかんで慣性を打ち消し、丁度縦坑から頭だけ出すような形でリフィルを見やる。

彼は真剣な顔をしてこちらを見つめていた。

「わかつていると思うが、命を粗末にするなよ。避難民を導けるのは中尉だけだ」

倉庫を出てからのやりとりがあつたための重い言葉だつた。だからこそ胸に響いた。アヤリは深く頷いた。

「必ず戻ります」

一言返すと、アヤリは完全に縦坑の中へと体を沈み込ませた。

港湾部の倉庫に避難民を待避させた後、アヤリとリフィルがまず向かった先は、マチアスのいる港のサラムス級宇宙巡洋艦リヨンではなかつた。

港周辺は緊急時でも対応できるように独立した電源体系を保持しており、すなわちセキュリティも生きたままとなっている。まっすぐリヨンに向かうにはあまりにもリスクが多すぎた。

その為、アヤリは単独でリヨンまでの道のりを斥候する予定時からある手立てを講じていた。

それは、港にほど近いサブ統括センターへ向かうことだつた。

直接侵入する術がないため、配電口や換気口を駆使・経由しセキュリティの裏かいてようやく潜入したサブ統括センター。

そこは、その名の通りコロニー中枢であるシステム統括センターが使用不能になった際のバックアップとして設置されている施設で、普段は使われていない。

だが、バックアップ施設ということはシステム統括センターと同程度の機能を持っているということで、これが脱出計画に際して非常に大きな意味を持つこととなる。

最終的にサブ統括センターの占拠が必要なのは確かなことなのだが、現時点では実は中継点にしか過ぎなかつた。

港のリヨンに接触するには、まずセキュリティをかい潜らねばならない。

リフィルの能力無しで脱出計画を考えていた当初、アヤリ自身にセキュリティの目を誤魔化すシステム改変スキルがない以上は、物理的にセキュリティの目に触れない方法で港へたどり着くことが求められた。

そこでこのサブ統括センターが登場する。

サブ統括センターには港へと伸びる隠された非常通路が設置されていた。

この非常通路は完全にセキュリティから隔絶しているだけでなく、配電や通気関係ともつながりはない。非常通路の施設は独立した燃料電池により電源を確保し、さらに言えば設計図面にも載っていない完ぺきに秘匿された存在だった。

このことは、実はコロニーを管理するコロニー公社の人間でもごく一部しか知らず、サブ統括センターを管理するメンテナンス要員ですら知らされてはいなかった。

ではなぜアヤリはこの通路のことを知っていたのか。

ことは今から2年ほど前に遡る。

士官学校を卒業し士官候補生課程を経て少尉任官されたアヤリの初めての任地はサイド2だった。

3バンチコロニー・レニアエアの駐留戦隊の海兵部隊に配属された彼女は、やがてサイド2と地球を結ぶ密輸ルート壊滅作戦に連邦警察の後方支援として携わることとなった。

この作戦は大成功を収め密輸ルートは見事に壊滅したのだが、公にはできなかったことがある。

それは、密輸組織の協力者としてサイド2政府高官が関わっていたことだった。あまりにも衝撃的な人物の関与だったため、政府は最大限の労力を図り隠蔽。

政府にとって幸いだったのは、事実を知ったのはごく一部の存在であつたため火消しがそれほど難しいことではなかったことだ。そ

して、アヤリも火消しの対象者の1人だったのである。

海兵隊の第5小隊副隊長として後方支援作戦に参加していた彼女は、偶然協力者としての政府高官を知るとともに、様々な極秘情報に触れることとなった。そのうちの1つが、ペルナローゼを含めサイド2の幾つかのコロニーに秘密裏に建造されていた非常通路の存在だった。

この通路は特定の政府高官、コロニー公社高級幹部の非常脱出用として極秘裏に試験構築されていたもので、正規ルートで建造されたものではなく、政府最上層やコロニー公社取締役会にも周知されていなかった。

まさに闇の存在であり、政府やコロニー公社ですらまったく関知していなかったことである。

各方面から管理責任を徹底的に追及されること間違いないの案件を、責任を負うことを最も嫌う彼らが大手を振って公表するはずもなく、施設はそのまま放置され全ては闇に葬られた。

アヤリにもあからさまな口封じがなされた。

事を公にしようとすれば、自身はおろか家族に害が及ぶやもしれない、というわかりやすい恫喝も受けた。

家のことがどうなるかと知ったことではないが、弟　リクトまで影響が及ぶとなると話は別だ。

家を捨てて単身軍の末席に身を置いたばかりの新米士官には何の力もなく、黙って受け入れざるを得なかった。

闇に関与したからかどうかはわからなかったが、その後サイド4の駐留戦隊に転属。

さらに不審船襲撃事件によってリクトを失ったことにより、闇は彼女の記憶の奥深くへと押しやられた　避難民を連れてペルナローゼを脱出すると決意するまでは。

家族を守るとはいえ、告発しなかった彼女の行為は社会正義の面から言えば不作為に他ならないが、あの時事件を白日の元に曝してしまっていたら非常通路は封鎖されてしまっていたかもしれない。

結果論にしかすぎないが、善悪の是非は別に、社会正義よりも弟への愛情を選択したアヤリの判断が正しかったことは自明の理だ。だからこそ、こうしてセキュリティの目を気にせずに港へ進出できる非常通路を使用することができたのだから。

当初はこの通路を利用し、避難民も港へと誘導する予定だった。しかし、非常通路は狭く多くの人間が通過するには適さない上、サブ統括センターを経由しなければならないという時間的ロスが生じてしまう。

その点を解消したのが、リフィルの参加である。移動しながらサブ統括センターと非常通路の一件を告げると、彼ならサブ統括センターからセキュリティの無効化が図れるやもしれないとのことだった。もちろん、システム統括センターから可視できぬよう『目隠し』をした上で。

港のセキュリティを無効化できれば、避難民を直接リヨンに搭乗させることができる。

また、アヤリが非常通路を通り港に進出しリヨンに接触している間にセキュリティを無効化できれば、時間的ロスも発生しない。

予定は刻々と変化している。

根拠のない改変は改悪の可能性をはらんでいるが、明確な根拠があるならば臨機応変に対処すべきであり、それが生還への道を繋ぐ。当初の予定を急遽変更してまで取った方策。

それが是と出るか否と出るか、直近の結果はすぐに分かる。

この通路の先にその『答え』があるのだから。

サブ統括センター床下の縦抗を下り、すぐに横へと伸びる通路を進むと、100メートルほど突き当たりに阻まれる。

すぐ脇の壁にはコンソールパネルが備え付けてあり、非常通路の電源が起動したのに併せてパネルの機能も起ち上がった。一見行き止まりに見えるが、眼前に立ち塞がったのはエアロックだった。ハッチ向こうの空間が与圧されていることを計器盤で確認すると、躊躇うことなくパネルを操作してハッチを開放する。

エアロックへと入ったアヤリは、内壁にあった同じようなパネルを操作してハッチを封鎖する。そして、パネルの中の『DECOMPRESSION（減圧）』と書かれたボタンを押した。

途端、狭い空間を空気が通り抜ける乾いた音がエアロック一杯に満ちる。

パネル上の電子表示が反応し、見る間のうちに数値が減少しEMP（空気無し）へと突き進む。

確かに空気が抜かれていくことを確認したアヤリは、進行方向のハッチへと向き直った。

かつてこの通路が作られた後に計画変更や改良がなければ、その向こうにあるのはペルナローゼ主宇宙港である。

港へのハッチはあちから分らないよう隠匿されているため電化されておらず、最後は人力で解放して内側に引き込む構造となっている。

アヤリは最終ハッチの中ほどに設置されているハンドルを握り、回した。力任せに暫く回すと、やがてロックが外れるような金属音がし、それ以上回らなくなる。

俄かに緊張が高まる。

ここから先は完全に敵の勢力圏となる。完璧に現状を把握できているわけではない空間なのだ。

敵の戦力や作戦の進捗状況、捕縛した敵兵の証言やこれまで触れた物証から考えれば、港に大軍が配置されている状況は到底考えられない。

だが、100%の断言はできない。1%でも港にジオン兵が溢れている確率が残されている以上は、このハッチを開けてみなければわからない真実があった。

そもそも、あまりにも相手の後塵を拝さざるを得ない受動的な立場で、情報も道具も皆無に近い状況にありながら失敗のない抗じ手を立てるとというのが無理な話なのだ。

万全の自信を持って脱出計画を避難民には告げたものの、ともし

ればこのように薄氷を踏むような危うさもはらんでいることは誰にも話していない。否、話せないことだった。

話せば必ずパニックが起きる。避難民らが一時取り乱したできごとなど比較にならないパニックが。

そうなればもう誰にも止めることはできない。助かる道があったとしても、そこで終わってしまっていた。

だから彼女は全ての責めを負う覚悟で、脱出計画の不確定要素は胸の奥底に仕舞い込んだのだ。

すべては生還への最も高い確率を持った選択肢を選び、避難民を無事脱出させるために。

ならば、限られた時間の中で知恵を絞り、状況と少ない情報を見極めて出した方策を最後まで信じるしかない。

ノーマルスーツの下で、アヤリはじつとりと手のひらに汗が滲み出るのを感じながらハンドルを持つ手に力を込めた。

ハッチを半分ほど開き、拳銃の安全装置を外しながら慎重に隙間から外を窺う。

ハッチ周辺に人影や人の気配はない。

それを確認するやいなや、彼女はハッチを思い切り引いて全開にし、低い体勢のまま外へと飛び出した。そのまま床に伏せると、敵を視認したら直ちに駆逐できるよう矢継ぎ早に四方へと銃口を向ける。

敵はいなかった。少なくともハッチの向こう　左右に伸びる通路上には。

油断せず、今自分がどこにいるのか把握すべくあらゆる方向へと視線を巡らせる。

軍務で度々港には足を運んだことがあるので、この場所の構造に關しては熟知している。そのため、現在の場所が港のどこに位置しているかはすぐに判明した。

そこは港口とは正反対、港最奥の壁面にベランダのように設置された通路だった。

港は港口のみ入出港を隔てるため上下二層構造となっているが、港全体は円柱を横に寝かせたような形となっている。

その港を俯瞰すると丁度「コ」の字形型になっており、港の外周を同形の通用路が幾重にも取り囲んでいるのだった。アヤリが今いる場所はその一角なのだ。

通用路を挟んで壁とは反対側には1・5メートルほどの高さの仕切板が備えられており、その向こうが長大な港となっていた。

アヤリは仕切板の影に入りながら身を起こし、背中を仕切板に預けて座り込む。

とりあえず至近に敵はいなかった。一つの賭けと捉えても言い過ぎではない勝負に勝ち、一先ず安堵するアヤリ。

しかしすぐに気を引き締め、無重力だからできることだが拳銃を手放して浮かすと、サバイバルキットから件の軍用双眼鏡を取り出す。

体が必要以上浮き上がらないよう注意しつつ、慎重に頭を上げていく。

仕切板の縁近くでいったん停止。可視範囲の索敵を念のため行つてから、おもむろに腰を上げる。

目の高さまで頭を出して静止。直ちにくまなく視界を巡らせた。彼女の目に飛び込んだできた光景は、あたかも地獄が転移してきたかの様相を呈していた。

壁面の至るところに戦車砲が着弾したかのような激しい弾痕が。港に停泊している艦船はのきなみ破壊されて擱座していた。なかでも2隻のサラミス級宇宙巡洋艦は酷く損傷し、集中砲火を浴びたことがよくわかる。

ブリッジが設置されているはずの艦体から伸びる塔のような構造物は途中から完全に喪失。各砲塔、機銃座、ミサイルランチャーは基部から根こそぎ吹き飛ばされている。エンジンブロックにも集中弾の痕跡があつた。また、艦体のそこかしこに弾痕が穿たれていた。事前に艦の状態やマチアスの安否を知っていなければ、なにもか



も終わつたと諦めてしまつてもおかしくない状態だつた。

なにより酷い光景だつたのは、破壊された様々な破片に紛れて数多くのノーマルスーツが漂っていたことだ。もちろん、中に人が入った状態で。

ノーマルスーツたちは身じろぎ一つしない。

ノーマルスーツの各所に穿たれた銃弾の痕と辺りに飛び散る大小様々な赤い球体がその理由をよく表していた。

ここでも容赦のない殺戮が行われたのだ。銃弾の暴風が吹き荒れ、等しく命を奪う公平な暴力が彼らを冥府に誘つたのである。

今日何度目かもはやわからないほど堪らない思いが胸に迫つた。

しかし、立ち止まるわけにはいかない。短く黙祷すると、アヤリは双眼鏡に目を当てさらに遠くに視野を広げた。

知識の限りの監視カメラ位置をチェックし現在位置と目的地までの経路について保安状況を確認。併せて港全体を索敵。

幸いセキュリティは支障にはならない。

問題は敵の存在だつた。それもすこぶる厄介な。

リヨンの艦首側、第一主砲塔の残骸付近にて、ありえない身長をした緑色の敵兵が光る赤い単眼を油断なく周囲に巡らせていた。

ジオンの人型 モビルスーツ MSだつた。

一方で人影は見受けられない。

限られた人員を効率的に使つたためだろう。人間の何十倍もの戦闘力と鋭敏なセンサーを持つMSを配置するのは悪くないアイデアだ。ある程度予想していたとはいえ、実際にMSが配置されているとなると脱出計画を進める上で大きな障害となる。排除しなければ計画の成功はありえない。

ただ、今はまだその時ではない。

軽く舌打ちをしたものの、アヤリはすぐに気持ちを切り替え、双眼鏡をサバイバルキットにしまった。

腕時計の液晶は16時49分を表示していた。倉庫を出たのが16時35分。猶予は少ない。

身を屈め仕切板に隠れながら移動開始。MSからこちらが死角になるポイントへと向かう。

その時、何かが天井ブロックからの照明を遮った。反射的に仰ぎ見る。

遮光の原因、それは破壊された何かの破片だった。それが港内を慣性のまま漂い、天井方向から流れてくる途中で光りを遮ったのだ。破片、といっても小さなものではない。身を少し屈めれば、平均的な身長の人間なら完全に身を隠せるぐらいの大きさがあった。

チャンスだ。

アヤリは予定を変更し、瞬時に判断。タイミングを計って仕切板の上に身を乗り出すと、丁度通路と同じ高さまで流れてきた破片に向かつて飛び出した。

体を丸めて投影面積を減らしつつ一気に破片に迫ると、手を伸ばして破片の端を掴む。

破片方向への慣性を力技で破片が流れる下方へ変えるため、腕には瞬間的に負荷がかかる。間接と腱が悲鳴を上げていた。

ここで手を離すわけにいかない。アヤリは歯を食いしばって耐えた。

我慢が効いたおかげで、破片への慣性は斜め下方へ向かうものへと変換され、試みは成功。身を丸めて破片の影に張り付きながら移動したアヤリは、MSからの死角　リヨン艦尾の影に入ったところで破片を蹴って離脱した。

そのまま港底まで降り立つと、反動を利用しV字軌跡を描いてリヨン艦底に一気に取りつく。

艦底は港底に近いため空間があまりなく死角も多い。そのため攻撃にも曝されにくく、損傷した箇所はほとんど見受けられなかった。艦底にたどり着くやいなやすぐさま艦首側へと体を流す。程なく目標地点が見えてくる。

資材搬入用のハッチ　周囲を黄色い枠で囲まれた場所こそ、現在危険の多い正規のルートを避けて艦内に潜り込める数少ない突破

口だった。

リスクはある。

だが、リフィルの言う通りリヨンのホストコンピューターが死んでいるならば艦内管制も瀕死の状態になっている。腕利きエンジニアである彼ですらサブコンピューターをなんとか一部蘇生させ、やつのことで艦の一部をモニタリングしていたことを鑑みれば、このルートが最も危険の少ない道程と言えた。

リスクはゼロにできない。ならば取る道は 答えは明白だった。しゃがみ込むと、ハッチ脇に設置されている開閉用の片手で回すタイプのグリップ式ハンドルに手をかけ、回す。するとハッチは少し艦内側に沈み込み、続けて横にスライドしていった。

開け放たれたハッチより艦内へと進入。内部の電源は生きており、照明によりくまなく見渡せた。

資材搬入口の向こうにあったのは未与圧倉庫ブロックで、そこかしこに大小コンテナが積み上げられている。

アヤリは一足飛びに倉庫内は艦尾方向の壁へと向かう。壁にはエアロックハッチが設置されており、与圧ブロックへと行くことができる。

エアロックを抜けようやく与圧ブロックの通路へと入ると、一路機関室へと急いだ。

サラミス級宇宙巡洋艦はスペックや年式によって若干艦内配置は異なったりするが、大凡においてまったく同じか、あるいは似たような構造になっている。

これまでに何隻もサラミス級の艦艇には常時搭乗したことがあるので、何がどこにあるか艦内配置に関しては全て把握している。目を瞑っていても壁伝いに移動できる自信すらあった。

数ブロック通路を抜け、非常階段を昇り、念の為セキュリティの網をかい潜る。

右左折を繰り返す際には敵との遭遇を考慮し、慎重に拳銃を構えた。

Ｔ字路を慎重に曲がり、通路をまっすぐ進むと、同じくＴ字路形の突き当たりが見えてくる。

突き当りにはハッチがあり、目線の高さにはプレートが貼られていた。

ハッチの向こうは、Ｌ・４シエルターで監視カメラごしに目にした場所。

そして、ともすればもう二度と会うことはないのかもしれないと危惧した人物が存命している場所。

最重要目的地の１つとして、アヤリ自身が強く到達を望んでいた場所がついに目の前に迫った。

サラミス級巡洋艦リヨンが最重要区画の１つ、主機関管制センター  
つまり、マチアスのいる機関室だった。

遙かなる大地を目指すかのような困難な道程を越え、ようやくたどり着いたリヨン・機関室。

このハッチの向こうにマチアスがいる。

冷静さに自信のある彼女ではあるが、さすがに胸に迫るものを隠せずにはいられない。逸る気持ちをどうにか抑えつつ、ハッチをノックする。

「大尉、マチアス大尉！ ハヤカワです！」

通称機関室と呼ばれる主機関管制センターは、艦の心臓部である核融合炉と熱核ロケットエンジンを管制する最重要部署の1つである。

権限付与されたICチップ内蔵のIDカード保有者しか入退室することはできない。厳重なセキュリティ下におかれているため、アヤリが入室するにはIDカード保有者を同行させるか内部からロックを解除してハッチを開放してもらう以外に原則方法はなかった。

だが、中から反応はない。静まり返ったままだ。まさか。

最悪の結末が脳裏をよぎった。ジオンに発見されてしまい襲撃を受け、全滅してしまったのではないか。

否、それはありえない。IDカードを持たない彼らが、ハッチを破壊せずに内部へと進入することはできないからだ。ハッチが破壊されていないならば、マチアスたちは無事なはず。

にもかかわらず反応がないということは。  
アヤリに不安がよぎる。

考えても対処する方がなかったため、考えないようにしていたことだ。マチアスたちがリヨンを引き払ってしまう可能性を。

この場所にいても起死回生できないと彼らが判断したら、移動してしまうのは自明の理だ。そして彼らを止めることはできなかった。

もはや機関室はもぬけの空なのか。

信じたくなかった。だからこそ、彼女は再びハッチをロックしようとした。それでも駄目なら『原則以外の手段』で押し入ることを決めながら。

軽く振った彼女の拳がハッチを叩くことはなかった。ハッチがあった場所をすり抜けてしまったのだ。

なぜか。小さな電動音とともにハッチがスライドし、機関室内への道が開かれたからである。

アヤリは何もしていない。ハッチが自動で開くわけではない。ならば、誰かが操作して開いたのだ。

誰か　考えるまでもなかった。

「マチアス大尉！」

アヤリは喜色を声に込めて室内へ入った。

機関室の中は薄暗かった。灯火管制を敷いているのか、戦闘配置の赤色非常灯のみが光源となっていた。

中規模程度の会議室に等しい室内は静寂に包まれている。人影は見受けられない。

直前までの喜びは一気に引き込み、反射的に体勢を低くしていつでも反応できるよう身構えた。

室内を見回すと、壁際に計器盤が並び、管制装置だろうか中央にも計器が幾つも光る机が複数配置されていることが確認できる。

慎重に周囲を見回し、歩を半歩進めようとした時だった。

悲鳴のような、はたまた雄叫びのような、けたたましい騒音をがなりたてながら物影から『何か』が横殴りに飛びかかってきた。

瞬時に反応。

後ろに飛び退ってやりすごすと、すぐさま床を蹴り逆に『何か』へと襲いかかった。

目標を見失って体勢を崩していた『何か』に飛びつくと、そのまま余勢をかって壁まで流れ計器盤に押しつける。銃口を突きつけた時点で大勢は決していた。

だが、引き金にかけられた指がすぐに離れる。『何か』の正体に気づいたのだから。

「待て！ 止める！」

懐かしい声だった。

最後に聞いてからまだ1日も経っていないのに。たまらなく懐かしく感じる、心から再会を望んだ彼の声だった。

『何か』 地球連邦軍一般兵士用のノーマルスーツを着込んだ機関科員を開放するとともに、アヤリは机の影から訝しげな様子で姿を表した声の主の方へと向き直った。嬉しさに溢れ出しそうになる涙を懸命に堪えながら。

「大尉、ハヤカワです。アヤリ」ハヤカワ中尉です」

暗がりの中、相手に見やすいように顔を向けるアヤリ。

「中尉？ 本当にハヤカワ中尉なのか？」

こちらを窺うように警戒していた彼は、薄闇のなか赤色灯に照らし出されたこちらの顔を確認してもまだ信じられないようで、複雑な表情をしている。

理解はしても納得できていないといった様子の彼に、アヤリは彼マチアス大尉と自分の2人だけにしかわからないフレーズを込めて穏やかに語りかけた。

「『スカートがよく似合う』とおっしゃっていただいた新任求人屋のことをお忘れですか、大尉」

ほんの十日ほど前に交わしたたわいのない会話が、今ではとても懐かしい。

彼も思いは同じだったようで、言葉の意味を噛み締めた後、ようやくその双眸から怪訝の色が引いていった。

替わりに特定の感情が湧き上がってきたようで、『よく……よく生きて』とつぶやいて俯いてしまう。

そこまで感極まった彼を見るのは初めてのことだ。それだけ彼も極限の中を潜り抜けてきたからに違いない。

さしものアヤリも釣られて感情を揺さぶられそうになったが、ど

うにか堪える。深呼吸を一つ入れた。

「大尉、お話ししたいことは多々ありますが、今はやらねばならないことがあります」

表情も声色も緊迫感がこもったものに変え、自分にも言い聞かせるように現実を伝えた。

マチアスは賢明だった。

一拍の間を置いた後。

「貴官の言う通りだ」

そう言つて顔を上げた彼の表情もまた一変していた。

自分自身も当て嵌まるとは思うのだが、マチアスが平時より戦時に力を発揮する軍人であることはこれまでの付き合いから感じていたことだ。

そしてそれが間違つていなかったことは、彼自身の研ぎ澄まされた刃物のような厳めしい表情が証明してくれていた。

「さつきはすまなかつたな。緊張の連続だったからか、うち（機関科）の若い奴が早まつた真似をした」

「いえ、非常時ですからお気になさらないください。それより、お2人以外の生存者はどちらに」

これを受け、怪訝そうに眉間に皺を寄せるマチアス。

一瞬彼がなぜ訝つたのかわからなかったが、すぐにその理由に気付く。

彼は知らないのだ。こちらが事前にリヨン機関室をモニターし、マチアス以下複数の生存者がいるのを確認していたことを。これでは訝られても仕方ない。

「すみません大尉。実は」

この子細を知らないマチアスに、これまでの経緯を含めなぜ生存者のことを知り得ていたかを説明する。

マチアスとの回線が切断されてからシェルターに避難したこと。

偵察行と会敵。

捕縛した敵兵から得た情報

敵の正体がジオンであり、コロニ



―落としての推測はもはや現実になろうとしていること

そして、同じく避難していた元連邦軍人の能力を借り、マチアスたちの生存を確認していたこと等を端的に話した。

さしものマチアスも陰しい表情をして聴き入り、一言も発しない。彼は話の途中からあたかも状況を脳裏に思い浮かべるかのように目を閉じ、話の端々で頷いていた。

一通りアヤリが説明し終えた後、『事前に大尉たちにこちらの状況を伝えられればよかったですが』と口惜しそうにこぼしたのを受けた彼は、気にするなとばかりに頭を振ってやおら臉を開いた。

「貴官らしい見事な判断と行動だったな。貴官がペルナローゼにいなかったら、コロニー内の住民はすべからく命を落としていたことだろう」

そう言つて、マチアスはアヤリを褒め称えるかのように一時険しい表情を緩め、微笑みを浮かべていた。

それは彼なりの労いの現れであることを感じたアヤリは、素直に礼を述べるのだった。

これに頷いて応えたマチアスは、半身になって振り返り声を上げた。

「みんな、安心しろ。彼女はサイド2駐留軍求人広報部の中でも指折りの求人屋・ハヤカワ中尉だ」

これに呼応するかのように、機器の物陰影から、床の点検口ハッチ下から、壁の通気孔から、隠れていたノーマルスーツが次々と姿を現す。

その数わずか10名。ノーマルスーツの形状やマーキングから過半数が民間人であることがわかる。

マチアスたちを加算してもわずか12名のみ生存者だった。

本来ならば厳しい現実には肩を落とすしかないところだ。

だが、L3シエルターで救出した姉弟以降目にするのはかつて人であった遺骸ばかり。こうして生きた人間たちと巡り会えたことがたまらなく嬉しかった。

「みなさん、ご無事で本当に、本当になによりでした」  
なにをしてやることもできない。

笑顔を浮かべて労おうとしても、これまでの辛苦が邪魔して微妙な微笑みしかできない。

ただ心からの言葉をかけることが今できることの精一杯。

それでも彼らは肩を震わせていた。久しく味わっていなかった、他者の温もりに心を揺さぶられて。

軍人ですら初めて体験する過酷なできごとばかりなのだ。ましてや民間人にとっては想像の範疇を遥かに超えてしまっているに違いない。

艱難辛苦を乗り越えてきた彼らのことも、どんな手を使ってでも救わねばならない。それはもはや自身に科せられた絶対の使命だった。

双肩にかかる責務はこれまで感じたことのないほどの重圧だったが、不思議と焦燥感はない。

妙に落ち着いているのは図太さなのか、あるいは開き直っているからなのかはアヤリ自身にもわからなかった。

ただ1つ言えることは、そのおかげか常に冷静さを保ち、状況を見極められているということ。

腕時計の時間は17時を示していた。

「ペルナローゼから脱出する方策があるんだな」

アヤリが時間を気にしていることに目敏く気付いたマチアスは、その先をもまで見抜き、核心を突いてきた。

さすがに驚いて目を丸くしたが、海千山千のマチアスである。彼ならばそのくらい洞察してもおかしくない。

また、彼の言から彼らは脱出の手段を持ち得ていないことも判明した。

仮に彼らも脱出手段を持っているならば、こちらに脱出手段があることを確認するはずがないのだから。先んじて核心に迫ったのも期待の顕れに他ならなかった。

「おつしやる通りです。みなさんと共にここから脱出するために、私はリヨンへと参りました」

マチアスはもとより、他の生存者のこともゆっくりと見回しながら伝える。

突然の希望の言葉をさすがにすぐには受け入れられないようで、皆懐疑的な訝しい眼差しを向けてきていた。

無理もない。L-4 シェルターの避難民たちも最初は同じ反応だった。

しかし、だからこそ話さねばならない。

「手短にご説明しますので聞いていただけますか」

気持ちを込めて思いを投げかける。すると、マチアスは皆に同意を求めるかのように生存者たちを見回した後、彼らを代表して『説明してくれ』とばかりに頷いていた。

ありがとうございます、と一言礼を述べ、アヤリは早速現在進行形の脱出計画について解説を始める。

「脱出の方法としてはそれほど回りくどいものではありません。まずポイントとなるのはリヨンを含めた港のサラミス級2隻、そして同艦底に接続されている大気圏再突入用カプセルです」

「なるほど、サラミス2隻は囧だな。2隻とも稼働させられることを事前に把握してこそその手か。そして、カプセルを使い別途脱出する」

先を読んだマチアスの切り返し。まったくもって彼の言う通りであり、言が正しい旨を頷いて応えるものの、彼はすぐに怪訝そうに眉をしかめた。

「だが、港も港の外も敵の勢力下だ。囧を使っても、カプセルでは突破できまい」

「いいえ。港の外には出ません」

疑義を挟むマチアスに、アヤリは即答した。

「私たちが向かう先は『コロニー内部』であり、次にポイントとなるのが『工業用ハッチ』となります」

我が意を得たり、とばかりに見る間のうちにマチアスの目が見開かれる。

「その手があったか。こいつはとんだ盲点だったな」

工業用ハッチ それは、コロニー建造時に使用された資材搬入用のハッチであり、コロニー両端の港以外で大型資材等が宇宙とコロニー内を行き来できる唯一の通路であった。その規模は300メートル級の宇宙艦船がギリギリではあるが通過できるほどで、かなり巨大な施設ではあった。

基本、コロニー建設時に使用された施設のため、現在は特別な作業等なければ普段使用されていない、言わば忘れ去られた存在だった。

ペルナローゼの工業用ハッチは、現在アヤリたちのいる主宇宙港とは反対側の副宇宙港にほど近い御椀形底部である丘陵部の一角に設置されてはいるが、いくら巨大な施設とはいえコロニー規模の視点から見れば取るに足らないスケールであり、住宅街や人が普段生活している場からは離れているため、日常では誰の目にも止まらない程度の施設でしかない。それどころか、その存在自体すら知る人も少なかった。

アヤリが知っていたのは、休暇の時に1人乗りのプライベートヘリコプターでコロニー内を飛行した際に視認した記憶が残っていたからである。

「いやしかし、コロニー内部も敵が制圧している旨は貴官から報告を受けたばかりだ。コロニーの特性上、カプセルのような機体が飛行するルートは限られる。工業用ハッチにたどりつくまであっさり敵に察知されてしまうぞ」

至極もつともな指摘である。

再突入が目的の1つであるカプセルは、翼こそあれど大気圏内においては『飛行』ではなく『滑空』を目的としている。

ミノフスキー粒子によりレーダーの目はごまかせても目視からは逃れられないため、コロニー内はできるだけ低空を飛行することが

視認性を低減させることとなるが、カプセルにはそれができない。

となると、コロニー中心部の空間　コロニーが自転することによって生まれる疑似重力が及ばない、いわゆる『無重力帯』を飛行するしかないが、それは三方のコロニー内地地上部へまざまざと機体をさらすこととなってしまふ。

銃弾の飛び交う戦場を全裸で練り歩くようなもので、自殺行為に他ならなかった。

それでもアヤリは揺らがない。彼女には確固たる自信があったのだから。

「おつしやる通り飛行ルートは限定されます、コロニー中心部の空間帯に。ここを飛行すれば、確かに地上からの格好の標的となってしまうことでしょう　通常ならば」

あえて含みを持たせた言い回しをすると、マチアスはその先を急かすようにわずかながらニヤリと笑みを浮かべていた。

「しかし、コロニー隔壁破壊による減圧と気象コントロールの停止によって、現在コロニー内には大量の雲が発生しています。中心部に」

「『雲の回廊』か。なるほど、貴官が頭の中で何を考えているかようやくわかってきたぞ」

「ご推察の通りです。コロニー内部の両端に渡って長大に伸びる、十分な雲量の雲の回廊内を計器飛行することにより、機体を三方の地上から隠蔽。敵の目に触れることなく副宇宙港側まで進出し、工業用ハッチから脱出。工業用ハッチの向こうでは雲の回廊に代わり、敵によって大量散布された戦闘濃度のミノフスキー粒子が逆に私たちを護ってくれるでしょう。後は、慣性航行によりルナツーを指します。以上が私の考案したペルナローゼ脱出計画の全体像です」

L-3シエルターへの偵察行の際に長大な雲の回廊を初めて空に目にした時から、他の断片的な要素を少しずつ繋ぎ合せて考案した脱出計画の骨子を語り終えたアヤリは、軽く一息ついてから補足する。

「これを成功させるには加えて幾つか付帯する作業を実行しなければなりません、現状でより確実性の高い効果的な脱出手段が他にないと判断し、現在実施過程にあります」

アヤリからの説明を受けたマチアスは、至極納得した様子で頷き、「貴官の話を聞いた上で、俺も貴官の考えている方法が適切だと思っっている」

と脱出計画に同意を示していた。

であれば話は早い。早速下準備のことを続けて説明しようとするやいなや、にわかに険しい表情となった彼にそれを遮られる。

「だが1つだけ確認させてくれ。リヨン、ケルンの2隻は罔としてこのまま主宇宙港から出港させるんだな？」

「はい、おっしゃる通りですが」

「ではどうやって出港させるつもりだ」

「当然ですが誰か人の手に操舵を任せるわけにはいきません。自動操舵によって出港させます」

「それは不可能だ」

今度はアヤリが怪訝な表情を浮かべる番だった。

それをわかってか、マチアスはすぐに己の発言の意図を伝えてきた。

「港湾部の現状をこの目で確認しているが、港内は破壊され過ぎた。構造物が破壊されただけでなく、停泊していた艦船も多くが破壊され座礁している。これをかいくぐって港を出ることは通常の自動操舵には荷が勝ちすぎる。何れかに激突してもう2隻ほど座礁艦を増やすだけだ」

自動操舵に対する明確な否定。

質問を挟みこそすれ、ここまで納得して説明に聞き入ってくれていたマチアスの反論にとまどいつつも、彼の言の正しさにアヤリは計画の軌道を修正する。

「その場合は……艦を自沈させます。最も効果を発揮するのは艦が港から外に出ることですが、そもそもサラミス級2隻の出港はこち

らが行動しやすくするための陽動です。相手の目を引き付けられればよいのですから、我々が港から撤収した後に自沈させることで目的を達成することができるとしよう」

平静を装って口に出している台詞だが、内心は正反対だ。

ジオンがサラミス2隻を無力化こそすれ撃沈することができない理由に早い段階から気づいていたのは他でもない、アヤリ自身なのである。

コロニー内に脱出した後、時間差で自沈させたとしてはたして危険がないかと問われれば、Yesと断言できなかった。

港湾部で爆発が起きた際に危険なのは大気のない港口方向ではなく、大気のあるコロニー内部方向だ。

爆発時の熱量で港湾施設が破壊しつくされることによりコロニー内部への破孔が開かれれば、たちまちコロニー内から空気が流入。瞬間的にこれを伝播触媒として、爆発の衝撃波がコロニー内へと雪崩れ込む。

その爆発力を正確に把握できない以上、タイミングを誤れば後背から致命的な衝撃波を受けることとなるのだ。

サラミス級を出港させられない場合の代替案として想定してはいたが、その効果を比較すれば結果は歴然としていた。

方法論的に言えば間違っていない。

だが、彼女は自身が放った言に対する自信を保っていられず、視線を泳がせてしまう。

叩き上げで一兵卒から大尉まで昇り詰めた老練な職業軍人がこれに気がつかないわけがなかった。

「貴官は自分に嘘をつくのが下手だな」

険しい表情から一転、マチアスは表情を緩めて薄い笑みを浮かべていた。

「貴官でなくとも、港で艦艇クラスのジェネレーターを暴走させて自沈させることがどれほど危険なことかはわかる。脱出の為に取るべき方法として、より効果的で生存への可能性が高い方法があるな

らばそれを選択しない術はあるまい」

その先に彼が言わんとしていることに気づき、アヤリは意図せず、大尉、とつぶやいてしまう。

彼女の反応に応えるかのように、マチアスは間を置いてから言った。決意の込められたまなざしで彼女を見据えて。

「俺がリオンを操舵し、出港させる」

よもやの展開に、アヤリは呆気に取りられて直ちに返すことができなかった。

マチアスの言う、手動操舵でリオンを出港させたその先に待つ運命がどうなるかなど言うまでもない。

それは自殺行為に他ならなかった。

焦る心を努めて落ち着かせようとするが、適切な返しが出てこない。

冷静沈着な指揮管制能力が評価され、また自身もそれを誇りに思っていたのではなかったのか。

結局のところ己の能力などまだ力不足の何物でもない。歯痒さ、口惜しさに言葉を失いつつも、このまま黙してはマチアスの主張を認めてしまうことになってしまう。

「中尉、問答している時間はないんだろ？」

なんとかして反駁しようと必死に思案を巡らせていると、それを見越したかのようにぶつけられる有無を言わさぬ正論。

開戦からこれまでほとんど揺らぐことのなかった彼女の感情が揺さぶられている最中に突きつけられた正論だったからやもしれない。アヤリはほとんど感情のまま、本来であれば口にしてはならない申し出を反射的にしてしまうのだった。

「では、では私がリオンを操舵します」

もはや理屈など吹き飛んでいた。

なんとか彼を説得したい。その思いから、冷静さを完全に失った彼女は思いつくままに乾いた言葉を必死に言い連ねていく。

「実務ではありませんが、シミュレーターでサラミス級を操舵した



経験があります。この脱出計画を発案したのは私です。であれば、最も危険な責務を負うのも発案者のはず。ですから、私が――

「この馬鹿野郎！」

機関室中に怒声が響き渡る。他の誰でもない、マチアスの野太い声だった。

お世辞にも優しい外見をしていないが、彼はベテラン機関長といういかにも粗暴で年中声を張り上げそうな役職にありながら、内面は滅多に感情を荒げることのない理知的な人物だった。

そのマチアスが目を剥いて怒りをあらわにしている。

アヤリはもとより、その場に居合わせた全ての者が息を呑んだ。

「貴官がいなくなったら誰が避難民を導く？ 生ある限り、最後まで彼らを導くのが貴官の使命のはずだ。それに、カプセルを計器飛行させられるほどの卓越した操縦技術を持つ人間が貴官以外にいるのか？」

マチアスの怒声、そして彼の冷静かつ的確な指摘は、混乱し迷走していたアヤリの心に強烈な平手打ちを加えた。

オットーに避難民の一時の命運を託したとはいえ、必ず戻るとうそぶいたのではなかったのか。

『命を粗末にするなよ。避難民を導けるのは中尉だけだ』と言ったりファイルに、同意して必ず戻ると約束したのではなかったのか。

ましてやマチアスの言う通り、雲海の中を計器だけでカプセルを飛行させられる者が自分しかいないことを一番よく知っているのは、他でもない自分ではないか。

頭から冷水を浴びせられたかのごとく現実を引き戻させられるとアヤリはもはや何も言い返せなかった。言い返せる余地などあるはずもない。

彼女は叱られた子供のようにうな垂れるしかなかった。

わずかな沈黙の間。

静まり返った機関室に、再び人の息吹が戻る。

再び皆の鼓膜を打ったのは、早朝の開戦からこれまでの経緯を語

り出したマチアスの声だった。

彼によると機関科員の多くはジオンの奇襲時、当直任務を終えて港湾ブロックに上陸し駐留戦隊事務所に詰めていた。アヤリからの連絡はリヨン機関室ではなく、交換手が気を利かせて回した先に届いていたのだ。

奇襲は駐留戦隊事務所にも迫ったが、居合わせた軍人、民間人を伴いつつどうにか逃げ延び、港湾ブロックから脱出する人々の混乱に乗じて逆に港へ突入。

なんと敵にまったく気付かれることなく、アヤリと同じく艦底からリヨン内部に戻ったのだという。

「だが、それまでの過酷さはほんの序の口だった」

苦虫をかみつぶしたかのように表情を歪め、彼は言った。

港に係留していた全ての艦船はジオンの圧倒的火力で瞬く間に制圧されてしまったと。

彼らは投降を呼びかけてきた。その甘い言葉に、戦意を失った連邦兵や恐怖に竦んだ民間人は揃って降伏する始末。敵の狙いなど露知らずに。

なるほど、だからリヨン艦内には白兵戦を行った痕跡や遺体がほとんどなかったのである。

隠れていれば活路が開けたかもしれないにもかかわらず、自ら首を差し出してしまったのということか。

その結末がどうなったかは、聞かずとも明らかだった。コロニー内とは別の方法ではあるが、港でも同じ結末が繰り広げられていたのである。

「あれは決して戦闘などではなかった。殺し合いですらない。一方的な虐殺だ」

吐き捨てるようにつぶやいたマチアスは、皆から逃れるように視線を外すと肩を落とした。

「奴らの襲撃に、俺は何もできなかった」

悔恨の言葉。ジオンに対する非難とともに、自責の念が深く垣間

見えた。

しかし、マチアスはそこで終わらなかった。

「だが、俺にはまだできることがあった」

あらぬところに投げやっていた視線をゆっくりとアヤリへと戻し、言った。

「軍人として、お題目などではなく本当に『国民の生命と財産を守る』ことができるのなら、俺は命を賭してでもその務めを果たしたい」

彼の瞳に宿る、強い意志の光。それがアヤリの双眸へと射るように差し込んでくる。

金縛りにあつたかのように身じろぎ一つできない。泣く子も黙る元海兵隊隊長が熟練技術屋に完全に気迫けしていた。

蛇に睨まれた蛙のように、脂汗を額に浮かべて凍りついていたアヤリをおもんばかってか、彼はふと表情を緩めた。

「なあ、中尉。俺はリヨンの機関長だ。ドンパチでは貴官にかなわんが、リヨンのことならこの中で俺が誰よりもよく知っているし、誰よりも上手く扱える」

「大尉……」

彼の自負と覚悟の前に、アヤリは力無く一言つぶやくことしかできない。

今にも泣き出しそうな彼女に対し、マチアスは娘を慈しむような微笑みを浮かべ、彼女の両肩にそっと手を乗せた。

「リヨンは俺に預からせてくれ。そして、貴官は貴官にしかできない使命を全うしろ」

マチアスの、他の何物にもかえがたいほどの重い言葉が、深く、深く胸に響く。

これほどの強い意志で覚悟を固めた人物に対し、自分はいつまで個人的な感傷の赴くまま食いさがっているのだろうか。『歴戦の海兵』が聞いて呆れるというものだ。

恥ずかしい有様を見せてしまったものの、浮足立ったアヤリの心

はマチアスの信念によって急速に落ちつきを取り戻していく。

焦りが消え、彼女の瞳から動揺がなくなったのを見計らってか、マチアスは静かに両手を下ろした。

途端、それまでの真剣な様子からうって変わっておどけたように表情を変え、「勘違いするなよ、俺は何も自殺しに行くわけじゃない。俺は俺なりに生き抜くためのあらゆる方策を駆使してジオン野郎どもをブチ抜き、ルナツーを指す。なんだったら貴官たちよりも随分と先に到着して、退屈で待ちくたびれているかもしれんぞ」と豪語。

飄々としたいつもの様子に戻った彼は、言って軽快に笑い声を上げた。

突然の変調に、さすがに面喰ったアヤリは目が点になったものの、それが彼なりの配慮だということにはすぐに気がつく。少しでもこちらの心理的負担を取り除こうとしている彼の志を無駄にしてはならない。

本当は声を上げて泣きたい程の感情を抑え、アヤリは逆に嘖き出して応えた。

妙な笑いが2人の間に満ちる。それは、長く親交してきた2人の『告別』の儀式だった。

ひとしきり笑った2人は、どちらが合図したわけでもなく互いに緩んだ頬を引き締め、踵を揃え背筋を伸ばした。

「すまん。貴官に全ての責めを負わせることになってしまった」それはもう一方でのマチアスの本心なのだろう。

特攻にも等しい陽動役は確かに絶望の道ではあるが、避難民の命を直接預からない分、責任はそう重くない。

170人とはいえ決して少なくない避難民を、最後まで導く責務を負う道を進まねばならないアヤリのことを慮った言葉だった。

だが、これから死地に赴こうとしている人物から詫びを入れられて当然など誰が同意できようか。

マチアスの配慮に対し、アヤリは言葉を返す代わりに彼の眼差し

をしつかりと受け止め、腕を振り上げて額の前にかざした。

「ハヤカワ中尉、計画を続行致します」

教練の教科書に載るほど見事な敬礼を、幾度となく力を貸してくれた大恩ある上官に手向ける。

こちらの思いを彼も感じてくれたのだろう。

「皆のことを、頼む」

これもまた老練で手本たりうる答礼をもって応えてくれるマチアス。

もはや言葉はいらない。

互いに決意を済ませた今、後は行動あるのみだった。

「話は伺いましたよ、ハヤカワ中尉」

マチアスが答礼を解いて復するのを見届けてから自身も敬礼を解くやいなや、外野から投げかけられる声。

見ると、床を蹴つてこちらへ流れてくる3人のノーマルスーツ姿が。

アヤリたちの前にやってきたのはマチアス以下の生存者たちで、加えて彼の部下たちだった。

いかにもエンジニア然とした面々の中、口を開いたのは先程の声の主だった。

「マチアス機関長の下で副機関長を務めているエラン中尉です」

こなれた実務的な敬礼に併せて名乗った、40前後のベテラン技術士官は不敵な笑みを浮かべていた。

「この一件、私も噛ませてもらいますよ。なんと言っても大尉一人には任せておけませんからね」

唇をニヤリと歪めて笑うエランは、マチアスに同行することがどれほど絶望的なことか歯牙にもかけていない様子だった。

「仲間外れはごめんですぜ。俺も混ぜてもらおう」

「俺も参加します。罔は少しでも多い方がいいでしょうから、ケルンの操舵は任せてください」

エランに呼応して他の2人も同行の意思を表す。

彼らの申し出に対し、お前たち、とつぶやいたマチアスの拳はきつく握られ、震えていた。

内心は襟首を引きずってでも部下を脱出させたいはずだ。

しかし、マチアスと同じく彼らも歯痒い思いに身をつやしてきたのである。負け続けた相手に一矢報いるこの機会に覚悟を固め、彼らが慕う上官と共に征く道を選んだとしても誰が止められようか。

なにより、彼らは相手がマチアスだからこそ、死地への輩<sup>ともがら</sup>となることを志願していた。

まなじりに薄っすらと光るものを浮かべたマチアスは一瞬声を詰まらせたものの、

「まったく物好きな奴らだ。いったいどこの誰がこいつらを教育したんだ？」

と、気丈に振舞っていた。

一番近いところで彼の人となりを見ている部下の面々がマチアスの思いを一番わかつている。

部下の思いを汲んでいるからこそその上官の碎けた発言に、彼らは今さら野暮なことは言わなかった。

「誰が、って機関長に決まってるじゃないですか」

「寝言は寝てから言ってくださいよ」

「違いねえ」

出て来るのは上官相手とは到底思えない台詞の数々。

「お前ら、俺が機関長ってこと忘れてるだろ、なあ」

呆れた顔のマチアスの反応は至極もつともなことだ。それでも、彼の眼差しは愛すべき部下たちを見守る穏やかなものだった。

「危険手当も超過勤務手当も何もつかんぞ」

とマチアスが素っ気なく言い放てば、

「そんなもん今までもなかったじゃないですか」

などと切り返される。一見乱暴ではあるが、硬く結ばれた信頼関係があればこそそのやりとりだった。

そう言えばほんの1年前、自分も海兵隊長として同じようなやり

とりを日々繰り返していたことを思い出した。

もう戻れないあの懐かしい日々のことを思うと、マチアスが羨ましくも感じる。

少々粗野でも血の通った彼ら、命を賭して避難民を救おうと志願した彼らの姿を、生涯忘れることはないだろう。

時は宇宙世紀0079年1月3日17時12分。

終末へのカウントダウンは刻々と迫っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8745f/>

---

戦火を越えて Cross over the under fire

2010年10月9日12時15分発行